

年中行事

はじめに

年々、曆とともにくり返される年中行事も、ここ数年の改廃が大きい、かなりの資料が、正月と盆の行事を中心に集められた。本村の位置が、利根川に沿った東毛の水田地帯にあるので、東毛地方の特色を示す風習が目だっている。はじめにいくつかあげてみよう。

正月には、セチと呼ぶ年始日が家ごとに決まっています、一族が集まって年始をする風習が盛んなことは、盆の本家参りや盆参りが盛んなことと相まって、一族の結合を固くする大事な機会だったことをよく現わしている。平坦地にあっても、意外と同族の結束は固かったのである。三日の家族に、餅を食べるとはれ物ができるといって、餅を食べない伝承があるのは興味深い。餅は年神への供え物としてまず神に捧げ、三日を過ぎてから四日に棚探しをして、供えた餅に種々のものを入れて雑煮を作るようになったものであろう。

小正月のモノヅクリにハナやマユ玉を作るが、綿ノ花といつてマユ玉の小さいのを作るのは、かつて綿作が盛んだった名残りであろうか。また、飾り替えてはずした幣束を、柿・梅などの成り木にしばりつけて実のりを願うのも、東毛に多い風習であろう。十四日の朝、正月の飾り物を燃やしてご飯を煮たり、マユ玉をゆでたりして、その灰を家の回りにまいて蛇除けの呪いとする風習もある。東毛地方に道祖神のドンドン焼きがあまり行なわれないことと関係があり、その変化と見られる。オミタマ様の飯を作って、ウツギの箸をさして年神に供える風習もよく伝えられている。正月の十六日は盆の十六日とともに、イロリのカギツツル

シも休ませる日といわれ、以前はエンマ大王の縁日だったようだ。

エビス講の供え物に生きたカケバナを井に入れて供え、あとで井戸へ放すというのも珍しい。ふつうはサンマやイワシ、家によってはタイを供えるが、生きたフナを供えるのは土地がらであろう。漁村でカケノウオと呼んで、タイやブリを神に供える風習と関連があるろうか。二月の初午に節分のいり豆を使って名物のスミツカリを作る。スミツカリは東毛地方で盛んに作られる食物で、オニオロシという竹製の大根おろしで大根を荒くおろし、ニンジン・油揚げ・サケの頭などを酒粕にまぜて煮こんだものである。初午だけの食物になっている。

二月と十二月の八日には、小麦粉のヤキピン(焼餅)を作って目籠に入れ、竿に付けて庭に立て鬼除けにしたという。焼餅がコト八日の供え物として登場するのも、この地方の特色と見られる。ふつうは盆の釜ノクチャケに、焼きガマスなどいって作られる例が多く、以前はコジユウハン(おやつ)としてよく食べられていた。

六月の初山参りが盛んなこともこの地方の特色であろう。新生児は親戚から初山着物が贈られる。それを着せて六合村の富士嶽神社や館林の浅間神社へ初山参りに行き、ウチワを土産として配る風習で、にぎやかに行なわれている。夏の祇園祭りに、ササヲという獅子舞の行列が盛大に行なわれていたことも、東毛地方の流行であった。そのため若衆の組織ができていたようすは、「芸能」の項を参照されたい。

七夕(タナバタ)にカツモ(カモモ)馬を作ることも東毛地方の特色ある風習で、ここでは一対のカツモ馬を向かい合わせて、七夕飾りの竹を結んだ繩に吊り下げたり、横木の上にのせたりして飾る。カツモ馬は取って置き、水難除けの呪い物にしているのも興味深い。七夕様の

乗馬として霊力を認められていたからであろう。

盆迎えを盆フチといつて寺から迎えるが、いったん屋敷のケエド（入口）に土山を盛った所へ迎え、夕食後そこで迎え火をたいて家まで迎え入れるというのも、そこが外界との境であったからであろう。新盆の家では以前は高灯籠を立てて目印にしたというが、現在は新盆提灯を軒先に吊している。墓地の土盛りの上にカッモで編んだ屋根を掛けて祭る風習があるのは、よそでもあまり例を見ない珍しいものである。盆の野回りも盛んなのもこの地方の特色である。十五日の朝、主人が線香を持ってその煙に盆様をのせ、自家で耕作している田畑を回って、作がらを見せて回るなつかしい行事である。盆行事が収獲を祝う祭りの一つでもあることを示している。

旧十月の神無月に、神がお立ちになる一日の早朝、未婚の男女が鎮守様をお参りして良縁を祈願する風習も、東毛に多かったようである。十日夜のワラデッポウをたく時に「忍（オシ）の鉄砲に負けん」と唱えて、川向こうの忍藩（行田）との対向意識を出しているのも興味深い。エビス講に麦コガシをこねてカヤ餅を作るといふのは何の意味か、よそではあまり聞かない。カマ神様の祭りが盛んで、オカマのダンゴを作つて、親が嫁にやつた娘を呼んでごちそうすることになっているのは、うれしい行事である。これに対し、親が五十五才になると、子どもが五十五ノダンゴを作つて親にごちそうしてやる風習もうれしい。

暮の十二月八日、または十五日を奉公人の出替りとしているのは珍しく、ふつうは二月初めにする例が多い。北毛地方の山間地に伝承の多い大粥粥の行事が、こゝでは全く聞けなかつたことも特色といえようか。

以上、大ざっぱに見てもこの地方にかなり特色のあることがわかる。各項目の記述については、旧富永村の東部の方から、旧永楽村の西部の方へ順に並べて、地域の変化を多少でも比べてみる便を考慮した。（関口正巳）

一 月

元 日

新 暦 昭和初期から新暦年おくれにかわつた。「新の正月は良いけれど、ボロとスルスが引ききれぬ。」（萱野）

大正四五年ころより新暦をつかう。（天神原）

年 神 その年の神である。卯の日にアガル。だから一膳だけの年もあり、二膳、三膳のこともあつた。いちばん長い十二膳（日）は、その年はよくない。少ない方がよいといつた。（下中森）

年 神は運の神様で、お飾りをする時に来て、二十日に帰る。（木崎）

年 正月様は卯の日卯の刻に立つ。来るのは分らない。（舞木）

年 男 総領とか子どもがする。若水も年男が汲むのがあたりまえだが、これは固い家でも、多くは主婦が汲む。（下中森）

年男はその家の相続人になり、井戸から若水を汲んで来る。（木崎）年男にはその家の長男がなる。（萱野）

節分の時だけ年男といひ、正月には特に呼ばない。（鍋谷）

若 水 特に若水を汲むとはいわない。（鍋谷）（上五箇）

若水迎へは特にない。昔は火事が多かったので、水をいつもくんでおいた。水をあらためるのは女衆の仕事であつた。（萱野）

朝 湯 近所・隣りでよばれつた。（下中森）

朝風呂をたてた家もあるが、あまりたてない。（上五箇）

朝湯は三日に入る。風呂は回り番で、よびっこをした。湯は年男が一番先に入る。その後は男が先、女が後である。（萱野）

朝湯は三時ころまでたて、近所の人をよんだ。五人組のまわり番でした。（瀬戸井）

朝湯は三日たて、最初年男が入る。昔は普段は交代でたてた。三十



床の間のシメ飾り
三ツヨリにして、松葉、コング、
稲穂、ゴマメ、幣束、ダイダイ
を付ける。土地の人が作る。
(赤岩) (関口正己 撮影)

人も入るので、その家ではお茶出しが大変だった。しまいには湯が少なくなつて、「膝湯だ、肩に乗らないので重たい」などと、皮肉をいうものもいた。(木崎)

お元日には朝湯にはいった。(鍋谷)

終戦前まで、朝湯をたてた。(天神原)

初参り 元日夜明けを待って鎮守へ初参りに出かけた。昔は時計が戸ごとになかったので、鶏の鳴き声で起き出してお参りした。瀬戸井の神社では神主がいて、太鼓をたたいて拜んでいた。(上五箇)

元旦にはお宮参りする。水をかぶって裸参りをした人もいる。(萱野)
夜中の二時ころ、男が裸で長良さまへお参りにゆく。はだか参りといつた。(瀬戸井)

お元日の朝、初参りといつて、オサゴとお賽銭を持って鎮守様に行つた。(鍋谷)

恵方参りはその年の恵方にお参りにゆく。(天神原)

年始・セチ 正月の十日ごろまでに、家ごとに「セチ」という日を決めておいた。その日には、くれた娘や孫たち、兄弟などが集まって、そこでお年玉などをやった。(下中森)

「セチ」は同族の新年会で家例になっている。各家をめぐり、一月二日より始まり、小池家は六日。同族が多い程たいへんで、エビス講あ

りまで続く。四斗樽が二十日に終つてしまふ。(上中森、小池清彦氏)
セチといひ、親戚どうして年始日を決めておいて、その日(セチ)にお互いに行き来する。(萱野)

もとは親戚や懇意の家と二年始に行つたり来たりしていた。半紙に水引きをかけた物にお年玉と記し、手ぬぐいなどを付けて持って十五日ごろまでに行つた。今は廃止した。回礼はしなかつた。(上五箇)

年始は三日から七日ころまでにするもので順はない。神主は三日まで寺は四日に歩いた。(瀬戸井)

年始回りは「オメトウ」と言つて、昔は若い衆が村中を歩いたと、うが、今六十歳から七十歳までぐらゐの人の頃はもうやらなかつた。(萱野)

年始廻り 特に順はないが、右の方から廻る。左廻りはシンダンボマワリといつて忌む。ノメシ(忌け者)は一二軒だが、固いものは全部廻る。(木崎)

明治十年頃はまだ村で五、六名、長脇差し、脇差しを差して村回わり



年神棚 居間の神棚の前に恵方に向けて吊る (萱野) (関口正己 撮影)



年神棚 (ザシヤの天井に吊る (上中森) (関口正己 撮影)

をした。

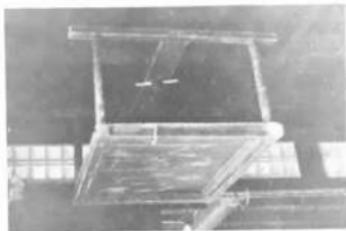
村の年始はお元日に鎮守様です。この時に新年会をする。年始の観
感回りは七日頃までにする。(鍋谷)

半紙、白紙一帖を持って年頭をする。(天神原)

正月棚 (オタナ) ヨシゴで編んで年ごとに新しく作った。二尺四方
ぐらいで一つだった。十四日までおいておいた。その一年に家から幕式
を出したりするとオタナは作らない。(下中葦)

七十年も前のころは、年神棚をヨシで二尺四方ぐらいに編んで作って
いた。竹を割って折り曲げて棚を押さえ、天井から吊るした。棚を一つ
作る家は南向きにした。二つ作る家は相向かいに飾った。つまり年神棚
を南向きにし、オミタナ様の棚を北向きにして向き合わせ、同じ物を供
えた。瀬戸井の南室行知神官(七十才)に御幣を作ってもらい、二本立
てて、供え餅や正月に作った物を朝晩に供えた。お神酒もあげた。供え
物は年男が供えた。(上五箇)

正月棚は神棚のほかに、竹を割って、籠のように編んで棚を作る。節



正月棚 73cm×59cm 高さ41cm
(赤岩) (関口正己 撮影)



正月の供え物
手富貴、ミカン、カネ、コンブ、スルメ、
サケ (上五箇) (関口正己 撮影)

分まで置く。大正の始めからヨシゴになった。供えるものは、萩の箸で
あげる。竹の箸であげちゃ悪い。萩の箸のない家では、桐箸を使う。(木
崎)

もとはヨシガラで毎年つくったが、今は板で組み立てる。お棚には
年神様をまつる。お供え餅は紅白で、白が下、紅が上に重ねる。お棚の
注連は七色の物をつるした。弊家、エスリ、豆がら、ゴマ、昆布、
松の葉、蜜柑などで、多少家によって異なった。(鍋谷)

年神棚は板を組んで作っており、取り外しができ、患方へ向けられる
ようになっていいる家もある。大きき、七五〇×五九〇、高さ四〇〇。(赤
岩)

かま神 流しの上に祭る。お正月におしめを作る。子どもができる
男なら厘子、女なら襷袢をあげる。(木崎)

カド松 松・竹を出入口に当る庭の真中に二本立てた。シメ縄は張ら
ない。家中イッケではカド松を立てないし、ほかにも松飾りを使わない。
屋敷内に松を植えてもいいけないという。(上五箇)

諸田四万氏宅では門松はたてない。(中島)

供え物 家中イッケは三が日には、年神様に大きい供え餅を一組あ
げるだけで、他の神には切り餅を供える。一寸真っ角に餅を切って、上
紅をつけ、紙に包んで神様に供える。(上五箇)

正月の三元日は、ご飯も神の鉢に盛り、節分時のますに入れ、ハギ
の箸で供えて回った。年神様、大神宮様、エビス様、オカマ様、俵神様、
仏様、屋敷鎮守などに供えた。(鍋谷)

家 例 一日から三日まで、朝うどん、昼余り物、夜ご飯に塩引きサ
ケとイモ汁。三が日のうちにトロロ汁を食べると風邪をひかない。(上五
箇)

三カ日は餅を食べない。餅を食べるとふきでものができるとい
いはつくるけれど食べないで、そばを食べる。
四日の朝はぞうにを食べる。(菅野)

将田家は、餅を食べると腫れものができるといい、三カ日うどんを食べる。(木崎)

ハギの箸を家族の人数だけ作っておき、正月うちにハギの箸で食べた。

(鍋谷)

朝一うどん、昼一おしろこ、夜一米の飯。三カ日は餅を食べない。(天神原)

木村家と森田家は、三カ日はうどんを家例としている。(新福寺)

元日から七草までの橋本甚次郎氏宅の食事。

朝食一三元日うどん、四日はオシルコ、七日は七草オカイ。

昼食一四日はしょう油ヤキモチ、七日餅。

夕食一日から四日まで米の飯、七日にも米の飯。

八山勝義氏宅では、三元日はウドンで男衆がつくる。女衆の手をかけるはいけない。諸田四万氏宅は、三元日に餅を食うとはれものができる

といいて、ウドンを食う。田代一家は(田代姓)三元日はイモソウニだけですこす。イモは里芋。(中島)

禁 忌 小池家では三カ日に餅を食べず、うどん、そばのみである。又、暮に大掃除をせずに、三カ日に毎日掃除をする。うどんをゆでた湯

で主人をはじめ家中で天井板まで掃除する。

小池家は上中森の草分けて、文禄3年に授業寺を開いた時の檀那になつている。武田勝頼の家臣であり、利根川沿いに逃げのびてここに落ち着いたが、暮に家を新築した為に正月に荒壁等が落ちて来たので掃除

をしたのが始まりであるといふ。(上中森・小池清彦氏)

三カ日に餅を食べるとオデキができる。(上中森)

年神さまのいるうちは争いごとをすといふ。

年初めに何かあると一年中あるので注意する。特にけがや病気に気を

つける。(瀬戸井)

三元日ははだしになつたらいけない。(鍋谷)

西ノ根の武藤家では三カ日に餅を食べず、お供えもあげないでうどん

だけで過ごす。三日に餅をあげる。先祖の武藤ケンモツが休泊堀の工事

中に大谷家と争い武藤家の前でそれを曲げてしまった。それにより殿様

につかまり前橋へ連れて行かれ、正月の三日に帰って来たので、そのし

きたりを守っている。今でもケンモツ橋が休泊堀にかかっている。(舞木

門 付 三河万歳・獅子・猿廻し・依ころがしなどが来た。(木崎)

二 日

謡初め 今は新年会を二日にする。(下中森)

謡初めは二日に若い衆がやった。高砂、四海波、千秋楽までやった。

萱野が上、下にわかれていて、お互の若い衆が宿に集まってやる。宿は

長男が嫁をもらった家でやった。謡初めの際、両方の組から使者が立っ

て下から上へ、上から下へと謡を一つずつやったものであるが、この

使者になるのは礼儀作法などきびしくて大変であった。口上の中のべ方

がわるかったり、態度その他に問題があると、ああでもないこうでもな

いといわれてなかなか帰してもらえない。そこを上手に何とか逃げて

こなくてはいらないから大変であった。相手側では何とか使者の落度を

さがしにかかるわけである。

行つてくれば行ってきたで、皆の前に手をつけて無事任務を果たしたと

報告しなければならなかった。(萱野)

二日の事始めがうたい初めで、長良さまへ村中の人が行つて「高砂や」

をやった。(瀬戸井)

正月二日に謡初めをした。戦前まで戦後は全くしない。嫁をもらっ

た家が宿になる。部落に新しい嫁が来るまでは宿になる。青年会(男だ

け)がした。酒や肴は持ち寄った。アベカワ、オシルコ、ウドンなどの

ご馳走をした。十時頃から四時頃まで飲んだり食ったりした。(鍋谷)

各々ウツ毎に宿を決めて毎戸の主人が寄つて、謡初めをする。その後で御馳走や酒で談笑した。(舞木)

うたいぞめは元日に一戸一名集まり、うたいをやる。一年間の行事の

割りふりをする。(天神原)

仕事始め 半日でも、繩を一ボでもなつてから遊べといった。(上五箇)

二日の仕事始めには、なわを一本なう程度。(鍋谷)

一月二日は仕事はじめ、この日には、はまだ(まぶし)をおるとか、なにかをつくつて、年神さまにあげた。(赤岩)

男は繩ない、藁すくい、女はオハシンの準備をする。(天神原)

三 日

厄落し 三日の日に厄除けの神さまに参拝した。(瀬戸井)

不浄日だが、改まったことは何もしない。(天神原)

四 日

棚採し お供え餅を下げて焼いて食べた。坊さんの年始は別にしない。

(上五箇)

四日にするが、その時おろしたお供えは二十日の汁粉に使った。(萱野)

四日は棚サガシで、下男がいる家では下男がした。主人は下男の小遣

いとして棚に金を上げお供えだけさせておく。(鍋谷)

お供えをおろして食べる。お供えはその日に食べるものと言われるが

現在では、二月になってから、油で揚げて食べる程度である。(天神原)

鍋作り 聞かない。(上五箇)

寺の年始 寺への年始は四日。大判餅を二枚持って寺へ行く。(上中森)

四日は不浄日といつて坊さんの年始日である。萱野では曹洞宗、洞源

寺からハンニヤの大きな札をもつてくる。

四才の子の厄除けの日で、昔は新田郡の反町の薬師様にお参りしたが、

今では赤岩の光恩寺が代行する。よく調べてあるもので、子が四つにな

ると招待状がくる。これは今でも行なわれている。(萱野)

寺の年始はない。部落内に医王寺という無住の寺はある。(鍋谷)

赤岩の光恩寺へ行って、四才になった子供の厄除をする。

(天神原)

六 日

爪切り 七草をひたした水に爪をつけてから爪ははぎる。元日からそれまで切らない。正月様がいるのに爪を切つてはいけない。(上中森)

山入り 六日は山の仕事始め、鎌をもって山に行き、少しでもいいから仕事をしする。シバを刈つて来る。(瀬戸井)

六日は山入りといつて山仕事をしてもよい。オサゴ、餅、オカシラツキを持っていってオミキを飲む。(萱野)

六日は山入りで、屋敷鎮守の東南に朝早く行き、松飾りをして、オサゴ、紅白の餅、お酒を供える。この時に山刈り鎌か木鎌を持って行った。

昭和十年ごろまではした。(鍋谷)

林を伐る人やイヤマ(家の裏の林)を伐る人が、酒一升飲んで仕事を始めた。(赤岩)

山の木の伐採をする人が四十、五十人いたが、屋敷山等の材木を買う元締めの家(舞木で三軒程あった)に集まって山入りをする。屋敷山の立木におしめを三ヶ所纏てははる。下に紙をしいて塩、お供え、オサゴ

を置く。山の木を一本切る。(舞木)

山仕事にまぢがいのないように、山の神をまつる。山には入らず、仕事の道具を山の神様(屋敷鎮守様の隣)に供えて、注連をはり、酒を供

える。主な山仕事は、農閑期に、薪を切つたり、燃料用の柴草、下草刈り等である。山の神様は天狗様で、栃木県オノマタにある。(天神原)

山入りには、オーバンという尺真角の赤、白の餅と、小半紙を敷いて、ごまめ、昆布、神酒を山の神に供え、あたりの草を刈るまねをした。(福島)

一月六日は山入り、近くの山に入って、料の中に半紙を敷いたお膳に餅、オサゴ、にほしを供え、酒をまいて残りは飲んでくる。この日に山

刈りといつて、もし木をとってきた。(中島)

七日 日

七草がゆ、白い粥を食べた。しかしナズナは入れた。ナズナのことをナナクサという。(下中森)

七草をドンブラ(井)に水を入れて冷やし、細かく切っておかゆに入れてたく。別に歌はない。そのドンブラの水で爪をふいてから爪をはぎるとばい菌がつかないという。(上五箇)

七日には七草ガユをするが、この辺では、ノコギリツバ一つで七種のかわりとする。略式である。ノコギリツバは田の畔などに生えている。(萱野) ナナクサといい、葉が七つに切れ、霜の歯のように生えている。「日本のはしを渡らぬうちに、すとんとん、とんとん」と唱えながら叩き、粥に入れる。「秋あらしが来て、突入りが悪いから、吹いて食べるな」という。(木崎)

六日の晩に七草ガユをする。昆布に正月餅を入れてカユをつくる。(鍋谷)
六日の昼にセリをとって水にひたしておき、ちぎってかゆに入れる。(天神原)

正月の七草には、昔は朝早くから起きてトントンと切る。「なな草なすな唐土の鳥が、日本の国へ、渡らぬうちに、ストトントントン」とうたしながらやる。一夜なな草はとるものでないといひ、三日前にとる。

なな草は七草でなく、ナナクサという草を一つとればよい。(ナナクサはナズナのことだといふ。)(新福寺)

十一日

クワ入れ 十一日の朝、小黒に供えておいた松と、オサゴとオオパン(餅一升ます大)等を持ってクワイレ畑(大体きままっている)に行つてサクを三本か五本ぐらい切つて、そこへ松を立て、酒と尾頭つきを供え、謡をうたつて酒を少しのんで帰る。オオパンの餅は家中で焼いて食



クワイレオカ(畑)にすることが多い。(下中森) (関口正己 撮影)



クワイレ(萱野) (関口正己 撮影)

べる。謡は高砂。(下中森)

年男が患方の田や畑に行つて、畝で三本ばかりサクをきつて、クワイレ様を祭る。半紙を四つにさいて、棒に付けて立てたものに、餅や一升ますに入れたオサゴ(米)、チョコや盃の酒、かつぶし、コブ巻きなどを供えた。酒は毒味してからチョコに注いで供え、余った酒はその場で年男が飲む。雪のあることもあり、よい気持だった。(上五箇)

ここでは畝入れといふ。十一日までは畑へ行くものではないとされ、この日には、たとえ三尺でも六尺でも畝を入れるものだといつて、少しでもサクをきる。(瀬戸井)

十一日に畝入れをする。夜明けを待っていて出かけていく。田の吉方にお松をたて、オサゴ、酒、肴を供え、サク切りをする。三・五・七ととにかく奇数のサクを切る。そして、謡の中のめでたいところをいくさりやる。#正月はめでてえ、など唱えてもよい。(萱野)

畝入りは十一日にあきの方の畑へ暗いうちに提灯をつけて行く。夜が明けてから行くと、一年仕事がおくれる。冷酒を飲み、帰つて来てから、

家例の汁粉、そば、うどんを食べる。(木崎)

十一日は鍛入れで、朝早く屋敷の鼻先きに松を飾り、一升俵にオサゴ、紅白の餅、お酒を入れて供え、手打ちをした。昭和十年頃まではした。(鍋谷)

11日は鍛入れ、田で三本サタを切って真中に松にオシメを張り、3カ所をしばって立てる。塩・オサゴ・ゴマノを供え、そこで主人が酒を飲み、謡いをうたう。(舞木)

タワイレ松といって、畑に松を立てて、注連をはる。オサゴ・魚・オパン(十二月につくっておいた餅)のすみをかいて、根元に供え、タワでサタを切り、お神酒を飲む。残りのオオパンは持ち帰っておしるこに入れて食べる。(天神原)

オシメをたて、そこへこまめ・おさこ・柿・大判ののしもちの角をかいてこれを上げる。山入り同様で、おみきで祝いをする。(新福寺)
明きの方の畑へ行ってさくを三さく切り、真中のさくに松を立て、半紙のお膳に餅とオサゴを供えてくる。(中島)



神前にニワトコの枝を供える(小正月)(菅野)
(関口正己 撮影)



堆肥場にさしたニワトコ(菅野)
(関口正己 撮影)

倉開き 倉は少ないが、倉開きをした家もある。(上五箇)

十 四 日

お松ひき 十四日にかざってあった松をとり、そのあとにハナギをさした。(瀬戸井)

十四日にはオシメをとって稲荷様のところへ燃す。

マユ玉を作ってあげる。また六日に切っておいたナラの枝でハナ木を作ってあげる。オシメのあがっていたところのみなあげる。①年神、

②大神宮、③エビス、大黒、④仏様、⑤カマド神、⑥井戸神、⑦馬屋、⑧物置、⑨便所、⑩稲荷様、⑪鍛入れしたところ。(菅野)

お飾りの松を取り、マユ玉を飾る。(舞木・天神原)

モノツクリ 十四日をモノツクリという。オタナは稲荷様に持って行っておく。お飾りは十五日粥を炊くかまどにくべる。灰は邸まわり、稲荷等にまく。シメは下方を、苗を束ねるナエバをしばるわらとする。

マユ玉は、綿の花の形をつくって、ケヤキ・サトゴ(エノキ)などにさして供える。(下中森)

十四日は「モノツクリ」といって百姓道具を作った。マンガを引く繩などを作った。(菅野)

ハナカキにはハナ木を使い、門松や年神様の所に立てる。(瀬戸井)

ハナ木には十六節のハナをかき、大神宮に二本あげた。(鍋谷)

ハナ木(ニワトコ)を削ってハナをかけた物を、竹の先に一本に一個ずつさして、方々の神様に供えた。六、七十年も前にはハナカキの道具が鍛冶屋にあったので、それでハナをかいた。ハナは大神宮、年神、エビス大黒、仏壇、屋敷稲荷、便所、井戸などに、シメ飾りと交代して供えた。十四日に飾り替えた。ハラミ、バシヤアワボなどは作らなかった。

カユカキ棒はハナ木で二本作って年神棚に上げておく。(上五箇)

ハナ木で一mもの長いものにハナをたくさん削りかけて年神棚に供える。あとは一節の短いハナをハナカキで削って作り、松のかわりに大神

宮、かまど、屋敷稲荷、井戸、便所、小屋、こやし場などに飾りかえる。

マイダマゴ(マユ玉)もいっしょに供える。(赤岩)

桑またはナラの小枝に繭玉、綿の花(米の粉で綿の花のように作ったもの)、小判(飾り菓子)を飾って正月棚か、大きいのは大黒柱に飾る。

花木を削って十六個の花模様を作り、大神宮にあげる。(舞木)

ハナゲを削いて、大神宮様に十六バナをあげる。現在は、節の十六あ

るハナゲをあげる。一年間あげておき、十二月に正月の餅をふかす下で

燃す。堆肥にもハナゲ、まゆ玉をあげる。まゆ玉はさげて牛馬にくれる。

ハナゲでカユカキ棒をつくる。(天神原)

ニワトコの芽のついた長い枝を堆肥場にさす。(置野)

成り木の呪い 十四日のモノツクリのあと、外したおシメを梅・柿・

ぼたんきょうなどにしぼりつけておく。(下中森)

十四日のものづくりにしぼりつけておく。幣束を作り、柿・梅・李

などにしぼりつけた。この日におしめをはずす。繭玉

を作る。幾分大きく十六箇玉を作り、あとは数多く作

る。綿の花も幾つか作る。(木崎)

正月飾りの幣束をまとめて、柿の木や梅の木などの

成り物の木に吊るしておく、実がよくなる。(上中



正月様の幣束を成り木に吊る
(上中森) (関口正己 撮影)



仏床の間が祭壇で掛軸、お札を飾る、前は年
神棚を吊る。
(袴押入れの中に仏壇、上が神棚 (下中森)
(関口正己 撮影)



仏床の間が神仏の祭壇になり前に年神棚を吊
る
(袴押入れの上が神棚 (下中森)
(関口正己 撮影)

森・鍋谷

マユ玉 米の粉を一升ほどこねてマユの形を作り、うでてミズナラの

木の枝に十個から二十個ほどさして、年神や鎮守・屋敷稲荷・井戸・便

所などに供えた。(上五箇)

まゆと同じ形につくり、ハンノ木にさして大黒柱へ立てる。ゆでた水

は家畜にやる。

まゆ玉は一週間くらいたてておき、固くなってから食べた。(瀬戸井)

マイダマはならの木の枝にさした。(新福寺)

十四日をモノツクリといい、朝のうちにマイダマを作りナラの木の枝

にさして飾る。マイダマ飾りは、十五日の夕方にはさげる。「十六日の風

には吹かせん」という。(鍋谷)

一升の粉で大きいマイ玉を十六作り大神宮に供え、あとの一升で小さ

いマイ玉を作り、ほかの所へ供える。(赤岩)

紅白のまゆ形をつくり、ナラの木にさす。床の間には十六タマといつて大きいまゆ形を飾り、恵比須様、大神宮様、クワイレ様には小さいのを三・四個さして、一本ずつ飾る。りっぱにやるほど良いといわれるが、最近はやらない家が多くなった。

マユ玉をゆでるとき、正月の松を燃し、その灰を水にとつて家のまわりにまく。そうすると、家の中にナガムシが入らない。(天神原)

今年にはマユ玉を作る家がほとんどなくなった。座敷に飾る家はなくて、わずかにケヤキの小枝などにさしたものを、神棚や仏壇や家の入口に供えた家が散見見られただけだった。

マユ玉は十四日の朝作り、十六日の風を吹かせるなどいって、十五日の夜取ることになっていた。(上中森)

若もち わかもちを十四日につく。(瀬戸井)

小正月に搗く餅を、年の始めに搗くのだから若餅という。(木崎)

子供が十四才になると、大人になった祝いの餅をつき、太田呑電様、妻沼聖天様へ行く。

昔、若餅をつきながら、こねどりのうでをついてしまい、それ以来若餅がつけなくなつたので、まゆ玉をつくる家がある。(天神原)

お供えを年神様に供える。(新福寺)

十四日の朝、正月のお供え餅を焼いてゴマ味噌をつけて食う。この日の朝のご飯は、正月飾りのお注連とお松で焚く。(鍋谷)

オミタマ様 年神様へおむすびを榊にさして供えた。ふつりの年は十二個、うるう年は十三個供えた。(瀬戸井)

一月十四日にお注連をさげ、クワイレに使つたオサゴでオミタマメシをつつくる。十二個つくりウツギの枝を一本ずつさして、仏様に四つ、他を年神様にあげる。オミタマメシをたいた灰を家のまわりにまくと家内安全になる。(萱野)

十四日に「おみたま様をずれ、おみたま様をあげる」といい、重箱に御飯を入れ、うつぎを十二本さす。(木崎)

十五日の朝、丸く握つた握り飯六個を、半紙を敷いたお膳に盛り、オガラ箸を六本たてて、お膳に供える。ミタマノ飯という。これはメーダマ飾りをさげる時に一掃にさけて、焼いて食べる。(鍋谷)

十四日にぎり飯を十六個作つてお膳にあげ、各々のにぎり飯にウツギの小枝をさして、年神様にあげる。それをすぐに下げて食べる。病氣にならない。(舞木)

十四日に注連飾りを下げたあと、御飯を六・八個にぎって、ウツギの榊を一本ずつ立てて、オミタマ様に供える。十五日にさけて焼いて食べる。(天神原)

ミタマサマは一月十四日に、部屋の中央に年神さまと相向いにつくる。丸いオニギリをつくり、うつぎの木を二芽残して下をけずってオニギリのまん中にさし、ミタマサマに上げる。

十六日に松かさりをとってオニギリを焼いて食べる。(新福寺)

一月十四日の晩、お膳に半紙を敷き、ミタマの飯といつて握り飯十二個のせ、うつぎの箸を十二本さして、お膳に上げた。これをオミタマ様といった。十五日の朝さけて、焼いて食つた。(中島)

オミタマ様は最近ほとんど作らないので、見られない。(下中森)

道祖神 十四日に門松を取る。お飾りは各家で焼く。この灰を水に入れて家のまわりにまくと、蠅よけになる。(上中森)

道祖神は別に祭らない。ドンドン焼きをしないで、めいめいでお飾りを始末した。(上五箇)

道ロク神は片脚で、べっぴんの弁天様に恋をして追っかけ回したので、弁天様は光恩寺の境内の池の真中に一本橋を掛けて鎮座した。道ロク神は一本足では渡れないので泣き入りして池の端に祭られた。今でも、足がわるくは道ロク神を拝めたい、願掛けて、直ればワラジをあげるの、大ワラジがかかっていることがある。(赤岩)

十四日に門松・正月棚を下げ集めて天王様の前で焼く。その火で餅を焼いて食べると病氣にならない。その灰を家のまわりにまくと火難厄病

除けになる。(舞木)

十四日は浅間様の境内でオタキアゲをした。昭和十年ころまではやった。(中島)

厄落とし 男四十二の厄年には、十四日に厄落としに栃木県佐野の元三太子にお参りした。(鍋谷)

十 五 日

アズキガユ 十五日ガユをする。さげた餅を入れる。カユは吹かずに食べる。吹いて食べると風の害があるという。カユカキ棒はとっておいて苗代の水口に立てる。(寛野)

朝アズキガユを作って、カユカキ棒に大判(一升ますの大きさ)の餅の片はしをぶつかいて挟んで、カユをかき回した。年神に進せてから、吹かずに食べた。「このかゆはあつくも吹かずに食べる、田植えに風が吹くから」という。

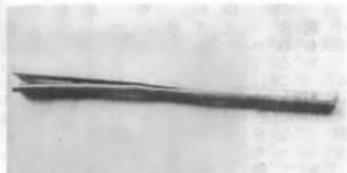
七草で青い芽が育つように葉を入れたカユを作り、十五日には実がなるので、アズキを入れたカユをつくる。

このアズキガユは吹いて食べると実が落ちるので、熱くとも吹かずにすすりこむものだという。(上五箇)

正月のシメ飾りのわらを燃しておかゆを煮る。この灰を十能ですくって家のまわりになくと、火難除けになる。灰を水にとかしてまく家もある。(上中森)

十五日がゆをあずきがゆという。重箱くらいのもちを切って入れて食べる。熱いかゆを吹いて食べはいけない。吹くと種の花を吹き落とすといわれた。(瀬戸井)

カユカキ棒 (天神原)
(青木則子 撮影)



十五日の小豆がゆを吹いて食うと、西風が吹く。(鍋谷)
小豆がゆを、ふいて食べると、田植えに風が吹くからふいて食べるなどいう。(天神原)

大正月、小正月等の語がない。十五日朝は小豆粥。にわとこで粥かき棒を二本つくり、これで粥をかきまわす。棒は先を十文字に割り、その割りに薨玉をさす。粥をかきまわした後は神棚にあげておく。(下中森)
カユカキ棒 ハナギで作る。おかゆのたかかったのを年神様にあげる。(木崎)

カユカキ棒はハナギで作った。十字に割り目をつけ餅をはさんだ。年神に供えた後戸口においたり、苗間の水口に立てたりした。はらみ箸やアーポ・ヒーポは作らない。(鍋谷)

カユカキ棒にマユ玉を半分に切つて挟み、アズキガユをかきまわす。米粒がたくさんつけば、今年は石があるという。(赤岩)

カユカキ棒に餅かまゆ玉をはさんで小豆がゆをかきまわし、かゆをたけて、年神様にあげる。あとで苗代に立てる。(天神原)

ハナギの棒の半分くらいの皮をはぎ、先を四つ割りとし、十五日のあずきがゆをかきまわして年神さまに上げ、二十日に下げる。その後は大神宮さまにおき、苗代をつくるとき水口にさす。

これをまたぐとオコリがたかる。(新福寺)

嫁の年始 嫁の里帰りは一月十五日。一升ます大の大判餅を二枚持たせてやる。(上中森)

十五日には嫁さんが里がえりする。大判(餅)を二枚ずつ紙に包み贈る。嫁さんの初めてのユサン日だという。(下中森)

嫁ゴの年始日 嫁ゴは実家へご年始に行く。その時、親のケへみやげ物として大判の餅(一升ますの大きさ)を二枚持たせてやる。家により紅白に染めたりして、水引きを掛けて二年始に持って行く。実家では大判の持って来られる家へかたづけたいといつて喜んだ。(上五箇)

十五日に嫁ゴの遊山日といって、嫁ゴが里帰る日である。(木崎)

八幡宮の元旦祭、上中森の八幡様へ家々からお供え餅を持って参拝に行き、家内安全のお札をもらってくる行事が、ずっと前から行なわれていた。(上中森)

糠、番頭の宿帰り 十五日には大・小餅(二尺真四角の餅)二枚を持って、嫁、番頭が実家に帰る。(萱野)

成る木賣め 梅の木などのナルモノは皆ナタで切り、カユをぬりつけた。多分十五日だと思いが忘れてしまった。(萱野)

十五日の朝「なるか」ならぬか」といって実なる木を鈍でぎずをつけ、そこへかゆをなすりつけた。(瀬戸井)

十 六 日

やぶ入り 十六日にはいろいろのカギツツルシ(かぎ竹)まで休ませろ、という。(下中森)

正月十五、六日をやぶ入りという。「カギツツルシ」も休む日だといわれる。(瀬戸井)

正月の十五、十六日は、カギツツルシも休むといって、湯をたてない。(木崎)

十王様 仏様につやのついた物(あぶらげ・こんにやく・こぼろなど)を煮付けて五目飯を作って供えた。正月も終えたようなものである。(上五箇)

地獄極楽などの絵のある十王様の掛しを、医王寺に行つて見てきた。子供をつれて行き、説明してやった。正月の十六日には必らず行ったものだ。(鍋谷)

堆肥出し ふみ草や肥料をこやし場に持って行き、堆肥を外に出す。(天神原)

十 七 日

観音様 正月十七日、恒落山宝生寺の境内にある観音さまへ参拝した。

牛や馬をひっぱってきて観音さまのまわりをまわってから、赤飯を馬にやった。(瀬戸井)

十七日は埼玉県上岡の観音様の縁日で、馬を飼っていた家では講があった。足利の手前のアガタの観音様に馬をつれていったこともある。(萱野)

邑栗町の石打と、谷中の観音様に参詣する。谷中はハチベーカーンノンといいい、女の下の病にいい。埼玉県比企郡の上岡の観音様に参詣し、絵馬、孟宗竹の葉を受けて来た。これはダイバよけになる。馬を飼っているものは、かならず出かけた。(木崎)

正月の十七日には、安産祈願に邑栗町の石打へ行ってきた。(鍋谷)

石打の観音様へ嫁が参拝に行く。嫁が観音・朝観音といつて、朝早く、さい銭とオサゴを持って行く。嫁に来たての人は母がつれてゆくし、たいてい都合をつけて行く。(天神原)

十 八 日

秋葉様の祭り 朝早く、風を当てないうちにマユ玉と花を皆さげろ。秋葉様(火伏せの神)の祭りだから風をあてないのである。秋葉様には赤飯を供える。消防士の祭りであり、ポンプで放水をした。(萱野)

ノッキリ競馬 一月十八日の円福寺にある馬頭観音の供養日にやる。片町通り約二千メートルの直線コースが競馬場となり、百姓馬十頭位出場する。ゴールに竹二本を立て、それに繩を張り、手拭いを何本か下げておく。裸馬にまたがった騎士(村の人がやる)が走って行って、立ちあがってその手拭いを取る。それが大変に難かしい。回らず直線コースでそのまま乗り切るの、ノッキリ競馬という。(舞木)

十八がゆ 十五日の小豆がゆの残りを、あたためて食べる。十八日は大師様の日だが、十五日に続いて作るのは容易でないのとておくという。(天神原)

二 十 日

エビス講 十九日夜、エビス様のお姿を神棚から下ろして床の間に飾りお膳をそろえて祭る。膳には大盛りのご飯、大根を千切りした煮びたし汁、イワシ(秋はサンマ)などを並べた。また、銭やそろばんも供えた。(上五箇)

二十日はエビス講でもあるので、館林にいたり、小泉にいたりした。エビス様をかざって酒、オカシラツキにゴハンにオツケを供えた。一銭から千円までの金を一升マスに入れて供える。
カ一生(升)マス(枳)繁盛の意味である。

その他、カケブナ(ザッコでもよい。)を二匹ぐらい川でとってきて供えた。カケブナは講が終ると井戸の中に入れた。虫を食べるからであるという。(萱野)

えびす様は東向きにしてごちそうする。おかしらつき、ごはんのお高盛り、いもの入ったケンチン汁を供えるが、この日には、金をますに入れて供える。(瀬戸井)

恵比須・大黒の軸を全部出して、その前にてっこ盛りのご飯、頭付のサンマ、カケブナ、カブ、里いもなどをそなえる。カケブナは生きたフナをどんぶりに入れたもの、カブは主に聖護院で大きいほど良いという。里いもは、芽が出たためめでたいという意味であげる。

家中で、恵比須様にあげたものを、いくらで買うと、できるだけ大きい金額を言って少しずつ食べあう。景気よく買って食べる。

恵比須様を生ぬるい湯で洗う。フナは翌朝生きたまま井戸にはなす。春、井戸替をする、ヤセたフナがいる。(萱野)

二十日正月にえびす講といて、朝そは、昼すし、夜すしをつくる。えびす様はいつも南向きだから東に向ける。えびす膳には財布、飯をオタカ盛りにして、生きているカケブナ二匹を供える。このフナは、翌朝

井戸に入れる。(鍋谷)

エビスの掛字を出してお宮をかざり、酒・柿・サンマ等のお膳をあげる。右左逆のお膳である。大黒様にもあげる。お膳を下げる時に有金全部を供えて買ってくる。(舞木)

おそなえ、お神酒、ヒレ頭付のイワシを供える。朝はそばをあげる。秋から食べすぎているからと、あまり沢山もらない。夜になるとお金をふやして下さいとお願ひする。(天神原)

二十日正月、二十日は正月は終るので、お棚に供えた物を全部下げる。マユもこの時に下げる。二十日正月がすむと仕事をさせられた。(上五箇)

正月の終りの日、おそなえで汁粉をつくる。二十日になって初めて汁粉が食べられた。(瀬戸井)

二十日正月でお汁粉を食べた。(萱野)
お飾りは二十日の風を吹かせるなといて、二十日前にかならず取る。(福島)

一月十四日についたのしもちを焼いて、年神さま、ミタマサマ、大神宮さまへ上げる。病気をしないという。(新福寺)

二 十 四 日

遊び日 この日は村の第一回の遊びの日、きめられたおじさんがいて「アツパレロー」と村中をどなって歩いた。一年中遊べないため、一年いくらでやとわれているような人はこのようながいわれると安心して遊ぶことができた。(瀬戸井)

愛宕別火 愛宕様は火伏せの神で、火事がないように、一月と十二月の二十四日にお祭りする。天神グルワや行人塚グルワなど一タクルワが集まって、サシ(割カンの寄付)をもらって五目飯をこしらえ、持ち寄せて食い講・おごり講をする。別火という語は愛宕様だけに使う。また「五箇の祭りにハツカシイ(二十四日)」といて、二十四日に祭ることになっていた。(赤岩)

天神講 正月二十五日の男の子の遊び、子どもたちが組になって、米、ごぼう、にんじんなどを持ち寄り、いくらかの金を出し合ってあぶらげぐらゐを買って、ごもくめしがきまりなのでつুক্তもらう。色紙で七夕さまより少し広い、いどの巾で長くはり合わせ、「奉納天満宮」と書いて竹の竿につけて天神さんへ上げ、早夕飯くらの時間に会食をした。女の子はやらなかつたようだ。(新福寺)

二 月

次郎の一日(二日)

餅を白ついで、神様にあげたり食べたりした。(上五箇)

次郎の一日といひ餅をつく。アワイ(間)にいゐるものを食べてないから、時々餅をつく。(木崎)

二月一日は二郎のツイタチ、朝ぼた餅をつくる。これは家のものだけが食うもんだといひ、仏様にも供えない。(鍋谷)

節 分(三日)

年取り トシトリ・トシコシ・マヤマキなどといひ、大豆をいって神棚から順次、屋内、屋外等にまく。(下中森)

二月三日は節分で、豆を豆ガラで煎る。福は内、鬼は外を競争で早くやる。豆は自分の年だけ食べる。また、豆をとっておいで初雷のときたべる子供が雷をこわがらないといひ。豆を流しの下に自分の年の数だけすてる家もある。

年取りの晩、鎮守様におまいりして帰ると寒いので、菊をはしておい

たのを燃してあたる。自分の体の悪い所にその火をあてるとその年はやまないといひ。(菅野)

鯛の頭を焼く時、「鯛の虫の口を焼きます、麦の虫の口を焼きます」と、作物の名を全部あげ、その度にベッベッと唾をかける。いった豆は、一旦神様の前にあげてから、歳神様・大神宮・お恵比寿様・仏様の順にまく。その残りで福茶を飲む。豆は年を食うといひ、井戸の中へ入れ、午のスマツカリに入れたり、初雷の時に食べる。鯛の頭は豆がらに挿し、とほ口に挿す。(木崎)

節分の豆は豆木もしている。年男は風呂に入って豆撒きをする。撒く順は、年神様―大神宮様―床の間―オカマ様―トボロ―屋敷鎮守―井戸神様―便所神様―山入りに松飾りをした所など。節分のユズ(冬至にユズを味噌づけしておく)をお茶に入れて飲む。豆撒きの豆を自分の歳の数だけ拾って井戸に入れる。豆占いはしない。ヤカガシとはいひ、豆がらにイワシの頭をさしたものを二本つくり、「虫の口を焼きます」と言ひながらツバをかけて焼く。これは年神様にあげておく。(鍋谷)

家の中へ豆をまき、鎮守様へも行つて豆まきをする。(赤岩)イロリで豆がらで豆を焼き、夕食後、ふろに入つてから、豆まきをする。

豆を持って鎮守様へ年とりに行く。帰つてから福茶を入れて年神様にあげる。冬至につけたユズのみそ汁を食べながら福茶を飲む。(天神原) 櫛の木の本又には鯛の頭を二つ挿したものを年越しの豆焼きに使う。これをヤカガシといひ、つばをかけたながら「大小麦の虫の口を焼きます」と農作物の名をいひ、焼く。ヤカガシは年神さまのお棚へあげ、このあとトボロに挿しておく。豆まきの豆は、いつさら櫛に入れてお棚へ広げ、豆まきの順は、年神さま―大神宮さま―オイベスさま―仏さま―屋敷稲荷―浅間神社で「福は内、鬼は外」と唱える。「福は内、

鬼は外、鬼は外」と唱える家もある。福は内は家の中を向いて、鬼は外は戸外に向って、いずれも戸を開けておく。年取りの豆で福茶を入れ、お茶を飲みながら、自分の年の数だけ豆を食う。この晩に、冬至につけたユズ漬けを食う。年取りの豆は、少しとっておいて初午のスミツカリに入れて煮る。(中島)

家中イッケは十八・九軒あって、先祖の供養をするため、赤飯をふかし、お客を呼んだりする。年取りの晩は人声が消えてからこっそり愛宕神社へ年を取りに行く。豆まきをしないで、米をまいて口の中で内緒に拝む。家中氏の先祖は鬼子母神なので、豆をまかないし、「鬼は外」ともいえない。家中氏の墓は阿弥陀堂の所にあり、紋は三つ柏。(上五箇)

節分にヒイラギは飾らない。(赤岩)

年越し 旧曆では、節分が年内になることがあり、そんな年はその分だけ余計に食うことになるから「年内年越しは七倉あく」といわれた。同じ年に三回豆まきをすることになるので、「今年は豆まきは三度だから豆がとれる」ともいった。年取りが春、大豆の種まきは五月、更に年取りが十二月にまわってくるので「三度まき」というわけだ。(新福寺)

ヤカガシ 大豆をいれる時に、いわしの頭を豆がらにさして、つばをかきながら「虫の口を焼く」とか「子どもの腹の虫を焼く」などと唱える。それをあとでトボーロへさしておく。(下中森)

イワシの頭を豆がらにさして、「四十八シユクの豊作の虫のくちばしを焼く」といって、ほうろくの下でイワシの口を焼き、豆をやく。それを苗間のうちち立てる。ひいらぎの木と、焼いた口をトボグチにはさんでおくと「鬼除け」となる。(瀬戸井)

イワシの頭を豆がらにさして、つばをつけて焼く。「ヤオヨロズの虫のクチを焼く」ヤカガシは年神様にあげて苗代にさす。(雲野)

豆のからの二またにイワシの頭を二個とおして、豆がらを燃やしながらか、湯をわかし、そのイワシの頭を焼く。この時に「虫の口焼き」「四十二色のわる虫の口を焼きます」などという。イワシの頭は年神棚に上げ



ヤカガシ
(天神原)
(青木四子)

撮影)

て置く。あとで片づける。
(上五箇)

イワシの頭は豆がらにさして、年取魚として取っておき、魚の骨がのどにつかえた時にこれでさす(または、水で

飲む)と取れるという。

ヒイラギの枝をさした例はあまり見えない。(赤岩)
いわしを二又の枝に差してつばをはきかけて焼く。「大小麦の虫の口を焼く」と言いながら豆がらで焼く。種、野菜等作物全部の名を言って焼いてから年神様にあげる。(舞木)

まゆ玉をさしたナラの木にイワシの頭をさして、「種の虫、麦の虫、小麦の虫、ナス、キュウリ、トウナスの虫……の虫を焼くぞヤカガシ」と、作物につく虫の名前をいって焼く。

ヤカガシと豆を年神棚(節分までさげずにおく)にあげて年をとる。ヤカガシは、苗代をつくる時、田へもってゆく。(天神原)

年取りの豆 節分の豆で福茶をつくつてのみながら、いろりに豆を入れてみる。しける年は豆がいぶり、ひでりの年は豆が燃え、一月から十二月の天気占う。(瀬戸井)

節分にまいた豆をひろって、家族の年だけ数える。十才を豆一粒に略して、端数は数えて全部まとめて、井戸の中へぶっこむ。「この豆が花咲くまで、はやり目はやり病いにたからないように」と唱える。最近までやっていた。(赤岩)

初雷の時に節分の豆を食べる。鬼の豆という。

井戸のまわり、または中へ年の数だけ供える。いった豆が生えるはずがないのに「この豆の生えるまで目を病まない様に」と。

十二個の豆を焼いて各月の天気予報をする。(舞木)
豆を、一個ずつオキの上で十二個焼き、その焼きかげんで、月の天気

を占う。ケブが出てこげないと風、豆の油が多く出ると雨、くべるより早く火がついて赤くなるとひでりという。(天神原)
井戸替え 節分の日に井戸替えをしたり、カマドをついたりする。(赤岩)

初 午(午の日)

稲荷祭り 屋敷鎮守へ五色の旗を立て「稲荷大明神 二月初午」と書いた。またマイ玉を供えて蛭神を祭るもので、オシラ様とはいわない。(上五箇)

初午にはダンゴ(シラダンゴ)を作ってお稲荷様に供える。ダンゴは小米を粉にしてまるめたもので、アズキを煮た中に入れスリダンゴにして食べる。(上五箇)

十月十五日の秋祭りに、屋敷稲荷の幣束を神主からもらっておき、初午に祭る。下中森ではマユ玉を飾って稲荷様を祭る。(下中森)

初午はお稲荷様のけんぞくの子供ができて、お七夜に当る。毎戸から米を集め赤飯をふかし、鎮守様にあげ、子どもと年よりに分けてやる。今は来る子がないので持てあます。(木崎)

赤岩城の鎮守だった源田稲荷に「正一位稲荷様」と書いた五色の旗をたてて祭った。(赤岩)

ダンゴ アズキを入れたダンゴとスミツカレ(大根をおろしたものに、節分の豆を入れて煮たもの、仲々おいしかった)を屋敷稲荷へ供える。(上中森・舞木)

米の粉で綿の花をこしらえ、イノキに飾って、綿の豊作を祈る。(下中森)

「初午のダンゴ」を作って、村の鎮守様にお参りした。節分の年越の豆を入れてスミツカリを作った。油揚げ、人参、魚、大根のついたものを加えてスミツカリは作る。(鍋谷)

小豆ダンゴ(ダンゴを小豆でくるんだもの)をオシラキにのせて、屋

敷鎮守様、大神宮様、仏様、恵比須様、牛馬の観音様(集会場の東)に供える。(天神原)

スミツカリ 屋敷の稲荷に「稲荷大明神」と書いた五色の旗をあげる。スミツカリとオダンゴをそれぞれツトッコにして供える。スミツカリというのは、大根をオニオロシ(手製——ほとんどこの日の専用)であらおろして中に酒粕・人参・油揚げ等を入れて煮たもの。おだんごにはあんをつける。この供え物は二月初午だけである。また二の午にもスミツカリぐらゐはする。(下中森)

初午にはスミツカレを作る。節分の時のいった豆を煮てやわらかくしてからしょうゆで味を付ける。あぶらげと酒粕を入れるとうまくできる。実には大根を、竹製の大根おろしでおろしたものや、いも、にんじんなどを入れる。大根おろしはオニオロシともいい、木のザンマタ(二



大根おろし スミツカレを作る (上五箇)
(関口正己 撮影)



大根おろし(鬼おろし)
(赤岩) (関口正己 撮影)

又)に割り竹を鋸の刃のように刻み目を入れて植え付けたもので、自家製や大工に作らせたものがある。(ふつうの大根おろしは、当地ではワサビオロシと呼んで区別する。)豆をいって、楀の下に置いてこすって皮をむいて煮る。スミツカレ(スミスカリ)は初午の日だけに作るもので、アワイ(ふだんの日)には作らない。三の午に作る家もあるが、初午に作った物を先祖様として少し残して置いてまげて作る。

スミツカレはおかず(オサイ)にして食べるので、おつゆは少ない。茶スミツカレ(茶ゾッペー茶菓子)にもする。稲荷様にはスミツカレをフラッパッコに入れて進げる。(上五箇)

初午の日にスミツカリをつくる。大根おろしを煮て豆を入れてつくる。スミツカリと、だんことを一緒に稲荷さまに上げた。赤飯もつくる。(瀬戸井)

スミツカリをつくる。聖護院大根、節分の豆、油揚げを入れて煮て、ツトッコに入れて団子といっしょに稲荷様、屋敷鎮守様にあげる。初午につくった残りがあれば、それをもとに初午以外の日にもつくってよいが、そうでないと初午以外に新たににつくれない。

スミツカレは初午以外には作ってはいけない。さもないと火にたつ(火事がおこる)という。大根をすって年越の豆を入れて、ネギ、油揚げ、人参と一緒に煮て味をつけて食べた。非常にうまいものである。

初午の十時前にはお茶を飲まない。(寛野)

スミツカリを初午に作る。大根・人参・油揚げ・蛙・年越しの豆・酒粕を交せて作る。間には作らない。年越しの豆を入れなければ毒消しにならない。大根の料理じゃ最高、一週間ぐらい食べている。あとで食べたければ、最初のを少し残しておき、それを入れて作る。初午以外には新規に作らない。(木崎)

スミツカレは大根をあらくおろして、年取り豆を一つかみ入れ、塩さけの頭やニンジンなどをまげて煮る。ゴボウは入れない。また、酒粕や油を入れない家が多い。(赤岩)

スミツカリをつくる。大根をオニオロシでおろし、人参・酒カス・油揚・節分の豆を入れて煮る。節分の豆を入れないとスミツカリとはいわない。(天神原)

(天神原)

二の午 初午と同じ料理を作るわけだが、おそろくしない。(赤岩)

二の午、三の午には、団子やスミツカリは改めてつくらない。(天神原)

二月八日

メカイ 鬼を家に入れないように、メカゴを下に向けて立てる。(上中森)メカイを立てるのは、メケゴ(モノモライ)ができないように。(下中森)

長竿のウラ(先)にメケエをさかさにして付け、軒先きに立てておく。鬼が金を入れてくれるといった。ダイマンとはいわない。(上五箇)

二月八日にダイハチマナコ(竹かこ)は竿にたてかけておいたり、つるしておく。目が多いから鬼が除けて通るといふ。(瀬戸井)

長い竿の先にミケー(ミケカゴで里芋などを洗うとき使用)をつける。

(菅野)

二月八日にヤキピンを作り、竹竿の先にメケエをつけ、中にヤキピンを入れて庭先きに立てた。福の神を呼ぶのだという。(鍋谷)

メケエの中にヤキピン二、三個とお金を入れて、竿の先に付けて軒先にしぼって立てておく。二月と十二月の八日にした。

メカイを竿の先に付けて立て、鎌をくつつけておいた。(赤岩)

焼キピンをメケー(目籠)に入れて軒先に立てる。(舞木)

夜、長竿の先にメカイをつけて玄關先の柱に立てる。そうすると、鬼がカゴの目におされてよってこない。(天神原)

八日ヤキピン 米の粉をひいてこね、あんを入れて、いろりの灰の中で焼いて食べた。八日ヤキピンといひ、八日の晩に作った。吹いたりたたいたりして食べるので、大カタともいふ。ヤキピンは床の間・大神

宮・屋敷稲荷・仏壇にも供える。(上五箇)

ヤキビンといってウルチの米で饅頭を作る。焼いて食へるとうまい。
(寛野)

コゴメの粉にあんこを入れ、灰の中に入れて焼いて、灰を吹き落しながら食べた。(瀬戸井)

小米の粉をねってホーロクで焼き、灰の上でよく焼いたもので、中にアンを入れる。(鍋谷) (赤岩)

二月八日は粟と米の赤飯を作る。ミケゴを立てない。(福島)

この日は水を使つてはいけない。(瀬戸井)

一年の世話のやきははじめ、くず米であんを入れて焼いて食べる。
シカカの死んだ日 二月八日。(天神原)

針供養 お針のけい古をする娘は農閑期の師匠さんの家で習っていたが八日には針供養のなかでお金を出し合つてこちそうを作った。(上五箇)

針供養はお針の師匠のうちでやる。豆腐に針をさし、寿司など作る。この日は針仕事はしない。(木崎)

針子は針をとうふにさして、こそつて天神様のお参りにきた。
六日の山入りの日に、氏子がお師匠さんの家で祝い、こちそうを作つて食べた。(赤岩)

天 神 講 (二十五日)

天神祭り 昔は手習い師匠の家へ寄り、酒・すしを用意して師匠に食べてもらつたが今はない。(上五箇)

二月二十五日によつた。オハリをするうちは師匠や先生の家が宿、習字の時は習字の先生の家でやつた。はたおりにしている人は使つた「ひ」を納め、習字をやる人は使つた筆を神さまに納めた。(瀬戸井)

正月(旧)二十五日は針供養で女衆とか、お針の師匠がやる。(寛野)

天神様が天神山の少し高い所に祭つてあつたが、だんだん前方に出てきた。一月と四月の二十五日にお祭りする。天神タルワが十七、八軒あ

り月世話番が回つてサシ(寄附金)をもらつて、とうふを買つて供えた。サシは天神様のお祭りだから一軒百円ずつと、金額を決めて割勘で集めることをいう。戦後も少しやつたが、しなくなつた。(赤岩)

伊勢講 年番で、お昼に子どもをよせた。庭にしべが敷いてあつて、その上で相撲とつたりしてあべれた。(木崎)

ヒ ナ 市(二月二十八日)

赤岩のほうそう神に子供を連れて行くと、ヒナ屋が市を張つて待つていた。昔は段ヒナや坐りヒナが多かつた。坐りヒナはカムロッコといつた。

二月二十八日から三月一日ごろ、初子のできた家ではヒナの祝いをし、紅白の大福餅を配つた。(上五箇)

三 月

ヒナの節供 (三日)

ヒナ祭り すしを作つて客を呼んでお祝いをする。ヒナ様にはひし餅を供える。初子の時だけ盛大に祝い、親王ヒナを嫁の実家から贈つた。

古いヒナは利根川へ持つて行つて流した。
食習 餅・すし・煮魚。

ヒナは一週間以内にしつう家が多い。十日ごろにはしつう。(上五箇)

ひな様は二月二十八日ごろ飾る。このころまでに初節供をやる。くさもちをついて供える。しまうのは五日ごろにする。(瀬戸井)

雛祭りは今の方が派手になつた。初子の初節供には里方で親王様をおくる。親戚では下のやつをおくつた。お返しには紅白の餅をした。またお客を呼んでご馳走をした。

雛様が古くなると川に流したり、天神様におさめた。

餅をしまうとき、菱餅を雛様の土産にやるというので一緒にしまつた。その餅を食べると兵隊検査をのがれるというので遠くからもらいにきた。(萱野)

二月二十八日が、ほうそう神様で、この日飾り始めるうちが多い。ひなは坐りびなが多く、親王様・小野道風など飾った。あられ、草餅のりまき、油揚げの寿司を作った。一日に、ひな祝いに親戚近所の人がある。初節供には、紅白の餅をかえす。(木崎)

三月三日はモモの節供、ひな様は二月二十八日にゴザに飾る。アラレ・白酒・菱餅(白餅と草餅)を供える。節供にはすしを作る。初節供には嫁の親もたら、親王様と内裏様のひなが贈られる。家によつては、右大臣左大臣、三人官女、五人ばやし、草履とりなどを贈った。隣り近所の家では立びなやすわりびなを贈つて祝った。おかえしには塩アンピンを奇数の数でやった。濃い親戚には二十一個、二十三個、隣近所には十一个、十三個。節供には嫁の親や隣近所を呼んで馳走した。古いひなは川へ流したり、種荷鎮守に納めたりする。(鍋谷)

古くなったヒナは川へ流すのが良いという。(天神原)

初節供 実家が雛人形を贈る。そして実家に草餅・イマサカ(赤色餅)を返す。親戚にこちそうを配る。(天神原)

初節供には、節供前に親戚などに草餅かアンコロ餅をくばる。お返しにひな人形を買つておく。嫁の親もたらは内裏さまとか親王さまのひながおくられる。(中島)

ヒ ヨ ウ 祭 (三月中頃)

一戸一人集会所に集まり、鎮守様にお神酒をあげ、ヒョウ害除けの祈願をする。(天神原)

彼 岸

入り口 仏壇に初水と花を供え、線香をあげる。

中日 ぼた餅を作り、仏壇に供える。
走り口 墓場へ送りに行き、だんご・おさこ(米)・線香・水・花などを墓に供える。水は四合びんやとっくりで持つて行き、墓にかけてやる。

食習 ご飯・てんぷら・とうふ汁を作り、仏様に進げる。

中日に集まって念仏を唱えたこともある。(上五箇)

はしり口には、はしり団子を作り、墓参りする。(木崎)

彼岸入りは十八日、二十四日がハシリクチ。彼岸入りとハシリクチには昼を食つてすぐ、ダンゴ、水、オサゴ、花、線香を持つて墓詣りをす。(鍋谷)

春秋の彼岸には坊さんが回つて来る。盆には忙しいので来たり来なかつたりである。(赤岩)

中日にぼたもちをつくり、仏様にあげる。終りの日には白団子をつくり、墓参りする。(天神原)

社 日 (戊の日)

作神 彼岸に近いツチノエの日に祭る。小泉の社日神社の講が十五人でできていて、福田から代参に行く。もとは膳部が用意され酒のごちそうを受けてきたが、今は酒・赤飯・切りいかが出される。お札と土を袋



社日様の掛軸 (天神原)
(青木則子 撮影)

に入れて受けて来る。この土を田にまくと豊作になるという。(上五箇)
小泉に社日参りをする。社日には九月と同じで作神さまをまつる。(瀬戸井)

小泉の社日様へ行く。百姓の神様で、野道具、さま、植木を買って来る。(木崎)

彼岸に近い戊の日に、大泉町元宿の社日様(百姓の神様)へ行き、お札と社日様の縁の下の砂を受けとくる。砂は畑にまくと作がよいというので畑にまく。社日様の火もどしのササ葉をもらつてくと病氣しない。社日は百姓の神様が休む日だからドロをいじるなという。(鍋谷)

中日から数えてミズノエの日に近い日。社日様は大泉にあり、百姓の神様である。お参りに行つてお札と砂を受けとくる。砂を堆肥、畑にまくと作物が満足にとれるという。(天神原)



社日様のお札とお砂(天神原)
(青木則子 撮影)

弘法大師(二十一日)

大師様 長生寺の弘法大師を祭るため、年寄りが米を出し合い、ムスビを作つてお参りにくる子供にくれる。「大師様のおにぎりのように小さいな」というように、小さいムスビを作る。(上五箇)

天神様(二十五日)

天神様は三月二十五日に祭る。以前は一戸一名出て祭をしたが、現在は、世話人六人と神主でシメを新しく切つて祭典をする。(天神原)

四月

厄神除け

四月一日は村中の厄神除けをした。下(菅野は上、下に分れている)の人の大六天という神社(はやり神)があった。村中の家から米をもらつて、赤飯を作つて村の人にくれた。子供やお参りの人に赤飯をやつた。子供などは幾度でももらいにいった。十二、三年前にやめてしまった。(菅野)

行者様(三日)

行人塚のコウチ(組)は十七、八軒あつたが、最近もつとふえており、三日に世話番の家に女衆が寄つて、百―二百円寄せて酒・魚を供え、菓子を買つてお祭りする。もとは行人塚の上に祭られていたものを、道路工事に土を使ったため、川端に移して祭つてある。しよぎの駒の形をした石塔が中にあり、りっぱな社が祭られている。(赤岩)

春祭り(四日)

四月四日は囃子様のまつり日、カマ番や世話人が準備をする。(鍋谷)

八日

おしゃか様 宝珠寺のおしゃか様を甘茶の中に立たせて、甘茶をかけてやった。(下中森)

長生寺に世話人が出て花の屋根を作り、おしゃか様のお姿に甘茶をかけて祝う。(上五箇)

四月八日は節供で、七日の夕方、藤ヅルとウツギを軒にさす。悪魔よけになる。

四月八日はオシヤカ様の花祭り、お寺に行き、オシヤカ様に甘茶をかける。甘茶を目につけるとよくなるといった。(置野)

オダンゴマツリといひ、東光寺薬師のお釈迦様に、一つが三合もある団子を八つと、お供えをあげる。藤の葉と、うつぎをフサシ(庇)に挿す。蛇が来ない。(木崎)

四月八日はお釈迦様の日、世話人(今は三人、もとは四人)は毎戸を回って、牡丹、ツツジ、藤などの花をもらって、甘茶のたつお釈迦様の屋根を葺く。寺へは子供をつれて甘茶を飲みに行く。甘茶で目を洗うと目の性がよくなるという。前日の七日には葛掃除をする。(鍋谷)寺ではおしやか様の屋根をツツジの花で飾る。お参りにはピンを持って甘茶をもらいに行く。(赤岩)

四月八日はお釈迦様の日、甘茶を飲み薬師堂に行く。堂守りが部落内を花もらいに歩いて、お釈迦様の屋根には花の屋根をつくる。各家では、うつぎと藤の葉を五月の節供と同じく屋根にさす。(中島)ウツギや藤を軒先に差す。(舞木)

軒にモチ草とフジツルの葉を飾る。(赤岩)

オシヤカ様の生まれた日。太田呑竜様の緑日。藤のツルとウツギの枝を軒下、屋敷鎮守様、大神宮様にあげる。その日にカラカラに枯れると、桑が高いといひ、枯れないと桑が豊富という。(天神原)

稲荷様。今は四月八日、以前は四月二十二日、初午の時は八人、普通の時は四人のかまぼこ(釜番)が、祭典の世話をやいた。(木崎)

大日講。熊野様を信仰する人が大日講を作っている。名称は大日講だが、実際は山羽三山を信仰し参詣する。坊さんを頼んで拝んでもらい、お金を本山の出羽三山へ送り、お札をもらう。春四月八日だけ祭る。(赤岩)

大掃除。春の大掃除に部屋のアツドコを上げて片づけ、ウスベリ(こ

ざ)やガバダタミ(ガマこざ)を敷く。昔は二畳つなかつたガバダタミがあった。この辺はネコ(厚いむしろ)はかかないで、むしろを織っていた。秋の十月の大掃除に再び畳をしく。(赤岩)

大 師 講 (二十一日)

老人が集まって念仏をした。寺が主催。昔は二十一大師を巡り歩いた。圍り飯をもって近村の大師様を巡った。他所からも来るので、お茶の接待などもした。(下中森)

五 月

八 十 八 夜 (二日)

霜の注意をするが、別に何の行事もしない。餅もつかない。(上五箇)苗代作り。八十八夜を中心にやった。苗代の水口には、ヤカガシとカユカキ棒をさした。(置野)

五 月 の 節 供 (五日)

ショウブ。五月の節供には、軒にヨモギとショウブと藤を三か所ぐらいたした。それには次のような伝えがある。

昔、御飯を少ししか食べないでよく働く人を嫁にもらい、といっている男がいた。その男のところへ嫁が来た。以来その嫁は米を食わなかつたが、米のへりようがひどかつた。ある時男がそつとのぞいてみた。その嫁の頭がばつくなり二つに割れてその中に飯を入れた。その後嫁が里がえりすることに。御飯をたくさん煮て「これはお前(男)の分だ」といった。男を頭上に載せて出かけた。男は機会をみて逃げようと思つたがその度に「おりととくっちゃうぞ」というのでなかなか獲れない。途中藤つるの下つているところがあったので、それにつかま

て逃げた。嫁は追いかけながら「人間とショウブの香はわからない。(区別できない)が、それ以外ならわかるぞ。」といったので、ショウブの繁みの中にかくれてついにその嫁(鬼)から逃れることができた。以来右の植物を軒にさすことになった。(下中巻)

戦前まではショウブとヨモギを庇にさした。ショウブを風呂に入れて入ると風邪をひかないという。昔、神功皇后が戦争に行く前にお産をした時、ショウブをおいたら丈夫に育って、その子が応神天皇になった。それでショウブを飾るようになったという。フキゴモリはしない。(上五箇)

四日の夕方、ヨモギ、ショウブを軒にさす。神棚にもあげる。

五月五日の節供には柏餅を作った。相鏡人ができると近親は家紋の入った鯉のぼりをおくった。鍾馗様をおくと強い子供になるといふ。

ショウブとヨモギを軒のひさしにさした。

ショウブ湯に入ったり、ショウブで鉢巻きをしたり、腹にしめたりした。(萱野)

ショウブ湯に入り、ショウブの葉で腹をしげると腹が痛まない。頭に鉢巻をすると頭が痛まないという。(赤岩)

モチグサとショウブを軒先に差す。人間を喰う鬼がいたが、ショウブのにおいが強くて、人のおいがしないので、あきらめて帰るといふ。

ショウブ湯に入り、ショウブの鉢巻きをすると頭がやまない。(舞木)



端午の節供に軒にさした
ヨモギとショウブ (天神原)
(青木則子 撮影)

四日の夕、軒下、床の間、屋敷鎮守様にヨモギとショウブをさす。男の子が生まれると、のぼりを立てるが、そこにもさし、ショウブの根を入れてしょうぶ湯をたてる。

さしたヨモギとショウブを干してとっておき、頭痛がするときそれで はちまきをする(天神原)

五月一日にのぼりをたてる。のぼりは嫁の実家からもってくるもので、おかえしは紅白のもちだつた。五月の節供にはかしわもちをつくった。

モチグサとショウブは屋根にさして魔除け、鬼除けとした。ふろに切りこんで入った。(瀬戸井)

初節供 五月五日は男の節供、ショウブの節供で、屋根のひさしにモチグサとショウブを二か所に一本ずつさした。もとは濃い親戚から初節供に鍾馗様の幡が贈られた。親もとからは紙の鯉やのぼりが贈られたが、今は五色の幡や布の鯉。お返しには柏餅に塩アンピンを添えた。塩アンピンは焼いて砂糖をつけて食う。鯉のぼりなどは五月中はあげて、天気の良い日にさげる。(鍋谷)

男の初子には鯉のぼりを親戚から贈る。お返しは柏餅。タラの開きは贈らない。

柏餅は柏の葉に米の粉のシンコ餅を包んでふかして柏餅を作る。(上五箇) 初節供のノボリは、婚家の紋を上に、実家の紋を下につけて贈る。(天神原)

五月五日はのぼりの節供で、親もとから吹き流しが贈られる。アンコ餅を作る。ショウブとヨモギを屋根にさし、いろいろな神様にあげる。神棟からさげてショウブ湯をたてる。(中島)

ハ丁ジメ 悪い病気が入ってこないように、他の部落との境の道路の両わきに竹を立てて、注連を八つさげる。(天神原)

初山 生まれた子どもに里の親もとから初山着物が贈られる。それを着せて六合村の富士嶽神社へ初山参りに行く。神社でウチワを買って、お産見舞のお返しに家々へ配ってやる。今でもしている。(上五箇)

子どもが生まれて最初の六月一日に浅間様(館林)へ行き、額に「富士浅間神社」の印をおしてもらい。うちわに名前を記入してもらいみやげとして近所に配る。

初山に行くのに着る初山着物は、婚家の紋をつけて実家で作って贈る。(天神原)

養 蚕 儀 礼

ヤスミ祝い 蚕が眠についたとき、もちをついて食べる。

マブシ祝 蚕のほたもちの祝ひ。もちをついたり、ぼたもちをつくる家もある。よくやるのはぼたもちの方だろう。

蚕祝い 蚕のしごとが終ると蚕祝ひをする。もちをついて、手伝ってくれた人にくばり、ごちそうをつくってやる祝ひ。人も招んでやる。(新福寺)

稲 作 儀 礼 (中・下旬)

サナブリ(マンガ洗い) 田植えが終るとマンガ洗イをして、ごちそ

うを作って神棚に供えたり食べた。苗の小さい一束をよくゆすいで、エビス大黒の前に供えた。もとはよくやった。(上五箇)

餅をついたりして、手伝った人を選んで、ご馳走をした。さなほりのボタ餅と昔からいっている。(富野)

田植えは六月十五日ころに始まり、二十七・八日ころまで行なわれるが、田植えが終るとその家の祝ひをする。多くはぼたもちをつくって食べた。(瀬戸井)

「サナブリだから餅をつけ」といって、^餅ごころ餅をつくる。(木崎)

田植えが終わると、「サナブリボタ餅」を作って、田植えの手伝いにくてくれた人を選んでご馳走する。マンガ洗イともいう。(鍋谷)

田植の終った晩に、マンガを洗い、マンガ洗イのボタ餅を作り、嫁いだ娘や手伝いの人を選んでごちそうする。(天神原)

サナブリにはマンガを洗ってお神酒をあげた。マンガ洗イともいう。水が少ないので、村中ふれを廻して、水車で水をかけた。田植えは邑菜郡で一番おそかった。

卯の日に、マンガ洗イといって休む。(福島)

マンガアレエはサナブリともいい、田植えが終ったときにする。(新福寺)



オカマサマ 田植えの終った日に、女
 衆が田のタロに苗を七株植え、それをよ
 くすすいで家に持ち帰り、カマドのうし
 ろのオカマサマにあげる。ボタ餅を供え
 る。どんなに忙しくても女衆が必ずやる。
 苗は一年間あげておく。(天神原)

マ 田の草とり 田の草とりは土用いっば
 いやること、土用すぎで田の草をとっ
 ても意味はない。(瀬戸井)

七 月

厄神除け(七月初め)

家族の病氣除けに、鎮守様にお神酒をあげ、神主をたのんで祈とうをしってもらう。

初かみなり 節分の豆を食べる。(天神原)

半 夏 生(二日)

ハンゲ様 ハンゲ様は非常に忙しい神だが、田やおカ(畑)の双方へ入って働いていけない、田なら田一方で働けという。行事はない。(上五箇)

半夏坊主が、片足田んぼへ入れて往生したので、その日は田植えをしてはならない。ちょうど七月二、三日のころにあたる。(瀬戸井)

半夏には田植えを忌む。半夏様が田・陸に、片足ずつ踏んかけて死んだという。(福島)

農 休 み(七、八、九日)

田植えが終る七月十日ガラマリのころ、仕事休みをする。田植えを手伝ってくれた人に、田植え日備(入夫賃)を払う日になっていて、お金を持って行き精算する。昔はうでまんじゅうや餅を作った。(上五箇、瀬戸井)

農休みは半日ずつ三日休む。炭酸まんじゅうをつくって食べる。

農休みは田植えの後に部落で三日間やる。所によって日は違う。雇人、奉公人に賃金をはらった。(菅野)

田植えがすみ、桑桑があらましになる七月七、八、九日の頃休む。昔は奉公人がいたからかならず休んだが、今はろくに休んじやない。(木崎)

崎)

以前は七月十日頃の三日間が農休みだったが、今は七月の六日、七日、八日の三日間となっている。嫁は実家にお客に行く。農休み勘定といって農作業を手伝ってくれた人に賃金を支払うことになっていた。今はそのときどきに払っている。(鍋谷)

田植え後、三日間休む。日は役場で決める。農休みの小麦まんじゅうを作って食べる。戦前は農休みは二日で、小麦まんじゅうを食べて昼湯に入るのがなによりも楽しみだった。(天神原)

農休みは二番ゴを取ってから休む。カッパを抜いたのを返すカッパガエシがおえなければ農休みにならない。昔は朝四時に起きて田に出た。(福島)

七月の田植えが終わったころ、富永地区に合わせてやるので新福寺の方では早すぎる時期になる。(今年は七日から九日にかけてやった)農休みかんじょうというのがあるが、農休みにはまんじゅうをつくって、ゆっくり休む。(新福寺)

天 王 様(十五日)

八坂神社の祭り。サノオノミコトをまつる。子どもだけでするもので、この日は小麦まんじゅう、赤飯をつくり、初なりのキウウリを供えた。(瀬戸井)

燈籠 以前は旧六月十五日で青年会が中心で祭りをしたが、今は七月十五日で部落の世話人が中心になっている。燈籠番が十四日に燈籠を立て、各家でも立てた。燈籠絵は見事なものだった。鍋谷には神輿も万灯もない。消防小屋の辻に注連を張って祭る。(鍋谷)

みこし 長良神社にある天王様の祭りにみこしが出る。六月十五日に出しておき、十九日にロープ・サラシで頑丈にしぼってかつく用意をする。二十日にかつぐ。みこしの頂上に杉の葉を立てる。又、弊束持ちが弊束を持つ。村の旧家名家をめぐり庭先でもむ。みこしを庭に置いて四

人が土台としてみこしにつかまり、その上にもみ上がる。全部で六、七十人位があり、怪我人が出たこともある。杉の葉をとり、又、弊束を奪いあう。その紙片をお産やはやり病いの時に飲むと効くというのでしまいは棒だけになってしまふ。水を沿道に備えておき見ている人が誰でもそれをぶっかける。名家旧家をまわりきると利根川へ行つてもみして終了になる。終るとくたくたになつたという。(舞木)

昔は天王さんの祭りには、村中でそろいの着物と手ぬぐいでにぎやかなものだった。

最近はずへつとめに出ている人が多くなつて、若い者はみこしかつぎなどをすれば翌日のつとめに知られねえ。「あんなことは馬鹿がする」というようなことで本気にならず、とうとうテラーに乗せるようになって。(新福寺)

キユウリの初物 七月十五日の天王さんへ上げてから食う。(新福寺)

八幡神社の祭り (二十四日・旧七月十五日)

上、下中森の祭りであり衆組でやる。みこしをかつぐが、先にロープで頑丈にしばっておく。社倉代、区長、地主等をまわり庭先で一もみする。今年上中森からまわれば来年は下中森から。

庭先にみこしを置き、それに頭をつけて土台になり、その上に人がはいあがり、合計30人位がみこしにあがる。学校でやる組み立て体操みたいに、みこしを芯にして上にあがりっこをする。神様のおかげで怪我人は出ない。子供や見ている人が水をかける。

杉葉や弊束は別に立てない。

八幡様の祭は七月二十四日に御輿を出してまつる。むかしは一月十七日と八月十七日に祭つた。この祭りは御輿を芯にして人がその上に組みあがられ、まわりから水をかけてやる。区長、神社総代、有志の家をめぐり、その都度庭で組みたてた。家々では御馳走をだしてふるまつた。

(上中森)

祇園祭 (二十六日昔は旧六月二十四日)

戦前までは盛大にササラ(獅子舞)をやつた。獅子三体にメンカ(道化)一体で組み、獅子舞は腹に太鼓を抱えたいて舞つた。ササラの行列は、小学生や中学生は棒つかいで、太刀の型(剣道)をやつた。若い衆は本物の刀を使って型をした。十七才から三十二才までの若者はそのゆかた姿で、祭り笠(菅笠)をかぶり村の大道を行列して歩き、社總代の家に獅子をスリコム。マンドウを一組(二本)作り、神社の前に置くが、行列の時は他村から来た舞が一本ずつ担いで村中回る。ハヤシ竹は笹竹で七夕のように短冊を付けて作つた。花笠は一辺一尺五寸、タツバ(高さ)二尺の箱を四個作り、盆栽のように造花で板の花二本、ポタンの花二本を作つて飾り、舞庭の四隅に置く。(上五箇)

駒形神社 (二十五日)

駒形神社を駒形コウチの家々に祭る。駒形神社は駒形グルワの屋敷鎮守である。もとは四月、六月、九月の各二十六日に祭つた。

地藏盆 しなかつた。(上五箇)

土 用

この日は、毒が降るので、井戸に蓋をする。また杭もぶたない。掛矢を借り来た者があるが貸さなかつた。(福島)

土用の丑の日には、魚なら何でも良いから食べる。(天神原)

八 月

カマノフタアケ (一日)

地獄ノ釜ノフタ 一日は地獄ノ釜ノフタアケ、「地獄ノ釜ノフタ」があい

たから氣をつけろ、川へ行くな、カッパに引き込まれる」という。(上中森・舞木)

「カマツブタがあいたから利根川に行くな」と子どものころよく言われた。今は何もない。旧七月一日。(下中森)

カモノクチャアキはしない。七日火も燃さない。(上五箇)

一日は盆月の始まりで、「カマツブタがあけた」というが、別に何も無い。子供には「お盆だから水を浴びるな、死んじやうぞ」と注意する。

(赤岩)

八月一日をカモノクチャアケという。この日は、仏さまが墓場からお客に出かけてくる日であるという。この日はコムギ粉でつくったまんじゅうをこしらえる。

むかしは、新盆のうちでは、この日かたかんどらう(高灯籠)を庭先にておいた。新参の仏さまはそれをたよりにやってくるという。

最近では新盆の提灯を縁先にさけておくようになった。

仏さまは、この日に墓場を出発して、七夕までには半道中であるという。なお、カモノクチャアケのあと、盆月になってなくなったものは、仏さまがお客にくるというのに、こちらから出かけていくことになるので

道中で仏さま(ご先祖さま)に会って、あたまでなぐられるので、埋葬するときに、すりばちをかぶせてやるものだという。(赤岩)

この日、「地獄のふたがあいたから川に泳ぎに行つてはいけない。カッパにひきこまれるから」という。(瀬戸井・鍋谷・中島)

地獄の釜蓋があく日で、仏様が盆で出かけて来る。その頃死ぬと、「盆だにいくんだ、それに来るのか」といって叩かれるので、かわらけをかぶせてやる。(木崎)

焼き餅 「釜のフタをやキ(ガス)」といつて、焼き餅をつくり仏様にあげる。焼き餅を供えると地藏様が仏に家に帰つて良いという許しを出す。許しをもらつて、十三日にやつと帰る。(天神原)

八月一日(旧七月一日)に米の粉をこねて塩あんを入れ、ホーロツドで

焼いたヤキモチ(カマツブタヒガシという)を本尊様にあげる。仏様が十万徳土から出てくるため、カマツブタをあけて出発するのである。(新福寺)

七 夕(七日)

七夕飾り カツモ馬を作った。ネット流シとて、ねむたがりの方が水あびした。利根川で頭を洗つた。芋の葉の露をとって習字した。食習としてほうどん、もとはまんじゅうを作った。(下中森)

もとは旧七月七日にしたが、戦後八月になった。新しい笹竹に色紙を付けて飾るが、「天の川」「七夕や秋を定める初めの夜」などと書く。(上五箇) 笹竹はあとで畑に立てて虫除けにする。(大塚)

七夕にはまんじゅうを作って食べる。(上五箇)

七夕の日には早起きをするといふ。川へ髪を洗いにゆくと頭を病まなという。七夕さまの露を目につけると目が悪くならない。

七夕に雨が降るとその年は水が出る。(瀬戸井)

七夕は八月六日の午後飾り、七日に流す。昔は利根川の流れをとめってしまったものである。『七夕や』と書いたり、『天の川ふりさけ見れば



まこも馬(豊野)
(青木則子 撮影)



七夕飾り(鍋谷)
(中村和二郎 撮影)

かすがなる三笠の山に出でし月かも」を五・七・五の句ごとに書いて竹につるす。また、カツモ(普通にはマコモ)で馬を二頭つくって供える。馬は七日の夕方屋根に上げ、そのまま上げておくが、最後には稲荷様の脇におさめてしまう。

七夕飾りは昔は皆やったが最近ではやる家が少なくなった。しかも最近二・三年千代田村の竹がみな枯れてしまっている。原因は不明である。今でも飾りをする家ではマダケでなくモウソウを使う。

六日に飾りをし、七日に流す。ネブタ流しといって水浴びをやる。七日にはまた女衆が髪を洗った。(萱野)

七夕は真竹のトウザイ(当才)に飾ったが、最近では真竹が絶えたので、今は孟宗竹に飾るようになった。芋の葉にたまった露で墨をすり、色紙に、天の川・七夕の天の川など書いてつける。「七夕の心のうちはいかならん。たしこし今日の夕暮れの空」と書いてあげる家もある。カツモ(まこも)を刈っておき、乾して、タナバタサマノウマを、雌雄二匹作る。

この日雨が降ると、夏の病気がうちわだ。天の川がおっぴらいて、悪病神が行き会えねえで、子どもができないから、三粒でも降った方がいい。カツモウマは、軒下にとっておいて、水で濡れた時に、それであたため



虫よけの七夕飾り(上五箇)
(関口正己 撮影)

てくれると、息を吹きかえす。また大水の時に、持って避難する。火難除けとして、軒に吊したり、屋根に上げる家もある。七夕の朝早起きして、竹を用に流すと、ネブタナガシといって、早起きができる。この日、髪を洗うといいという。

七夕の朝、飯前に墓地の掃除をする。(木崎)

七夕は七夕節供といい、節供入りの六日に墓掃除をする。七夕さまは馬ののってくるといいカツモで、一対(男女)の馬をつくり、カイドウ口(カイトウ)に竹竿を張り、その竿に向い合わせに飾った。昨年まで馬をつくった。ネブタ流しといって、七夕の朝、川へ馬を流した。子供が持つて行った。七夕には雨が降った方がよい。赤飯、ウドン、まんじゅうをつくってこ馳走する。隣の邑桑郡大泉町城之内では、この七夕に城を攻められたという伝えにより七夕飾りはしない。(鍋谷)

七夕の朝、朝早く起きて、川へ行って髪を洗ってくるのと眠たくならないという。また、七夕飾りの笹の葉の露を浴びると丈夫に育つというので、わざとゆすぶって露を浴びたりした。

七夕まつりが、昨年から極端に減った。

小泉の富岡城が七夕に落城したので、そこにいた柴崎イッケは七夕飾



七夕かざりを流す (新福寺)

(阪本英一 撮影)



七夕飾りの始末 (赤岩)

(関口正己 撮影)

りをするなどいわれる。

イモの葉の水を取って墨をすって、短冊に字を書いて笹竹に吊るすが、ここ二・三年急にやらなくなった。竹が枯れたことが原因。(赤岩)

六日の朝の里芋の葉の露で墨をすり、短冊に書く。七夕飾りは庭に立てる。おとうみょうをあげた。七夕飾りは八日の朝川の端にすてくる。七日の夕方に、もとは女衆は川へ髪洗いにいった。(中島)

カツモ馬 七夕に庭に竹を二本立て綱を張って馬を二頭向かい合わせで吊るす。その下に赤飯・杯・灯明を供える。七夕が終わると屋根へあげておく。留守番をする、盗難よけになる。(上中庵)

七夕のウマは六日の午後作る。その前(三日ほど前)に近くの池からカツモを取って来て、三日間ほど干しておく。六日の午後、太陽のあるうちに飾る。六日の晩にたきたてのお初のご飯を皿にのせて、七夕のお飾りの所あげる。「七日の晩の夜露にかけてはいけない」といって、七日の夕方お飾りを取る。お飾りの竹は利根川に流した。ウマは魔除けといつて軒下にかけておく。前の年のウマは竹と一緒に川に流す。水におぼれた者がいると、古いウマを燃やした。こうすると助かるという。ウマが飾ってある所には、「子どもはウマの下をくぐったり、近寄るな」といわれた。近寄るとけがをすという。子どものころには、ウマのそばには、決して行かなかったという。

六日の夜カツモで馬を作り、笹竹の七夕飾りを立てたカツモ繩に雌雄二匹を相向かいに吊るす。七夕が終ると、カツモ馬はひさしの片はしにしばりつけて置くと魔除けになる。毎年作るのだんだんふえるが風雨にさらされてなくなる。カツモ馬を笹竹といっしょに川に流す家もある。最近カツモ馬を作らなくなったが別に変わったこともないのでよそうという気分になった。

カツモ馬は毎年取って置いて、子供が水に濡れた時にこれを燃して腹を温めると水を吐いて助かるといふ。(上五箇)

カツモ馬はあとで屋敷のまん中辺の軒下にしぼって置く。棄てると子供がよく育たないという。(大塚)

七夕飾りは六日に色紙でつくって飾る。「カツモ」という草をほして馬をつくって飾った。二匹つくって離して飾る。この馬はとっておいて屋根に上げておいた。魔除けになる。水におぼれたときにこの馬を燃すと助かるといふ。(瀬戸井)

七夕の馬は藁で作った場合、藁は三つかみもあればいい。繩をなっ



カフモ馬 庭先につるしておく
(下中森) (都九十九一 撮影)



マコモ馬 (栗原宗七家) (舞木)
(丑木幸男 撮影)



七夕のマコモ馬 (上中森)
(近藤義雄 撮影)



マコモ馬 七日昼、うどんをあげる
(萱野) (青木則子 撮影)



マコモ馬 (上中森)
(丑木幸男 撮影)



マコモ馬 (上五箇)
(関口正己 撮影)



わらの七夕の馬(木崎) (上野 勇 撮影)



カツモ馬
七夕のあと屋敷の中央に吊るしておく
(上五箇) (関口正己 撮影)



盆の買物合計900円也
(赤岩) (関口正己 撮影)

盆 棚 一斗真角ほどの板を台の上のせて盆棚を作る。座敷に設け、左右に笹竹を立ててチガヤの縄を張り、五色の色紙でシメを作って下げる。壇の上を買った盆こさを敷くが、カツモのゴザを編んで敷く家もある。奥に仏画の掛軸を下げ、仏壇の位牌を出して並べる。造花の

幕掃除 墓場の草取りをできれいにする。盆前の適当な日にやる。昔は、番人がいて特定の人がやったが、その後、青年団の奉仕となり、現在では個人がやる。(貴野)

盆買物 盆に使う物を一揃い荒物屋などで買ってくる。飾り花(造花二〇〇円) 数島香(線香二〇〇円) カワラケ(二個四〇円、色紙二〇円) ろうそく(二〇円)、ござ(四〇〇円)、合計九〇〇円(赤岩)

盆の買物として、線香、色紙、献花、オガラの箸、供え物をのせるカワラケ、カボチャなどを買う。献花は盆様の分とシヨウワリヨウさまのと二つ買う。また盆様にあげる献花にはキンバナ、ギンバナの二種類あり、毎年決まっている。カワラケは、去年までは大泉で焼いた土器をつかったが、今年はカワラケを焼く人が出かせぎに出してしまっていて焼く人がいないので、瀬戸物の皿だった。(天神原)

盆

で最初たてがみを作り、七夕だから七つ、たてがみから足まで続いている。それに後足をつける。竹の両方につける。(木崎)

六日の夕方、カツモで雌雄の馬をつくり、縁先に長竿をわたして、結いつける。その近くに短冊をつけた竹を立てる。七日の夕方、竹は川へ流し、馬はイヌイの隅にたくわえておく。それが魔除けになる。今年は、堀をきれいにそうじしてしまったのでカツモが少なく、わらでつくった家もある。また、竹が枯れてしまったので、川へ流さずにとっておき、スズメヨケに使う。小麦まんじゅう、うどんをつくって供える。(天神原)



仏壇を飾った盆棚(略式)
(上五箇) (関口正己 撮影)



盆棚(赤岩)
(関口正己 撮影)



ソウリョウ様 盆棚の下に昨年のハナをナスにさして置く。(上五箇) (関口正己 撮影)



盆棚(上五箇)
(関口正己 撮影)



盆棚(天神原) 朝、ボタモチを供える。(青木則子 撮影)



盆棚 下にカフモゴを敷いて、ショウリョウ様をまつる(下中森) (関口正己 撮影)

盆花を買って飾り、また竹に秋の七草やミソハギなどの生花を取ってき
てくり付けて飾る。前にキノコのおはぎを供える。(上五箇)
盆棚の前に二本の笹竹を立ててカフモの繩を張り、色紙や杉の葉を
吊ったり、ナス、ホウズキやうどんを吊るす家もある。(上五箇)(赤岩)
おはぎは仏様の髻に六個ずつ、二組供える。茶碗も二組で十二個そろ
えて、お茶を供える家もある。(下中森)
盆棚は三尺一間が普通で、組立て式のが各家にある。ゴザを敷いて、
上・中・下三段また家によっては上・下の二段にする。マコモ(この附
近ではカフモ)の繩を上・下二重に張り、それに色紙で作ったキリコと、
ホウズキ(提灯のかわりといわれている)をさげる。

盆棚の下には水ムケ茶碗に水をくんでおく。また同じく棚の下にナス
を四角にきっておいておく。先祖様の乗り物である馬のカイバであると
いわれている。
F家の場合は十二日の午後つくる。前の柱に竹とハギを飾り、綱を上
下二本はり、色紙、ホウズキを飾る。ゴザを敷いて位はいを出し、高野
山の月牌の軸をかける。七夕につくったマコモの上に、水とミソハギの
花を入れたドンブリをおく。下の段にショウリョウウサマをおく。子供の
仏だというが位はいはない。ショウリョウウ様の盆花と、昨年の盆様の盆
花を飾り、供え物はかわらない。
仏壇には留守仏がいるので、仏壇にもお供えをあげる。(青野)



供え物にミソハギでお水をかける。(赤岩)
(関口正己 撮影)

盆棚をお棚という。ヨコギに飾る。棚の上にウチ仏、棚の下に精霊様(無縁仏)をまつる。茄子にオガラ(馬)の足をつけた馬をイモの葉にせ精霊様に供える。馬の背に精霊花をさし、この馬を精霊様という。棚の上の供え物は三度三度かえるが、精霊様の方は送り盆までかえないで供えはなしにする。精霊様は墓へ行く道筋の適当な所に線香を立てて迎えてくる。送る時も同じ所に線香をたてて送る。(鍋谷) 部屋のみすまか障子の前に、三尺×六尺ほどの棚を設けて盆こぎを敷き、仏壇の位牌を全部出して

きなこのボタ餅を作り、西瓜・南瓜・ナス・キュウリを供える。(木崎) 十三日の午前中につくる。三尺四方の二本の柱に竹とハギの枝を飾りシバ草でなつた籠を上下二カ所はり、ホウズキ、色紙(家によって折り方が異なる)をかざる。上の段が盆様で、下の段がシヨウリヨウウイモの葉の上に二つに割ってナスの半片をのせたもの、食事茶、水、野菜、イモの葉棚は十三日につくるが、盆棚の下にはソウリヨウウイモをおく。棚の上には、お膳の上にカワラケに入れて供え物をする。カワラケは小泉焼で、明治の末には一枚五厘だった。またイモの葉に野菜等を入れて、棚の上にも下にも供え、送り出すときナス、インゲン、ササゲ等を刻んだものをつけ加えて、お寺の門の所にもつけていく。枯れてくると区長が燃す。オガラの馬も作る。足はオガラである。オガラで盆棚の供物の箸も作る。オガラはゴザ、ハナ、カワラケなどと共にボンガイモン(小泉や地元)のとき買う。(新福寺)



盆花 左はシヨウリヨウウイモ、
右は盆様へあげる(天神原)



(青木則子 撮影)

盆花は店が売りに来るがかならず毎年同じ店から買うことになっていて他の人からは買わない。また、ミソハギを盆花と呼ぶ。(鍋谷) ミソハギを盆花といふだけでは必ず供える。そのほか何

飾る。花びんに生花をさして飾る。仏様の膳に茶碗を七個(ふだんは二個だけ)、または十二個並べて、毎朝、寺からもらったお茶を入れて供える。シバ草またはヨシ實を編んだ五センチ四方くらいのお敷き物を敷いて、ハスまたは手の葉にナスをさいの目に刻んで盛り、ミソハギの束を壺の水に浸して濡らしてやる。仏様用の土器(カワラケ)に柿の葉を敷き、ご飯を盛って供える。(赤岩) 月牌 高野山におまいりして、先祖の月牌をたのみ、掛軸をもらってくる。高野山で毎月毎月の命日に供養してくれている。月牌之契証 建立月牌母月之妙供朝暮之持誦永至子慈壽出世之院天更不可有怠慢者也(梵字) 先祖代々霊 昭和三十三年一月二十七日 紀伊高野山準別格本山 福智院 最も古いのが文化十五寅年二月三日の掛軸で、六代目と八代目の母を供養するもの。(現戸主は十三代目)(菅野) 盆花 ミソハギの花を小束にして半紙でまるめて、ハス葉(またはイモの葉)の上に盛った刻んだ物といっしょに置く。茶碗に水を入れて置き、ミソハギを水に浸して線香を上げる時などに供え振りがけてやることをくり返す。(上五箇)

の花でも取ってきてあげる。(中島)

無縁仏 ソウリヨウ様といって普通盆棚の下に祭る。去年の盆花(造花)を供え、牡丹餅も小さく造ってカワラケに載せて供えた。また蓮の葉または芋の葉にナスを細かく切ったものを供えたが、これもソウリヨウさまと呼んだ。(下中務)

カツモの葉の太い方を切り揃えて四十センチ四方ぐらいの大きさに編んだものを、ソウリヨウ様のお膳、または子どものお膳と呼んで、盆棚の下に置き、去年の盆花をナスに立てて飾り、供え物をのせて置く。カツモの葉を編まないで並べておく家もある。

盆棚の下にカツモのこさを敷き、去年の古い盆花を飾りお灯明をあげ、オハギ・カボチャなどを供える。ここはショウリヨウ様という無縁仏をまつる所で、子供の霊は棚の上に祭る。(上五箇)

小さい器を買って小規模に祭るのは棚の下で、三度三度同じものを供える。(瀬戸井)

盆棚の下には精霊様(昔からのその家の子の子の霊といわれている)をまつる。



ショウリヨウさま(天神原)
今年のカワラケがなくて、瀬戸物の皿にオガラの箸。(青木則子 撮影)



ショウリヨウさま(壹野)
(青木則子 撮影)

盆花(造花)を一本精霊様にあげる。ナスを半切りにしてそれにさし、里芋の葉(ハスの葉がほとんどが)にのせる。(壹野)

子供の仏様は上にあがねえので下に飾る。(木崎)

ミソハギの束に水を付けて、供え時にふりかけてやる水は、茶わんか井に入れているが、毎朝取り替える時に裏庭に棄ててやる。無縁仏がその水を飲むという。また、ふだんでも毎朝のお茶を決まって同じ裏庭に棄てる時、「無縁仏たむけます」といって棄けると、六三除けになる。(赤岩)

ソーリー様といって、盆棚の下に無縁仏の棚を作る。ぼた餅と盆花より小さいソーリー花を飾る。他にどんぶりに水を入れたものと、蓮かきもの葉に茄子をサイの目に切ったものをあげ、盆花の草でどんぶりの水を茄子にビチャビチャかける。(舞木)

ショウリヨウ様は、その家から出た仏にはちがいないが、名前のわからない仏や、子供の仏で、こっそり盆をしてかえる。ショウリヨウ様にお供えを沢山あげたほうが良いというが、献花の種類がちがうだけで、同じに供える。ショウリヨウ様の献花はナスの上に立てる。(天神原)

盆棚にはウチの仏の下に精霊様をまつる。精霊様には茄子か胡瓜で足にオガラをつけた馬を柙に入れて供える。この馬の背に精霊花を挿す。(中島)

お留守居様 仏壇の中の位牌などは全部盆棚に飾り、空になった所へ土器(カワラケ)にご飯を盛って供えておく。尿は開いておく。(赤岩)

仏壇はしめておく。(天神原)

生キ盆 イキミタなどいわない。(上五箇)

盆迎え 盆ブチ 重箱にインゲン・ナス・米・線香・ボタ餅などを入れ、お金を包んで寺へ盆迎え(盆ブチという)に行く。寺には寺世話人がいて、粉茶を包んでくれる。寺から帰ると、屋敷の

カドに土山をこしらえ、そこにいったん盆様をお



おるすい様
お水をお供える（下中森）
床の間の右に仏壇、仏壇の上部
が神棚の家もある。
（関口正己 撮影）



お留守居様（赤岩）
（関口正己 撮影）

ろして休んでもらう。夕飯後、そこへ盆迎えに行き、土山の所で表わらを燃やし線香に火をつける。その煙に乗せて盆様を家へ迎え入れる。家の入口に水を桶に汲んで置き、盆様が足を洗って入れられるようにする。盆様は遠くから来て、足が汚れているから。（下中森）
十三日の夕方、家紋や姓の入った新しい提灯を下げ、おサゴ（米）とお金（五十円―百円）を包んで、寺まで盆迎えに行く。寺の盆棚を拜ん

で提灯に火をつけて、ヒキ茶をもらって帰ってくる。墓へは迎えに行かない。

寺から帰ると、家のカドで迎え火をたいてから、家の盆棚へ迎え入れる。「よくご先祖様来てくれました」といい、盆棚の灯りをつけて、お茶を膳の上にイッテテ進める。

寺から帰ると、屋敷内の住吉様の石碑の前でも表わらを燃して、盆を迎える家もある。

寺から盆迎えしてくると、屋敷のケエド（カド先）に土を盛って上面を四角に平たくした土山（ドーママ）を作り、そこに休んでもらう。日没後、土山の所に迎えに行き、小麦わらを立てて迎え火を燃やす。この煙に乗って盆様があつた世から来るといふ。この火で線香に火をつけ土山に立てたり、カドカドに配りながら家の盆棚へ盆様を迎え入れる。（上五箇）

盆の用意には、金花、蓮の花、新しいござを買ってくる。

何軒かは十二日に迎え盆をするが、ふつうは十三日にだんごをつくり、迎え盆をする。線香、ちようちんをもち、線香には火をつけて家を出て墓へ行く。その煙のついでおボンサマが来る。

なす、おさい銭、米、いんげんなどを重箱に入れてお寺へ持ってゆき、お盆に使うお茶をもらってくる。（瀬戸井）

十三日午後、おサゴ、ナス、ササゲ、盆供え、お重ね餅をもって行く。寺と墓地が同じところにあるので、ボンブチと盆ムカエはいっしょにやる。

新盆の場合にはタカンドウロウを一つよけいに軒高くつるした。（萱野）

新盆の家は軒下に新しい提灯を下げる。庭先に高ん燈籠をあげる。釜つぶたが開いて、仏様がそれを見てやって来る。（木崎）

新盆の家では八月一日に軒下に新盆ちようちんをさげ、送り盆に寺へ持って行く。（鍋合）



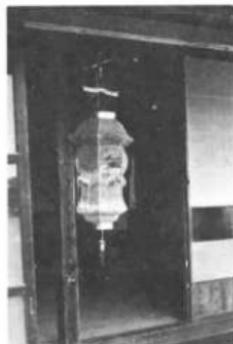
新盆ちょうちん(鍋谷)
(中村和三四 撮影)



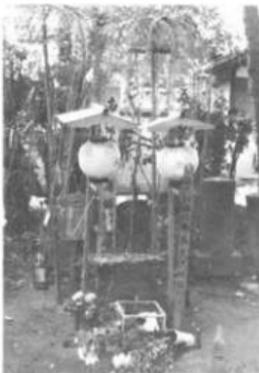
新盆の提燈(下中森)(郡九十九一 撮影)



盆提灯(木崎)(上野 勇 撮影)



新盆のちょうちん(下中森)
(関口正己 撮影)



新盆の墓地飾り(中島)
カッモの仮屋をふく
(中村和三四 撮影)



新盆の墓（舞木）
（関口正己 撮影）



新盆の墓地（新福寺）
略式のマコモを提灯の屋根にかける。
（関口正己 撮影）



ボンヤネ 新盆の家では墓に屋根をつける
（光恩寺、赤岩）（郡丸九十一 撮影）



新盆の墓地（舞木） オダテゴサで屋根を
ふくのは略式。（関口正己 撮影）



新盆の墓地、シバで屋根をかける。（舞木）
（関口正己 撮影）



迎え盆の土盛り カドに土を盛り、上面を四角とする。
（上五箇）（関口正己 撮影）

新盆の家ではコザの縁側に新盆ちようちんをさげる。この時新仏の墓にも新盆ちようちんをあげる。大体八月の一日から七日頃までにする。盆が終わるまで毎日あかりをとす。(鍋谷)

新盆の家では、盆月にはいと、高灯籠のかわりに岐阜提灯を軒下に吊るすようになった。七夕あたりから吊るす家もある。(赤岩)

盆屋根 旧七月一日に新しい仏がお客に出かけてくるので、その目印にタカンドロウという燈籠を庭に立てる。今はチョウチンを軒へ出すだけである。墓には、葦のオダテを二枚つかって、竹で柱をつくり屋根をかけた。カッモで編んだこともある。タカンドロウと屋根は十六日までおく。(天神原)

新盆の家では墓地の土をかけたツカの上に竹を曲げて四角に立て、カッモまたはシバ草を編んだコモをかぶせて屋根を作り、墓が雨にかからないようにする。提灯を下に吊るしたり、別に脇に棒を立てて提灯を立てたりする。提灯の屋根に小さく編んだコモをのせて略す家もある。コモをオダテゴザ(養蚕用)で間に合わせる家もある。これは盆前に作って置く。舞木の円福寺(時宗)などで現在もしている。また、墓土の上を立てた竹の棒はノベ送りの時喪主の次の者が持って来たもので、紙を巻き麻でしばってあり、この竹の上から水を注いでやるものである。(舞木)

お盆後に死んだ者は、軒に提灯をさげる。これを目標に十三日に仏様は来るという。昔はタカンドロウ(ノボリざお)にトウロウをつけて、綱で引き上げ、トウガイに燈明をつける)をかかげた。

墓には竹で輪をつくり、その上に屋根(コモあるいはワラを一並べに織ったゴコモでつくる)をのせてしぼり、その中に提灯をさげた。憩意の者、親戚の者は、新盆見舞をする。昔は干ドウ・砂糖・トウナス・スイカなどを持って行き、仏様に線香をあげた。「お静かなお盆さんでおめでとうございます」と挨拶する。(新福寺)

新盆の家では、七日に、新盆ちようちんを中の間の縁側にさげ、新仏

の墓にも新盆ちようちんをさげ、コシの上にカッモのすだれをかける。コシのない墓には、カッモの飯屋をつくる。現在もしている。七夕のカッモ馬は昨年まではつった。(中島)

提灯を持って寺に行き、先祖迎えをする。墓場で灯をつけてくる。昔は「さあお迎えにきました。しっかりつかまってグ」といって手を後にまわしてきた。灯を盆棚に移す。タライに水をくんで表におく家もある。先祖が足を洗うためという。(豊野)

お寺へ迎え提灯といって提灯を持って行って、迎えに行く。墓地へ行って、それから本尊様のところの火をつけなおし、燂燂の火を乗せて来る。(木崎)

お盆迎えをする前に、ボンブチといい、重箱に米またはササゲを入れて金をそえてお寺に持って行き、一たん家に帰ってから夕方、夕食頃家からちようちんをつけて寺に盆様を迎えに行く。

盆ブチは盆の十三日、新盆や年回の仏様のいる家では、草履一足と米や野菜を重箱に入れて寺へ行った。この時少々金も包んだ。寺から挽き茶をもらってきて、水でお茶を入れてお棚にあげる。この後、盆様を迎えに行く。

盆迎えは十三日盆ブチの後にする。門火はたかない。ちようちんに火をつけ、オハギとウドンと線香を持って墓に行き、線香に火をつけて迎えてくる。この煙ののって仏様かくるといふ。線香の火をお棚に移す。(鍋谷)

光恩寺まで盆迎えに行くが、これを盆ブチという。十三日の晩、重箱に供物を入れて寺へ盆迎えに行き、供物とお金を供えて、寺で提灯に火をつけてもらい、墓地に回って先祖の霊を連れて道案内しながら家に来る。迎え火はたかない(赤岩はほとんど迎え火をたかない)。火を盆棚の灯りに移し、提灯の火は消さないで軒下にかけておく。

お盆様は十三日の晩十二時に、ソウリョウ様という馬に乗って帰ってくるという。(赤岩)

盆棚を飾り、重箱にオサゴを入れ、金を包んで、赤岩の寺へポンプチに行き、ひき茶をもらってくる。

夕食後、ちょうちんをつけて墓地までむかえに行く。線香をあげ、墓のまわりにある木の葉(サワラ・シキビ、何でもよい)を一枚とって、それに線香の煙をあてて家を持ってくる。盆様は線香のケブにのって来るといので、火が消えないうちに帰る。(天神原)

十三日、寺に行き、本堂の火を提灯にもらって墓に行き、一廻り廻って家に向い、玄関(トボグチでなく庭に面した廊下)から入り、座敷につくられた盆棚の燈明をつける。提灯は表にさげ、蠟燭は消す。(新福寺) 十三日は盆ブチで、盆迎えの前にオサゴを持ってお寺に行き、寺から挽き茶をもらってきて、水でお茶を入れて盆棚の仏様に供える。

十三日に薬師堂の共同墓地へ盆迎えに行く。ポタモチ四個を先祖様に供え、線香に火をつけて迎えてくる。先祖様はこの線香の煙にのってやってくるといわれている。門火はたかない。(中島)

本家参り 十三日の夕方盆迎えをしてくと、その晩、分家の者はおハギを持って本家の盆様をお参りに行く。そのため、本家にはおハギが集まる。翌日改めて親戚の者は盆参りとして盆様へ線香あげに行くので、分家からは二日続いて本家へ行くことになる。(上五箇)

盆参り 盆のうちの親戚や近所の懇意の家から、仏様に線香をあげに来てくれる。ふつう十二、三軒の者が行ったり来たりして、百円くらい包んでくる。遠くから来てくれる人にはお昼を出す。盆と春秋の彼岸にも行き来する。

正月の二年初は略されてほとんどしなくなったが、盆参りはみんな盛んにやっている。(上五箇)

盆に行く人は、はしうどん、さとう、果物、金などを贈る。(瀬戸井) 盆の来客は仏の縁故、親戚とか特別の関係のあった人。盆の場合には、金品をもらってもお返しはしなかった。金品とはいってもウドンが普通であった。(萱野)

盆の仏まいりに、親戚は干しウドン五把、隣近所は干しウドン三、四把持って行く。これは特に決まっているわけではないので、なかには線香やロソク、砂糖などを持って行く人もある。

盆の仏まいりの挨拶は、大ききまって、「お静かなお盆でおめでとうございます」という。(鍋谷)

新盆 アラ盆の家では八月一日から提燈を軒先につるす。昔はタカンドウロウをあげた。(下中森)

新盆の家では二十尺もの高い竿を立て、その先に灯籠を吊した。大工に頼んで雨のむらぬように屋根を付けた灯籠を作り、中に油壺を入れ布やトウスミ(灯心)を入れて灯りをともし、竿の先にセミ(滑車)をつけて綱で引き上げた。七夕ころ作り、盆が終るまで毎晩の灯りをつけて置くので、村の人に新盆であることがよくわかった。五十年前も前までのことで、今は高灯籠のかわりにきれいな新盆提灯を下げて置く。(上五箇)

新盆見舞 新盆の家へは十四、五日のうちに線香たてに行く。人かぎり、家かぎりのつき合いで行くが、昔は干うどんを五わから十ばも持って行った。今はお金がふつう。新盆の家に行くと「お静かのお盆でおめでとうございます。お線香をたてさせてください。」などと挨拶する。ふつうの盆では、そんな挨拶はいわない。盆棚に線香をたてて、あとこ馳走になる。別に墓参りはしない。(上五箇)

新盆の家は八月一日にちょうちんを下げておく。盆だなどはふつうのもの、関係のある人は行って線香を上げてくる。新盆のある家の人には、よその家へは出かない。(瀬戸井)

タナイイリに新盆の家に行く。もってゆくものは干しうどんが多く、偶数でもって行く。新盆の家ではおおきちょうちんをあげる。(萱野)

新盆の家では、仏まいりはしない。きてもらうだけ。(鍋谷)

新盆の家では七月一日から白い提灯を軒先につるす。また、盆中、外出はしない。(舞木)



ノマワリ 15日朝、野らを回る(赤岩)
(関口正己 撮影)



シキミ、線香をもち、野回りに出る
(天神原)

(青木則子 撮影)

十五日の朝早く、盆様をつれて、自分の家の田畑をまわる。線香と木の葉(シキミやサワラ)を持って、作物の出来具合をみせて歩き、稲の穂・さつまいも・とうまきび・豆等を

新盆には、うどん・砂糖・スイカ・金等を持って近所の人がたなまじりをする。「お静かなお盆でおめでとうございませう。」という様なことを言う。(舞木)

タナマイリは十四日で、アラ盆の家に、とうなす、砂糖をもって親戚がお参りにゆく。

新盆には盆の十四・十五日にセガキをする。(天神原)

普通の場合は「お静かなお盆で、おめでとうございませう」という。「新年おめでとうございませう」といって、笑われたものがある。(福島)

仏の野回り 十五日の朝、朝食の後、仏様に茶をあげて、線香を持ち、火をつけて野回りをする。線香をもって歩くのは、先祖様と見て歩く意味をもっている。早いものができていれば持つてきて、盆棚にあげてお

く。さつまを掘ってくるとか、小豆をあげた。『できたよ。』といつてあげる。(萱野)

八月十五日の朝、その家の主人公が自分の耕地を皆廻る。さつまができていればさつま、大豆なら大豆、稲の穂が出ていれば稲の穂を取って来て、野廻りをして来たしに、お盆様にあげる。固い人は、線香を持って歩く。送り盆の時に、それを土産に持って行く。(木崎)

野回りは十五日の朝食の後、施主が線香に火をつけて、家の田畑を回ってくる。今年の作物を先祖様に見てもらうのだという。

十五日は野マワリで、家の主人が、線香に火をつけて、自分の家の田、畑を線香が終わらない中に一まわりして行く。これを「野マワリ」とい、先祖様に、田、畑の作物を見てもらうためだとされている。(鍋谷)

茶と食事をあげてから、過去帳をふろしきに包んで背中にしょって歩いてまわる。(萱野)

盆の十五日の朝、線香一束に火をつけてその煙にお盆様をのせて、家の田の中を1回り回ってくる。早く出た稲の穂やニンジン・イモなど珍しい物を取つてきて、盆棚に供える。今でもやっている。

盆の十五日の午前、あまり暑くないうちに、線香に火をつけてう

ちの回りをひとまわりまわる。仏さまはけむりにのって、一緒にいくという。田に珍しいもの(たとえば、早く出た穂とか、いい穂)があればそれをとってきて、盆たなにかざる。野マワリには、うちのもののがれがいてもよい。これを「お盆さまの野マワリ」という。(赤岩)

十五日の朝早く、盆様をつれて、自分の家の

田畑をまわる。線香と木の葉(シキミやサワラ)を持って、作物の出来具合をみせて歩き、稲の穂・さつまいも・とうまきび・豆等を

とつてきて、十六日に帰るときのみやげにする。新しい土地をかたつきは必ずみせる。(天神原)

盆の十五日の朝、火をつけた線香を持って田や畑をまわり、仏さまに田や畑をまわり、仏さまに田や畑を見せることにする。稲、豆、さといもなどの供物をとって来て仏さまにお供えする。(新福寺)

盆の十五日の朝、野回りといつて、主人が線香をさして、家の田畑を回り、作物を種類ずつ取つてきて盆棚に供えた。先祖様に今年の作物柄を見てもらうのだという。(中島)

送り盆 十六日の夕方三時ごろ、盆様を送り出す。キュウリにオガラ足の足を付けた馬を作って屋敷のカドに出す。カドで小麦わらを燃やすと、その煙にのつて盆様が帰る。あとで墓場へ線香を持ってお参りに行く。提灯はつけていかない。

盆棚に供えた全部の物をカドに出し、土山の上で麦わらを燃す。線香に火をつけて置く。また、ナス・キュウリの馬を作って置き、うどん二本を掛けて腹帯にしてやる。うどんはみやげ物を付ける荷縄のわけだともいう。土山の上に盆の竹などを置いたり、供え物のカワラケ(土器)もそばに置く。もとは子どもが土器を集めて遊んだりした。(上五箇)

迎え火等はたかず、線香をつけて迎えてくるが、送るときは小麦わらを燃す。いへ行くが、カド送り程度の家もある。(下中森)

送り盆の時は、寺へ行くカドへ送り出してからお墓参りする。重箱にだんごを入れて行き、墓に供えたり食べたりする。

カド口へ家族数だけの茶碗を出して、やかんで水を注いで供えると、はやり病にかからないというので、もとはいねいにした。(上五箇)

盆様を送り出すのは十六日の二時頃、お棚の竹や供え物、ダンゴ、線香、水、お花など持って行く。(鍋谷)

十五日の夜、近くの道のはたに小麦わらを燃して送る。ナス、キュウリで馬を一對ずつくり、オガラの箸を足にして、うどんを首にかけてたずなにする。その火にあたると、ヒビ、アカギレがきれない。(菅野)

十六日、麦ワラでサイトウ(松明のこと)を作る。盆ダナのゴザと縄で麦ワラを結わえて作り、それに火をつけて、その雲にのつて仏様かかえる。ナス、キュウリにトウモロコシの尻をつけて馬をつくり自分のモヨリの場所(その家により昔からきままっている)で、サイトウで燃やしてしまふ。(菅野)

十六日が送り盆で、午後お寺に仏様を送って行く。婦りに十王様の掛図を見て来る。この掛図は十二枚あって、それぞれ十人の王様がいて、子どもの火遊び、うそ、盗みなどをしないようにいろいろと教える場所であった。(鍋谷)

盆棚に供えた物を全部持って、夕方寺の道ばたへ送り出す。道端で火を燃して焼く家もある。この時ナスの馬にオガラの足を付けたものを持って行く。お墓へダンゴを上げてくる。

盆に供えた物などをわらで燃やすと、その煙に乗ってお盆様が帰る。この時、ナスの馬に乗って行く。(赤岩)

送り盆は十六日で、昼に団子を供え、生のウドンを二本、シヨイ縄として供えてから送る。盆棚に供えたもの、野まわりでとってきたもの全部と、線香をとらぎの葉につつま、ムカエ盆のときにもつてきた木の葉をもって墓地まで送る。墓で線香をたき枝をさしてくる。

シヨウリウ縄は寺の入口の左側の無縁仏をままとめたところへ送る。団子などを供えたカワラケごとおいて行く。(天神原)

盆うちの供物や盆棚の竹など持って行って、衆師堂へ共同墓地の入口にままとめておき、墓には精霊花と線香をあげてくる。(中島)

盆の食置 盆のぼた餅は黄な粉をつけたオハギを作る。(上五箇)

盆は、朝ぼたもち、昼うどん、夜は米のめし、とうなす汁ときまっていた。(瀬戸井)

盆の食事としては朝はボタモチ、昼間はウドン、夜は米の飯、トウナス汁。(八木節の文句になっている。)(菅野)

「盆はぼた餅、昼間はうどん、夜は米の飯トウナス汁よ」と盆踊り歌

にあるように、朝は餅、昼うどん、夜ごはんは決まっている。これらの食べ物、仏用の土器に柿の葉を敷いて盛って盆棚に供える。土器は小泉のかまどで焼いたもので、小泉焼は今年で止めになるといふ。(赤岩)

十三日 夕食にうどんをあげ、お夜食としてお餅(お重ね)をあげる。十四日 十三日の餅の残りをあべかわにして食べる。

十五日 朝はキナコのおはぎ、昼はうどん、夜は米の飯、トウナス汁。盆にカボチャはつきもので、トウナス汁といつてもキリコブといつしよに煮た煮つけである。(萱野)

盆はポタモチ、昼はうどん、夜は米の飯、とうなすのオツケ、と、三日間これだけあげれば良い。水は朝晩とりかえる。(天神原)

盆の食物を唄った盆唄がある。実に哀調をおびた節である。

「盆はポタモチ、昼間はウドン、夜は米の飯、トウナス汁よ。」(中島)

施餓鬼 十五日に長生寺で施餓鬼をやる。新益や年忌に当たった家では寺から通知があつて、お布施として塔婆代千円、読経代七百円などを持って出かけお焼香をする。坊さんが塔婆を書いてくれるのを、もらつてくる。その時に寺の棚に飾った色紙の大旗・小旗をもらつてくる。赤岩では十八日に川施餓鬼をする。(上五箇)

十五日に寺で行なひ、年回るときは、年回にあたる人の名を記したトウバを、それ以外のときは先祖代々と書いたトウバを立てる。新益の時は親戚、近所を呼んで盛大にやる。(萱野)

十四日の午前中等に行き、施餓鬼をしてもらふ。トウバとメシバタ(オミタマサマの旗)をいっただいて来る。トウバは大人千円か子ども七百円(昭和四六年)である。メシバタは野菜畑にさしておくと虫がつかない

とされている。盆の十四日の朝、寺施餓鬼をする。寺世話人(三人)は前もって準備を手伝う。十三日の盆フチの米で五合位ご飯をたき、サン俵に盛り、お櫃にのせて盆棚に供える。ご飯には竹に色紙をつけてメシバタを立て



施餓鬼(宝生寺、瀬戸井)
(関口正己 撮影)



施餓鬼より帰る(瀬戸井)
(関口正己 撮影)

る。この数は塔婆の数と同じ。塔婆料を包んで塔婆とメシバタをもらつてくる。メシバタは虫除けになるといって大根畑に立てる。塔婆は送り盆に墓に立てる。(鍋谷)

メシバタは送り盆の施餓鬼の時に、坊さんが毎戸にくれる。真丸の握り飯にさす。それをとっておいて、大根を蒔いたら、大根畑にさす。虫がつかない。(木崎)

盆の十四日の朝、寺で施餓鬼があり、新益や年回のある家では、寺へ行って塔婆を書いてもらう。塔婆料として、大人一、〇〇〇円、子供七〇〇円位包む。木の塔婆でお盆様に上げておき、迎え盆に持って行って墓に立てる。寺では塔婆一本に色紙の幡一本をくれるが、これは虫除けになるといつて大根畑にたてておく。(中島)

盆踊り 昔は寺の庭で盆踊りをした。神社ののぼり竿を結んでやぐらを組み、碁籠を使って二階を作り、提灯を七重にも重ねて飾つた。(上五箇)

盆踊りにはヤグラをます作る。神社のノボリザオを使う。寺の庭に一

晩で作ってしまった。若い衆が人の家の物や道具をだまってもついたりして作ってしまった。仕事師などを物こして手伝ってもらった。ヤグラの回りには提灯をたくさんつけた。火で提灯が燃えないように注意をした。

昔はいたずらをする人があったので、餅搗き臼をおいて、ヤグラをこわされないようにした。踊り場は地面でなく、餅搗き臼の上に作られた。そこで、菅笠に花をつけて、花笠踊りなどをやった。音頭は、ヤグラの上でする。(菅野)

鍋谷は十六日、木崎は十三日、赤岩は川施餓鬼の十八日。鍋谷ではお寺の庭に三階のヤグラがたった。「鍋谷の笠踊り」は有名だった。ほかの部落からも若衆が踊りにきたが、大抵十二時頃には終えた。(鍋谷)

十王様 盆の十六日は堂山のジオウ(十王)様を祭った。小さい木像があり、子供が鐘をかんがんだたいてにぎわしたが、今は光恩寺の本堂にある。「ジオウノツラヨシ」といって、五目飯を作って供える。

盆と正月の十六日に、十王様を祭り、五目飯をたいて食べると無病息災になり、かぜをひかない。(赤岩)

盆がら 八月十七日を盆の明けの日としてボンガラといい、盆の疲れをとるために一日休む。(瀬戸井)

十八日にキナ粉ほたちを作って食べたり供えたりする。又この日赤岩の川施餓鬼に行く。そこでは燈ろう流しや盆おどりがあった。(鍋谷)

川施餓鬼 (十八日)

豆腐屋のカブト屋の職人が川で死んだので、光恩寺の和尚さんとカブト屋の主人その他が申し合せて始めたのが最初であった。元来八月十六日は堂山の十王様の祭り、十七日も祭りがあって、十八日が川施餓鬼であった。(赤岩)

オタキアゲ (二十一日)

盆の八月二十一日に鎮守(八幡様、浅間様)様でオタキアゲをする。神社総代六人、カマ番七人は当日神社の清掃、祭りの準備をする。カマ番の任期は三年で四月交代、前クルワ、中クルワ、後クルワから各二人、富士原は一人で計七人。サシ番は一人、春、夏、秋のまつりごとにかわる。サシ番は祭りが近づくとき、毎戸から金や酒、揚物などもらって、カマ番にとどける。当日の飲食にする。二十一日の夕方、神社の清掃のとき準備した神社の木の枝や、毎戸から持ち寄った麦ワラを積み重ねて、オカザリをたく。この時、先達やワキ先達などが「お伝え」をあげる。(中島)

九 月

二百十日 (一日)

厄 日 二百十日は厄日、荒れ日で、まんじゅうを作り神に供えたり食べたりした。(上五箇)

まんじゅうをつくる。この日が無事にすぎれば作物がよくとれる。(瀬戸井)

小麦マシジュウを作って、家まつりだけする。(鍋谷)

早稲の出穂日。荒日。(天神原)

オクのものでも穂が出る。(天神原)

風 祭 半日休むだけ。何もしない。(菅野)

一戸一人集まって天神様に御神酒をあげる。神主から幣束をもらって村境をふって歩く。戦前までやった。個人の家では改めて祭はしない。(天神原)

ハッサク (旧八月一日)

ハッサクノ節供 嫁がショウガを持って実家へ節供に行くので、ショウガの節供ともいう。実家からは「実が入るように」と、箕を買って寄こしたり、斗拵などを寄こした。嫁に来て二、三年まで行く。(上五箇)

箕に若いショウガを入れて、嫁が里帰りする。身ごもって、性の良い子ができるようにいう意味である。

八朔(旧)は嫁が実家に戻る日。実家から箕をもらってくる。箕の中に一升マスを入れてもらってくる。「イッショウウミヨウマス」という。「一生(升)実(箕)を増す」という意味であらう。

また一年目には箕を、二年目に三(実)マス(一升マス、五合マス、一合マス)をもらってくるのもある。(菅野)

嫁が実家へ行く。きまったものを持って行かない。嫁の実家では、早く身持ちになるようにと、箕を持って行かない。嫁の実家では、

(木崎)

嫁は3月3日・5月5日・7月7日・8月1日に里帰りをする。八朔にはショウガを実家を持っていく。「ショウガネ嫁だから」という意味だという。実家からは箕を持たせてやる。「ショウガネ嫁でもミなおしてくれ」という意味だという。(舞木)

八朔の節供はショウガの節供といわれ、嫁は葉つきのショウガをもってお客に行く。仲人と実家では「み」を買って返すことになっていて。

一説には婚家で「しょうがない嫁ごだ」というのでショウガをつけてお客にやるのだというが、仲人や実家では、「そんなはずはない、見直すように」お願ひするということで「み」をつけて返すのだという。別の説では、「早くみこる」ようにという願ひがあるという。

仲人や実家を買う「み」はコナミがよく、めのあらいオニミでは、嫁が鬼になるというのできらわれる。(新福寺)

八朔の節供は旧八月一日、嫁は箕を持って実家へお客に行く。嫁に

きて二、三年は続ける。(中島)

十五夜 (旧八月十五日)

月祭りて丸い食物をつくる。まんじゅうや牡丹餅、かきなどの果物。子どもたちはこれを下げて歩いた。十五夜に雨が降ると大妻が不作、十三夜に降ると小妻が不作、十日夜に降ると米が不作などといった。(下中森)

ススキの穂を飾り、丸い物(まんじゅうやぼた餅)を作って皿に五箇盛って供える。柿・栗・ナシなどの果物を箕の中に入れて廊下へ出して置く。月見の晩なので、近所の子どもが供え物を下げて回った。子どもには興味があった。(上五箇)(赤岩)

十五夜は旧暦八月十五日、五本のすすきをとってきて、みの中へ作物や柿や梨などのくだものををかざる。子どもたちは集団でひろって歩いた。何か音がしたなと思うと供えものがなくなっていた。(瀬戸井)

十五夜には丸いもの(マンジュウなど)を箕の中に入れてそなえる。子供たちがそれをさげにゆく。柿や栗もさげにゆく。竹の先にクギをつけて、それでさしてさげたりもした。(菅野)

十五夜に薄を十五本と、時のものに団子供える。お供えものを子どもがオンカデ(おおつびらに)さげる。さげた方がいい。この日ナットーマツリといい、多い家では、二斗も三斗も作った。(木崎)

箕の中にススキ十五本、栗、梨、柿、ぼた餅、お月見ダンゴを入れ、斗拵を台にして、庭に飾った。子供衆が棒を持ってボタ餅をついて取って歩いた。ぼた餅はつかれた方がよいという。(鍋谷)

ススキ五本、ぼたもちまんじゅう五個、イモ、カキ、クリを箕に入れて、縁側にだす。ろうそくで燈明をあける。

子供達が、棒に釘をつけて供え物をひっかけて、トウドリ(盗取り)して歩いたが、今は誰もとらなくなった。(天神原)

オクンチ (九の日)

ハツクンチ (旧九月九日) ナカノクンチ (旧九月十九日)、シマイノクンチ (旧九月二十九日)、ナカノクンチ、新暦十月十八日、十九日は白山神社の秋まつりである。

オクンチ (旧) はシメエグンチ (二十九日) が多い。コビマチ (屋敷稲荷祭) をする家も多かった (家によって違う)。屋敷稲荷をまつるには、藪でオカリヤを作った。村内で稲荷祭に呼んだり、呼ばれたりした。(萱野)

オクンチに九日茄子を食べると中気にならぬ。(木崎)
9日が初グンチ、19日が中グンチ、29日がしまいグンチといい、長良神社の祭りである。舞木は中グンチにする。稲荷様の堤防際で角力大会をする。またこの日に飯宮をワラで作って屋敷稲荷をまつる。(舞木)
ここではオクンチをしない。(上五箇)

彼岸

春も秋も同じで、ボタモチを作って、お墓参りをする。(萱野)

中日 ぼたもちをつくる。ネギの種をまく。(天神原)

ハシリクチ 彼岸のアケの日。団子をつくって墓まいりをする。(天神原)

原

社 日

秋の社日参りはしない。(鍋谷)

小泉の社日様に、農道具や種の市が立つ。(天神原)

十月

十三夜 (旧九月十三日)

ススキの穂を立てて、十五夜と同じに祭る。供え物の数が三個または十三個ずつになる。(上五箇)

十五夜と同じようにしてまつる。(萱野)

ススキ十三本、ぼた餅、ウドン、栗柿などを縁側へ飾り、灯明をあげた。(鍋谷)

片見月はよくないといふので、十五夜によそに泊ると、十三夜にもよそに泊まらなければいけないといふ。(赤岩)

コビマチ (十月二十九日)

末のクンチに、コビマチまたはオビマチといつて、コビ社を祭る。クルワにある小さい八坂様などの社の祭りをする。(上中森)

オビマチは、麦まきのころクルワの祭りをして、赤飯を近所に配った。

(赤岩)

神送り (旧十月一日)

お神のお立ち 旧十月一日は神様が出雲へお立ちになる日なので、朝早く起きて鎮守へ参詣に行つた。オサゴを持って行って、いい所へ縁つけてもらうようにお願いした。(上五箇)

十月は神無月だが、神さまは十月の初申の日に行くのでこの日にお参りに行く。(瀬戸井)

神送りには、いい縁組みをしてくれるように、おたちだから早くお参りに行く。(木崎)

神様が出雲の国へ縁結びに行く日。結婚前の男女は、朝暗いうちに神

社へ行って、良い嫁、良い髪を迎えられるように祈願する。神様がよいなので十月を神無月という。(天神原)

十一月

七五三 (十五日)

七才・五才・三才の子がそろくと七五三のお祝いをした。新しい着物を作って着せて鎮守参りする。昔より今の方がさかになった。またオビトキといって、七才の子どもがいるときお祝いする。男女とも祝うが、女の子はお嫁に行く時の支度をする。(上五箇)

新しい祝いの着をこしらえてお宮参りをし、赤飯をたいて仲人や親せきの人を招いた。(瀬戸井)

十日夜 (旧十月十日)

供え物 十日夜には餅。十この餅を箕に載せて、それを一斗ますの上
に上げて月に供える。(下中森)

十日夜には塩あんの大福餅を作って、十個を重箱に入れて床の間へ供えた。月見の行事だが、庭には供えなかった。大根は供えないし、ワラを供え物に敷くこともしない。

十日夜には、もとは塩あんと砂糖を入れたあんを入れた二色^{ふたいろ}のあんびんもちをついた。えんがわに、新わらをすぐけてしぎ、その上に箕をのせてそこへ、もちを十コ(最近はいまいあんを入れたあんびん)あげて供えするのはもちだけである。十日にもちをつくのは、秋の仕事でつかれているので、もちを食べて威勢をつけるためだという。(上五箇)

新米でもちをつくと、もちを十かさねお月さまにあげる。神だにも供える。もちはこちそうだった。わらでつぼりをついた。(瀬戸井)
庭にもみを積みあげて、餅を十個、箕に入れてあげる。餅は大一個小

九個作り、大きい餅を囲むように小餅を並べる。(萱野)

十日夜が近づくと大根が抜けてきたという。餅をつく。箕の中にイモ、サトイモ、ナシを入れて縁側に出して、灯明をあげる。(鍋谷)

餅を十個お膳に並べて、縁側に出して供える。お供え餅も作って、二重ね餅にして、二十日のエビス講にもエビス様へ供える。(赤岩)

庭に稲束を出し、その上に餅を二重ね供える。十重ね供える家もある。十日夜の餅をのどにひっかけて死んだという話から、十日夜の餅はあわてずに食べろという。(天神原)

旧十月十日にもちをつき、おそなえを十個膳に入れ、稲束に供える。(新福寺)

稲束をすすきの代りに縁側に近い庭にかざり、灯明を上げてもちを供える。うるう年には床の間に十三このもちを上げる家もあるが、ふつうは十二で、あんこを入れないおそなえのようなもちである。

新しい仏さんのある家では、十三仏さまというので十三このもちと、小さいいんなしのもち四十九こをわらのつとつこに入れ、お寺にもって行って供養してもらう。また、馬がほねをおって苦労したからこくろうさんというので、馬にもちをくれたが、もろこしもちや、あわもちを馬にくれたことが多かった。(新福寺)

ワラデッポウ 十日にワラデッポウで地面をたたく。「大根の年とり」で、大根がのびないようにしたのでたたく。

「トリーカンヤ トリーカンヤ トリーカンヤのワラデッポウ ウシ(忍)のテッポウに負けん」と唱える。(上中森)

ワラ束の中にイモガラを入れて縄で巻き、ワラデッポウを作る。子ども同志で家の庭や道路をたたいて回ったが、別に何ももらわなかった。モグラが土を持ちあげないようにした。

わらにイモがらを入れてたばね、ワラデッポウを作った。これで地面をたたきながら、「十日夜ワラデッポウ、オシノ鉄砲ニヤ負ケルナ」と唱えた。

この日、わらでわらでっぽうをつくり(この中にいもがらを入れると
なりがいいという)、これで子どもが庭先をたゞいてある。大根はた
けの近くでたたくと、大根がぬけでるといった。(上五箇)

「十日夜、十日夜、十日夜ノワラ鉄砲忍ノ鉄砲ニ負ルナ。」と言って、
イモガラを入れたわらつちをたたく。

大根畑でわら鉄砲をうつと、大根がぬけ出す。

薬鉄砲を作る。イモガラ(里芋の茎)を中に入れてと音がよい。

「十日夜はワラデッポウ、ウシ(忍藩)の鉄砲にまけるな」と唱えなが
ら地面を叩く。

十日夜には餅を作るが、いい餅がつけると、肌のいい娘ができる(生
れる)といった。(萱野)

芋がらをしんにして薬鉄砲を作り、「トオカンヤ、トオカンヤ、ト
ンヤノワラデッポウ、オシノテッポウニマケンナ」といつて叩く。叩く
と大根が脱け出す。叩く時は気の合った者同志で左右に分れ、交互に叩
く。昔、忍の行田藩と館林藩とあって、行田藩の方が石高が上になつた
ので、負けちゃ残念だというので、「オシノテッポウニマケンナ」といつ
た。(木崎)

子供たちはワラの中にイモがらを入れて縄でしばつたワラ鉄砲を作
つて、「十日夜、十日夜、忍(牛)ノ鉄砲ニ負ケルナ」と唱えながら、庭
や道などたいて回つた。(鍋谷)

十日夜の晩には、子どもものころわらでっぽうをつくつてもらつて、庭
先をたいて、あそびである。いた。
タルワの子供が道ばたに集まって威勢よくワラデッポウをたたきなが
ら「十日夜ワラデッポウ、忍ノ鉄砲ニ負けルナ」と唱えた。

大根畑でたたくと大根がよくのびるといふ。(赤岩)

「トオカンヤ、ワラデッポウ、オシノテッポウニ負ケルナ」(舞木)

トオカンヤをつくり、子供たちが、

「トオカンヤ、トウカンヤ、忍ノ鉄砲ニ負ケルナ」

と言って街道をつく。トオカンヤにイモガラを入れると良い音がする。
トオカンヤをつくと、その音で大根が伸びあがると言い。大根畑でつ
けとすめた。(天神原)

子どもは、わらの中にイモガラを入れてつくつたものでドベタ(地面)
を叩きながら庭から道までゆく。「十日夜、ワラデッポウ、ウシのテッポ
ウニ負ケルナ」とうたう。(新福寺)

エビス講 (旧十月二十日、または十一月二十日)

供え物 エビス講までに新米の俵を積んでおく。

十日に餅をついておいて、二十日に供える。エビス講の掛字を下げて
エビス様のお宮をかざり、それに御飯、ケンチン、サンマのお膳を机に
供え、「千両で買い、やす」とか言つてそれを下げてくる。

神様は出雲(行き、留守番はエビス、庚申、オカマ様がする。(上中森)
旧十月二十日。けんちん汁、さんま。一升ますにお金を入れて供える。
また、供えた御飯を買つて食べると力がでると、家族一人一人がお金
を供えて、その御飯を食べる。(下中森)

旧の十月二十日、えびすさまを神だならおろしてテーブルにかざ
り、十日夜のおそなえをとつておいてここに供える。サンマやイワシの
おかしらつきとケンチン汁にめしで、供えたものは「二万両で買いま
すから」といつて下げてきて食べる。一万両でなく「トチマン両」ともい
う。なるべく若い者に食べさせることにしている。(瀬戸丹)

エビス講は旧十月二十日にやる。エビス様は普段は東に向けてはいけ
ない。東を向けると金ができなくなるといふ。ただし、祭の時だけは東
を向ける。

この附近では、正月は商人のエビス講、十月は農家のエビス講とい
つて盛んにやつた。

オイベス様の日に、ダルマの目を入れる。(萱野)

オイベス様を神棚からおろして祭る。尾頭のついた魚(イワシ、サン



大黒様
の掛軸(天神原)
惠比須
(青木則子撮影)

マ)と、飯を山盛りにして供える。山盛りにするのを、「エベス様のようだ」とも、エベス盛りともいう。鯉をあげるわけだが、鮒をあげる。

(木崎)

恵比須・大黒は十月の留守番なので、祭が十月にある。朝、お供え、赤飯、尻頭付魚(主にサンマ)カキ等をあげる。「トリアゲでたっぶりだ」といって、飯を盛り上げて供える。夜は、お金をあげて、「この次の祭までに倍にして下さい」と拝み、供え物を、あきんどから買うように、「売ってくれ」と言って現金を出して買って食べる。(天神原)

カキ餅 コネ鉢(ベニバチともい、瀬戸物でなく磁器)で麦コガシをこね、その中に洗柿のうんだもの(よく熟成したもの)を入れて、カキ餅を作った。うんだ洗柿を入れると甘味がつき粘りも出たという。(赤岩、川上宗八氏)

この日エビス様にて麦コガシをこね柿餅というものを作りて食う。(永楽村郷土誌)

代参講 十九日に大泉町西宮神社へ一人づつ代参に行き、熊手(縁起物)を受けてきて講員に配る。(上五箇)

オカマ様 (旧十月二十六日、または三十一日)

オカマノダンゴ 田仕事が終わった時に新米でカマドの神様にだんごを供える。(上中巻)

秋の取り入れや脱穀がすみ、干し物が終わった旧十月晦日のニワアガリに、オカマノダンゴを作ってオカマ様に供えた。小さいダンゴをうりて、

あんこの中に入れてかんまわした物だが、略してオハギを作ったり、最近餅を作るようになった。

オカマノダンゴができると、縁づいている嫁や嫁を実家に呼んでこちそうした。また、近所の家ともやり取りした。

旧十月は神様が出雲の国へ出かけるが、エビス様とオカマ様は留守居をしているので、二十日にエビス講、晦日にオカマ様を祭るが、ふつうはコミ(いっしょ)で祭っている。

オカマ様はオロシのお勝手の方には棚を作って祭っており、正月に御幣をあげるが、あとは祭らない(上五箇)

十一月二十六日、米の粉のダンゴを作って食べた。カマドのところにオカマサマがあり、そこにダンゴを供えた。(置野)

秋の新米ができた旧十月二十六日に、新米を粉にしてダンゴを作り、親が嫁に行った子供を迎えに行つて呼んで連れて来て食べさせる。親は子がかわいいので、わざわざ呼びに行くから、縁先きではどうしても嫁をお客に出してやらねばならない。

オカマ様は子どもがたくさんいるので、出雲国へ連れていけないから、留守居をしているといい、二十六日に仕事が終わって嫁を呼んで休ませる。(赤岩)

嫁いだ娘を呼んで、だんごをつくってこちそうする。だんごをあんこでくるんだものをカマドにあげる。この団子を食べると、嫁に行つて子供を沢山生むというので、「オカマの団子は数はかり」ということばがある。

嫁に行つてしまうと、なかなか実家に帰れないので、呼びにゆく。今でもやるが、日は決まっていない。(天神原)

十月二十六日に、嫁いだ娘や家から出ている者全部をよんで、あんこをつけただんごをつくってこちそうする。この日には嫁は大手をふつてお客に来られる日で、娘たちも楽しみにしていた。(新福寺)

五十五のダンゴ

親が五十五才になると、子供はダンゴをこきえて親を呼んでごちそうする。一合の粉で五十五個の丸いダンゴを作り、しょうゆをつけて食べるもので、菓子屋でも小さいダンゴを作って売っている。埼玉の方から戦後に伝わった風習らしく、昔より今の方がさかんにやる。秋の収穫後にやることで、日のきまりはない。最近、亥年に親に紫の布団を贈れば、親が死ぬ時にお尻の世話にならないということが宣伝されているが、これは布団屋の商売上手によるものらしい。(赤岩)

取納 祝い

カマガリ 稲刈りが終わると鎌を洗って箕の上に置き、お燈明をあげて、ボタモチや餅をついて供えた。

家族は馳走をたべるが、「油ケンチン、田ゴメの飯だ。」などという。オカボではなく、うまい飯をたべた。(萱野)

稲刈りがすむと、刈りとりに使った鎌は全部きれいにそうじして大神宮さんに上げ、米の飯をたいてお祝いをした。(新福寺)

ニア(ワ)ガリ モミスリが終るとニワガリをする。ムシロをすいてモミをほし、やがてムシロをはたいてきれいにする。そして餅をついて親戚に配った。(菅野)

ニアガリとは庭あがり、庭仕事全部すんだ時、あんの餅を作り、近くの親戚にも配る。(木輪)

米の収穫後、百姓手伝いに来てくれた人を集めて、餅やら酒を御馳走する。(舞木)

十一月、庭仕事が全部終わった時にやる。(福島)

秋のしつけ、とりこみがすむと、米の飯にいのけんちん汁、大根のシラアエをつくり、近所の子どもを招んだりして食べる祝いで、しごとの終わった家からやるので何日も続いた。(新福寺)

ニアガリ庚申 秋は庚申さまが庭にいるもので、その庭を借りて親をほしたりしごことをしたりするのでお礼をする祭りがニアガリ庚申さま。(新福寺)

旧の十月に庚申さまをしたことがある。

旧十月十六日は庚申さまのご縁日である。(赤岩)

穴ツブサゲ まき物が終ると、穴ツブサゲ餅をついて、神棚や仏様に供えたり、食べたりした。油餅は聞かない。(上五箇)

アナップサゲは十月から十一月三日頃までのうち、個人毎に違うが、麦時きが終れば、ぼた餅などを作る。(木輪)

ねずみつぶさげ 麦まきが終ったときぼたもちをつくる。ねずみの穴を丸いものでふさいで、麦を食われないようにするぼたもちという。(新福寺)

念 仏 秋の取納(シノウ)が終ると親戚を呼んで供養をする。別に年忌でなくとも先祖の供養をやった家もある。また、念仏講社に頼んで念仏を唱えてもらった家もある。(上五箇)

神のお帰り (旧十一月一日)

神迎え 朝早く鎮守へお参りに行き、おサゴを供えて、神のお帰りを迎える。(上五箇)

旧十月のしまいの申の日に神さまは帰るので、神主が橋のところまで迎えに行き、お神楽をする人たちが音楽をして神社へ送りこむ。この日から十二日間休まれる。十二日に「オメザメ」といって参拝にゆく。

ある時休み中に参拝に行ったのか、杉の枯枝を拾いに行ってきた人がいたが、この人は両頭の蛇がバタンコン、バタンコンと追いかけて来たので恐ろしかったという。長良さまが怒ったのちがいない。(瀬戸井)

お神のお帰りは十一月一日で、おみやげを持って帰ってくるので、朝早くお参りにゆく。(天神原)

十二月

カビタリ餅 (一日)

カビタリ餅のことはだけ伝承されている。十二月一日か、十一月末日か、不明。(下中森)

餅をついて神棚に供えたが、別に川へは行かなかつた。(上五箇)言葉だけで行事はしない。(赤岩)

十二月一日にカビタリ餅をついて食べる。(天神原)

おそなえを川へ上げた。

十二月一日にカビタリ餅をつく。このもち「縁切りもち」ともいうが、十二月は作番頭などが年あけになるので、きりかえのしるしに、たとえ一晩でも家へ行って来るのもちをつくという。(新福寺)

屋敷稲荷



屋敷鎮守様 (天神原)
(青木則子 撮影)

鎮守の村祭り(七月二十四日)の時神主に共に拜んでもらつたり供え物をするだけで、秋には祭らない。(上五箇)

屋敷稲荷をよく作るとその家はだめになるといい、なるべく簡単に作り、毎年作り替える方がよいという。(赤岩)

コト八日(八日)

八日ヤキビン 八日に焼キ餅(米の粉にアズキを入れたもの)を作る。それを壁にぶつけて、付くと奉公人があと一年いられる。この日には、嫁が夜ナベをしなくてよい。

「焼キビンとかけて何となく。大神楽ととく。そのころは、吹いたりたたいたり。」(上中森)

八日ヤキビンといって、こめをほうろくで焼いて食べた。中にはあんなこを入れた。これは二月にもする。(下中森)

この日、ウルチのくす米をひいて、ふかしてねり、あんなこを入れて焼いたものを作る。そして神棚、床の間、稲荷さま、えびすさまなどにそなえる。オニヤキビン、または八日(ようか)ヤキビンともいう。(上中森)

米の粉の中にあんなこを入れたやきもちをつくって食べる。(瀬戸井)

十二月八日はヤキビンといって、マンジュウをやいて食べた。

コゴメツコ(くす米)をついてまんじゅう(八日ヤキビン)をつくり、ホウロクで少しかばらしてからイロリのまわりにおいて焼く。灰がたかったのを吹いてたたいて、灰をのけて食べる。それを「ダイカダラのようだ」と評する。次のようなナゾもある。

「八日ヤキビンとかけて何となく。ダイカダラととく。その心は、吹いたり、たたいたり。」(萱野)

世話のヤキジマイ。米の粉をふかしてついてヤキビンを作って食べる。(天神原)

コト八日に小米を石臼で粉にした真黒けのを、手で搗いて作った。砂

糖を買って来て入れたたり、足りなくなると葉の潰けたのを入れ、ヤキビンを作った。(福島)

ヨウカヤキは米の粉を材料に、葉のつけものを油でいためてこねくるみ、あんことして入れ、ホーロクでやく。(新福寺)

ダイマン・メカイ 鬼が来ないように、メカイをトボー口に立てる。奉公人の出かわりの日。

この日に、「音をさしてはいけない」という。「水も流さぬ師走八日」などといわれてきた。(下中森)

鬼よけに、長竿の先にメカイをつけて軒に出す。(菅野・天原)

鬼の来る日。「今日はダイマンだから、めかごを立てろ」といった。鬼が福を持って来るので、めかごを吊した。鎌をつける家もある。米の粉をこねて、中に箔を入れて焼き、ヤキビンを作った。(木崎)

ミケゴを、口の方を上へ向けて立てる。泥棒もよけられる。「水も流さぬこと八日」という。この日は作神様がやって来る。(福島)

師走八日を八日ヤキビンという。竹竿の先にメカイを結わえつけ、中に煙の葉を敷きヤキビン二個を入れ、庭にたてた。これをダイモンという。ヤキビンは小米の粉で、中につぶしあんを入れ、りりの灰の上で焼いたもの。夕方、子供衆が大勢でダイモンカエシに各家を回る。追っ

ばわれたような時、子供衆は声をそろえて「ただいまダイモンカエシましよう、カエシで悪るけりやたてましよう」といって逃げ出した。戦前で終わりの行事。(中島)

ススハキ (十三日)

ススハキ日 昔は十三日がススハキの日だったが、ふつうは二十日後にやった。戦後十年ぐらい(昭和三十四、五年)まではイロリのある家がかかり見られ、家の中はすすやほこりがひどかった。そのころはイエヤマ(家山)の木の枝や葉などを燃したり、わらやくずを燃したりしてご飯たきをしていた。(上五箇)

いい日を見てやったが、十三日頃が普通であった。(菅野)
もとは十二月十三日に煤はきをした。煤はネーマ(雷間)にまいた。夕食に粟こわめしやキミこわめしをつくった。(鍋谷)

ススナデ日は十三日。(天原)

ススハキは十二月十三日に決まっている。(福島)

スス竹 葉のついた青竹二本をしぼってスス払いの竹を作った。これで神棚の上や天井をはらった。スス竹は、終ったあとで屋敷稲荷の脇に置く。(上五箇)

山から笹をとってきて二本合わせて、ススダケをつくり、大掃除をする。この日から神様を外に出してもタタリがないので、神棚の掃除をする。都合の悪い時でも、笹だけはとってきて二つ三つはしておけば、他の日にやっても良い。ススダケは使い終ると屋敷鎮守様におさめる。(天原)

くねゆい

十二月に入るとかならずやったものである。(菅野)

出替り(八日、十五日)

八日は奉公人の出かわり(下中森)

十二月十五日が奉公人の出替りの日で、いい着物を着せて実家へお客に出してやる。奉公に来た日を出替りの日にする家もある。(赤岩)

御来迎様 (十五日)

十五日の朝早く起きて、田の中にある山神塔まで朝日の出るのを拝みに行った。この日はお天道さまがぐるりぐるり回りながら上るので、みことだから拝みに行くのだという。(赤岩)

油餅 (十五日)

油餅というだけで、何もしない。(赤岩)

ツジオダンゴ 脱穀の時に、足もとに落ちた米を、たんせいの年寄りがきれいにさらい上げて、白米の粉にひいてツジオダンゴを作った。串にささないで、あんこを付けて食べる。(上五箇)

冬 至 (二十二日)

ユズ・トウナス 「冬至ユズ」といって、味噌づけにしてそれを節分に食べる。また、「冬至巳待ち」もした。(下中森)

冬至ガユは小豆を入れて、塩味をつけたカユを作って食べる。トウナスを煮て食べると、中気が出ないという。コンニャクとは別にいい。

冬至にユズの実を漬けて置いて、節分に福茶を飲む時に出して食べる。ユズ湯を立てることはしない。(上五箇)

冬至にはユズを味噌につけておく。節分に福茶と一緒に食べる。するとユズ(融通)がつくのだという。また五月に田の中に入ってトゲをふまないという。

冬至にトウナスを煮て食べると中気にならないという。(菅野)

冬至にはカボチャを煮て食べると病気にならない。冬至に「ユズ」を煮て食べると「ゆりずり」がつくようになる。(瀬戸井)

冬至にはユズを味噌の中に漬けて、年越しに食べる。(木崎)

冬至には「当時融通がきくように」ユズを漬けて置く。(赤岩)

トウナスを食べる。冬至にトウナスを食べると中気にかからない。

ユズを丸のまま箸で穴をあけて、みそにつける。(天神原)

冬至に南瓜を食べる。中気がかない。(福島)

火難除け 冬至にはポンプで家のまわりに水をまくと、火難除けになる。ひしゃくで家のまわりに水をまいた。(下中森)

二十二日に辰巳の方から水を持ってきて主人が家の回りにまく。火難

除けになるという。

タツミの方向の家の井戸水をもらってきて、家の各むねにタツミの方から水をかける。(菅野)

冬至の朝、初水を汲んで屋根に柄杓でかけ歩いた。現在はしない。朝の十時前にお茶を飲むものでない。冬至は火早い。(鍋谷)

冬至の朝、火難にあわないうように、家の隅々に水をかけて回る。また、屋敷桶荷の屋根にひしゃくで水をかけてやる。(赤岩)

朝、屋根に水をかけると、一年中火難に合わない。(天神原)

月拝み 「月オガミ」といって、冬至に邑菜郡大泉町古海の高尾山信仰の先達(柴崎さん)が来て、キリサゲをして行った。(中島)

太子ガユ

しなかつた。(上五箇) (赤岩)

歳末諸事

暮 市(二十六日) 赤岩中宿に暮市がたつたので、桶・ざる・その他日常品などの市買物をするために人が来た。松飾りは売らないが、正月の破魔弓や羽子板などを買う。(上五箇)

終戦前に終った。(赤岩)

歳 暮 嫁にくれた年ぐらいは、鮭の塩びきを持ってくる。一年か二年くらいしか続かない。(瀬戸井)

弓破魔 正月の掛軸に神宮皇后の絵がある。男の子には弓破魔という弓矢飾り、女の子には羽子板を贈る。(上五箇)

昔のお歳暮はシャケがつきものであった。「オラガチはどれだけもらった。」などといって、近所の人にみえるところにさげた。金を借りた人とか仲人とかには必ずお歳暮をとどけた。(菅野)

餅つき 二十七、八日ごろセチ餅をつく。もとは大変ついで、米一俵ほどもついたので、正月二十日ごろまで食べられた。今は五升から一斗



正月のシメ飾り（上中森）
豆ガラ、コブ、ダイダイを
付ける。
須水イッケは松を飾らない。
（関口正己 撮影）

ぐらいつく。臼の下にわらを広げて置き、三本竹でついたものである。お供え餅は七組作り紅白の餅にする家もある。年神・大神宮・エビス大黒（寝室の奥やお勝手の上の棚、大神宮の脇などに祭る）・作神（別の神棚がある）・庚申・屋敷稲荷・村鎮守へ進める。（上五箇）

三日めの餅をお供え餅に作る。（上中森）

暮の二十七、八日が多い。十三日くらいついた。一夜餅ならお元日が良い」といって一夜餅はさけた。（鍋谷）

餅つきは毎年二十八日につく。この日なら磨を調べなくても悪い日はない。一夜餅を嫌い、一夜餅になりそうなきは元日の朝につく。

臼の下に西と北が尻になるようにワラを十文字に敷いてつくと、はりつかない。最近ではむしろを敷く。白い餅の他に、食紅を入れて紅餅をつくり、白餅に紅餅を重ねたお供えを年神様にあげる。お供えをあげるのは、大神宮様、恵比須大黒様、稲荷様、よろずの神（床の間、牛馬の神様等である。ノリを入れたノリ餅や、ゴマを入れて餅をつく。かたくなつ餅は天日で乾して油で揚げて食べる。（天神原）

二十八日に搗く。二日前に搗くもので、一夜餅は悪い。（福島）
カラミ餅 スミツカレに使う大根おろしして大根をあらくおろして、

しょうゆのほかはゴマやサトウを入れてカラミを作り、餅を入れてカラミ餅にして食べる。（上五箇）

カキ餅 餅をつく切に、ゴマ・ノリ・ミカンの皮などを入れてつき、かまぼこ形にして、切って乾燥させてカキ餅を作る。翌年の田植えや盆のころ、茶菓子として食べる。炭火でゆっくり焼いたり、油で揚げたりして食べるが、昔はよく作った。（赤岩）

シメ飾り 一夜飾りは悪いので、二十九日ごろ作る。わらを三ツコになって棒ジメにするが、人形に作る家もある。ミカン・コブ・ゴマ・豆ガラを紙にくるんで、棒ジメに付けた。床の間の年神様に三本、大神宮様に一本、屋敷神様に一本供える。（上五箇）

須水イッケはシメ飾りに松を使わない。わらに豆がらとコブを挟み、ダイダイを飾り付ける。シメ飾りのわらは取って置いて、田植えの時の苗取りに苗をしぼるナエバに使う。（上中森）

二十七日にモチ米をひたした水で蒸をしめす。それからオシメの縄をなう。どこの家でも二十八日までのよい日を見てやる。不幸の知らせがあると飾りはしない。

一夜飾りと一夜餅はしてはいけないという。

萱野の飛地といって平地林の松林があり、この村の人はそこに松取り（松迎え）に行った。実生の松（二、三年経たもの）で、三階、五階のを切る。奇数の枝ぶりが喜ばれる。（萱野）

暮のシメ飾りに、ヨリツキとヨコザの境いの敷居にそって二間ほど八寸シメを張り、幣束と七色の飾り物をさげた。七色の飾り物は、幣束、豆幹、ごまめ、譲り葉、昆布、松の葉、菘根など。（鍋谷）

シメ飾りはわらを三つたりにして太く作り、ダイダイを中心に付け、コブ餅を飾り、稲の穂をたらず。（赤岩）

松飾りは三本よりのお飾りを普通の家では八本作る。「お飾りが三本だ」といえば、「奴は三本か、普通にくらしているな」と思った。大里郡の十二郷では松飾りをしない。聖天様と吞竜様が喧嘩をした。聖天様が

勝ちそうになったので、しょうがなく呑電機が、松の木を振り廻した。松の葉が聖天様の目にささって、片目になった。こんなものは縁起が悪いと飾らなくなった。(福島)

十二月二十八日に、裏の松山から、三階または五階の松を取ってきて庭にたてる。神棚には一枝の松を飾り、注連縄をはって、豆ガラ、ゴマメ、コブ等を吊す。一夜飾りを嫌ひ、二十八日か二十九日に飾り始めておけば、三十、三十一日に飾ってもかまわない。(天神原)

松飾りは何処と方角は決まっていない。山を持って来る人が枝を、他人の家の取って来るものが幹を引いて来る。松飾りを見ると、こころちは山があるとか、ないと判った。他人のものだから思いやりがない。山を持っている人は惜しいから大きいのは切らない。(福島)

カマ神様のミソカ松(正月の松飾り)は、三段松のもの一本ときまっていた。(中島)

八丁じめ 十二月二十九日ごろ、長良さまからいただいた。これを正月のおかざりにする。(瀬戸井)

大晦日(三十一日)

ミソカッパレエ ナスガラを燃してご飯をたいて、早く夕飯を食べる。ナスガラを燃すのは、「ナスカラ申ス」といって、借金取りに誠意を示し、面倒をみてもらいたいという意味だといふ。

夕ご飯は神棚に供えるが、年神棚には供えない。夕飯はイモ汁・ケン

チン汁で、里イモ・ニンジン・ゴボウなどに油を入れて煮る。(上五箇)

昔は年越しソバを自分の家で作ったソバ粉でして食べたものである。明治四十三年の水害前には畑がかなりあったのである。水害後みな水田になった。

大晦日の晩に三が日に使う箸を作った。山に入って萩の木を切っておいて作った。箸は神にも供えた。(萱野)

夜ふかし 大晦日の晩は早く寝るものではない。帳面の整理や着物づ

くろいなどで夜がふける。除夜の鐘など昔は聞かなかったが、ラジオやテレビで聞くようになった。(上五箇)

除夜の鐘 百八回たたくわけは、今年是不景気でよくないため「四苦八苦(四九 三十六、八九 七十二)」で合計一〇八になるから、来年はよい年であるように祈ってたたくのだという。(赤岩)

除夜の鐘が鳴ったら、年が変わったというのに、金を貸した方は、提灯消さなければまだ暮れだといって、取って廻った。(福島)

うどん 大晦日に、めん棒で喧嘩したので、一週間うどんを作らない家例の家がある。(福島)

言語伝承

はじめに

かつては、石も私たちに語りかけ、木も歌をうたつたが、今は沈黙の時代に入ったのか、伝説は意外に少かった。亭々と聳えていた寮の松も枯れ、根元の庚申様だけがぼつんと残っている。それに比べると、世を賑わした大食・大力・快走の人々や、オトカの話は豊富である。

どの言語伝承も、くらしと密着している限り、いきいきと発展するが、くらしが変われば、根を切られた草木の如く、ふたたび花咲く時に、会うことはむずかしい。毎戸馬を飼っていた時には、言語伝承に限らず、信仰・俗信・生産・交通など、あの長い顔を出さない部門は、少なかった。道に馬を見ることもなく、馬小屋には牛が寝そべり、牛の鞍馬が掛り、四つ足が四つ車に変る世となつては、馬といふことはさえも耳にするもとは稀になるだろうが、一旦、地についたことばは、なかなか消えるものでないことを感じた。

日常目にふれ、耳に聞くものに關しての謎・洒落などは、他の調査地と比べ豊富であり、談笑裡に話が進む状態が想像される。(上野勇)

一 伝 説

長良神社 瀬戸井の長良神社は元、赤岩の鎮守で、藤原長良を祭る。赤岩の向こうに大沼があった。今でもポッケといつて、地面が動くところがある。そこにいた長物もの(大蛇)が、毎年娘を取つて村人を苦しめていた。ちやうど、都から藤原長良が桐生まで来ていたので、退治し

てもらうように頼んだ。長良は、おきよ殿(さいぞう様ともいう)という御殿女中を連れて来ていた。弓の名人で、たちまち大蛇の片目を射て、もう片方の目も射てつぶし、近づく所を刀で刺して殺した。十八切に切つて、頭を瀬戸井に祭り、以下舞木など十八社に祭つた。「十八長良」といつて、邑楽部には長良神社が十八社あるのは、名前をくくれやつたからで、長良神社の正体は蛇である。氏子の相撲で瀬戸井が赤岩に勝ち、一番大きい長良神社を赤岩から瀬戸井に移したものである。(赤岩)

道陸神様と弁天様 赤岩の光恩寺の境内の池の中に弁天様が祭られてあるが、その傍に道陸神が立っている。由来は、道陸神が別びんの弁天様に恋をして追っかけ廻したので、弁天様が池の中に逃げこんで一本橋をかけておいた。道陸神は片脚で追っかけるので、一本橋は渡れないから泣き寝入りといひ、足が痛い人は治すために信仰して、わらじを掛けて拜む。治ればわらじをあげるからと願をかけて拜む。今でもやる人がいて、大わらじがかかっていることがある。お祭り日は別ない。(赤岩)

稲荷 赤岩城のまっすぐ前に源田(げんだ)稲荷があり、城の屋敷鎮守だった。塚があって、質のいい瓦が出た。

永楽小学校の西にお城下があって、その稲荷様は館林の尾曳稲荷になつたといわれ、本家である。(赤岩)

堂山 赤岩の堂山は二子山で、ひょうたん型をした首のあたりに、地震の起きる所があって、いつも笹が動いている。赤岩城主赤井将光輝の墓という大きい笠塔婆がある。そばの丸い石塔に耳を付けると、うなっている音が聞える。そこから約五百メートル離れた南権現に往生院があり、赤井将光輝房の石塔がある。その墓地らしい地所を、赤井氏



狂犬を退治したという刀（上五箇）

（関口正己 撮影）

の子孫という人が耕作している。（赤岩）

舞木城 舞木城は赤岩と山続きで、舞木の入口の権現橋の端に権現様の石宮が祭つてある。お宮があつて駿馬なども上げてあつた。（赤岩）

儀 瀬 埼玉縣大里郡妻沼町儀瀬は、昔、赤岩の領分だったので菩提寺が赤岩にあり、今でも盆づちには赤岩へ来る。昔、利根川に儀を並べてその上を伝わって渡ってきたという。（赤岩）

日ノ御子様 上五箇にあり、源義家東征のとき、利根川につきあたり渡河していると、東から太陽が昇ってきた。思わずそれを拝み、その地に日ノ御子様として祠をつくつた。その祠は現在愛宕神社に移してある。義家はそこから湿田に大木を伐倒して通り鞍かけ山に出ていったと伝えられている。（上中森）

赤岩の名 昔、浅間山が噴火した時に利根川を岩が流れてきた。対岸の武州側から見たら、赤い岩が残っていたので、赤岩というようになった。その後、赤い岩は流れてなくなつた。また、その赤岩だという石が岩田屋の屋敷内にあるともいう。（赤岩）

赤岩城 赤岩城は光恩寺の裏で、安楽寺の東にあつた。城主は赤井照光だった。（赤岩）

赤城山 先祖の藤原秀郷が赤城山のムカデを退治したので、舞木の人は赤城山へ登山できない。

舞木の人は赤城へ行かない。依藤太秀郷の出生地なので。（赤岩）

舞木の名 昔中島に舞木太郎という人がいて、その人の名をとつたともい、また、藤原良長公が羽生の猪熊森高を攻めたとき、中島の地に祭壇を設けて出陣し、帰ってくる時鞍が空中に舞い上つた。そのため中島を改めて舞木村としたという。（舞木）

龍宮伝説 五軒屋敷の町田源次氏の井戸は龍宮までと聞いていたという。中がえぐれていても崩れない井戸で、この井戸のことを田原藤太秀郷生ぶ湯の井戸ともいう。この近くに城下という地名があり、田原山光西寺がある。そこに秀郷の碑がある。大塚半蔵氏等の努力により、中村孝也博士の撰文である。もとはこの付近にも塚があり、城の裏鬼門に八幡、表鬼門に稲荷様がまつてあつた。

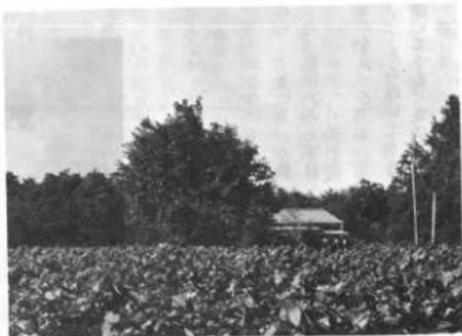
藤原秀郷うぶ湯の井戸が町田源左エ門家の井戸であるという。五軒屋敷の中にある。いくら汲んでも尽きない井戸で、龍宮まで続いているという。（舞木）

カクレザト 昔は、子供が夕方泣くと、「カクレザトにかくされるから泣くのではない」と注意された。大正五年の初秋ごろ、五才の子がカクレザトにかくれて、くるわの大騒ぎになったことがある。日が暮れてもいないので、皆で見付けたがわからなかつた。ところが、三百年もたつ白樺の木のでっぺんで、がさりと音がしたので、念のために登つてみたら、木の枝の上でその子が眠っているのが見付かつた。本人もいつどうにして登つたかわからないうちに、夢中で上に登つて眠っていたものである。その木の下は大勢の人が行ったり来たりして見付けたのに、全然気付かなかつた。こんもりしている枝の上に、七、八尺の高さだったので、かくれて見えなかつたという。その子は現存している。（赤岩）

入定様 せんぎりぎんたまと悩んでいる山伏かいた。おれは死んだほうがいい。おれを穴掘つて入れてくれというので、その通りに入れて埋め



行人塚（下中森）
堤防を守るため生きながら入定した人を祭るといふ。
（関口正己 撮影）



中央の森に片目の白蛇が住む（鍋谷）
（中村和三部 撮影）

た。七日松虫鉦を叩いていたが死んだ。下の病の願をかける。（福島）
光恵寺は弘法大師が開山して、あとに優秀な弟子をおいて、去った。何年かたつて、本山から諸国修業に出た坊さんがやって来て、その弘法大師の弟子の僧と禅問答をしたところ、負けてしまった。修業僧は、本山でも負け、今また田舎坊主と問答して負けたことを口惜しがり、ついに利根川のほとりにあった赤岩（という岩）のそばに赤煙の杖をおいて、たもとにいばい石を入れて水定してしまつたという。（赤岩）
窪の片目の白蛇 鎮守の境内にある弥々子様は、以前鍋谷の窪にあって、今は雑木が立ちこめているが、ここに古井戸があり、一尺位の白い片目の蛇がたくさん住んでいる。不思議なことなので弥々子様の跡地に弁天様をまつた。（鍋谷）

カモジ・鰻をかならずつけてやった。女房のミタマをやすめた。それ以後順序よくいった。
竜柱は鬼門の方にたてる。最初は鶴を書いた矢を鬼門の方に向けてたてる。上様式になると亀の書かれた矢を鬼門にたてる。（天神原）
寮の松 松の根元に庚申様の春猿の腹に蛇の目影のある蛇がいた。花籠の竹を、蛇の口から尻につんぬいたものである。三日たつて、抜いたが、気の違ひ子ができた。落し物やヒルケン（空果ねらい）があると、庚申様を荒縄でしばつた。すると、一晝夜のうちに出了。この木に、ゴヘイドリが来て、夜もさむしげに鳴いた。（福島）
首切り地藏 村の人が食えねえんで、お寺の木を売って、村の人を救つたが、寺社奉行にやられて、ここで切られた。四体ある。（福島）

竜柱 家を建てる時に竜柱をたてるが、これは建築の本によると聖徳太子を祭るのだという。しかし、これには次のような話が伝わっている。

ある宮大工がお宮を建てる時、拝殿の柱を一本短かくしてしまつた。困りはてると、女房に何かあったのかと慰付かれてしまつた。女工が、実はこうだ、腹切り問題だという。女房はやりようによつては何とかなるだろうといつた。そして長い方の柱を切つて同じ長さにして、杓石をおけばよいのではないかと教えた。建て前をしたら、よくできたとひどくほめられた。ところが女房に教わつてやつたというのでは恥だ、ばれるといけないというわけだ。女房を殺してしまつた。それからは女房がたつて何をやつてもうまくいかない。そこで女房を祭つた。竜柱にヘイソクと女の化粧道具（紅・白粉・



松の寮 (福島)
(上野 勇 撮影)



庚申様 (福島)
(上野 勇 撮影)



首切り地藏 (福島) (上野 勇 撮影)

カッパ 盆月に水あびに行くくと、益さかたにカッパがとりにくるから水あびに行くな。……盆月七月に川に水泳に行くくと益に食べる魚をカッパが取りに来て、人間がいると取って行くので危険だから水泳に行くなといわれた。

川で水あびしていると、カッパが人の腹の中のものを食べる。

川で水泳していて死ぬと一度は沈んでしばらくしてから浮いてくるのは、カッパが人間の内臓を食べてしまうので浮いてくる。カッパはこの内臓を好むから危険だといわれていた。

この地方は、川の水の流れによって、スシタ、ススタといわれるやわらかい土地や砂などがたまり、そこに踏み込むと深く沈む危険が多かった。ここにはいい場合は、川の水の流れる方向にいけないとぬけない。利根川を横切って泳いだ時期は十四、五才だった。途中でつかれたら流されながら休まなければならなかった。(中島)

お屋敷山 昔からおヤシキ山といっている。今では陸田になっている。何故おヤシキ山というかというところ、もと、館林の秋元様が宅地取りをしたところだからである。近年までカマイ畑があった。

秋元さんに白狐が夢じらせをして、ここに屋敷を建てると長のじ(長くつづくこと)がないという。さらに白狐が尾で引いて教えるからというので、館林の三の丸に越した。白狐が尾を引いて仕上ったので尾引きの城という。館林には尾引き稲荷がある。

おヤシキ跡を開墾したとき、石宮がでてきたり、埴輪がでてきた。埴輪は学校に持っていった。

秋元様はこの辺を城下町にしようとしたらしい。平地林を六畝割りにしたり、道も広い所は三間道、狭い所でも二間道である。(天神原)

二 昔 話

三人兄弟 昔々あって、子どもが三人いて、男の子、名前なんか忘れてしまった。そんなので、どこかへか働か行って、何か覚えてきよってんで、それで、三人して、うちを出て行った、道が三方にあったから、あにさんはこっちの道行く、弟はこっちの道、三番目が右に入ったとかしてね、そうしたらね、あにさんはなやら仕事をし、弟は鍛冶屋を習っ

て来て、鍛冶屋になった。あにさんは忘れたね。一番しまいの人がね、行つたらば、泥棒のうちへ行つたね。泥棒溜つて来たつてね。それで、一人は乞食だったかね。お腕を持つて来たつていうから、そんで一番小さい人、泥棒かね、それでね、庄屋様だか、名主様へ行つて、泥棒の話したら、泥棒に入れつてんで、じゃ今夜泥棒に来るからつて、旦那様獲ずには番してんだつてね。今来るか、今来るかつて、獲ずには番してたら、その晩に雨が降つてね、それであれだ、傘を掛けておいてね、雨んだれで、パチンコパチンコ、パチンコパチンコ、まだ一所懸命獲ずには番してたら、そのうちにね、下を穴掘つて入つて、千兩箱かつぎ出して、貰つて行くよ。獲ずには番して、取られるのが知んかつたつて、まだパチンコしてゐるんで、まだ入れずにいるのかと思つたら、そのまに土蔵の地形の下、穴掘つて、貰つて行くからなつて、いつたつて、そんな話が、昔ありましたね。いちが酒買つて、これで終つた。(福島)

はてなし話 天から長い古禱が下つて来て、たぐつても、たぐつても、たぐりきないとさ。たぐつても、たぐりきないとさ。(福島)

えびすさまだいいくさま えびす様は、米を一粒倍くりけえしてだいいく様を使ったという。だいいく様は一所けんめい働いたので、上のつても背負つても間に合わないほど、余るほどに米が残つた。ところがえびす様はだいいく様にやらせておいて自分で、毎日魚釣りばかりしていたので鯛が一匹残つただけだという。だいいく様は、一粒倍くりけえして、えびす様にトッキリかけたことになる。人間はたらかなければだめだ。(新福寺)

オトカ 高関の鯉屋で二匹の鯉をもらつて背負つて来たが、千石の岡山でとられてしまつた。今は団地になつてしまつたが昔は悪いところで、さみじばかりかオトカの果があつて、魚などは必ずとられた。

関番のじんさんは、婦りがけに錠を腰の下にはさんで帰つてきたら、向うからエブロンをかけた女がやつて来るので、「いい女が来たな」と思つていると、二間くらい前でポツと消えて、また通りすぎると脇の方へあ

らわれていせよく自分の方へとんで来るので、来たらひつきつてやろうとしたが目の前でチョッキ止まつて見えなくなつた。オトカのしわざだつたという。(新福寺)

柴崎某(明治三十五年生)が十八才のころ、中村に地芝居が盛んで手伝いに行つた。三晩あけて、芝居の打切りの夜、お酒をこちそうになり子どもへイカをみやげに持つて夜道を歩いて帰つてきた。八幡様の入口でおつころがったのは覚えてゐるが、いくら行つても家がない。一晩中歩いて、明かるくなつて見たら五反田が見えた。秋のころで、身体中に贅で引つかきだらけになり、ヤマジラミの実がいっぱい付いてゐた。イカは食われてしまつた。オトカ(狐)にマヤカされたものである。(赤岩)

松内のシンヤンが家の人が館林の暮市に行つて見物してから、酒を一杯ひつけて帰つて来た。どこかでオトカかムジナに取つ付かれて、この道を通つた。こりもり傘に品物を付けて担いで、つてこつて歩いて来た。あの人は松内のあそこん家の人だという声は聞こえた。村の人が取つつかまえて、どこへ行くのかと聞くと、「このアマがおれげに取つ付いて、離れなくてしょうがねえ。よせよこのアマ、よせよこのアマ」というが、誰も付いてゐない。人々が家へ連れこんだら、品物はなくて、背中はほろほろに破れてゐた。泥足で飛びついたりされたらしく汚れてゐた。

館林から夜自転車帰つて来る時に、先の方を自転車でいく人がいるので、追つつかうとしていくら一所けんめい走つても追つつかなかつた。十一時過ぎで、一本道だつたが、そのうち前の車の明かりが消えて何もなかつた。(赤岩)

踏鉄屋のじいさんは、昼休みにキノコトりに行くといつて前の山へ行つた。まわりは麦畑で、自分は山へ入つたつもみだが畑の中をおして歩いてゐた。見るに着物やみんないで頭にしばりつけて「おお深い、おお深い」といつておしまわり、隣りのじいさんが西の家へ寄りこんで「おれんちはどこへ行つたらよかんべ」と聞いたので、その家のばあさんに「ねほけるな」と叱られて「おー 気がついた」という話があつ



金剛院 (福島) (上野 勇 撮影)



力石 (福島) この石をかついだ
(上野 勇 撮影)

た。オトカに化かされたという。

子どものは、小雨の降る晩などは田んぼのくろを、ちよろちよろして、ついたり消えたりするあかりが見え、ボウツとして列になったり、シャンシャン音がするといわれた。オトカの嫁どりで、鍋谷から中島の浅間さんに嫁入りがあるということをよくいった。

夕方「子どもたちがかくれんぼをするもんではない、連れてゆかれるから」と親たちにいわれたが、そこにいる者を見えなくするのだからオトカは術を知っていて、術をかけてしまうのだからすこい。

宝林寺の裏のいなりさんのところは、オトカの果で、杉の木の根元に穴があり、そこをぞいて見るとキラキラ光って見えた。オトカが子を育てるときには赤飯をもって行った人もいる。

山形屋の弁天さんのところへ行くときは、火の玉がよくとんだが、オトカのしわざだったのだらう。(新福寺)

狐 後をつけてくるから、くるっと回って灯で照らすと姿がみえる。また煙草をすうとよい。

田園の中を狐にはかされて、「オー、フケエ。フケエ。」といっではつていた人もある。

オトカの提灯行列を見たおぼえがある。(富野)

大食・大力 煮ほうとを、五十人鍋食った。一杯ぐれえ食えっていうかと思つたら、きれいに食つちゃって、毒じゃねえかっていったら、毒じゃねえ、こんなもんだって、逆立ちして歩いた。ものぐさくて、小さいかあに、リヤカー引かせて歩いた。拍餅を味噌こし二杯食った。一つに十五人入る。夏の祇園に呼ばれて行って、遠慮ししい、饅頭を九十食った。出す方がたまげた。皆食つちや悪いから少し残した。食うんとは、たいしたもんだ。飯は一升一べんに食って、八十貫かついだ。八幡講の相撲に、杖んぼ二本ついて来て、今の着いてえは、見られたもんじゃねえ、そんな弱いばかりか、そうしたら、青年だから怒つちやつた。それじゃしょうがねえからおれとやるか、三十八、きれいに放り投げた。(福島)

力石 金剛院の墓石を量って、三十貫、三十五貫とかついだ。九十貫かついだものもある。木の臼は、慣れなければかつげない。杉田伝蔵は、子どもをおぶって、足駄をはいて、子どもの頭を、向うへやって、三十六貫かついだ。(福島)

酒の強い人 妻沼のショウデンサマの祭りには、お参りの人へ酒が出る。熊さんという人は、樹酒で、七合、五合、三合と七五三でやってきたという。強い人は三升は飲んだ。(瀬戸井)

昔は酒を馬の背中のせてこも包んで運んだ。好きな人は樽に誰でもんで穴をあけ、そこからすって飲んだあと、竹のひごをさして止めてきた。主人が文句をいえば、「樽が吸った」といった。(新福寺)

大食い 舞木の人で、金時というさつまいもを一貫食食べた人がいる。(新福寺)

変りもの 理屈家がいた。里帰りをした。向うの人は、あいさつに早かつたねというのが常識だから、「早かつたね」というと、「そうかね、

早かつちゃ、また家へ行って来る」って、帰ってしまった。「おら今日は四万へ行くべえと思もうんだ」と、朝いった。俄か雨で、家のものは逃げて来た。「おじいさんがいるから、葦ぐらいたと思つた」というと「間拔野郎、おれは四万へ行ってると、いつてゐるんだ。四万から手が届くか」って全然蓋をしなかつた。(福島)

杉田伝蔵 信心深く、伊勢参りを二十回ぐらいた。馳けるのも早い。博打を打つて、伝蔵だつていうと、追っけなかつた。警察の帳簿に載つてた。お寺で開帳して、博打を打つたら、巡査が来た。逃げ出したら、洋傘を忘れた。それで、ひっかけて、洋傘持って逃げたが、巡査がおつつけなかつた。(福島)

過ぎたもの 福島に過ぎたるものが二つあり、杉田伝蔵、寮の松。杉田伝蔵は、稲荷様や神社仏閣に寄附をした。運が悪く、後は絶えた。寮の松は、金剛院の寮のある飛地の松で、根元に庚申様が祭つてある。最近枯れた。(福島)

しまりや 飯を三杯食う人と、二杯食う人では、一か年に袖口が一つ違ふ。(福島)

田舎芝居 赤岩の柿沼さんのおじいさん伝内は田舎芝居の名手だいたしたもんだつた。とくに神崎与五郎の東下り、文寛上人の天地にらみを得意として田舎団十郎といわれた。(赤岩)

強盗のちようちん持ち 昔は一時、押し入り強盗がやつてきた。四、五人でくりこみ、まちがえは切るので家人は遠くの方へ逃げた。明りがおそくまでついているとねらわれるので早く灯を消した。銭はカメに入れて縁の下へかくし、泥棒のためにいくらかの銭を包んでおいたりした。アブラ屋さんは、質屋で金貸しをしており、吉田へ行くのに人の畑を通らずに行けたくらい金持ちだったので一番ねらわれた。村の中の者を脅して案内をさせてやつて来るのだから困つたものだった。こうしたちようちん持ちはわからなかつた。(新福島)

ちん小僧 背の小さい目のくりくりした巡査がいた。おつつけては言

わねえが、陰では、ちん小僧といつていた。かわりものを作つたので、子どもに持つて行かせた。名を知らないし、さまを付けばいいだろうと、「ちん小僧さま」といつて出したら、「この野郎」といつて、怒られた。子どもには、いい加減なことは教えられねえ。(福島)

ナベヤツカセ 五反田の一二内のくえが婆さんが、東京へ出かけて子になった。巡査に聞かれたが、「一二内のくえが婆さん」といつてだけで見当がつかない。そのうち東風が吹いて来たら、「シタケが吹けば、ナベヤツカセ」といつたので、それならと探して、やつと判つた。(福島)

三 諺・酒落

乞食の雨(ばらばら降る雨)と親のぼちは、あたるようであたらない。

(中島) 我がままっ子の飯食い、あっち食い、こっち食い、食いちらず。

銀に鉛 おれは銀、向うは鉛、相手にしねえ。

人のお鉢に泥を入れる 飯の茶碗に泥を入れちゃ食えねえ。

あとでゆうのが、福助の頭 将棋をしなから「ちよつと待つてくんねえか」といつと、「あとでゆうのが」といつ。

嘘と坊主の頭 いったことねえ。

土用に布子着せられちや叶わねえ 時に合つたようになくちや。

天道様に鉄砲 君の話は、天道様に鉄砲で、届かねえ。

大根泥棒は、抜きっぱなし 仕事のしっぱなし。

肝と豆柿、猿泣かせ 柿だから、甘いと思つて食べると、えら洗い。

付き合つてみると、欲が深い。

親が井戸へ入つても出したくねえ 出し惜しみ。

女の小便と、こけの分別はあと廻り。

馬鹿とぼろは先に出る ぼろは見えないようにするが、どうしても出

ちやう。馬鹿は出なくていいのに、先に出る。

馬鹿でも膝との談合。

馬鹿につける薬 ある人が馬鹿に向つて、「馬鹿につける薬はねえ」といった。すると「あつたら、高かんべえ」といった。

五箇の山伏 三里四方で一番悪い、泣く子も黙る。何をいっても、反對するものを、「あの野郎、五箇のやんぶし」という。(福島)

「何にもならず五箇の山伏」といわれる。上五箇に山伏屋敷の地名が残っている。(上五箇)

ササラスル、ササラフルウ こっち行っちゃおどろ、あつちへ行っちゃおどろ、どこへでも口をかけて顔を出す。

ササタフム 自分ではやらず、やるふろをしていて、他人にやらせること。

坊主にすべえ 十時(住持)のお茶のことを、大工がいった。芋っ葉に小便で、受けつけねえ

人間に馬の糞葉つけちゃ駄目 人間には、人間の糞葉、適当なものをつける。

上岡の観音様で、うますぎる 上岡の観音様には、馬を飼っている家では、かならず参詣した。(福島)

「オカマのダンゴとケツメドのソバ」 接近していることをいう。(上五箇)

貧乏 油のいらねえ火の車。

馬の食う程 食えもしねえ。

馬より太え 針金、鉋かけたようだ 捜せている者のたとえ。

馬に乗つて、犬に吠えられたようだ ちっともおっかなくねえ。屁でもねえ。馬が物覚えたようだ 飼葉桶をガタガタさせると、餌をやるので、食物をはたす時、ガタガタさせる。

葦切の口に土用が入つたようだ いつもべらべらしゃべる人が、一言もいわない時にいう。

のだおか(野狐)がほし(宝珠)のたま抑えたようだ 価値のねえことを、一所懸命やつてる。

ポクリェー 松の根にできる。これを飲むと、何にでもきく。何でも口を出すのを、ポクリェーのようだという。(福島)

どこでも、何にでも首をつんだす人のことを、ポクリェーのようだという。(新福寺)

河童の果(けつ)持つてくようだ。自分で自分をしばる。(福島)

四 謎

なぜかけ坊主 昔は、なぜかけ坊主というのが来た。あの人が来たら、恥かかしてやろうと思つて、「なぜかけ坊主、くそくらえ」といふたら、

「夏のあかつきと解く」といふた。「そのころは」つていふたら、「西が暗え(汝が食らえ)」といふた。(福島)

なぜ 田で白い鼻をたらししているものは何? 綿(霊野)

五 方言・その他

ノゴキ 畑や田で脱こくすること。

ヤベ 連れて行くこと

ススタ 川のふちのところで流れて来たやわらかい土でうめられてるところ。ススタともいう。

サカイセブリ 田畑などの端を掘り隣接地にくい込むこと。サカイセブリは枕だんご(死者に供えるだんご)にならないという。

コメノイトコ 本当の従兄弟
エンノイトコ 血縁関係のない従兄弟

コジキノ雨 ばらばらと少しの雨のこと。

スナメ 砂質の土地

テンチガエシ 田畑の土を上と下に入れ交かんすること

蛋ビリョウ 蛋の時期に手伝う人のこと。(中島)

オゾクナル 利こうになる。

ゲエロコ おたまじゃくし

オダをあげる 冗談を言つてさわぐ(菅野)

バンシ 勝手働きする人。女中のように食事の世話をする人。

ナンゴ お手玉。

ガズ 竹の皮。「ガズジョウリ」。

カマボコ きんつば焼き。

スイトス 縫い糸。

ガゴ 強情。

シタケ 東風。

ランガイッタ 大変なことができた。

カカッタレ 聞きたくないことをやたらしやべる人。

エボル ぶつぶついう。つぶやく。

シコロ 氣どる。

ヘイシニ やたらに。

ヘズ 一本、線などをいう。

オカシロイ おもしろい。

オエネエコウ 困ったこと。

ガジョウキニ 強く。乱暴に。「ガジョウキにやってくれ」

オッピライタ あふれた。

タサル 濡れる。「雑巾がくさった」。

イバリカガヤク いばりくさっている。

ニヤン 人の呼称の下につける。友達同志。「ニヤン」

ヨナネズミ はつか鼠。

ヨナッコ 小さいねずみ。ヨナ。

シラタ タイに以た魚の名。タナゴとは別。

ネエゴ イナゴ。

トカゲ カマキリ。トカゲとカマキリを反対に呼ぶ。

ホウジヤク 豆にたかるコガネムシ。

ホリヤ 米にわくコクゾウムシ。

トッコ アリジゴク。

タブドウ レンゲ草。

シビトツバナ ヒガンバナ。

三月豆 ソラ豆

ピンチャン 葬式。

デンボウ うそ。

シヤクシ 鑷。

オトモリ 子守り。

オカマ 女性器。

カタバリッカ 因業の人。一方的に言い分を通す人。

アタ 石灰。

カルママ 軽石。

オゾイ りこうな。「オゾイ人」

トリツケシ 鶏糞。

ノラボ 乞食(赤岩)

ハスongo 蓮の実

カマギツチヨ トカゲ

ベタメンコ

タマツチロ ビーダマ(鑷谷)

ヒキガエル オカマガエル、オヒキガエル、ガマガエル、イボガエル。

オタマジヤクシ ゲエロンコ。

ハスの実 ハスゴ。(上五箇)

嫁の呼称 部落外からきた嫁は「お……さん」と呼び、部落内からきた嫁に対しては「……ちゃん」と呼んで区別している(鍋谷)

人の呼び名 地ばえの人は、年をとっても、○○ちゃんという。嫁にきた人は、お○○さんと、名前の先におをつけ、さんつけをする。(赤岩) あだな 馬鹿でおぞがる、こすかろくさん、馬鹿げで削口、あいぞろさん。(福島)

タバコ吸い トメヤンという人はすごいタバコ吸いで、マッチいらすのタバコ吸いで、手を離さずに吸う。一日バット三箱はふつうで、世間の人には「浅間山」という。(新福寺)

身体の部分の呼称 足の(ヘラ)足の裏、土踏まず、足のこう、クロボシ(くるぶし)、ひざっ小僧、向こうツネ(向こうすね)、ミズオトシ(みずおち)、のど仏、盆ノクド(盆の窪)。(中島)

かみなり ふつうはライサマという。西からと南から来るのはものすごく、雨も降る。東から来るのは弱く、ほとんど降らない。

雨は降らず、雷が鳴るだけのカラライとよび、こんな時はすごく落ちるのでこわい。(新福寺)

さんばいね 富士西から来る。(福島)

カバシラ 蚊が渦を巻いて群がっている状態をいう。

こじゆけいの鳴き声 こっち来い、こっち来い。(新福寺)

ボンボンドリ ほととぎすくらい大きさで、夜聞くとさむしい。

ナエマドリ 苗間ごしらえの頃の一番眠った時来る。耳が立っている。寮の松に巣をかける。(福島)

ジムタリ まむしに似ている。

ヤマカガシ いたずらしたり、かまうと頭を上げて追ってくる。少し

マムシ のことで、おこる人のことをヤマカガシのようだという。かじられると、腐ってしまおうといわれている。

シマヘビ

糞じょうりに食べる。

青大判

ナイゴ

ゼムシ

ケラ

トンボの種類

ホウタロ

ホーホー

コッチの水ハアマイゾ

アマンジヤク

おとなしい。家の中のねずみを食べる。

イナゴのこと。

ずいむしのこと。

オケラとケラはちがう。ケーラがなくなると明日は天気だなどという。

カネトンボ、オオヤマトンボ、オハタロ、アカトンボ。タムカゼがかえてオオヤマトンボになる。

ホウタロにはゲンジボウタロとウジボウタロとあって、子供たちがつかまえるのはゲンジボウタロ。二間ほどの竿の先に篠竹を結え水にぬらしたものでつかまえる。この時に次の歌をうたった。

ホーホー ホータルコイ ヤマブシコイ アッチの水ハニガイゾ

コッチの水ハアマイゾ (中島)

アマンジヤク 毒をもつケムシのこと。(寛野)

千代田村の民家

はじめに

千代田村の南は利根川に接し平坦地のため古来より豪雨のたびに利根川が氾濫し、水害をこうむることが多かった。古老の最も生々しい記憶に残る水害は、明治四十三年の利根川氾濫であると伝える。この時は村内一帯が水びたしになり、泥水は床上一メートル以上にも達し、泥水が引いて元に復するの二十日以上もかかったというのである。このような水害に会うたびに古い民家は倒壊し、あるいは激流に押し流されて姿を消していったものと思われる。

最近では東京に近いという地の利もあってか、(註1)この地方は近代化がいちじるしく百年以上経た古民家は比較的少なかった。この地方では昔「直家」の他に「曲り家」が存在していたということであるが、「曲り家」の形態を有する現存遺構は村内をくまなく探しあてた結果ようやく二棟(T₁、T₂)を確認することができたというようでありさまであった。以上のような現況の中で今回の民俗調査が実施されたわけであるが、とりわけ民家はまさに消滅寸前を記録にとどめることができたという貴重な調査であった。

調査を実施した地区および民家は第一表に示したとおり、九地区二十七棟に及んだが、特に調査に当たっては多忙な折にもかかわらず、われわれのために家を開放し、隔々まで心良く見せていただいた各家に心から感謝の意を表します。(桑原 稔)

一、調査民家の形式分類と編年

二十七棟の調査民家は平面形式より区分すると七つの型に分類される。このうち改造著しく復原に問題のある遺構を除いて平面および細部形式を分類し、様式編成すると第二表のようになる。編年の際の指標は聞取によってほぼ建築年代の判明したものの五棟(T₁₁・T₁₂・T₁₄・T₁₅・T₁₆)の平面および細部形式を検討し、これらの特徴と他の遺構の示す特徴とを比較検討しながら第一・第二表に示す如く建築年代を推定した。なお、その際できるだけ多くの資料を参考とする意味から隣村である明和村民家遺構の編年表(註2)をも考慮し、特に十八世紀以前の遺構ではそれが

第一表 地区別調査民家

地区	棟数	調査民家
新福寺	四棟	君島玉男家、君島直吉家、齊藤光藏家、森田要一郎家
福島	三棟	新島陽三郎家、川島常司家、浜島正家
舞木	五棟	酒巻峯吉家、大谷雄一郎家、森田乙雄家、小林秀雄家、武藤喜一家
赤岩	五棟	洪沢保男家、柴崎宗次家、鈴木清八郎家、塩田三四郎家、大沢百治家
鍋谷	二棟	小暮併三郎家、橋本喜幸家
木崎	三棟	村田章一郎家、小林一郎家、神山善作家
上五箇	一棟	吉水昭八郎家
上中森	二棟	関口金吉家、橋本源太郎家
下	二棟	細田孝郎家、井上一男家

年代推定の有力な手掛りとなった。

ここに千代田村民家の平面形式を溯源的に順次列挙すれば次のようになる。



次にこれらの各形式についてその特質を順次述べることにする。

二、一間取型

この形式は直屋のうちで最も原始的な形態を示すものであるといわれている。円い竪穴住宅から生成した民家平面は、次に齊藤光藏家(T₁)の示す復原平面(添え図参照)のように土間と床上に分割された一間取型となり、これが直家の出発点として考えられているからである。

齊藤家の規模は梁行二間桁行四間で桁行の中央部を境に左側を床上、右側を土間(ダイドコロと呼ぶ)とし、土間の表側に設けられた半間幅の出入口の他は全く開口部なく土壁で閉鎖されている。このような家を昔壺屋と呼んで平安・鎌倉時代にかけて存在した一般民家の形式と思われる(註3)。寝るために暗く静かな、そして外部から種々な危害を加えられる心配のない場所がよいということから、恐らくそのような窓のない丈夫な壁を四周にめぐらし小空間をつくったものと思われる。

齊藤家の建築は一九世紀中頃と推定され建築年代は古くない。しかし、以上に述べたとおり原始的な形態を示しており、溯源的に考察すると竪穴住居に次いで発展した住居形式であることが窺われる。ゆえに、当家は日本における庶民住宅の発展史を考える上で貴重な資料を与えてくれ

るものと思われる。なお、竪穴住居は庶民の住居として近世初期の頃までみられたようである(註4)とことから、近世末期の頃に齊藤家のような一間取型の壺屋が存在しても別に不思議ではあるまい。このように文化は時代の先端を行くものとしんがりゆくものとは大変な格差を有するものであり、そのような状態は今日においてもわれわれの身のまわりに数多く見られるところである。

三、二間取型

架構技術が発達して住居の規模がだんだん大きくなると、一間取型にみられた夜の部分としての一空間は二つに分割されて、表側に昼の生活部分が設けられ裏側に夜の生活部分が設けられるようになる。これがいわゆる二間取型であって表側の昼の生活部分では育児や裁縫・接客などが、土間では炊事や農作業・ワラ仕事などが行なわれた。

川島常司家(T₂)は梁行三間桁行六、五間の小規模な民家であり、二間取型の平面形式を示している。建築年代は一九世紀中期頃のものであり古いものとはいえないが、前述の齊藤光藏家と同様溯源して庶民住宅の発展史を考察する上で一間取型に次ぐ形式として極めて貴重な資料となることと思われる。

四、広間型

社会が発達し生活が複雑化すると床上生活の拡張を要求していったものと思われる。こうしてやがてナンド・コザ・ザンキというような三つの床土部分からなる間取が現われる。ザンキは梁行いっぱいわたって広々とした空間を占めるため、この形式を広間型と呼んでいる。三つに区分された床土部分はやはりナンドが寝室に相当し、コザは接客やその他公けの性格を持った対社会的空間とも考えられるようになった。ザン

キは家族の居間であり、食事室であり、床上の仕事場でもあるが、また、日常の軽い訪問客のための応対にも使用されるという種多な兼用空間であった。このためザシキと土間との境では建具が用いられておらず開放されており、ザシキは機能的に土間との結びつきが強かったことを示している。また土間の表側片隅にはウマヤが設けられるようになった。

調査遺構中でこのような広間型の形式を示すものは関口金吉家(T)と酒巻峯吉家(T)の二棟であった。関口家のナンドは三疊しかなく、当初は畳が入っていないかった。ナンドの周囲は土壁で囲い、半間幅の出入口の他は全く閉鎖された室であったと思われる。コザは客間に相当するため、この室に限って畳が敷きつめられていた。しかし、新しい民家にもみられるようなトコヤトダナは未だ設備されていない。さらに、コザの表側に袖壁を有するもの古い民家にもみられる特徴である。関口家が古い証拠はこのような間取の特徴をもって判断することができるが、この他に大黒柱をはじめ他の当初柱が丸刃の手斧(チョウウナ)で仕上げられていることによってもわかる場所である(註5)。

関口家の正確な建築年代は知るよしもないが、以上の事柄や細部手法などから総合的に判断して十七世紀中期頃のものではないかと思われる。しかしながら当家は後世による改造が著しい。考えてみればこのような改造があったからこそ、主要な構造体が今日まで残されたものであろう。

酒巻峯吉家は関口家より梁行規模が一間大きく、梁行四間桁行約七、五間で、当初から南面に奥行半間のオダレ(ノキシタ)を有していた。当家における現在のオダレ上部の屋根は瓦葺きになっているが、当初は母屋上部の草葺き屋根がそのまま葺き下されていた。また、当家のコザには当初からトコヤトダナが設けられていた。なお、ザシキは半分がサマとなっており古い様式を示している。

当家の大黒柱仕上げは平刃の手斧の痕跡が斜めに細かく付けられておるが一部にカンナが使われている。また、関口家ではコザとザシキ境に

だけ使用されていた差鴨居が当家ではナンドとザシキ境にも使用されており、関口家より新しい技法をいくつか窺うことができる。当家の建築年代は関口家より少し下降し、およそ一七世紀後期頃から一八世紀前期頃のものとして推定される。

五、不整形四間取型

広間型における広いザシキは作業に適していたが、種々の用途が重なり合っているため不便なこともあった。たとえば食事室の来客には困りに相違ないだろう。そこでやがてザシキから食事室の独立が計られることになり、ザシキが分割されて裏側にカッチが設けられる。この場合広間型の平面において、大黒柱がコザとナンド境の間仕切線に移行し大黒柱と中スミ柱(註6)間に差鴨居を架け建具を嵌め込むように工夫がなされたとすれば、容易に不整形田字型が実現する。このようなところから不整形田字型は広間型から生成した形式であると考えられている。

渋沢保男家(T)・君島玉男家(T)・紫崎宗次家(T)は不整形四間取型の遺構例であり、このうちで渋沢家が最も古い様式を示している。すなわち、渋沢家におけるコザの表側は広間型でみられたように袖壁を有しており、ダイドコロとザシキおよびカッチ境は建具を用いておらず開放されている。また、ウマヤが表側外壁に接して設けられているのも古い方法である。

君島玉男家・紫崎家は渋沢家より新しい要素がいくつかみられる。それはコザ表側の袖壁がなくなり、ザシキ(紫崎家ではココザと呼ぶ)とダイドコロ間を開放とせず建具が嵌め込まれ、ザシキ(ヨコザ)はダイドコロとの間を断ち切つて独立した一個の室として意識されていることである。ここに、不整形四間取型にみられる共通の特徴を上げると、広間型において完全に土壁で閉鎖されていたコザとナンド間の間仕切が、一間だけ開放され建具が嵌め込まれることであり、また、カッチとダイ

ドコロ間には旧態を残して開放されており、建具が嵌め込まれていないことである。

不整形四間取型は以上の如く広間型に次ぐ古い様式を残しており、これが主に建築された時間は多少の年代差はあるにしても、およそ一八世紀後期頃のことと思われる。

六、整形四間取型（田字型）

不整形四間取型は前後の室の奥行が異なり不自然である。架構技術が進展して梁行規模の増大が可能になると、やがて前後の室の奥行は同一（二間）にとられることになって整形四間取型（田字型ともいう）が現われる。この形式は近世民家の変遷史の中で一応完成された形とみられるものである。

大谷雄一郎家（ T_9 ）・小林秀雄家（ T_{13} ）は整形四間取型の遺構例である。大谷家のコザとナンド間の間仕切は不整形四間取型にみられたように一間だけを開放し建具を嵌め残りの部分は土壁としている。しかし、カッタとダイドコロ間は差鴨居を架け建具を嵌め込んでおり、ザシキと同様にカッタもダイドコロとの結び付きを一応断ち切って独立した室として意識されている。当家は裏側が道路に面し、江戸時代より菓子屋をしていたということであり、土間が裏側へ一間突出している。おそらくこの部分が店であったのであろう。なお、当家の東妻側は妻桁梁より上部の束や梁を漆喰塗りでおい意匠的な効果を表現している。これは商店とて人目につき易く考えられた結果であらう。瓦葺総二階でいかにも農家離れた外観を表現しているが、平面形式は農家と異なるところがないのは注目される。当家の建築年代は一九世紀前期頃であらうと推定される。

小林家は大谷家より幾分新しい建築であると思われるもので、コザとナンド境の土壁はなくなり、この間は従って建具で仕切られている。ま

た、ナンドの裏側も一間が開放されここより採光するように考慮されている。こうして民家は徐々に各室が開放され、明るい近代的な空間が求められてゆくのである。小林家はおじいさん（三年前七十才没）の三代前に建築したということであり、およそ一九世紀中頃の建立と推定される。

七、六間取型

この形式は一般に不整形四間取型や整形四間取型の裏側に奥行一間から一、五間の室を並列したもので、ナンドの奥室をオクナンドと呼び、裏側のダイドコロ寄りの室をカッタといっている。そして、このカッタとザシキ（ヨコザ）にはさまれた室をチャノマ・ナカノマあるいはナカザシキと呼び三種の呼び名が付けられている。

この形式を示す遺構は新島陽三郎家（ T_8 ）・鈴木清八郎家（ T_{14} ）・塩田三四郎家（ T_{15} ）・井上一男家（ T_{16} ）などである。

君島直吉家（ T_{10} ）は六間取であるが、以上の形式とは異なっており、整形四間取型におけるコザとナンドの妻側の前後に二室が設けられたもので、ダイドコロから最も遠い妻側の室をコザと呼びトコヤトダナが設けられていた。コザの裏側の室名は不明であり、コザとザシキにはさまれた表側の室をナカノマと呼んでいたということであった。現在はコザとその裏側の室はとりこわされてしまっており、整形四間取型となっており。当家のザシキ表の半分はサマとなり、ナカノマとナンド間の間仕切は半分が土壁となるなど、古い手法を残している。当家は名主役を勤めた家柄であったため、一般農家より多くの間取を必要としたことであらう。その結果桁行方向に室が付加されたものと解釈する。このように桁行に室を増加する方法は梁行に増加するより古い方法と考えられる。それは技術的に梁行を増大する方法は新しい技術を必要とし、桁行を増す方法は新しい技術を必要となくとも容易にできると思われるからで

ある。君島直吉家は一八世紀後期頃の建築と推定する。

新島家はやはり名主を勤めた家柄と伝えるが、梁行の規模を増大する方法によって室数を増している。それは裏側に幅一間の下屋を設けることによつて可能となつた。この様な方法は一八世紀後期頃までみられなかつたところであり、当家はその嚆矢と思われる。当家のコザとナンド境の間仕切の半分は土壁が残り古い手法を残している。建築年代は一八世紀前期頃のものであらうと思われる。

このよ様な形式はその後年代が下降すれば当然一般民家にも採用されることとなる。その例が鈴木家・塩田家及び井上家であり、前記の二棟は一八世紀中期頃の建築によるものであると思われ。

井上家のオクナンド・カッテの奥行は一、五間もあり、最も発展した形式を示している。さらに大黒柱の径は異常に大きく(一、一四尺角)裝飾的価値をも表現している。当家は瓦葺二階建てであり一八世紀後期に建築されたもので調査遺構中では最も新しいものであつた。

八、曲り家

この地方にみられる曲り家は一般にナンドの裏側に一室突き出してオクナンドを設けるため、棟が裏側へ曲つてできたものである。調査遺構中で最も古い曲り家と思われるものは小暮孫三郎家(T₃)であつた。当家のコザとナンド境は土壁で閉鎖されており、室数は四室であるが、ナンドの奥行をカッテの奥行(二間)と等しくとらなないで二間としているため、ナンドが一間奥側へ突き出している。この突き出している部分をおおうため棟が裏側へ曲つたもので、曲り棟の長さは短かく曲り家の原始的な形態を示している。当家の建築年代はおよそ一八世紀中期頃のものであると思われる。

橋本喜幸家(T₁)は、小暮家に次ぐ古い曲り家の遺構と思われるもので、コザの表側とコザ・ナンド境には土壁を残している。当家は不整形

四間取型のナンド寄り裏側に六畳のオクナンドと四畳のローカ(板の間)を付設したもので室数は六つになる。すなわち、当家の基本形は不整形四間取型で、これの裏側に室が付加されたものとみられるべきものである。このように裏側に室が新たに付加されるようになるのと平の部分から裏側に棟が一層長く突き出して本格的な曲り家を出現することになる。当家の建築年代は一八世紀後期頃のものであると思われる。

以上二つの遺構は村内に現存する曲り家であり、往時の曲り家を知る貴重な資料である。

将田章一郎家(T₁)と森田乙雄家(T₂)は当初曲り家であつた遺構であるが、今日では裏側に突き出した室はとりこわされてしまつており、往時の姿を窺うことができない。この両家は大型の曲り屋で前述の二遺構よりさらに発展しようすがみられる。森田家は名主の家柄であり、将田家も詳しくはわからないが、森田家と同様な立派な建築であるところから昔何らかの村役を勤めていた家柄であると思われる。この両家は建築様式が類似しているところから共に一八世紀中期頃の建築と推定される。

曲り家は一般の農家建築において平面計画上発生し、やがて室を増加する一つの方法として発展して行つたものと思われるが、時代が新しくなると民家の中では名主等の特別な階級の民家形式として次第に格式あるものに位置づけられて行つたものと思われる。その証拠として隣村である明和村でも三棟の曲り家に遭遇したが、いずれも名主・組頭役の民家であつた。しかも、それらは前述の森田・将田家と同様の平面形式を示し、建築年代は一八世紀以降に入るので、建築も質がよくできていたことなどがあげられる(註2)。

九、エンガワ

武藤喜一家や川島常司家は現在でも、表側の下屋に床板を張つておらず、従つてエンガワが設けられていない(後掲の写真参照)。この他の調

查民家は現在総べてエンガワを有しているが、その大多数の民家のコザやザシキ表に立ち並ぶ柱脚の両側面にはコマイ竹の穴が残っており、さらにコマイ穴より外側が目にみえるほど風蝕されている。このような痕跡は一九世紀中期頃の遺構にまでみられるところから、一九世紀中期頃までの民家においてはエンガワを設けていなかったものと思われる。

この地方では床板の張られていない表側下屋部のことを「オダレ」と呼んでいるが、関口金吉家では当初このオダレを設けていなかったところから、近世初期にまで溯る古い民家では恐らくオダレはなかったものと思われる。しかし、やがて上屋の軒先を深く暮き下し表側に三尺幅の空間をとってオダレが生じたものと思われる。オダレは建物に対する雨仕舞をよくすると同時に穀物の急なとりこみにも便利であった。

新しい遺構になると屋根裏への採光を考慮することなどから、上屋の軒高を増すため、オダレ上部の屋根は上屋と切り離され、瓦で葺かれるようになるが、森田要一郎家のオダレ上部の屋根はこの過渡的な形態を示しており大変興味深い（後掲の写真参照）。

十、ウマヤ

ウマヤはトボーグチのすぐ右手に、外壁に接して設けられるのが古い位置であるが、次第に後退して一九世紀中期になると裏側の外壁に接して設けられるようになる。そして、ウマヤ近くの東側外壁に出入口が設けられ、ここから馬を出入りさせたので、この出入口をウマヤグチと呼んだ。ウマヤが裏側へ後退すると、トボーグチの右手は広い空間が得られ、前面にサマを設けてこれより採光しここで機械が行なわれた。今日ではここを物置としている家が多いが、そのような場合でもここをハタバと呼んでいる家が多数存在する（T₁・T₂などその例である）。

以下に第二表掲げられた一八棟の復原平面図および復原断面図を添えておいた。また、写真は以上の一八棟の他に貴重と思われるものをでき

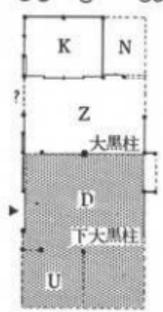
るだけ多く掲げておいた。

〔註〕

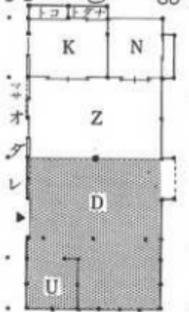
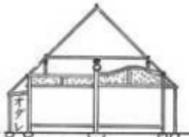
- 1……東武伊勢崎線で東京浅草まで約一時間半で行けるため、村内では東京に通動している人もかなり存在する。
- 2……桑原稔「邑葉郡明和村の民家」日本建築学会東海支部研究報告集 第八号（昭和四十五年十一月）
- 3……壺屋の文字は「今昔物語」や「古本説話集」にみられるところから平安鎌倉時代にかけて存在した一般庶民の民家形式ではないかと思われる。壺屋は字の示すとおり、開口部は出入口ただ一つだけで四周を壁で囲われた小さな建物のことである。
- 4……伊藤ていじ著「日本の美術二十一巻、民家」一四七ページ、慶長の堅穴住居（昭和四十年五月初版、平凡社。伊藤延男編「日本の美術」6、NO. 38住居）二二ページ、堅穴の流れ。
- 5……手斧で柱を仕上げる方法は丸刃仕上げと平刃仕上げの二種類あって前者の方が一般により古い仕上げ方法であると判断されている。丸刃仕上げは手斧の刃幅がせまく、耳（刃のかど）をおとしてある手斧で仕上げ面は丸味をおびており、ちょうど魚のうろこのように見える。このような丸刃の手斧仕上げはめったに見られないものである。泉内の民家ではおよそ十七世紀頃まで使われていたらしい。その後平刃の手斧が使われるようになるのであるが、これは斜めに細かく仕上げる場合と大まかに仕上げる場合とがあり、前者は後者より古いと考えられている。
- 6……この地方では広間型においてコザとナンド境の柱で、ザシキに面する柱のことを中スミ柱と呼ぶ。

0 3 6 10尺

K: コザ
 N: ナシ
 Z: ザシ
 Y: ヨコ
 K: ナカ
 U: ウマ
 O: オク
 T: チャ
 D: ダイ
 NZ: ナカ



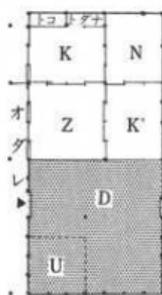
T1 関口金吉家



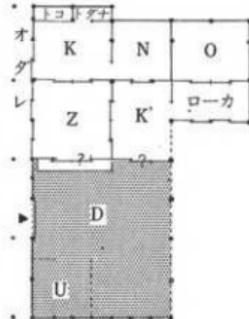
T2 酒巻峰吉家



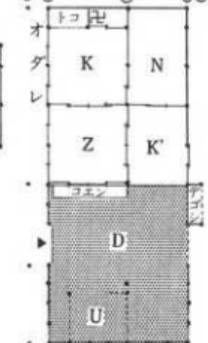
T3 小暮孫三郎家



T4 洗沢保男家

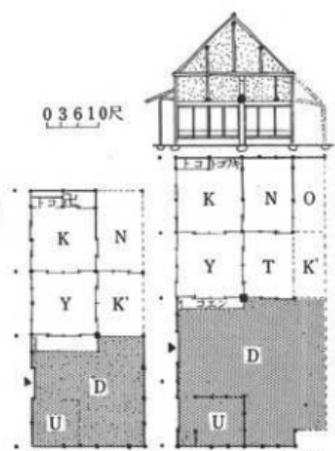


T5 橋本喜幸家



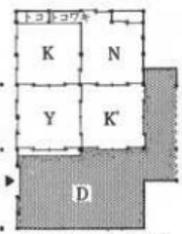
T6 君島玉男家

0.3610尺

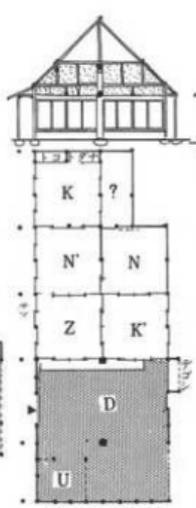


T7 柴崎宗次家

T8 新島陽三郎家



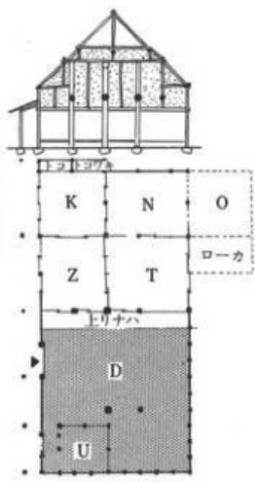
T9 大谷雄一郎家



T10 君島直吉家

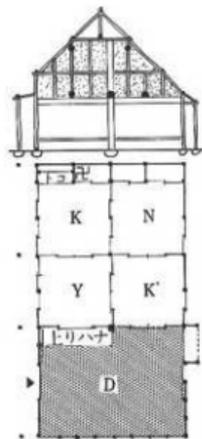


T11 将田章一郎家



T12 森田乙雄家

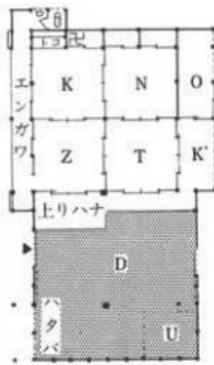
0 3 6 10尺



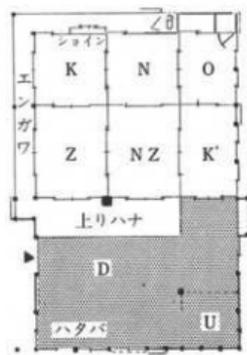
T13 小林秀雄家



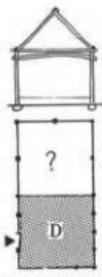
T14 鈴木清八郎家



T15 塩田三四郎家



T16 井上一男家



T17 斉藤光蔵家



T18 川島常可家



酒巻峯吉家
ダイドコロよりザシキをみる



小暮孫三郎家(T.) (前面)



小暮孫三郎家
裏側、ナンドが1間裏側へ突き出たため屋根の棟はナンド
上部で裏側へ折れて曲り家となる。



小暮孫三郎家
(東側妻屋根)



関口金吉家(T.)
軒先の瓦屋根は後補



関口金吉家ダイドコロの柱



酒巻峯吉家(T.)、
前面の瓦屋根は後の改造によるもので、当初は草葺き屋根
が深く葺きおろされていた。



酒巻峯吉家
ザシキ表の柱に残る“サマ”の痕跡。



柴崎宗次郎(T.)



伊沢保男家(T.)



柴崎宗次家

上屋の軒高が増すため“オダレ”の屋根(瓦葺)と上屋の屋根との間隔が大きくとれるようになり、ここに格子の窓を設け屋根裏へ採光している。棟の中央には草葺きの煙出しをさせているが、このようなかっこうをした煙出しはめずらしく、この地方の特徴である。



橋本高幸家(T.)

前面の瓦葺きの部分は当初草葺である。

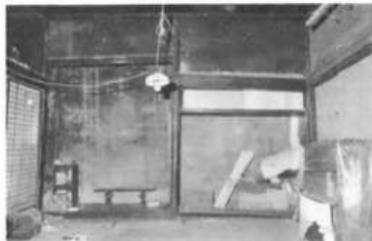


新島陽三郎(T.)

前面に主屋を新築し、現在は使用されていない。



橋本高幸家、裏側



新島陽三郎家のコザ、

正面左はトコ、右をトコワキという。



君島玉男家(T.)



君島直吉家
ダイドコロよりザシキをみる。



君島直吉家大黒柱



将田章一郎家(T₁₁)



将田章一郎家東妻屋根
鎌倉型のダシの中に“水”の字
がみえる。



大谷雄一郎家(T₉)、(丑木幸男 撮影)
瓦葺総二階、19世紀前期頃の建築と思われるが当時とし
てはめずらしかったものと思われる。



大谷雄一郎家東妻、(丑木幸男 撮影)
当家は昔、菓子屋をしていたということであり、道路に
面した東側は妻梁より上部を漆喰塗りとし化粧をこらし
ている。



大谷雄一郎家東側



君島直吉家(T₁₀)



小林秀雄家大黒柱



将田章一郎家
ゼシキよりコザをみる。



小林秀雄家のコザ
正面左がトコ、右はトダナである。この地方では仏壇をこのトダナの上段トコ寄りに安置する家が多い。



森田乙雄家(T₁₂)



鈴木清八郎家(T₁₄)



森田乙雄家大黒柱
大黒柱の左側にみえる産物居はゼシキとチャノマ間に架けられたもので、高さは1尺4寸3分あり調査民家中の産物居では最も立派なものである。



塩田三四郎家(T₁₅)
棟の中央には大きな「サガラ」がのっている。



小林秀雄家(T₁₃)



吉永昭八郎家（上五箇）
大正5年の建築と伝える



塩田三四郎家
エンガワの屋根上部に設けられた屋根裏採光のための開口部



小林一郎家（木崎）



塩田三四郎家東妻屋根



石島正家（福島）



井上一男家(T_{1a})

19世紀後期になるとこのような瓦葺二階家が多く建築されるようになるが、前面に半間の下屋を有してエンガワを設けているところはこれまでと変わらない。



石橋一雄家（木崎）



井上一男家大黒柱
1辺が1尺1寸4分あり装飾的価値をも表現している。



斉藤光藏家(T₁₇)



大沢百治家(赤岩)
大正4年の建立



川島常司家(T₁₈)



神山善作家(木崎)

昭和10年建立養蚕のために草葺屋根がよいといわれていたので、昭和に入っても養蚕に力を入れている家は、写真のような草葺二増屋を建てたということである。



武藤喜一家(舞木)



かつての茶屋「新田屋」(赤岩)(都丸九十九 撮影)

この家に田山花袋が泊り原稿を書いたこともあるという。近くの堤防拡張で現在地に移転する。



森田要一郎家(新福寺)

村内の民家の多くは前の写真でも紹介したように表側に上屋の屋根と段違いの下屋を設けて、下屋だけ瓦葺としている。しかし、ここに掲げた家のように上屋の屋根が深く葺きおろされて下屋を包含するのが古い形式と思われる。森田要一郎家はその過渡的形態を示しており大変興味深い。(本項写真は一部を除き、桑原 稔撮影である。)



ジュウノウウツの家(下中森)(都丸九十九 撮影)
この瓦は小泉瓦とも呼ばれ戦後まで小泉で生産されていたが、強度がないため割れ易く以後生産されていない。

千代田村の民具

はじめに

千代田村の民具として集まった資料を一見したとき、ひと言でいうならば、際立って特殊なものは見当らなかったといえる。理由はいろいろ考えられるが、一つには制約された時間内で広範な調査をするので対面できる民具は極めて限られたものになること、二つには、調査にあたって「古いもの」ということばで伝えられた情報への反応として、調査地区民が特別のいわれや価値の与えられそうなものを選択して提示するために限定されてくるのが考えられる。こうしたことから本来の民具、日常の生活のために伝承し、用いられてきた生々しい実用道具は姿を見せずに終ってしまうことが多い。したがって、ここに報告されたものだけが千代田村の民具について結論を出すことは不可能なことといわねばならない。

今回報告された民具のほとんどは、現に使用していないもの、道具として使用の生命を終わったものである。民具は、どこにもある身近で親しみぶかい、実用の生活道具であるために、ひとたび実用価値を失うと「じやま」になり、捨てられて急速に姿を消す宿命をもっており、千代田村もまた例外ではなかった。平地の農村であることから山樵関係、狩猟関係の用具は見当らず、田舟、オオガ、田こすり、鎌などはじめとした農具に特色がみられたが、サナ、カマト、織機その他貴重な民俗資料が、相次ぐ家の改築のために灰と化しているのが現状である。

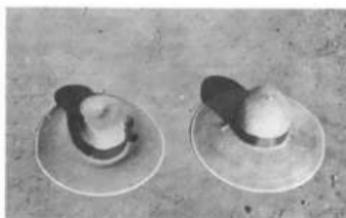
ここに収録した民具は、千代田村独自のものは見当らない。周辺地区に広く分布しているものが多いので今後の調査研究がまたれるものであ

る。本書の各項を参照せられたい。(阪本英一)

一 衣・食・住に関する用具

麦わら帽子 最近の市販品で、男性が現在も使用している。(上五箇)かき 夏季などの農作業に欠かせないもので、内側に丸い輪と、耳かけのようなものにひもをつけてかぶったものだったが、最近は小屋の隅ではこりをかぶっている。

しばみの 下中森の遠藤正雄氏の提供してくれたもので表はシバ(草)で編み、裏側は糸でこまかく編み、結んでいる。やわらかく、軽く、収縮も自在なので身体にびったりする。この地方で編んだものか他地方か



むぎわらぼうし(上五箇)(井田安雄 撮影)



シバミノ(下中森)(都丸十九一 撮影)

ら將來されたものかは不明である。(下中森)

オニオロシ 初午にスミツカリをつくるときに、自分をつくってもスミツカリの味には変りはない。材料は、手ごろなふたまたの樺をさがし、これに大きめにのこぎり状の歯をつけた竹をききとめてつくればできあがりである。これを用いて大根・にんじんをすりおろして、あぶらげやとうふ・さけの頭や酒粕を入れた汁、スミツカリをつくるわけである。野趣あふれる道具で、つくられた汁もまたまったくの田舎の味となる。(菅野・新福寺)

初午のスミツカリをつくるときの田舎の味となる。材質 木製、ニスの木、おろす部分は竹。法量 幅二十六cm、長さ四十cm。(菅野)

キッタテ ふたを失っているが、酒用に使ったものか。(下中森)



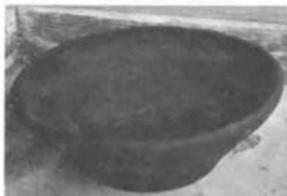
オニオロシ (新福寺)
(阪本英一 撮影)



オニオロシ (菅野)
(青木則子 撮影)



キッタテ 蓋がない(下中森)
(都丸九十九一 撮影)



鉢 使用不明 (下中森)
(都丸九十九一 撮影)



薬 研 (下中森)
(金子綾一郎 撮影)

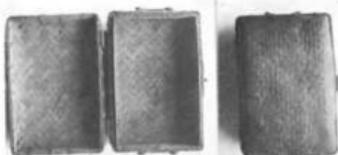
鉢 どんな用途に使ったものかわからなくなっ
てしまったもの一つ
で、すり鉢状である。
薬 研 下中森所見の
もので、台ともに木製と

いうのは現在では種で貴重な例である。もともと製薬用に使われていたのが薬研であるが、一般家庭では、とうがらしなどをすりつぶすのに使用するために所有される例が多かった。(下中森)

タン 弁当入れ。材質 竹。外側は○・三cmの皮竹の網代編(二、二)。内側は○・八cmの身竹で網代編(二、二)。外側は二・二cm幅の皮竹を上下にまわし、○・三cmの皮竹でとじつけ、上下はちようつがいと口金でとめる。ふたの内側にも二・一cmの身竹をまわし、外側からまわした皮竹でとじる。はこの内側には二・三cmの身竹をまわし、ちようつがい、口金とつての金具でとめる。法量、幅一七・五cm、長さ一一・五cm、高さ八cm。(菅野)

ほうろく 豆をいったり、やきもちを焼いたりするのに以前はほうろくを使っていた。素焼きのほうろくは、焦げず、ふっくらと焼き上がって美味いというので各家庭で使っていた。ここに上げるのは赤岩での所見である。戦中から戦後にかけての物資不足時代に陽にあたった時期があったが、ジュラルミン製にあって代られて姿を消した。(赤岩)

みそだる 三年みそがよいとか、みその色が薄くなることは左りに前になってきた証拠とわかれた時代には、みそだるが陽にあたることも少



タン (萱野) (青木則子 撮影)



ほうろく
径 34 cm 高さ 4.3 cm (赤岩)
(関口正己 撮影)



みそだる (4斗入) 高さ 54 cm (赤岩)
(関口正己 撮影)



半切り桶としゃもじ、みそたき用 (赤岩)
(関口正己 撮影)

なかったが、ビニールの袋をかけられて、古いタイヤの上に置かれるのも時勢である。みそたきには、桶の上部を切った半切り桶と、豆をかきまわす大きなしゃもじはつきものだった。(赤岩)

ハンギリ桶 ミソタキの時にハンギリ桶を使う。直径七五、五センチ、高さ三五センチ。煮た大豆を臼でついて塩をまぜ、コウジ菌を入れてミソ樽(高さ五四センチ、四斗入り)に入れ、ミソ部屋に並べて置く。古い順に食べる。ミソシャモジは長さ六七センチで、ミソをかきまわす。(赤岩)

シヨウユしほり 組内が共同でしヨウユしほりをやる。当番の者が早起きして原料を煮つめる。原料のみそは小麦で発酵させたもので、麻袋に入れ、大きな木箱に入れて、キリンでしめてしほる。木箱は一八、五×六六、五センチ、高さ六五センチの大きさで、底に溝がついている。しほり汁を大釜に入れて煮る。作業は集会所に集まって共同でやる。(赤岩)

ほうちよう 調理用のほうちようの中でも、うどんづくり用のほう



しヨウユしほり
しよたて 118.5 横 66.5 高さ 65 cm
(赤岩) (関口正己 撮影)



ほう丁各種 (赤岩)
左2本桑切り、右2本ウドン切り用
(関口正己 撮影)

ちようは、群馬県下広く見られるもので、こねた粉を薄くのぼし、手打ちうどんを切るために使った。桑切りほうちようは、大形で、養蚕の稚蚕期に桑を切って給桑するために使ったものである。(赤岩)

膳 かつては箱膳を使用していたというのが報告は一例もなかった。上中森と下中森から報告されたものは、どちらも日常の生活に用いるもの



人寄せの際の膳（下中森）

（都丸九十一 撮影）



徳利（上五箇）

（関口正己 撮影）



お膳（杉戸義家）（上中森）

（丑木幸男 撮影）

でなく、祝儀不祝儀の人寄せの際に使われる膳碗類の一つで、ふだんは蔵の中にしまわれている類のものである。（上中森・下中森）

徳利 上五箇からの報告は、現在の姿、形ばかりまとまって量よりも本数を問題にさせる小さなものどちがって、どっしりと腰を落ちつけさせるものであり、新福寺所見のもは、いわゆる貧乏徳利であった。

杵 上五箇から報告されたものは精米用のもので、玄米を精白するときに使用したもので、これと対になる臼は確認できていない。

玄米を精白する杵は、先端が凹んでいて、臼に玄米を入れて杵を落とすようにしてついていたもの。（上五箇）

灯火用具

行灯（あんどん） 下中森から報告されている。一例は紙をはったものであり、他の例は骨組だけになっているが、使用可能なもので後者の方が一般であった。（下中森）

がندوق 一例だけの報告であったが、前方だけを照らすためにく



玄米を精白する杵 先が凹む（上五箇）

（関口正己 撮影）

最近では神仏に供える灯明用の小さな台ランプ（豆ランプ）が見られる程度である。瀬戸井の所見では、かざりつきの台ランプに箱をつくり、一方だけを明るくできるように工夫した勉強用のランプがあり、赤岩、上五箇では吊りランプ、天神原、上五箇から豆ランプがそれぞれ報告されている。

豆ランプ 石油を使用。材質ガラス。法量・高さ 十一、五 cm、底径

六、五 cm（天神原）

ちようちん ロケットを入れて歩行用に利用するちようちんは、一般にはすでに失なわれたが、婚礼などの儀式用に使われた定数入りの弓張ちようちんが赤岩にあった。昔は、箱に入れて座敷の鴨居などにつるしておいたものである。（赤岩）

たんす 現在のものよりは低く、上部が両びらきになり、小ひき出しや金具がたくさんついた古いたんすが下中森から報告された。こうした江戸時代の生活を伝える家具は稀にか残っていない。（下中森）

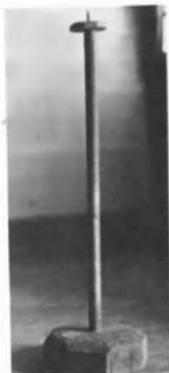
長持ち 衣類や寝具までも収納できる長持は、昭和初年までは嫁入り

ふうされた投光器で、ブリキ製の新しい時代のものらしかった。（下中森）

獨台 ロケット立てで、蔵の片隅などにはまだ残っていると想像されるが、結婚式や村の寄合いなどには百友ロケットなどを立てて使用したものである。

（下中森）

ランプ 明治から大正にかけて、電灯の普及するまでの期間、行灯やヒデ鉢にとって代って生活の必需品となったランプも、



燭台 (下中森)
(金子緯一郎 撮影)



行燈 (下中森)
(金子緯一郎 撮影)



アンドン (下中森)
(都九十九一 撮影)



ランプ3種 (上五箇)
(関口正己 撮影)



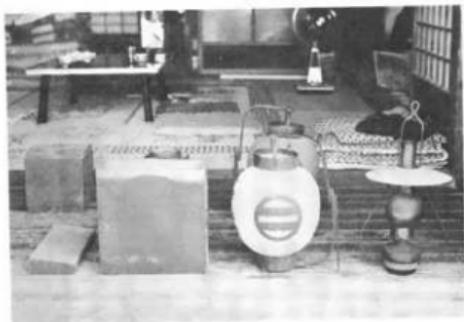
ランプ (天神原)
(青木則子 撮影)



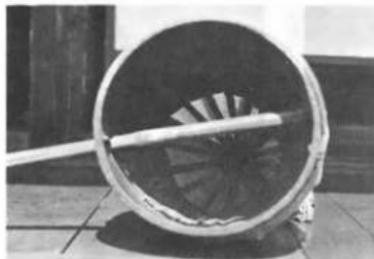
ランプ 手前
だけが明るくなる
(瀬戸井)
(阪本英一 撮影)



ランプ (中島)
(阿部 孝 撮影)



提灯とランプ (赤岩)
(関口正己 撮影)



昔のハエ取り器具のひとつ。(金子緯一郎 撮影)



江戸時代の末頃のタンス (下中森)
(金子緯一郎 撮影)



ハエを取っているところ (赤岩)
(金子緯一郎 撮影)



長持ち (下中森) (金子緯一郎 撮影)

道具の一つとなっていた。下中森の例は、上下二つ重なる例は、時代の異なる姿を見せているが、下のものが古く、上の方はひかたく新しいものである。(下中森)

からと ふつうの長持ちよりも大きく、しっかりしたつくりで車をつけた長持をカラト(車長持)という。カラトは、江戸で禁じられてから地方に根つき、富豪の家などでつくられた。地震や火事などの非常の際、この中にめぼしい家財を入れて綱で引いて避難するための非常持ち出し用具というわけであった。千代田村ではかなりの数が残っているらしいが、最近は不用になり、牛小屋の飼料入れや、何かの台におちぶれているのが実情である。(萱野・上五箇)

車のついている大きい長持をカラトという。幅四尺、長さ六尺、八分板でつくる。ふつうの長持は幅二・五尺、長さ五尺でカンがついていてかつぐようになってる。

車のついている長持。材質 木。法量・幅七十cm、長さ一五一cm、高



からと (上五箇) (井田安雄 撮影)



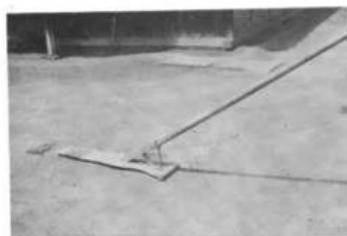
牛小屋のわきに出されたカラト (萱野)
(青木則子 撮影)



エンガ (瀬戸井) (阪本英一 撮影)



えんが (柄鉄) (赤岩) (関口正己 撮影)



エンガ (新福寺) (阪本英一 撮影)

従来の裸の労働を主とした農業から機械を多用する農業への変化の中で、時代おくれになった各種の農具は、老人の感傷からいねいに小屋の上にしまわれていたり、一部で使用されているために現在の時点ではかなり保存されている。

エンガ 柄鉄は各地で報告された。太くて長い柄をにぎって麻を蹴るように土中にさしこみ、挺子の原理を応用して畑を耕起する農具で、これで一日一反の畑をやれると一人前の農民としてみられたものである。柄をしめるために竹を使ったものもあるが、エンガにつく泥を落とすためにツバクシ(竹べら)をつけておいた。

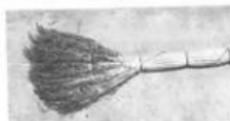
さ七十八cm。(菅野)

これは吉永利雄さん(明治三十三年生まれ)の祖父の時代のものという。嫁入りのときに夜具をいれてひっぱってきたものという。これは旧家でないという。(上五箇)

ハエとり器 ハエ叩きのように惨酷できたならしい方法をとらず、薬



ねずみ取り器 (中島)
(阿部 孝 撮影)



モロコシボウキ (天神原)
(青木則子 撮影)

二 生産・生業に関する用具

(一) 農 具

割って薄くけずり、筒形の骨組をつかって紙をはり、上部に袋をつけたもの。下のかこの部につけてハエの上に乗ってゆき、素早くかぶせるとハエは上の明るい方へとびあがり、逃げようとする上部の袋の中に捕えられるという仕組みで、どこか風情のあるハエとりである。(赤岩)

ねずみとり器 箱の中に鼠の好む餌を入れて、中蓋を上げて置き、鼠が中に入ると、止め具をはずして押しつぶす仕組みになっているもの。よそでも見られるので、ある時期に流行したらしい。(中島)

モロコシボウキ 台所用のホウキ。自分で作る。(菅野)



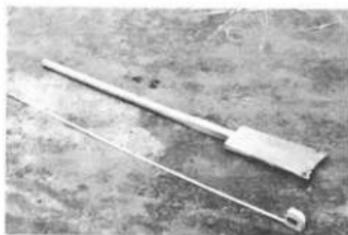
ひらぐわ (瀬戸井)
(阪本英一 撮影)



シャベル (瀬戸井)
(阪本英一 撮影)



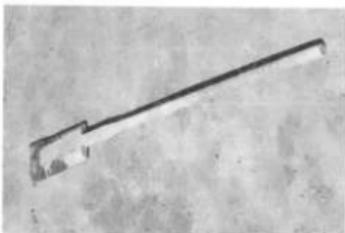
田スキ (下中森) (金子緯一郎 撮影)



しゃくし (赤岩) (関口正己 撮影)



すき (新福寺) (阪本英一 撮影)



へら (萱野) (青木則子 撮影)



オオガ (新福寺) (阪本英一 撮影)

オオガ 昭和十年ころまでは、田を耕起するには、これを馬にひかせて使った。全長二、五メートルもある大きさだが、指二本をそえただけでも使えるくらい軽く、馬は田の中をぐるぐるまわっていても、人間の方は遠くの方でやっていられた。オオガを使うと、半日で四反は楽にやれたほど能率がよかった。

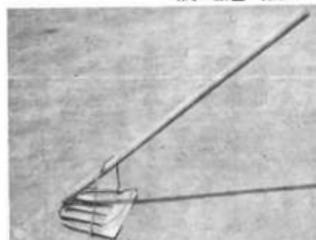
スキ オオガを小型に改良していったものの一つがこれである。もちろん牛馬にひかせて使用するもので、田畑を深く耕起できるばかりでなく、小回りがきいて扱い易く、小型耕耘機の出現までの間の主役として使用されてきた。

材質、ヘラの部分はケヤキ、柄はエノキ、エノキの柄は細くてもねばりがあるて良い。ヘラには油のあるタルミが向く。鉄歯はとりかえられ。(天神原)

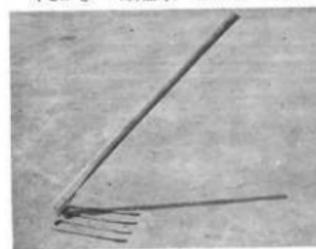
シャベル ひかくの最近のものであるが、柄の部分、特に上部の形が平鍬や、しゃくしといわれているものとよく似ている。湿地帯の多かった当地では、柄の長いこと、扱い易いことなどの工夫からこうした型を必要としたのだろうか。



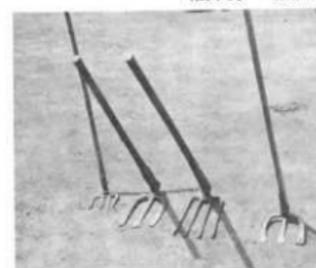
タワ各種(赤岩) 開懸用
ハターサク切リ用
(柄) タワ一畑のサク切リ用
備中鍬一畑のサク切リ用
(関口正己 撮影)



くさかき (新福寺) (阪本英一 撮影)



さつまいも用のくわ (新福寺)
(阪本英一 撮影)



まんこの各種 (新福寺) (阪本英一 撮影)

ひらぐわ(平鍬) この名称は瀬戸井で聞いたもので、赤岩ではしゃくし、菅野ではへらとよんでいる。湿地を耕したり、排水路の土を掘ったりする道具として使用したが、土地改良の進んだ最近では、その生命は終った。

へラ アゼ、クロをぬる道具。材質、ケヤキ、歯は鉄。棒屋がつか

る。法量 幅一・八cm、全長一七cm。柄、径三・四cm。鉄の歯先だけとりかえることができる。(菅野)

くわ 鍬はサツマを掘って土を上げ、除草に用いる。備中鍬は大ウネの時に使う。サツマイモ掘りなどもこれでやる。唐鍬は開懸用である。

ハバタは幅の広い鍬で、開懸用に使う。デンチツクワは小さい鍬で、サツマ(うねの間)に使う。

田こすりは亀の甲ともいって、田の草取りのかわりに、株の間をこすって除草した。最近では除草剤があるから使用しなくなった。(上五箇)

くさかき 畑に使う農具としてあるが、畑作地帯や山村とちがって小さいもの、かんたんなのが使用されていたように感じられた。



馬鎌 (まんが) (赤岩)
馬に引かせ水田をかく
(関口正己 撮影)



まんが (新福寺) (阪本英一 撮影)



百本まんが (赤岩)
馬にひかせ、田をならす
(関口正己 撮影)



くわとくさかき (瀬戸井)
(阪本英一 撮影)

すのこを使用してきた生命の長い農具である。全体に丸味をもち、少しくま目のものである。ところが粘土質の桑園のさく切り用にも使うようになり、柄と刃とがつくる角度をより鋭角にして、刃を長くつくったマンノウを桑園や畑のさく切り用にして使用するようにになった。特に春秋二回の桑園のさく切り専用にした家もある。(新福寺) 更に戦中から戦後にかけての食料不足の時代には、食料増産の国策にそって大規模にさつまいもつくりを進めたときには、四本刃で、細く長い、軽いマンノウがさつまいも専用につくられ、さかんに使用された。

マンノウ (万能)
備中鎌といわれて江戸中期ころからさかんに使用されるようになった三本刃の鎌で、田を耕すときに馬を使わないところや、馬が入れない隅の方をおこすのに使われるようになった三本刃の鎌で、

マンガ (馬鎌) 田植えをするときに馬にひかせて水田をかく作業に使う農具で、基本型はほとんど変わらないが、新福寺の例では、一度に幅広く代掻きができるようにするために本来の刃の部分に板をつけて幅をひろげ、両端に二本ずつの木製の刃をつけている。こうして一五三センチメートルになっていた。

百本まんが 千本まんが 麦まきをするときに田の中を馬にひかせて土塊をこまかにしてならす道具で、赤岩所見のものには把手をつけて操作するようにになっているものであり(八三×一四五センチ)、新福寺のものは、刃の露出している部分の長さが十二センチメートルのものが九三本、六列に並べてうめられたものを使用した。後者はひかすの近年につくられたものだという。

牛にひかせる。材質 歯 鉄製 枠 木製。
法量 幅一四九cm、長さ八十七、五cm 歯幅 〇、七cm、長さ十cm。
歯百一本。(萱野)
スジヒキ 農作業の中では、すじひきをする機会は思ったより多い。



千本まんが (新福寺) (阪本英一 撮影)



スジヒキ (萱野) (青木則子 撮影)

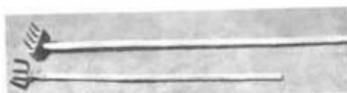
一本の縄を使って一列ずつすじひきをするのも作業によっては非効率なことで、最近さかんになってきた水稲の直播法は特にその感がある。そこから工夫されてつくられたのがスジヒキのようである。

直播の田にすじをつける道具。木製。

法量 幅一八cm、長さ二十四cm、柄 太さ三、四×三、五、長さ一

七八cm。(萱野)

田こすり 除草用の農具の一種で、畑で使うものは単にこすりと言ん
でいるようで(赤岩)多くは水田用に使われているので田こすりという。
木に刃を植えこんでつくったものが古く、最初はヨツゴと同じだとみら
れる。用水がこないときなどに稲のさくを少し振りおこすようにして草
とりをするが刃の短かいもの(柄も短かい)でこすり、続いて柄の長い
ものでやる。長い柄は二五センチにも達し、短かいとどうしても腰を
屈めないし作業にならないが、長いものは楽な姿勢でやれる上に、稲を
いためないですむので一石二鳥なのだという。したがって毎戸に長い柄
の田こすりがある。(新福寺) 萱野ではネコクッタガヤシともゲンゴロ



田こすり (新福寺) (阪本英一 撮影)



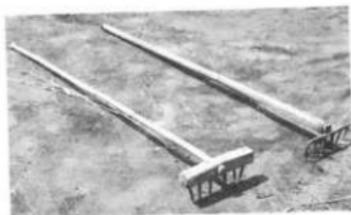
たこすり (上五箇) (井田安雄 撮影)



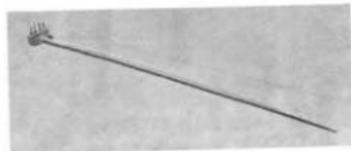
ネコクッタガヤシ、ゲンゴロウともいう
(萱野) (青木則子 撮影)



よつこ (新福寺) (阪本英一 撮影)



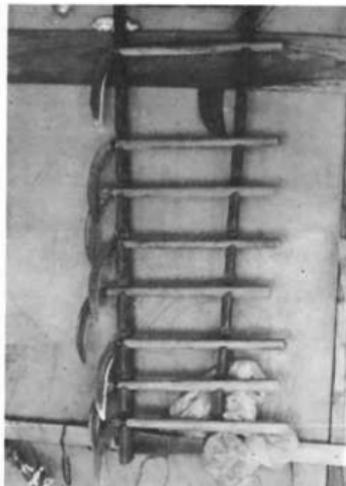
こすり。左が古いもの(赤岩)
(関口正巳 撮影)



タコスリ (萱野) (青木則子 撮影)



田こすり(赤岩)(関口正己 撮影)



農機具の置場入口にある鎌の置物(下中森)
(金子鎌一郎 撮影)



鎌。右から草取り、オカゴの草取り、山刈り、
草刈、砥石、荒砥。(上五箇)
(関口正己 撮影)



イネカリガマ(天神原)
(青木剛子 撮影)

鎌用途によっていろいろあり、それをきちんと整理していざというときにすぐに使えるようにするのも農民の心がまえの一つであろう。下

ウともいうという報告があった。(萱野)
田の草とり用。明治四十三年以前に使用。
材質、歯、鉄、歯の台は木、柄は竹製。法量
歯 幅〇、八cm、長さ六cm、歯四本、先が
とがっている。台 幅六、七cm、厚さ五、
八cm、長さ九cm。柄 径三cm、長さ二三二
cm。(萱野)
ネコツケタガヤシ ゲンゴロウともいう。
タコソリの改良型で田の草とりに使用。材
質 歯鉄製、柄木製。法量 歯〇、四cm、
長さ三cm、歯のつく部分の幅六、五cm、長
さ三十四、五cm、柄 径二、三cm、長さ一
七二cm、歯の数十九本。(萱野・天神原)

中森での所見はその見本のようなものである。草刈り・山刈り用のものはいわゆる鎌で、後者は刃が少し短か目でも厚く鍛えてあって、少しぐらいの木や篠でもびくともしない。稲刈り鎌は、のこぎりのような刃をつけて形がちがっている。これら鎌の古くなったものは除草用に使われることもあるが、除草用につくられた柄の短かい、刃のついでているような鎌もある。
稲刈り鎌 稲・麦刈りに使用。材質 歯は鉄、柄は木製。右手で持つと、刃先が内側にそっている。
法量 刃 幅二・二cm、長さ一七・五cm、厚さ〇・二cm、柄 長さ十八cm。(天神原)
鎌の使い方 山刈り鎌は、ヨシの上の方をつかみながら下から刈るのに使う。
草刈り鎌は、田のあぜなどの狭い所はつかみ刈りで、広い所や牧草などはナゲ刈りをする。
草取り鎌は草刈り鎌の減ったものを使い、点々と生えている草を根元



ムギコキ台 (萱野) (青木則子 撮影)

から削り取る場合に用いる。ジッカ(一面)に生えている草は草かきでけずる。草取り鎌で草を取るのを拾い草という。
おかほの草取り鎌は小型で、おかほの間に生えた草を削り取る。砥石はアラ砥とふつうの砥石とあり、先の方をつかんで本の方を鎌の刃にあててとくと手を切らない。(上五箇)

(二) 収穫調整用具

麦の脱穀 明治末から大正初年にかけてのころまでは、麦ふち(脱穀)のときには、サナとカナゴキを使った。小麦はサナで、四尺巾の二間の長さのサナに四・五人が並んでやった。人数が多いときは二台並べたか



カナゴキ (萱野) (青木則子 撮影)



ら見事だったという。大麦はカナゴキを使う。フリ棒を使って叩いて落すのもあったが、牛車でやったこともあったという。サナは現在では、牛などの飼料や、その他の農具などを置く台になっていたり、小屋の天井裏に上げられて台がわりに使われている。カナゴキは、種籾をとるのに使う程度で消えてゆく運命にある。牛車を使ったというのは記憶だけで、現物は残っていない。その後足踏脱穀機が入ってきてどこの家でも買入れたが、昭和になって石油発動機を使っての動力脱穀機となり、さらに戦後にはモーターを利用し、最近では全自動の小型コンバインの使用もはじまった。

ムギコキ台 麦を脱穀する道具。材質 歯は竹、台は木製。



カナゴキ (瀬戸井) (阪本英一 撮影)



法量 幅三十九cm、高さ九十二cm。歯 径一・九cm、長さ三十四・五cm、先をななめにそく。歯の数十九本。(萱野)
 カナコギ 種の脱穀用具。材質 齒 鉄、台は木製。
 法量 幅五十cm、長さ一一二cm、高さ七九cm。歯幅一・一cm(一本)二十五本、三十一cm、長さ二十一・五cm。(萱野)

フリボウ 麦をこなす道具。フリボウで麦をこなすことをボウゴナシという。脱穀したものを土間に干して、かわいてから、二十俵を五六人で約三時間かかる。材質、ボウは杉、カシラ(ケルリ)はカシ、柄は竹。カシラは棟屋から買う。

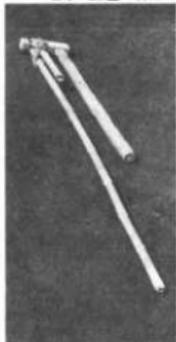
法量 幅二十cm、長さ一四三cm。ボウ、径四・六cm、長さ七六cm、カシラ 幅三・五cm、高さ四・五cm、長さ二十cm、柄 径二・九cm、長さ一四三cm、カシラをはさみ繩でしぼる。(天神原)

は竹(もうそう)だけでない方がよい。もうそう竹はコバがあるので落ちが良いので、種のノゲモンをこなすのにも使い、仕上げ用。もうそう竹を割ったもの四枚あわせて二カ所を針金でしぼる。アタマは棟屋につくってもらう。大勢でやるときはアタマを沢山買っておいて、こわれるとすぐ取り替えて遊ばせないようにした。

法量 幅二十cm、長さ一六八cm、ボウ、幅四・一cm、長さ八十二cm、厚さ(一枚)一・五cm、アタマ、幅四・五cm、高さ、四cm、長さ二十cm、柄長さ一六八cm、折りかえし三十八cm、アタマを回転させる部分をはさ



くるり棒(ふり棒) 麦や豆の脱こく用(赤岩) (関口正己 撮影)



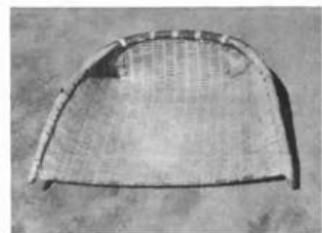
フリ棒(天神原) (青木則子 撮影)



フリボウ(萱野) (青木則子 撮影)



麦フリイ(萱野) (青木則子 撮影)



み(萱野) (青木則子 撮影)

み繩でしぼる。(萱野)
 麦フリイ フリボウでたいたあとを麦をふるう。三本の足でつってふるう。材質 枠は木、ふるいの部分は竹と金網。安政六年の銘がある。
 法量 幅四十三cm、長さ八十二cm、高さ十四cm。(萱野)
 み 板木県はじから、米のとり入れ前に売りにくる。材質 竹と藤の皮。桜の皮。竹を横、桜皮を縦にして編み、ふちを藤の皮でまく。幅六十八cm、長さ五十五cm、高さ十六cm。(萱野)
 とうみ 麦や米、大豆などを脱穀した後で、ノギヤシイナ、設などをとり除くには、原始的な方法では自然の風を利用したが、中国から伝わ



ほしもんひろげ (新福寺)
(阪本英一 撮影)



干し物ひろげ
稲もみや麦をひろげて干す
(赤岩) (関口正己 撮影)

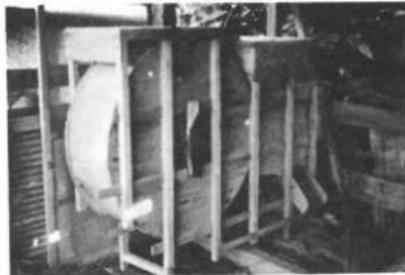


ほしもんかえし (上五箇)
(井田安雄 撮影)



穀よせ
干した穀物を集める時使う
(赤岩) (関口正己 撮影)

ので唐箕も物置きの際に追いやられている。ほしもんひろげ その名のとおり糠や麦などをむしろの上で天日乾燥させるときに使用するもので、同じものは全国的に広く使われている。上五箇からはほしもんかえしという報告があったが、一度ひろげては



とりみ (上五箇) (井田安雄 撮影)

たもので唐箕といわれるのを使用するようになって能率が一変した。右手で把手をまわして風をおこし、上の口に入れた糠などを調節板で調節しながら少しずつ落ちてやると送られてくる風力で選別されて手前の口から良い糠が落ち、反対側の風の出口に近い方からは二番が出る。前の口からはわらくすや実の入っていないシイナ、穀などが吹き出されて選別ができることになる。現在は全自動脱穀機などを使用しているが同時に選別してしま

ながら、日中上下を入れかえるようにして乾燥むらをなくすときにも使われるのでこの名がついたようだ。ほしもんをするときは、庭に麦などの穀物をしてからむしろを敷くので、むしろをしまうときには穀も片づける必要がおきる。そのときは、雪国の雪かきのような、カラヨセが使われる。豆板こなし 金肥の使用がさかんに、大陸から豆板の輸入がさかんに行なわれるようになると、こまかく砕いて肥料として使用するため道具かくふうされた。豆板をはさみこみ、腕木を上下して鈍のような刃でけずる式のものである。

(三) 糞蛋・染織用具

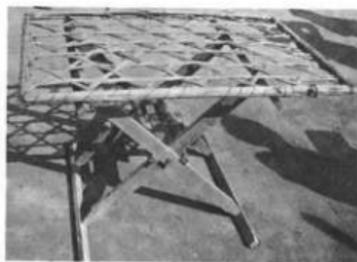
糞蛋用のかご 大かごは長さが六尺(一・八メートル)あって不便だったので、ハンカゴが次第に使われるようになった。大かごの半分というもので、八畳の間に三列、十段の棚をつくり、三十枚を入れられるのでよく利用された。大正十二、三年ころになると、秩父など山の方から藤でつくられたニゴサンゴというかごを買って使うようになった。二尺五寸と三尺五寸というもので、八畳間に四十枚入れられた。糞室をつくる人はなかつたからこれらがぐあいがよかつたという。かご台 家の中に棚をつくって糞蛋するには、給桑や除沙などの作



豆板こなし (赤岩)
肥料用の豆粕をけずる
(関口正己 撮影)



干した麦をかきまわす農具 (下中森)
(都丸九十一 撮影)



かごとかご台 (瀬戸井) (阪本英一 撮影)



しのかご (瀬戸井)
(阪本英一 撮影)



かご台 (瀬戸井)
(阪本英一 撮影)



稲刈り台
水田の稲を刈ってしぼる時使用する。
(給桑台を利用) (上五箇)
(関口正己 撮影)



煤炭作り 養蚕用の煤炭を作る（赤岩）
（関口正己 撮影）



桑切り包丁（上五箇）（井田安雄 撮影）



わたぶるい（上五箇）（井田安雄 撮影）



桑切り機（下中森）（金子隼一郎 撮影）

業をするための台の上にかごをのせなければ能率が上がらない。そのためにつくられたかご台であるが、農耕用にも利用されていることが上五箇から報告されている。これを利用すれば湿田の中でも畑をしばる作業がうまくゆくはずである。

桑切りはうちょう 桑切り機 昔の養蚕方法では、桑は切り刻んでくれるのがよいといわれ、養蚕期には、特別製の大きなほうちょうを使って、壮蚕期になると桑切り機を使った。

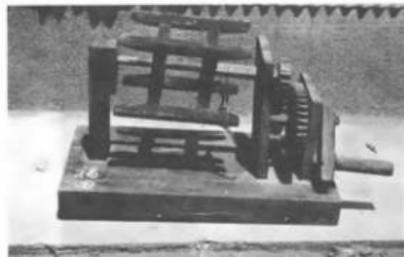
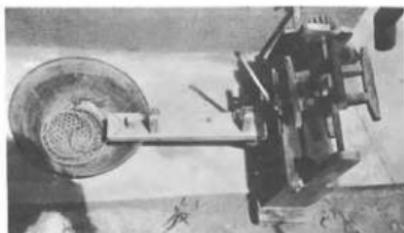
たどん作り 養蚕用の煤炭を作るのに、昭和初めころは、ネバ土（粘土）で石炭の粉をこねて容器に詰め固めて自家用を作った。八寸用、四寸用とあり、各直径二センチ、一三センチとなっている。（赤岩）

わたぶるい わたをとってきて、これでふるいかけた。（上五箇、家中勝春氏所蔵）

ワタクリ 法量 幅二十・八cm、長さ六十一cm、高さ三十三cm。（萱野）
中野もめで有名だったこの近辺は、古くから綿つくりがさかんで畑から摘みとってきた綿から実をとり除く作業にワタクリを使うので、ほとんどの家があったようで、戦時中から戦後にかけて再度さかんに利用されたものだといふ。

キヌタ 繩をなったりするときには、わらをたたいて加工しやすくするためにわたたきが必要になる。輪切りにした木の柄をにぎれるようにしたもの、または穂の大きいものを使用する。キヌタとよぶが、一部は木綿も打ったといふ。

糸車 農閑期の婦人の仕事として館林の織物屋の下請け、賃機がさかんに行なわれ、中野がすりの伝統をうけついでこの地方は、それに関係した道具を多く残している。瀬戸井所見の座繰りは、最近まで使用したとみられるもので、まゆのすくい網、つづみ車ともにそろっている。糸のまき返しに使うグルメキ台、糸を紡いだり、タダに巻きとったりするための糸車もいくつかあった。赤岩のものは美しくひもで編んだ車であり、瀬戸井所見のものは、車に糸を使用しないでつくられていた。



座繰り (以上4点、瀬戸井) (阪本英一 撮影)



糸車

座繰りとグルメキ台

グルメキ台

(三点とも赤岩) (関口正己 撮影)



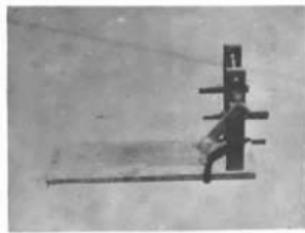
糸車 (瀬戸井) (阪本英一 撮影)

わらすぐり 俵を編み、まぶしをつくり、なわをなうには、わらをそのまま使うのではなく、わらしべといわれるものをすぐりおとさなければならぬ。少量ならば手でとれるが大量の場合には道具が必要である。そこでわらすぐりが使用されるようになった。カナゴヤの歯をそのままばらして間をあけて植えつけたようにして、つくったもので、わらの穂

四 その他の生産用具



ワタカリ (萱野) (青木剛子 撮影)



わたくり (瀬戸井) (阪本英一 撮影)



綿くり機 (赤岩) (関口正己 撮影)

の部分をにぎってこくようにすれば、わらすぐりがかんたんにできる。最近ではわざわざいくの必要もなくなつて急速に姿を消しつつある。編すり わら繩のケバを落として、俵をいわせるために使う繩を作るが、長さ二七センチ、直径一七センチほどの太鼓様の筒を二〇メートルくらい離して杭を打って吊るし、二十〜三十本の繩を縦によつて掛けて、男衆が二人でよいしょよいしょと引き合う。繩と繩がこすれてケバがとれる。(赤岩)

マブシオリ機 ワラマブシを折つて作るようになったのは、昭和初期で昭和十二年二月吉日に新調と書いてある。(赤岩)

俵あみ 明治時代のもので、ふたまたになつてゐる木を二つ割りにしてこれに横木を通してつくつてゐる。おもりは、古くは石を使用しており、その後木や他のおもりを使うようになってゐる。(瀬戸井)

俵の形式が変わると、俵編みも変わる。三種あり、①長さ一一三センチ、高さ四四センチ、②長さ一〇八センチ、高さ四八センチ、③長さ一一九センチ、高さ三七、五センチ。冬のわら仕事として以前は盛んだったが、最近では米袋になつたので作らない。俵ベシ(さん俵)を作る台も大小二種ある。(赤岩)



キスタ 木綿も打つたという(下中森) (金子謙一郎 撮影)



キスタの穂 (上中森) (近藤義雄 撮影)

俵を編む台。材質 木、脚は二又の木を使用。四カ所に繩をさげ、一つおきに編む。
 法量 幅一五七cm、高さ四十八cm、俵の幅九十七cm。(萱野)
 さん俵編み 俵の上下にあてて繩でとめてふたとするサンダワラ(タワラベシ)を編むのも冬季の仕事。大きさを一定にするために台が型を



俵あみ (瀬戸井)
 (阪本英一 撮影)



タワラアミ (萱野)
 (青木則子 撮影)



俵編み台 (赤岩)
 (関口正己 撮影)



俵編み台 (赤岩)
 (関口正己 撮影)



俵ベン(さん俵)を作る台 (赤岩)
 (関口正己 撮影)

きめており、中央にある小さな突起がサンダワラの中心となる。赤岩報告のこれは複式用とのことで、径三三センチ、高さ一〇センチ、総高は二一センチにおよんでいる。(赤岩)
 押し切り 馬や牛を飼っているころは、カイバを切るのもひと仕事であった。押し切りは早くから使われ、少し大きくなった子どもの仕事に



わらすぐり わらしべを取る(赤岩)
 (関口正己 撮影)



繩すり あら繩のケバをすり落す
 (赤岩)(関口正己 撮影)



繩 (萱野)(青木則子 撮影)



まぶしおり機(赤岩)
 (昭和12年新調)(井田安雄 撮影)

なったりしたが、昭和初年ころ普及したカイバ切りは一段と能率的になった。押し切りは、養蚕時に桑を切るにも使われる例もあった。

三 運 搬 用 具

田舟 田舟は太工さんにつくってもらった。

最近排水がよくなったので不用になったが、以前は湿地だったので稲刈るときには、これをひいて、稲の束を一つかみずつまるめて、この中に入れた。また、田植のときに、苗をはこぶのにも、田舟をつかった。田舟はこの家にもあるとはかぎらなかった。ない家では、ある家でかりをつかった。

田舟はたて一三二センチ、横七七センチ、高さ二〇センチほどの大きさで、どこの農家にも二、五艘はあった。昔はドブツタだったので、苗の運搬や、刈った稲をのせて束ねたりするのに使った。ヨツ（結束の縄）や鎌を舟に入れて置き、上にヨツを敷いて刈り稲をのせてしばった。三、四束のせると引っぱってあせ道に出す。あまり重いと底がつかえて動かない。今は排水ができるので、結束にはビニールを敷けばよい。



おしぎり (上五箇) (井田安雄 撮影)



手押し切り かいばのわらを切る。(赤岩) (関口正己 撮影)



かいば切り (赤岩) (関口正己 撮影)



田舟 (赤岩) 132×77×20cm (高さ) 苗の運搬や、刈稲を束ねる (関口正己 撮影)



タカリブネ (天神原) (青木則子 撮影)



田ぶね (下中森) (金子隼一郎 撮影)



天秤 (下中森) (都丸九一 撮影)

から田舟を使用しなくなった。田植えにはまだ使用する。(赤岩) タカリ舟 稲刈り、苗ちらしに使用。材質 木。太工が作る。稲刈りでは二束くらいたまると運ぶ。二人用。 法量 幅 八十四cm、長さ一五一cm、高さ十五cm。(天神原) てんびん 千代田村は山がないので山村のような背負い台がない。大八車や馬を使うほかは、人々は肩で担いだもので、それにはてんびん棒が活やくしたはずであるが、油等を用いたという報告だけであった。 馬の鞍 かつては一人前の農家の一つの象徴であり、農耕の重要な部分を担当した馬も姿を消した現在では、荷鞍も乗り鞍も消失し、わずかに二例だけの報告があった。萱野のものは田の耕作作用に使用したものの一



テゴと天びん棒 各径65, 55, 50, 45 cmと差をつけて
組合わせる。天びん棒は長さ182 cm (赤岩)
(関口正己 撮影)



テゴ (天神原) (青木則子 撮影)



馬のくらと台 赤岩 (関口正己 撮影)



馬のくら (堂野) (青木則子 撮影)



牛のわらじ (中島) (阿部 孝 撮影)



牛のロゴ (中島) (阿部 孝 撮影)

部であり、赤岩のものは運動につれ出すときの乗り鞍である。鞍をのせておくための手製の台が興味をひく。

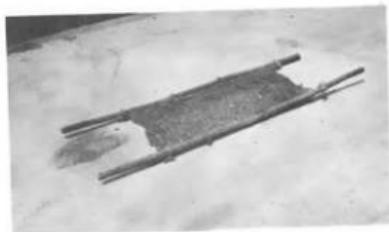
テゴ コゼ繩(細繩)を使って、テゴというモッコのような容れ物を編む。芋、駄肥えなど運ぶのに使う。大中小と大きさを変えて、ふだんは中へ容れて積み重ねて置けるように作る。いずれも高さは二十七センチほどだが、直径は、六十五、五十五、五十、四十五センチというように違えている。吊り手をつけて、天秤棒で担ぐ。天秤棒は長さ一八二センチ、太さ径五センチほどの棒を使い、止めが二個ずつ付く。

テゴは俵編み台の、右半分を使って編む。(赤岩)
細かい堆肥を運ぶ。イモホリなどにも使用。材質はわら、自分で作る。俵編み台をつかって米俵と同じ大きさに編む。編み方を俵編みという。繩を底から十字にまわして持手にする。

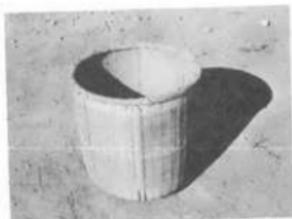
法量 口径五十 cm、底四十 cm、高さ三十六 cm。(天神原)
テモッコ 堆肥をのせて二人で運ぶ。牛小屋から出した堆肥をコヤシマンノウでかえしてホータでテモッコにのせる。おかぼを植えるとき、一段で十モッコ必要である。材質、わら、かつく棒は松。八寸の一本繩で編み、棒との間に竹を通す。直接棒を通すとすれて切れやすい。



ザマ (萱野) (青木則子 撮影)



テモッコ (天神原) (青木則子 撮影)



はだかじやる (上五箇) (井田安雄 撮影)



テボウキ (中島)
(中村和三部 撮影)



サヤラ (中島)
(中村和三部 撮影)

法量 幅七十七cm、長さ一九〇cm、堆肥をのせる部分の幅六十七cm、長さ一〇五cm (天神原)
 コシゴザル スリボウでこすって、アンコをこす。材質 竹、皮竹、うらがえし (内側が皮竹になる)。底 径十二cm、幅〇、六cm、二本合せの網代編 (二、二)、立竹になる。〇、二cmの幅み竹で胴部を編む。底に十文字に力竹 (皮竹) をかける。(萱野)
 はだかじやる (はだかざる) もみとかまゆなどをいれた。まゆだと二貫匁くらいはいった。(上五箇)



右アゲザル、左コシザル (萱野)
(青木則子 撮影)



コノメザル 2種
大ザルはマユ1貫目入り。(赤岩)
(関口正己 撮影)



ザル各種 (右) 肥えざる (中) 桑ざる (左) 切り桑ざる (赤岩)
(関口正己 撮影)



真鍮はかり (杉戸義家) (上中森) (丑木幸男 撮影)



矢立て (左上) と 坪り (右下) (下中森) (金子輝一郎 撮影)



一斗ます (上五箇) (井田安雄 撮影)



一斗ます。明治16年の墨書がある。(上五箇) (関口正己 撮影)



俵口 (左) 一斗ます (右) 一斗ますは明治19年の墨書 (上五箇) (関口正己 撮影)

アゲザル 米の水を切るざる。大泉の社日様で買う。材質 竹(身竹)。法量 底径二十五cm、径十七cmは割代編(二、二)、それが立竹(幅一、三cm)になる。幅み竹は〇・三cmの身竹のざる編、口径三・二cm、一、三cmの身竹による巻口仕上げ。底に十文字に力竹をいれる。高さ二十二、五cm。(萱野)

ザマ 桑カゴ。六つ目の籠の内側にもうひとつ重ね、箆日の箆を作りつけにして編む。現在は、台所で使うクスマ葉を入れる。(萱野)

こやしじやる これにつなをかけて、女衆がかかえてつくった。はたけのさくいだこい(堆肥)をひっこむときにつかった。(上五箇)

テボウキ テボウキの葎草はモロコシ、若藪の皮紐で編んでつくる。冬仕事にまとめてつくっておく。台所や作業場の土間をはくの用に用いる。(中島)

ササラ ザルやカゴなど竹製の用具を洗うの用に用いる。(中島)

四 交易に関する用具

はかり 穀類でも、綿でも、量のほかに重さをはからねばならず、そのためにはかりも多くの家があったと思われるが報告は少なかった。上中森の杉戸義家のは真鍮はかりで、その使われ方については明らかになっていない。下中森の例は、小さいはかりで、これを腰にさして歩いたセリの商人たちを想像させるものであり、皮袋つきで、一緒に矢立てが報告されているのも裏づけているようである。

一斗ます 穀類をはかるのに用いた斗罎は、上五箇から三例報告されたが、明治十六年と同十九年の墨書のある二例は旧式の金盤罎で、縁に鉄の補強がされ、斜の角棒も入っている。円型のものはそれよりも新し



検地の測量台（上五箇）
 総高 93.5 cm
 盤 36.5×36.5×7 cm

（関口正己 撮影）

いもので、ひかく的最近まで使用されたものである。

儀 口 殿頭を俵に入れるとき、直接やったのでは不都合が多いので、竹製のヒョウダチを利用した。これは麻袋を使うようになってもべんりなものである。これも上五箇から報告されている。（上五箇）

検地の測量台 上五箇から報告されたものであるが、いつ、どこで、どのように使用されたかは明らかでなかった。しかし脚が一本で固定され、十文字につけた接地部に釘をつけて地面に固定するものである点に興味をもった。察するに検地とはいっても明治初年の地租改正正当時に用いられたものであろう。（上五箇）

五 社会生活に関する用具

祝い樽 かつては婚礼やその他の祝い事には、ツノダルとかイワイダルといわれる酒樽を二本結びあわせて贈ることが行なわれた。そのころには、一般家庭の中でも用意しておいた家もあったが、朱塗りの祝い樽は萱野と瀬戸井で報告された。瀬戸井の方がやや古く、型も大きいものであった。



祝い樽（瀬戸井）（阪本英一 撮影）



祝い樽（萱野）（青木田子 撮影）

ほかい（行器） これは祝儀、不祝儀の際に餅、赤飯等を入れて近親者が贈るとききの道具であり、上五箇からの報告では新築の祝いに餅を入れるとあり、下中森では「香典かえし」に餅がこの中に入るとある。また瀬戸井や新福寺では「おねんぶつだま」を入れるといわれた。こうした点から関連のある事例として上げられるのは、葬式の際に出す香典は、現在では印刷されている「御霊前」ですませているが、以前は「行器」と書いていたことが多かったという話もあり、ひかく的の多かった葬式に関連して利用されたものとみられる。

このほかえは、おぼえては親戚の法事るときに、もち（あんびんもち）を入れてもっていった。同じ大きさのものを二つもっていった。二つで一斗分ぐらいははいる。（上五箇・吉水利雄氏所蔵）

はさみ箱 これは明治前後のもので、嫁に行くときに目録などをいれて、祝いだると一語にかついでもっていった。これをかつぐものを、お

ともといった。(上五箇・吉永利雄氏所蔵)
足踏式消火器 竜吐水よりも進歩した消火器で、
という。 屋根まで注水できる

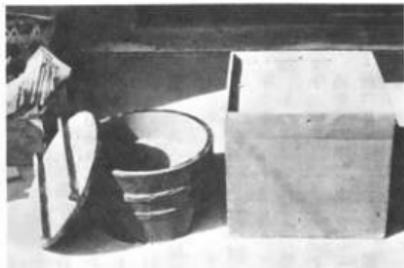
竜吐水 江戸時代に発明され、しだいに一般化して備えられた消火器



竜吐水 (上五箇) 明治15年2月吉日の墨書がある。東京浅草花川屋住倉家製 (関口正己 撮影)



ホラ貝 (杉戸義家) (上中森) (丑木幸男 撮影)

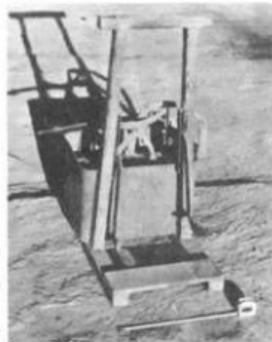


ホカイ 新築祝いに鉢を入れる (上五箇) (関口正己 撮影)



ホケイ (森田保次家) (舞木) (丑木幸男 撮影)

で、明治十五年二月吉日の墨書があり、東京浅草花川戸住倉家製のものである。
ホラ貝 村の集りや、行事の合図をするには新福寺のように寺の鐘を鳴らしたところもあるが、ホラ貝もその一つとみられる。



足踏式消火器
高75cm 幅56cm×35cm
(上五箇) (関口正己 撮影)



魚形の楽器(?) (森田保次家) (舞木) (丑木幸男 撮影)



ハンダイ 上部の容器は下の箱に納められる (下中森) (金子謙一郎 撮影)

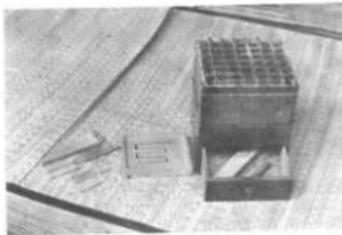
魚型の楽器 穴のあき方からみて笛らしいが、これにまつわる伝承は報告がなかった。舞木の森田保次家蔵のものである。

六 民俗知識に関する用具

香時計 舞木の森田保次家蔵のもので、これまで県内ではほとんど他に例をみないものである。上部に灰を入れておき、ふたをとって棒をあてて香をまくと、一定の形に一定量がまかれるので、それが燃える時間が一定するので時計としても利用されたことから香時計といわれるという。(舞木)

オシラキ 神に供えものをするための器台で、舞木の長良神社にあったものが報告された。十二月ともなるとこうしたものを買って正月の用意をしたもので、お盆の用意としてカワラケを買う例とにている。(舞木)

三輪車 最近の子どもたちはほとんどが三輪車に乗るが、昭和初年ころは、一部の人たちだけのものだった。こうしたものは、こわれれば古



香時計(森田保次家)(舞木)
(丑木幸男 撮影)



オシラキ(長良神社)(舞木)
(丑木幸男 撮影)



三輪車、昭和初期(赤岩)
(関口正己 撮影)



竹馬(下中森、遠藤正雄氏方)
(都九九十一 撮影)

物屋さんが処理したのであまり残っていないが、赤岩で一例報告された。

竹馬 下中森の遠藤正雄氏方所見のものは、足をのせる部分の下に、斜に三角になるようなささえの棒を入れ、足の部分には縄をまきつけて仕上げをするなど、きわめていいいにつくつてある。子どもの遊びの竹馬は一年中やれるが、秋から春先にかけてが特に時期だった。

(資料)

上五箇村外四ヶ村村誌

(上中森 小池清彦氏蔵)

上野国邑栗郡上五箇村
上野国邑栗郡上中森村
上野国邑栗郡萱野村
上野国邑栗郡木崎村
上野国邑栗郡瀬戸井村

誌料編輯有志賛者

群馬県上野国邑栗郡上五箇村外四ヶ村村長

身分 平民

関口佐太郎 履歴

慶応元年一月ヨリ明治五年一月マテ進藤又治ニ從ヒ支那字ヲ研究ス 全九年二月四日栃木県ヨリ第拾一大区九小区萱野村用掛申付ラル 全九年九月九日群馬県ヨリ第拾三大区八小区萱野村瀬戸長申付ラル 全十三年二月廿五日萱野村忍耐学校学務委員当撰認可セラル 全十一年十一月一日萱野村用掛申付ラル 全十五年一月廿四日邑栗郡第拾学区学務委員兼務申付ラル 全六年六月十二日依頼学務委員差免サル 全十七年三月廿四日萱野村戸長申付ラル 准十七等 全日戸長ヲ以テ学務委員申付ラル 全六年六月三十日戸長役場区域改正ニ付戸長解職 全八年八月十五箇村外四ヶ村用掛申付ラル 全十八年一月職務勉強勸ニ付慰勞金七拾五錢給与セラル 全四年四月三十日上五箇村連合戸長申付ラル 准拾七等 全九年九月七日教育令改正ニヨリ学務委員被命 同十九年一月七日職務勉強ニ付慰勞金也

円給与セラル 全十年十一月三十日准判任官十等トナリ 全廿一年三月職務勉強ニ付慰勞金六円給与セラレ現ニ在職ス

群馬県上野国邑栗郡上五箇村外四ヶ村村長

身分 平民

小林弥次郎 履歴

文久四年一月ヨリ明治七年七月マテ杉戸大角ニ從ヒ支那字及ヒ国字ヲ研究シ 全十八年八月本部下中森村公立小学校授業生申付ラル 同十五年六月十五日依頼解職 全九年九月十五日石狩国札幌神社主典ニ任セラレ全日ヨリ全十七年一月マテ渡島国函館八幡宮々司大貫真浦ニ從ヒ国字ヲ研究ス 全月廿一日依頼本官ヲ免セラル 全十八年五月廿二日上五箇村外四ヶ村村戸長役場兼生申付ラル 全十九年三月廿四日 全十九年三月廿四日館林町外八拾六ヶ町村連合会議員就職 全廿一年二月廿七日辭職ス 現ニ上五箇村外四ヶ村村戸長役場兼生在職

埼玉縣武蔵国北埼玉郡上中条村産

身分 平民

松本待之助 履歴

安政三年一月ヨリ文久元年一月マテ中村孫兵衛ニ就キ支那字ヲ修業シ 全三年三月ヨリ元治元年五月マテ寺門静軒ニ從ヒ支那字ヲ研究シ 明治二年八月ヨリ全四年一月迄吉田六三郎ニ從ヒ支那字ヲ研究シ 全二年二月ヨリ全六年十一月マテ森左司馬ニ從ヒ国字ヲ研究シ兼テ韻字ヲ修ム 全八年十一月栃木県師範学校ニ入校シ 全九年六月六日教則全科卒業 全十年十月栃木県ヨリ都賀郡小来川公立小学校教五等訓導ニ嘱任セラル 全十年十月依頼解任トナリ 全十一年一月廿一日埼玉県ヨリ幡羅郡妻沼村公立小学校長兼三級訓導補嘱任セラル 全十三年四月廿三日依頼解任トナリ 全十五年十二月廿二日埼玉県児玉實美郡那珂郡役所雇申付ラル 全十七年五月廿日依頼願差免サル

上野国邑栗郡上五箇村

沿革

建置 不詳

名称 称呼ノ因由詳カナラサレドモ建置以來上五箇村ト称ス
所属 上古不詳 中古ヨリ邑桑部佐實莊ニ隸ス 寛文元年ヨリ館林鎮
ト云フ 明治元年九月岩鼻縣ノ管轄ニ屬シ 全四年二月館林藩ノ管轄ニ
屬シ 全年七月館林縣トス 全年十一月栃木縣ノ管轄ニ屬シ 全五年四
月第六拾九區舞木村御用取扱所ニ屬シ 全六年三月第八大区九小区全所
ニ屬シ 全年八月第拾老大区九小区全所ニ屬シ 九年四月十日第四大区
十二小区須賀村御用取扱所ニ屬ス 全十一年十一月十二月邑桑部役所ノ
管理ニ屬シ 郡区編制ノ令ニ拠リ上五箇上中森下中森ノ三ヶ村ヲ連合シ
テ戸長役場ヲ上中森村ニ置ク 全十三年十二月分離獨立シテ戸長役場ヲ
本村ニ置ク 全十七年一月上五箇上中森菅野木崎瀬戸井五ヶ村ヲ連合シ
テ戸長役場ヲ本村ニ置ク

管轄 古昔不詳 寛文元年ヨリ天和二年マテ館林城主宰相右馬守綱吉
之レヲ管ス 後(年歴不詳)四分シテ一部ハ徳川氏ノ直轄トナリ代官某
之レヲ支配シ、其他ノ三部ハ旗下柴田七郎兵衛・奥山水馬・布施孫兵衛
ノ採地ニ屬ス 明治元年ニ至リ徳川氏直轄ノ分代官木村甲斐守替テ支配
シ同年九月岩鼻縣ノ管轄トナリ 全四年二月館林藩ノ管轄ニ屬シ 全年
七月廃藩置縣 館林縣ノ管轄トナル 全年十一月栃木縣ノ管轄ニ屬シ
全九年八月九日更ニ群馬縣ノ管轄ニ屬シ 全十一年十二月邑桑部役所ノ
管理ニ屬ス

位置 疆域

位置 部ノ西南ニ位ス
東 上中森ニ接シ里道及田畑畦畔ヲ以テ界トス
西 瀬戸井村ニ連リ里道及田畔ヲ以テ界トス
南 武蔵国北埼玉郡酒巻村及下中条村ト相對シ利根川中央ヲ以テ界
ス

北 菅野村ニ連リ惡水鎌田堀南堤及田畑原野ノ畦畔ヲ以テ境セリ

幅員

東南 拾老町拾間
南北 拾三町五間
周回 老里貳拾七町拾七間
面積 四拾六万貳千九百六拾七坪

地味

色 薄赤
質 粗惡ニシテ砂石ヲ混セリ
適種 米麦大豆小豆木綿桑蕎麥藍等ノ類ナリ

地勢

水脈 利根川ハ瀬戸井村ノ南端ヨリ来リ本村ノ南ニ沿ヒ東流シテ上中
森村ニ入ル 舟楫ノ便アリ且ツ本村ノ中央ヲ貫流シテ東上中森村ニ入ル
之レヲ休泊堀ト称ス 則本村ノ用水ナリ

東部 田圃接続シ点々民家アリ

西部 田圃連亘 民家散在セリ

南部 利根川ニ沿ヒ用圃相連リ堤塘其中中央ヲ貫キ民家接続ス

北部 田畑相連リ東端ニ多少ノ原野アリ

全地形勢 地形立帽子ニ彷彿タリ 関村平垣ニシテ南境ニ利根川ヲ帶

ヒ 降雨暴漲ニ際シ決堤汎濫ノ憂アリ 本川ノ堤塘東西ニ亘リ又中央ニ

休伯堀東流ス 然レトモ水量常ニ淺クシテ為メニ夏候糞水ノ欠乏ヲ告ケ

ル比年ノ如シ 北部ハ底地ニシテ降雨毎ニ惡水溢溜ス 其害亦尠少ナラ

ス

字 地

筆数

氏子 百拾貳戸
末社 山王社 淺間社 湯殿社 八幡宮 神明社 八坂社 三橋神社
現任宮司若クハ祠官 祠官 高橋英 祠掌 南室博

權現 權現通 九町四反六畝廿七步 百四拾八
大塚 大塚通 七町三反五畝拾五步 百拾五
鎌田 かまだ前 八町五反四畝 貳步 百七拾四
中道西 五町貳反貳畝貳拾貳步 百〇五
山王 山王北 七町九反四畝拾五步 百〇貳
福田 福田前通 六町 四畝拾八步 百拾六
石頭 (石頭堀南) 九町貳反貳畝廿九步 百四拾六

寺院
医王山 長性寺 坪數 八百六拾坪
所在 上五箇村字駒形
宗派 真言宗 寺格 当郡瀬戸井村宝生寺末
開基人名 僧雄等
開基年月 寛永十四年丁丑三月廿四日
現住ノ姓名 長柄行将

北田頭 (山王北) 拾老町四反六畝拾九步 百八拾九
中道東 七町六反四畝拾三歩 百貳拾六
山王東 山王北 七町 八畝拾八歩 百四拾三
砂田 三町三反 廿五歩 九拾五
悪途 九町七反歩 百五拾

雜項 里言ニ曰ク本寺ハ寛永十四年丁丑三月廿四日 僧雄等ノ開基ニ
係リ元全郡上中森村ニアリシヲ(年歴不詳)本村ニ移転セル所ニシテ堂
宇可ナリノ造営ナリシガ 嘉永四年十二月廿日祝融ノ災ニ罹リ堂宇並ニ
諸職物悉ク烏有ニ掃ス 後檀徒金ヲ醴シテ僅カニ一棟ヲ建ツトルト雖モ
未完全ノ堂宇ヲ建造スルノ期ニ至ラス

駒形 (駒形通) 貳拾三町七反貳畝廿六歩 四百貳拾六
戸長役場 (休伯堀南) 明治十七年七月一日設置 上五箇村外四ヶ村戸長役場
所在 上五箇村字駒形
所轄町村 上五箇村 菅野村 木崎村 瀬戸井村 上中森村

道路

足利道 長 拾老町貳拾九間 瀬戸井村ヨリ字鎌田ヨリ来リ 武藏国北埼玉
等級 里道老等 幅 貳間

郡酒卷村字堤外ニ至ル 形状 險所登降トカク南部ニ三四ノ屈曲アリテ中央休伯渠ニ土橋一ヶ
所ヲ架ス

神 社
愛宕神社
所在 上五箇村字大塚
祭神 火靈彦命
社格 村社

創建年月 不詳
祭日 三月廿四日 六月廿四日 九月廿四日
雜項 南武藏国北埼玉郡酒卷村ヨリ利根川ノ津頭ヲ経テ本村上川岸ヨ
リ西部ヲ屈曲北折シ西北隅ニ至リ瀬戸井村ニ入ル 本線ハ下野国足利町
ヨリ武藏国行田ヲ経テ中山道ニ出ツル要路ニシテ車馬ノ行通ニ便アリ

中道

等級 里道貳等

長 拾老町拾五間 瀬戸井村字中耕地ヨリ来リ上中森村字八幡上南

ニ至ル

幅 九尺

形状 平垣ニシテ中央ニ二ヶ所ノ屈曲アリ

雜項 瀬戸井村ヨリ来リ本村中央ニ於テ北ニ曲折シ又東ニ折レ東ニ走

リ上中森村ニ至ル 本道ハ館林町ニ通スル支線ニシテ行人類繁ナラザレ

トモ行路便易ナリ

堤 塘

利根川堤

長 拾老町五拾九間四尺 瀬戸井村ヨリ来リ上中森村ニ入ル

高 貳間四尺五寸

幅 馬踏貳間ヨリ三間三尺迄 敷拾三間三尺

雜項 瀬戸井村ヨリ来リ本村南隅ニ入り東ニ走リ東南隅上中森村ニ至

ル 抑本堤ハ徳川家康関東八州ヲ管スルニ方リ利根川ノ汎濫ヲ防ク為メ

文祿四年其臣奉行荒瀬彦兵衛 石川佐次衛門二氏ニ命シテ建築セシムル

所ナリ 西 古戸村ヨリ起リ東ハ下五箇村ニ至ル延長老方八千三百貳拾

九間ニ亘ル 之レヲ本堤ノ創設トス 後寛文年間徳川綱吉館林ヲ治スル

時大ニ力ヲ水防ニ尽シ堤防組合ヲ設ケテ防禦ニ供フ 然レトモ徳川幕府

治世ノ時ハ高輻制限アリテ自由ニ増築スルヲ許サス 是ヲ以テ數々決堤

横流ノ患害ヲ免レス 然ルニ維新已來政府大ニ力ヲ水防ニ用キラレ年々

地方稅ヲ以テ増築修繕セラル故ニ現時ハ頗ル堅牢トナレリ

渡 津

上川岸渡

所在 上五箇村西南北字悪途ヨリ武藏国北埼玉郡酒巻村字堤外ニ通ス

ル里道利根川ニアリ

廣 貳百貳拾老間

舟梁 馬船 貳艘 步船 老艘 合 三艘 深 五寸三寸(尺)

雜項 古昔不詳 今古ニ至リ武藏国北埼玉郡酒巻村慶品寺ハ上野邑栗

郡館林町善導寺ノ末寺ナルヲ以テ茲ニ私船ヲ備ヘ寺用ノ便ニ供セリ 是

ヲ渡津場ノ創始ト云フ 後人馬ノ行通頻煩トナルニ及ンテ本村ト調議シ

兩村ニ船守ヲ置キ以テ行人ニ便ス 而シテ現今ニ至レリ 已上徴スベキ

旧記ナク當ニ口碑ニ傳フルノミ

同 上

下川岸渡

所在 上五箇村東南隅字悪途ヨリ武藏国北埼玉郡下中森村字堤外ニ通

スル利根川ニアリ

廣 三百三拾八間 深 四尺六寸

舟梁 馬船 老艘 步船 老艘 合 三艘

雜項 創設不詳

湖 沼

切所池

所在 上五箇村字駒形ニアリ

周圍 六町拾九間四尺

面積 三千九百四拾三坪

水利 北辺ノ田數反歩ニ灌溉ス

雜項 元田圃宅地等ナリ 弘化三年利根川出水潰堤ニ因テ現時ノ池ト

ナル 鯉鮒鱧鯉アリト雖トモ物産トスルニ足ラス

人 物

故 龜田鶴斎小伝

先哲曰ク生時ノ榮名ヨリ死後ノ名声ハ真ノ名譽ナリト実ナル哉 夫レ
徳川氏施設ノ初メ數百年來擾亂相續キ所謂春秋ニ義戰ナキノ後ヲ承ケ父
教未タ興ラス 然ルニ藤林石川諸氏奮然シテ技シテ儒学ヲ稱セシヨリ已
降中葉ニ至リ儒ヲ以テ自ラ任スル者輩出シ治教大ニ隆興ス 然レトモ概
子朱學ノ新学ナリ 此時ニ當テ卓然古学ヲ称道シ国家ノ経倫ヲ以テ己レ
カ任トナシ其身ヲ榮枯ヲ顧ミザルモノハ抑何人ナルヤ 曠齋先生則其人
ナリ 先生氏ハ龜田名ハ長興初名ハ翼字ハ公龍又雅龍ト云フ 曠齋ト号
シ善身堂ト稱ス 幼名弥吉壯年福十郎後文左衛門ト稱ス 上野国邑栗
郡上五箇村ノ人ナリ 父名ハ安長初名ハ八十次後萬石衛門ト稱シ老年髪
ヲ削リテ運庵ト号ス 母ハ某氏山城ノ人ナリ 家世々農ヲ以テ業トナス
運庵少時ヨリ身ヲ立テ名ヲ成シコトニ志篤ク年廿餘ノ時江戸ニ出テ覽
甲職ヲ習ヒ夫レヨリ諸国ヲ漂流スル年アリ 終ニ京都ニ上リ居ルコト數
年廷臣某氏ノ勸メニ依テ妻某氏ヲ娶トル適々身ルアリ携テ郷ニ還リテ家
業ヲ營ム 宝曆二年十月四日ヲ以テ男兒ヲ奉ク 運庵大ニ歡ヒ奮然志ヲ
決シテ遂ニ家産ヲ親族某ニ譲リ畿カニ金一分取朱ヲ齎シ妻子ヲ携ヘテ江
都ニ出ツ 數日ニシテ義已に空シ偶々郷人某ニ遇テ資金一分ヲ借り馬喰
町ナル覽甲商長門屋某ヲ主トシ其職ニ從事シ漸ク進テ番頭ノ地位ニ至リ
神田舟邊橋辺ニ宅ヲ構ヘ猶長門屋ハ通動ス 会々妻病ヲ以テ歿ス 然レ
トモ男子アルヲ喜ビ頗ル辛酸ヲ嘗メ桂セス 後主家ノ店ヲ譲リ受ケテ家
業大ニ盛ナリ 然ルニ姦物ナル番頭アリテ三千兩餘ノ負債ヲ残シテ出奔
ス之レガ為メニ破産シテ非常ノ困難ヲ極メタリ 爾後漸ク商業ヲ販ヒ
節儉ヲ行ヒテ蓄財シ二分金ヲ葛籠ノ内ニ張込ミテ藏ス 曰ク吾兄修業ノ
費ニシテ学者ヲ作ル資本ナリト 遂ニ先生を金嶽井上純郷ノ門人トナス
是レヨリ先通庵困難中ニ居ルト雖モ兄ヲ教育スル最モ意ヲ要シ師ヲ選
ンテ読書習字等ヲ学ハシム 先生亦性聰明穎悟絶倫シト寝食ヲ課ルマ
ニ至ル 是レヲ以テ字大ニ進ム 此ニ至テ金嶽ノ門ニ入り名道ヲ修ム
ニ古学ノ旨ニ通シ後一家ヲ成ス 又諸国ノ歴道スル 独リ名山勝区ヲ探
クルノミニ非ス 心ヲ經濟ニ注キ風土民俗ヲ視テ考フル処アリ 後季粹

稲梁辨ノ著アル以所ナリ先生江都ニ還リ妻某氏ヲ娶リ男ヲ生ム 則緒漸
ナリ 其名クルニ方リ父通庵曰ク龜ハ頭尾四肢ヲ甲中ニ藏ス 故ニ六藏
ト云フ 然レトモ悉ク藏スルモ過キタル可レハ中ニ隠テ可ナラント則三
藏備新学ヲ創セシ以來経義不醇明清諸儒及国朝藤・物・諸氏之レヲ排擊
スト雖モ猶古道ヲ得スト慨然トシテ自ラ奮ヒ経義ノ深奥ヲ窮ム 故ニ所
著ノ書高ク古ノ聖賢ヲ攀ケテ大ニ前人ノ未タ發セザル所ヲ發ス 嘗テ弟
子ニ謂テ曰ク吾レ力ヲ竭シテ性命道徳ノ義ヲ研ス 此ニ至テ止ムベシ
若シ一層ヲ深ルセハ機ヲ洩スノ懼レアリト其若心勤力以テ見ルベシ
又老莊ノ旨ハ推シテ其時弊ヲ矯ムルノ言ニシテ聖經ニ乖クニ似実ハ聖
道ヲ術ルノ書ナルヲ明カス 亦王荊郭象ヲ除クノ外後人ノ探測スルコト
能ハザル所ナリ 其詩文及書ヲ能クシ酒ヲ嗜ミ豪宕不羈ナルノ事跡ハ世
人ノ普ク知ル所ナリ 先生嘗テ詩ヲ作文章曾不用陳語 詩賦但任意所
徂 経傳探賈排諸家 草聖揮毫笑書奴 古人所有不有 古人所無不有
無ヲ以テ自負ス 然レトモ竟ニ志ヲ得ス 意氣慷慨重游快狂頓疎放詭酒
徒ヲ以テ自ラ甘ス 皆実況ナリ 故ニ世俗其書名酒名ヲ喧傳シテ経術ノ
深粹ナルヲ知ルモノ稀ナリ 所著大学私衡 善身堂 一家言 東西周考 国
字考 季粹稲梁辨 書帖醉銘帖 画譜胸中仙 詩抄 文抄等皆刊行ス猶
遺稿數部アリ 先生隆準與自身長大ニシテ家中ヲ行クニ頭ヲ屈ムルノ態
アリ 且眠ムルコト毎夜二時間ニ過キス昏醉泥ノ如シト雖モ常限ニ過フ
ルコト無シ 其名声盛ナルニ時ニ方テハ贊捧ヲ得ルコト日々數金ニ及フ
然レトモ多クハ近隣及ヒ所識ノ貧者に惠テテ更ニ儲蓄スルコトナシ又或
時龜田大隅守ノ子孫ト稱スルモノ其系因ヲ携ヘ來リテ之ヲ亮ランコト
ヲ請フ 先生笑テ之ヲ却ケタリト彼欣喜ガ許ヘ仁傑カ子孫ノ家譜ヲ持
チ來リシコト符合シテ亦奇ナリ先生自ラ講スルコト前記スルカ如シ
故ニ其弟子ヲ數ニ誦々トシテ倦カス 其書ヲ讀ムルコト温顔ヲ以テ其蕙
ヲ発キ弟子ノ能ク會得シタルヲ見テ歎シテ止ム 是レヲ以テ弟子能ク其
義ヲ了悟シ儒家トナル者多シ 先生頗ル義氣ニ富ム故ニ彼ノ赤穂義士ノ

天明六年ノ破堤

天明六年丙午七月(日不詳)本村西南隅字権現堤塘破決ス 登時決口

ノ景況及ヒ下流村々被害ノ慘状等ハ書記ノ微スベキナシ 又古老ノ口
碑ニ依リ僅ニ其大概ヲ記センニ決堤延長百四十六間深老丈數尺水流横激
決下流村ノ人家拾數流失シ溺死亦拾數人石砂汎溢シ本村西半及ヒ瀬戸
井村東半當野村南部悉ク荒蕪トナル 又其下流被害ノ村ハ蓋シ拾數村ニ
シテ其慘状亦言フニ忍ビザルヘシ 而シテ徳川政府土木官吏ヲ派遣シ組
合各村ノ人ヲ督シ賑勉數十日ニシテ漸ク築堤ノ功ヲ奏ス 其經費ハ悉ク
國庫金ヲ以テ支辨セラル 而シテ各村荒地ハ漸ク掘返シテ田圃トナシ自
今ニ至テハ砂石ヲ集メテ成ル処ノ小塚所々ニ点在スルノミ 堤南ハ利根
川堤下ヲ流レ水深老丈數尺ナリシガ 年以來用心少シク南ニ迂移シ
堤外拾數間平坦ノ地トナリ居民五戸アリ 則現今ノ上川岸渡津ノ地是ナ
リ

弘化三年ノ破堤

弘化三年丙午六月廿七日ヨリ暴風降雨ニ際シ廿八日利根川洪水激漲
シ本村東南隅字駒形堤塘危殆ニ臨ム 是ニ於テ慣例ニ依リ水防組合各村
吏員人民ヲ卒ヘテ託所ニ集合シ人民ヲ督シ以テ防禦其術ヲ極ム 然レト
モ激漲増漲堤塘ニ溢レ遂ニ防禦ノ術ナク同夜子ノ刻ニ至テ決堤ス 其区
域東ハ上中森村境ヨリ西ハ川岸道ニ至ル延長百四拾六間 其決口ヨリ横
流平地ニ汎濫シ家屋ヲ流失シ田稼ヲ掃蕩シ溺死人アリ 畜類ノ死傷亦頗
ル多ク一望渺茫恰海洋ノ如ク人々避難ノ処ナク家屋ノ破材ヲ集メテ塊カ
ニ茂ヲ結ヒ雖モ其上ニ避ケ數日火食ヲ絶ツニ至ル 其慘状実ニ名状スル
能ハス本川古今未曾有ノ洪水ナリト云フ 其被害數拾村ニ延キ本村及ヒ上
中森村下中森村ハ殊ニ甚シク横流ノ跡良田変シテ砂礫トナリ又池トナ
ル 是ニ於テ徳川政府勘定方直江隸之助ヲシテ普請上條要助并上富藏蓮
見首次郎林紋三郎氏等數氏ヲ卒ヘテ派遣セシメ人夫ヲ統督シ晝夜張り留
ニ尽力スト雖モ一日ノ土功一夜ニ流失シ絶テ痕跡ヲ留メス 此ノ如クス

ルコト數十日終十月十五日ニ至リテ其効ヲ奏ス 尋テ本土功ニ着手シ翌
年三月廿五日ニ及シテ完ク成功セリ

堤外ハ二十數年前マテ頗ル深流ナリシカ漸ク附洲シテ平原トナル故ニ
開懇シテ畑トナシ目今ニ至テハ一帶ノ桑園ナリ 被害村ノ内(目今大輪沼
新田)大輪沼ハ上古ヨリ沼沢ナリシカ中古ニテ谷田川已南ニ少シク水田
ヲ開懇シ其他依然沼沢ナリシガ然ルニ此出水ノ為メニ泥濘數尺蓄溜シ殆
ト田面ト平行ス 是レニ因テ爾來漸次開懇シテ目今ニ至リ頗ル良田トナ
ル 是レ此ノ水害ハ反テ今ノ幸福ヲ來セリ

本村ハ全ク砂石押入シ最高所三四尺最低所ト雖モ貳尺通りノ砂礫トナ
リ樹木生セズ漢々タル平原ナルヲ爾來人民頗ル苦楚ヲ嘗メ漸ク掘返シテ
砂石ヲ埋メ田畑ナシ残余ノ平原現時東北隅ニ拾數町歩アルノミ
堤塘決口下流數町歩ノ良田掘シテ池トナル 亦漸々埋立水田トナス
現今ニ至リテハ堤北ニ沿フテ僅ニ老町步余ノ池ニ留ムルノミ 其周圍深
淺等湖沼ノ項ニ明掲スル如シ

上中森村ノ内砂入ノ地ハ漸次開懇シテ田圃トナシ目今ニ至テハ山林原
野ヲ合算シ僅々三四町步ニ過キス 池ハ埋立シテ僅カニ老反步余痕跡ヲ
留ムルノミ
以上微スベキ書類ナシト雖モ當時關係人ノ參考若クハ口碑ニ徵シテ掲
記ス 其登時ノ景況及ヒ現況ハ即左ノ如シ

- 一 破堤延長百四拾六間 深六尺ヨリ老丈五尺マテ
- 一 流失家屋 上中森村三拾六棟 上五箇村三拾貳棟 合六拾八棟
- 一 溺死 老人
- 一 砂入村名及其反別
- 一 上五箇村 九拾八町三反九畝貳步余
- 一 上中森村 百三町 六反七畝六步余
- 一 下中森村 凡四拾五町步余
- 一 當野村 貳拾五町步余
- 一 大輪沼新田凡貳拾三町步余

但砂ノ上部ニ泥濘ヲ置クコト貳尺余

一 荒地不変起村名及ヒ其反別

上五箇村 荒地 老反九畝拾貳步 池 老町三反三畝拾三歩

山林 拾四町貳畝步 原野 老町七反貳畝三歩 合計拾七町七

反畝貳三歩

上中森村 池 老反老畝拾四歩 山林 老町四反九畝拾老歩

原野 老町七反老畝七歩 合計 三町三反貳畝貳歩

菅野村 原野 四反歩

一 浸水村 凡六拾ヶ村

一 普請築堤 長百四拾六間 高切敷ヨリ平均七間 馬踏二間 敷拾六間

一 工事日数 二百六十日 一 一日平均貳千人 總人夫五拾貳萬人

一 普請金 七千九百五拾兩余

一 普請御掛 勘定方 直江鞍之助 普請方 上條要助 井上富藏

一 運見音次郎 林紋三郎

普請組合村

古戸村 仙石村 古海村 舞木村 赤岩村 瀬戸井村

上五箇村 上中森村 大輪村 大輪沼新田須賀村

飯野村 川俣村 矢島村 千津井村 斗合田村 松原村

梅原村 江口村 岩田村 赤生田村 堀工村 大高島村

下五箇村 小桑原村 青柳村 大佐貫村 鍋谷村 新宿村

新里村 中谷村 谷越村 入ヶ谷村 南大島村 下三林村

上三林村 江黒村 野辺村 近藤村 菅野村 木崎村

田島村 鍋谷村

上野国邑栗郡上中森村

沿 革

建置 不詳

名稱 称呼ノ起因不詳 建置已来上中森村ト称ス

所屬 上古不詳 中古ヨリ邑栗郡赤岩郷ニ屬シ佐貫莊ニ隸ス 寛文元

年ヨリ館林領ト云フ 明治元年九月岩鼻郷ノ管轄ニ屬シ四年二月館林

藩ノ管轄ニ屬シ今年七月館林領ナル 今年十一月栃木県ノ管轄ニ屬ス

八五年四月第七拾区ニ屬シ須賀村御用取扱所ニ屬ス 今年三月第八大

区八小區トナリ御用取扱所放ノ如シ 今年八月第拾一大區八小區ニ編シ

御用取扱所全上 全九年四月十日第四大區十二小區ニ編シ須賀村御用取

扱所ヲ區務所ト改メ全村ニ置タ 今年八月九日更ニ群馬県ノ管轄ニ屬シ

第二十三大區八小區ニ編シ區務所放ノ如シ 全十一年十二月邑栗郡役所

ノ管理ニ屬シ郡區編制ノ令ニ據リ上五箇上中森下中森ノ三ヶ村ヲ連合シ

テ戸長役場ヲ本村ニ置タ 全十三年十二月分離独立シテ戸長役場ヲ本村

ニ置タ 全十七年七月一日上五箇上中森菅野木崎瀬戸井ノ五ヶ村ヲ連合

シテ戸長役場ヲ上五箇村ニ置タ

管轄 往昔不詳 寛文元年ヨリ天和二年迄館林城主宰相右馬ノ守綱吉

之レヲ管ス 後五分シテ其一ハ前橋城主松平大和守之ヲ領ス 其四ハ旗

下青山三之助 山岡十兵衛 三浦其橋 小出静五郎四氏ノ採地ニ屬ス

明治元年九月岩鼻縣管轄ノ分館林藩ニ屬シ 今年七月鹿沼縣前橋藩ノ

所管モ併セテ館林縣ノ管轄トナリ 全九年八月九日更ニ群馬縣ノ管轄ニ

屬シ 全十一年十二月邑栗郡役所ノ管理ニ屬ス

位置 疆域

位置 郡ノ西南ニ位ス

東 下中森村ト里道及田畑畦畔ヲ以テ界ス

西 上五箇村及菅野村ト堀中央及比田畑畦畔ヲ以テ界ス

南 武蔵国北埼玉郡下中条村及須加村ト利根川中央ヲ以テ国界ヲナ

ス 北 大輪沼新田ト谷田川中央及道路ヲ以テ界ス

幅員

東西 七町五拾七間三尺
南北 拾九町五拾五間三尺
周回 老里三拾町五拾貳間
面積 四拾七萬八千七百〇六坪

地味

色 薄赤
質 粗悪ニシテ砂石ヲ混ス
適種 稲 麦 大豆 小豆 木綿 蕎麥 藍等ニ適シ尤モ桑ニ宜シ

地勢

水脈 利根川上五箇村ノ南端ヨリ来リ本村ノ南ニ沿ヒ東流シテ下中森ニ入ル 舟楫ノ便アリ 然レトモ霖雨暴漲ノ際汎溢ノ憂アリ 休伯堀上五箇村ヨリ来リ中央ヲ東流シテ下中森村ニ入ル 則本村ノ用水ナリト雖モ已南ハ灌溉ノ利ナク已北ハ其便アレドモ夏候洪水ノ憂アリ 谷田川ハ本村ノ西北隅ヨリ始リ北境ヲ東流シ大輪沼新田ニ入ル 本川ハ悪水落ニシテ霖雨ノ際流通宜シカラス悪水ノ害アリ

東部 田圃連亘シテ民家散在セリ

西部 田圃接続シテ点々民家アリ

南部 利根川ニ沿ヒ田圃相連リ堤塘其中央ヲ貫キ民家接続ス

北部 谷田川ニ沿ヒ田畑連亘シテ民家更ニナシ

全地形勢 地形鯉魚に似タリ 闔村平坦ニシテ南境ニ利根川ヲ帯ヒ舟楫ノ利アリト雖モ霖雨激漲ノ際汎溢ノ憂アリ 堤塘東西ニ亘リ休伯堀中央ヲ東流ス 則本村ノ用ナリ 然モ水量淺クシテ夏候洪水ノ憂ヲ免レス

北部ハ窪地ニシテ谷田川ニ沿ヘ悪水ノ害ヲ被ル頃年ノ如シ

字地

北谷	西谷	東鍋田	対地	谷端	東谷	西鍋田	長性地	仲道	神田	愛宕	八幡上北	八幡上南	八幡下	悪途
谷新田	谷新田	なべ田	まんぢう田	まんぢう田	谷新田	なべ田	長性寺	神田	愛宕下	道六神	道六神	道六神	道六神	堤あい
二反田	谷新田	へび田	ついじ	谷端	谷新田	なべ田	きつね塚七町八反三畝廿八歩	覺田	原新田	原新	原新	原新	原新	悪戸
八町九反七畝三步	八町五反畝廿六歩	八町三反六畝廿九歩	七町三反三畝拾八歩	三町 九畝三步	八町八反四畝廿貳歩	八町貳反八畝拾九歩	八町貳反三畝廿八歩	五町老反 三步	九町貳反老畝廿壹歩	九町七反三畝拾三步	九町七反三畝拾三步	九町七反三畝拾三步	九町七反三畝拾三步	拾町老反貳畝三步
筆數	貳百貳拾	貳百七	百七拾六	七拾三	百九拾六	貳百壹	貳百五	九拾壹	貳百貳	百九拾七	百九拾七	百九拾七	百九拾七	百七拾七

神社

八幡神社
所在 上中森村字八幡上南 坪數 四百七十坪
祭神 譽田和氣命
社格 村社 明治五年十一月ヨリ村社ニ列ス
創建年月 不詳
祭日 三月十五日 九月十五日
氏子 百貳拾老戸
末社 三社 稲荷神社 水神社 道神社
現任宮司若クハ祠官ノ名 祠掌 吉田吉府 杉戸泰治

寺院

天徳山授業寺

所在 上中森村字八幡上南

宗派 曹洞宗

開基人名 僧廣俊

開基年月 不詳

現住ノ姓名 天野大忠

坪数 六百九坪

寺格 武藏国北埼玉郡花咲村法泉寺末

道路

中道

等級 里道貳等

長 拾三町拾三間 上五箇村字駒形ヨリ来り下中森村字大船戸ニ入

幅 貳間

形状 登降更ニナク屈曲六ヶ所アリ

雜項 上五箇村境ヨリ来り中央ヲ屈曲東通シ下中森村境ニ至ル 本道

ハ上五箇村足利道ヨリ館林町ニ出ツル支線ナリ 平坦ニシテ行路便ナリ

道六神道

等級 里道貳等

長 九町拾八間 本村ノ南方利根川ヨリ起リ菅野村境ニ至ル

幅 貳間

形状 登降更ニナク屈曲四ヶ所アリ

雜項 村ノ南方堤塘ヨリ中央ヲ北通シ菅野村境ニ至リ足利道ニ合ス

平坦ニシテ行路稍便ナリ

堤塘

利根川堤

長 九町拾五間三尺

高 貳間四尺七寸

幅 馬路貳間ヨリ三間五尺マテ 敷 拾五間

雜項 上五箇村ヨリ来り本村ノ南部ヲ貫通シテ下中森境ニ至ル 抑本

堤創設ハ徳川家康開東八州ヲ管スルニ方リ利根川ノ汎濫ヲ防ク為メ文祿

四年其臣奉行荒瀬彦兵衛 石川佐次右エ門二氏ニ命ジテ建築セシムル所

ニシテ西ハ古戸村ヨリ起リ東ハ下五箇村ニ至ル延長一萬八千三百貳拾九

間ニ亘ル 後寛文年間宰相徳川綱吉館林ヲ治ムル時大ニカワ水防ニ盡サ

レ堤防組合ヲ設ケテ防禦ニ供フ 然レトモ徳川氏治世ノ時ハ高幅制限ア

リテ自由ニ増築スルヲ許サス 是レヲ以テ堤体脆弱ニシテ本川暴漲ノ際

時々潰決ノ憂アリ 然ルニ明治政府ニ至テ大ニカワ水防ニ用キラレ年々

地方税ヲ以テ修繕増築セラル 因テ現時ハ頗ル堅牢トナレリ

人物

故 正八位杉戸大角履歴

元姓ハ宮田氏藏人ト称ス 夫雪ハ其字ナリ 上野国邑栗郡上中森ノ人

ナリ 考修験常福院権大僧都秀教母ハ宮田氏 嘉永元年三月一日ヲ以テ生

ル 少時家庭ノ教育ヲ受ケケ稍長スルニ及シテ全部舞木村修験大光院大僧

都石近ニ從ヒ密字修行シ能ク其奥妙ヲ探リ年十三ニシテ常福密院ノ号ヲ襲

キス 館林藩儒臣杉四郎及ヒ進藤又治ニ師ヒ支那學ヲ研究シ頗ル其義ニ

通ス 且石川甲子雄ニ從ヒ国学ヲ修メ尋テ栃木県中教院教頭梅園春雄ニ

就キ国学ヲ研究シ爾來益螢雪ノ勞ヲ積ミ學大ニ進ム 傍ラ詩歌ヲ能クス

明治元年官符ヲ奉シ復飾シテ杉戸大角ト改ム 全月村社八幡社ノ祈願ヲ

命セラレ全六年二月同郡川俣村郷社粟島神社ノ詞官ニ任セラレ全七年一

月調導ニ兼補セラル 全八年十月下野国二荒山神社ノ主典ニ転任シ権少

講義ニ兼補セラル 全十年五月少講義ニ補セラル 全十二年三月權中

講義ニ兼補セラル 全十一年六月渡島国函館八幡宮ノ主典ニ任セラル 全十三年

講義ニ兼補セラル 全五年五月石狩国札幌神社ノ弥宜ニ転任ス 全十三年

八月全社ノ宮司ニ任セラレ全年九月中講義ニ兼補セラル 全十六年三月
講典講究所委員ヲ委托セラレ全十七年十月六日正八位ニ叙セラレ全十八
年十月札幌神道事務局監督ヲ命セラレ全十九年十一月十三日官ニ卒ス

旧検地帳所載ノ字

延宝三乙卯年三月十七日(五冊ノ内巻番貳番三番四番五番)検地役
人長谷川六兵衛外三人

うるし田 花まつり 大舟戸 浪うへ 柳屋敷 愛宕下
谷端 ついじ まんぢうだ 中道 なべた ほりうへ
しべ 長性寺 原新田 すたて場 鷺田 へび田
谷新田 道六神 神明 きつねつか十二所 向田
うし田 八幡前 二反田 堤あひ 原新 悪戸
以上 三拾字

旧検地帳表書合計

五冊之内

表 上野国邑栗部上中森村水帳
書 (巻番)(貳番)(三番)(四番)(五番)
田畑屋敷合百〇三町六反巻畝六歩
合 高 合干拾石八斗巻升五合
計 外貳畝廿八歩 蔵屋敷

変異記事

上五箇村決堤ノ罹害
弘化三丙午年六月廿八日上五箇村字駒形決堤ニ際シ砂石汎溢シテ全村
其害ニ罹ル 就中百三町二反余歩ノ地ハ悉ク砂礫トナル 爾来人民力ヲ
尽シ漸々掘返シテ田圃トナシ現今ニ至テハ山林原野等合セテ三町六反五
畝歩残ルノミ 而シテ当時ノ慘状ハ上五箇村変異記事ノ項ニ詳記セリ
双児出産

明治十四年十一月廿六日本村平民集原忠藏妻よね双児ヲ生ム 男ヲ桂
三郎ト称シ女ヲもよと名ツク 而シテ男ハ全年十二月三十日ニ至テ死亡
シ女ハ今ニ健全ナリ

上野国邑栗部萱野村

沿革

建置

不詳

名称 名称ノ起因詳カナラザレトモ建置已来萱野村ト称ス
所属 上古不詳 中古ヨリ邑栗部赤岩郷ニ属シ佐貫庄ニ隸シ館林領ト
云フ 明治元年九月岩鼻郷ノ管轄ニ属シ全四年二月館林藩ノ管轄ニ属シ
全年七月館林領トナル 全年十一月栃木県ノ管轄ニ属ス 全五年四月第
六拾九区舞木村御用取扱所ニ属シ全六年三月第八大区九小区ニ編シ御用
取扱所故ノ如シ 全年八月第十一大区九小区ニ編シ御用取扱所全上 全
九年四月十日第四大区十二小区ニ編シ区務所ヲ須賀村ニ置ク 全年八月
九日更ニ群馬県ノ管轄ニ属シ第廿三大区八小区ニ編シ区務所故ノ如シ
全十一年十二月邑栗部役所ノ管理ニ属シ郡区編制ノ令ニ拠リ萱野野辺上
三林ノ三村ヲ連合シテ戸長役場ヲ野辺村ニ置ク 全十三年九月分離独立
シテ戸長役場ヲ本村ニ置キ全十七年七月一日上五箇上中森村萱野木崎瀬
戸井五ヶ村ヲ連合シテ戸長役場ヲ上五箇村ニ置ク
野辺村ト称ス
分村 寛永九年(現由不詳)分テ二村トナシ一ヲ猶萱野村ト称シ一ヲ
管轄 古昔不詳 天正ノ頃ヨリ館林城主榊原式部大輔之レツ管シ寛文
元年ヨリ天和二年マテ館林城主宰相石馬守綱吉之レツ管ス(年歴不詳)
六分シテ徳川氏ノ旗下山岡久留島 大久保 水野 青山 土岐(名不詳)
六氏ノ採地ニ属ス 明治元年九月山岡十兵衛 大久保兵九郎 水野鑑太
郎 土岐左近ノ四給岩鼻郷ノ管轄トナリ 全三年二月青山三之助 久留
島半八郎ノ二給亦全県ノ管轄ニ属ス 全四年二月館林藩ノ管轄トナリ全
九年八月九日更ニ群馬県ノ管轄ニ属シ全十一年十二月邑栗部役所ノ管理

二風ス

位置 疆域

位置 部の西南ニ位ス
 東 上中森村及ヒ大輪沼新田ト接シ惡水堀ヲ以テ界ヲナス
 西 赤岩村及ヒ木崎村ト惡水堀田畑畦畔ヲ以テ界ス
 南 上五箇村瀬戸井村赤岩村ト相接シ田畑及惡水堀ヲ以テ界ス
 北 野辺村木崎村ト堀及ヒ田畑畦畔ヲ以テ界ヲナス

幅員

東西 拾八町五間
 南北 拾町貳拾五間
 周囲 三里拾五町三拾五間三尺
 面積 四拾七万八千七百六坪

地味

色 赤色ニシテ薄黒ヲ帯ブ
 質 粗悪真土ニシテ砂交リナリ
 適種 稻 麦 大豆 蕎麥 藍葉ニ適シ尤木綿ニ宜シ

地勢

水脈 鎌田堀赤岩村ヨリ来リ南境ヲ東流シテ上中森村境ニ至リ五間堀ト称ス 則用惡兼用ノ水路ニシテ是ヨリ東境ヲ北流シテ大輪沼新田ニ至リ谷田川ニ注ク緩流ナリト雖モ惡水流通ノ利アリ
 東部 田圃連亘民家更ニナシ
 西部 田圃相通リ民家并列ス
 南部 鎌田堀ニ沿ヒ田畑接続シ民家散在セリ

北部 田畑連亘シ又野辺村ノ北部ニ一帯ノ飛地アリ 水田山林原野合セテ廿六町歩アリ 中ニ民家四戸散在セリ

全地形勢 地形輪狀ヲナシ闊村平坦ニシテ足利道西部ニ亘リ行通ノ便アリ 又南境ヲ東流シテ五間堀トナル之レヲ鎌田堀ト称ス 東境ヲ北流スルハ則五間堀ナリ 共ニ惡水路ニシテ緩流ナリ 故ニ夏候霖雨ノ際潦水滯留シ為メニ稲草腐敗ノ憂アリ

学校

設立 明治七年十一月廿日

所在 菅野村字上

地坪 貳百坪

建坪 三拾六坪

種類 公立尋常小学校

生徒 男百貳拾貳人 女貳拾人

教員 四人

字地

柳 柳田 三ツ又

柳ノ前 寺前 申新田 漆畑 道六神

越前 桑つぶ 田島

稲荷 早川

前田

鎌田

万年

八幡

權現 早川 さうが淵

反別 筆数

四町貳反 九歩 七拾四
 三町八反八畝拾四歩 七拾三
 七町七反七畝廿八歩 百三拾六
 貳町七反四畝廿三歩 五拾八
 貳町五反 拾貳歩 四拾九
 四町五反老畝廿七歩 七拾五
 貳町七反 廿貳歩 五拾
 三町四反七畝拾貳歩 五拾三
 四町九反 七歩 百拾七
 六町九反六畝廿貳歩 百拾四

五反田 八町卷反七畝 五歩 百三拾
 淵ノ上 五町七反七畝 九歩 百〇卷
 新割 五町四反三畝 廿歩 百貳拾老
 上沼 四町 貳畝拾六歩 百〇五
 水香 三町六反老畝 廿歩 九拾三
 沼はた 老町五反七畝 六歩 三拾四
 下沼 六町八反 拾七歩 百〇七
 丑起 四町九反 廿三歩 八拾老
 田谷 五町八反五畝歩 八拾老
 島崎 五町 三畝拾四歩 八拾五
 若宮 六町貳反老畝廿七歩 百
 子ノ宮 四町三反五畝廿三歩 六拾三
 北中道 老町六反 貳歩 拾八
 下 拾老町五反四畝 四歩 九拾九
 上 拾貳町九反四畝廿老歩 百〇七
 西浦 四町四反九畝拾八歩 五拾八
 中上 四町三反三畝拾七歩 七拾
 遠上 三町七反八畝拾老歩 六拾五
 木崎前 五町貳反七畝 老歩 四拾老
 相ノ谷 拾老町貳反九畝 七歩 六拾四
 老丁野 六反七畝拾四歩 六
 申子前 四町 五畝 貳歩 七
 長良林 三町八反貳畝 老歩 拾老
 大林 九反老畝廿六歩 四

白山神社
 所在 菅野村字上
 坪数 貳百九拾七坪

祭神 菊理姫命 伊弉册命
 社格 村社 明治五年十一月ヨリ村社ニ列ス
 創建年月 不詳
 祭日 九月十九日
 氏子 百三拾老戸
 末社 富士岳神社 八幡大神 稲荷神社 菅原社 道神社
 若宮神社
 現任宮司若クハ副官ノ名 詞官 高階契 詞掌 南室傳

龍沢山洞源寺
 所在 菅野村字上 坪数 四百八拾貳坪
 宗派 曹洞宗 寺格 本郡堀工村茂林寺末
 開基年月 慶長十六辛亥年(月日不詳)
 現住ノ姓名 松沢嶺雲

雑項 本寺ハ慶長十六年僧正雄ノ開基創建ニ係ル 然ルニ寛保二辛亥年利根川出水ノ害ニ罹リ本堂ヲ始メ其他ノ建造物皆流失ス 後延享元年甲子年當時ノ住職僧夕包之レヲ再建ス 則今ノ造営ナリ

道路
 足利道
 等級 里道老等
 長 九町拾貳間 瀬戸井村境ヨリ来リ木崎村境ニ至ル
 幅 貳間
 形状 登降更ニナク屈曲五ヶ所湾曲老ヶ所アリ
 雑項 瀬戸井村境ヨリ来リ西部ヲ曲通シテ木崎村境ニ至ル 本道ハ下野国足利町ヨリ中山道ニ出ツル要路ニシテ行路便利ナリ 故ニ車馬ノ行

通稱類領ナリ

館林道

等級 里道武等

長 拾八町四拾間 木村字上足利道ヨリ野辺村境ニ至ル

幅 貳間

形状 登降更ニナク屈曲九ヶ所湾曲二ヶ所アリテ用水上沼堀両野堀ニ

各一ノ土橋ヲ架ス

雜項 本村字上足利道ヨリ分岐シ中央ヲ曲通シテ野辺村境ニ至ル 本

道ハ上五箇川岸ヨリ館林町ニ出ル支線ニシテ車馬ノ行通アリト雖モ冬季

霪霏ノ際行路ノ便悪シ

旧検地帳所載ノ字

天正十九辛卯年二月廿八日 検地役人 更科林平 斎藤次兵衛

寺前

花 下

下萱野

うしろふけ

ふけあみた免

子宮

観音免

稲荷前

屋敷西

あつぶ

屋敷前

ねの宮

沼はた

旧検地帳表書合計

表 天正十九辛卯年二月

書 東上野佐貫庄館林領萱野村字打帳

紙数 四拾七枚上紙共

合計 都合田畑六拾四町大四拾歩

変異 記事

上五箇村決堤ノ罹害

弘化三丙午年六月廿八日利根川洪水ノ際上五箇村字駒形堤堤延長百四

拾六間破決ス 此時本村ハ其決口ニ方ルヲ以テ浸水最モ深ク激流奔波之
レカ為メニ南東ノ地(前田 杉ノ前 柳 田谷 鳥崎 子ノ宮)合六字
凡貳拾五町歩余砂石汎濫シテ荒蕪トナル 然ルニ爾來人民勵精以テ田圃
トナス 現今ニ至テハ残余ノ砂原四反歩余ノミ 而シテ當時ノ状況ハ上
化箇村変異記事ノ項ニ詳ナリ

上野岡邑栗部木崎村

沿革

建置

不詳

名称

称呼

起因

不詳

建置

以来

米木崎村ト称ス

所屬

上古

不詳

中古

ヨリ邑栗部赤岩郷ニ屬シ佐貫莊ニ隸ス 寛文元

年ヨリ館林領ト云フ 明治元年九月岩鼻郷ノ管轄ニ屬ス 全四年二月館

林藩ノ管轄ニ屬シ全年七月館林縣トナル 全年十一月栃木縣ノ管轄ニ屬

ス 全五年四月第六拾九区ニ編シ御用取扱所ヲ舞木村ニ置ク 全六年三

月第八大区九小区ニ編シ御用取扱所故ノ如シ 全年八月第拾一大区九小

区トナリ御用取扱所全上 全九年四月十日第四大区拾一小区ニ編シ舞木

村御用取扱所ヲ区務所ト全村ニ置ク 全年八月九日更ニ群馬縣ノ管轄ニ

編シ第廿三大区七小区ニ編シ小泉村區務所ニ屬ス 全十一年十二月十二

月邑栗部役所ノ管理ニ屬シ郡區編制ノ令に拠リ赤岩村瀬戸井村木崎村鍋

谷村ヲ編合シテ戸長役場ヲ赤岩村に置ク 全十一年七月一日上五箇村上

中森村萱野木崎瀬戸井ノ五ヶ村ヲ連合シテ戸長役場ヲ上五箇村ニ置ク

管轄 古昔不詳 天正六年ヨリ館林城主榊原式部大輔之レツ領ス 全

十八年徳川氏ノ代官曾根與五左エ門ノ支配トナリ正保元年ヨリ寛文元

年マテ(居城不詳)松平和泉守之レツ管ス 全年ヨリ天和二年マテ館林

城主宰相右馬寺綱吉之レツ管ス 全年代官岡登次郎兵衛ノ支配トナリ元
禄元年ヨリ全十五年迄代官池田新兵衛之レツ支配シ全年ヨリ宝永元年迄
代官野田三郎左エ門ノ支配ニ屬ス 全年八月分ア之レツトナシ其一ハ
全氏之レツ支配シ一ハ松平伊豆守ノ採地ニ屬ス 全四年野田氏支配ノ地

モ亦旗下(姓名不詳)ノ採地トナル 明治元年九月岩鼻県ノ管轄ニ属シ
 全四年二月館林藩ノ管轄トナリ全九年七月庵藩置景館林県ノ管轄トナル
 全十一年一月栃木県ノ管轄ニ属シ全九年八月九日更ニ群馬県ノ管轄ニ属シ
 全十一年十二月邑案部役所ノ管理ニ属ス

位置 疆域

位置 郡ノ西南ニ位ス
 東 萱野村ト連リ道路用水路及田畑畦畔ヲ以テ界ス
 西 赤岩村及ヒ鍋谷村ト相接シ道路ヲ以テ界サ画ル
 南 萱野村ト道路用水堀及ヒ田畑畦畔ヲ以テ界ス
 北 鍋谷村野辺村ト接シ田畑畦畔及ヒ悪水路ヲ以テ界トス

幅員

東西 拾老町八間
 南北 五町三拾六間
 周圍 老里貳拾貳間
 面積 貳拾三万八千八百拾六坪

地味

地味 薄赤黒
 質 粗悪ニシテ野土ナリ
 適種 稲 麦 大豆 小豆 蕎麦 木綿 桑 藍等ニ宜シ

地勢

水脈 地藏堀鍋谷村ヨリ来リ北境ヲ東流シテ野辺村ニ入ル 則悪水落
 ナリ 又赤岩村ヨリ来リ中央ニ於テ二派ニ分レ一ハ北流シテ地藏堀ニ注
 キ一ハ東流シテ萱野村ニ入ル 則本村ノ用水ニシテ灌漑最モ便ナリ

東部 田圃連亘シテ民家更ニナシ
 西部 畑山林原野接続シテ民家散在セリ
 南部 田圃相連リ民家并列ス
 北部 田圃連亘シテ少シク民家アリ
 全地形勢 地形長ク東西ニ横ハリ西部ハ廣ク東部ハ狭シ 園村平坦ニ
 シテ足利道西部ニ亘リ行通ノ便アリ 且用水疎通シテ灌漑ノ利アリト雖
 モ東部ハ低地ニシテ夏候暴雨ノ際悪水渾流シテ之レカ為メ稲草腐敗ノ憂
 アリ

字 地

權現 矢橋東
 東 八町 三畝拾九步百四拾四
 土 六町三反八畝拾六步 三拾三
 沼 六町六反九畝 四步百三拾三
 沼 五町老反八畝廿六步 百〇六
 沼 六町六反四畝廿七步 百〇九
 沼 六町八反七畝拾六步百貳拾六
 沼 貳町貳反老畝廿四步 六拾
 沼 七反三反老畝廿八步 六拾八
 沼 拾老町 貳畝 貳步 百〇四
 沼 六町九反貳畝 貳步百八拾貳
 沼 三町 五畝廿貳步 四拾九

北田 鹿島西 鹿島前 鹿島うら
 土 持 ながれ 土持
 社 下 門前 なるりの前 だうろく神
 前谷 前谷 だうろく神 橋場
 神 明 西

神 社

稻荷神社
 所在 木崎村字社下 坪数千三百貳坪
 祭神 倉稻魂命
 社格 村社 明治五年十一月ヨリ村社ニ列ス

創建年月 不詳

祭日 三月廿二日 九月十九日

氏子 五拾老戸

末社 八坂神社 菅原神社

現任宮司若クハ祠官ノ名 祠官 高階英 祠掌 南室傳

寺院

医王山東光寺

所在 木崎村字社下

宗派 真言宗

開基人名 不詳

開基年月 不詳

現住ノ姓名 長柄行持

開基人名及年月不詳 応永二乙亥年十二月八日僧源秀更ニ中興

ス 其他由緒ハ書記口碑更ニ徴スベキナシ

道路

足利道

等級 里道老等

長 九町貳拾九間 菅野村境ヨリ来リ鍋谷村境ニ至ル

幅 貳間

形状 登降更ニナク屈曲七ヶ所アリ

雜項 菅野村境ヨリ来リ西部ヲ曲折北通シテ鍋谷村境ニ至ル 本道ハ

下野国足利町ヨリ中山道ニ出ツル要路ニシテ平坦行路便ナリ

館林道

等級 里道貳等

長 拾三町拾貳間 赤岩村境ヨリ来リ野辺村境ニ至ル

貳間

形状 登降更ニナク湾曲一ヶ所屈曲九ヶ所アリ

雜項 赤岩村ヨリ来リ中央ヲ曲折東北ニ走リ野辺村境ニ至ル 本道ハ

赤岩村ヨリ館林町ニ通スル別路ニシテ平坦ナリト雖モ屈曲多ク且冬季霜

融ニ際シ泥濘ナルヲ以テ行路不便ナリ 故ニ行人少シ

旧検地帳所載ノ字

延宝二甲寅年三月 検地役人 御魂奉行 後藤角右エ門 平岡又兵衛

北田 沼はた さぶ島 ながれ 橋場 矢橋

権現 しぶか 東 土持 だうろく 神鹿島前

鹿島うら たうりの前門 前 前谷 西 以上拾七字

旧検地帳表書合計

表 上野国邑栗郡館林領木崎村水帳

書 案内 甚右衛門 佐右衛門 喜左衛門 惣左衛門

合 田畑屋敷合五拾町老反貳畝廿六歩

計 分米 四百三拾五石四斗四升七合

上野国邑栗郡瀬戸井村

沿革

建置 不詳

名称 名称ノ起因不詳 建置以来瀬戸井村ト称ス

所属 土古不詳 中古ヨリ邑栗郡赤岩郷ニ屬シ佐貫莊ニ領ス 寛文元

年ヨリ館林領ト云フ 明治元年九月岩鼻縣ノ管轄ニ屬ス 全四年二月館

林藩ノ管轄ニ屬シ全年七月館林縣トナル 全年十一月栃木縣ノ管轄ニ屬

シ全五年四月第六拾九区舞木村御用取扱所ニ屬シ全六年三月第八大区九

小区ニ編シ御用取扱所故ノ如シ 全年八月第拾一大区九小区トナリ御用

取扱所全上 全九年四月十日第四大区拾一小区ニ編シ区務所ヲ全村ニ置

ク 今年八月九日更ニ群馬縣ノ管轄ニ屬シ第廿三大区七小區ニ編シ區務所ヲ小泉村ニ置ク 全十一年十二月邑吏部役所ノ管理ニ屬シ郡區編制ノ令ニ拠リ赤岩瀬戸井木崎鍋谷ノ四ヶ村ヲ連合シテ戸長役場ヲ赤岩村ニ置ク 全十三年十一月分離獨立シテ戸長役場ヲ本村ニ置ク 全十七年七月一日上五箇村上中森村萱野村木崎村瀬戸井村ヲ連合シテ戸長役場ヲ上五箇村ニ置ク

管轄 古昔不詳 寛永二年ヨリ寛文元年迄館林城主榑原式部大輔之レヲ領ス 今年ヨリ天和二年マテ全城主宰相徳川綱吉之レヲ管ス 今年ヨリ元禄十一年マテ徳川氏ノ代官本庄藏部之レヲ支配ス 今年ヨリ文政十一年マテ旗下新見藤四郎ノ採地トナリ今年ヨリ全十二年十二月マテ代官荒井清兵衛之レヲ支配ス 今年全月ヨリ天保四年四月マテ代官山本大膳ノ支配トナリ今年全月ヨリ全六年二月迄代官矢島藤藏ノ支配トナリ今年全月ヨリ五月マテ代官山本大膳ノ支配トナリ今年全月ヨリ全十二年一月マテレニ代官全十一年八月マテ之レヲ支配ス 今年全月ヨリ全十二年一月マテ伊奈友之助ノ支配トナリ今年全月ヨリ全十三年五月マテ代官森新之助之レヲ支配シ今年全月ヨリ嘉永元年二月迄代官北條雄之助之レヲ支配ス 今年全月ヨリ安政二年二月マテ代官林部善太左エ門之レヲ支配ス 今年全月ヨリ全七月迄代官設楽八三郎代テ之レヲ支配ス 今年全月ヨリ全三年二月マテ代官小林藤之助ノ支配トナリ今年全月ヨリ全四年十二月迄代官川上金吾之助之レヲ支配ス 今年全月ヨリ明治元年四月迄代官増田作右エ門 荒井清兵衛 伊奈半左エ門 佐々井半十郎 福田所左エ門 更代之レヲ支配ス 今年九月岩鼻縣ノ管轄トナリ全四年十二月館林藩ノ管轄ニ屬シ今年七月廃藩置縣館林縣ノ管轄トナル 今年十一月栃木縣ノ管轄ニ屬シ今年八月九日更ニ群馬縣ノ管轄トナリ全十一年十二月邑吏部役所ノ管理ニ屬ス

位置 位置 疆域 位置 郡ノ西南ニ位ス

東 上五箇村ト道路及ヒ田畑畦畔ヲ以テ界ヲナス
西 赤岩村ト田畑畦畔及ヒ惡水堀ヲ以テ界ス
南 利根川ニ沿ヘ武藏國北埼玉郡酒卷村北河原村ト本川中央ヲ以テ界シ西端ハ赤岩村ト堤壩ヲ以テ界ス
北 赤岩村及ヒ萱野村ト田畑畦畔及ヒ惡水路ヲ界ス

幅員

東西 拾貳町五間
南北 拾貳町五間
周圍 老里拾七町五拾六間
面積 三拾四万千百五拾壹坪

地味

薄赤里
質 粗惡ニシテ砂礫ヲ混ス
澆種 稲 麥 大豆 小豆 藍 蕎麥 木綿 桑等ニ宜シ

地勢

水脈 利根川ハ赤岩村ノ南端ヨリ來リ本村ノ南ニ沿ヒ東流シテ上五箇村ノ南端ニ入ル 舟楫ノ利アリ 又休伯堀ハ赤岩村ヨリ來リ中央ヲ東流シテ上五箇村ニ入ル 則本村ノ用水ナリ

東部 田畑相連リ民家更ニナシ
西部 田圃平林接統シ民家散在セリ
南部 田圃連亘シ堤壩其中央ヲ貫キ民家并列ス
北部 田畑相連リ民家更ニナシ

全地形勢 地形幾ント弧三角ヲ為シ全村平坦ニシテ南境ニ利根川ヲ帶ヒ洪雨激漲ノ時決堤ノ憂アリ 本川ノ堤壩東西ニ亘リ且休伯堀中央ヲ東流シ則本村ノ用水ナリ 然レトモ水量淺クシテ夏秋灌漑ノ欠乏ヲ告ケザル

殆ント種ナリ

字 別 地

字	別	地	筆数
前耕地	六町六反八畝	三歩	百拾八
中耕地	拾老町五反六畝廿七歩		百五拾四
新田	拾三町四反四畝	貳歩	貳百九
老丁畑	三町貳反老畝廿五歩		七拾五
新田裏	貳町七反	廿九歩	五拾三
館海道	七町四反六畝	廿歩	百四拾八
野中	七町八反八畝歩		百九拾八
永田	六町	貳畝廿五歩	百拾四
四ッ入	六町七反五畝	拾歩	百七拾
中田	老町	老畝廿九歩	貳拾三
鎌田	貳町三反	拾八歩	四拾三
二丁免	七町老反七畝	貳歩	百五拾四
宮下	九町五反八畝	九歩	百八拾五
宮前	貳町三反六畝拾六歩		三拾三
堤外	五町三反六畝廿三歩		八拾三

神 社

長良神社
 所在 瀬戸井村字宮下 坪数三千八百六拾六坪
 祭神 藤原長良公
 社格 郷社 明治五年十一月ヨリ郷社ニ列ス
 創建年月 貞観十一年三月十八日
 祭日 三月十八日 九月九日
 氏子 千貳百六拾六戸

末社 殿島社 須賀社 春日社 稲荷社 神明宮 愛宕 廻三柱社
 八坂社

現任宮司若クハ祠官ノ名 祠官 高橋英 祠掌 南室傳
 雜 藤原長良公ハ東平治ノ為メ下向アリ 兼庶ヲ恵ミ仁恵ヲ施シ任
 調チテ後覺ス 後貞観十一年三月十八日大和国春日神社ノ末社ニ列紀ス
 時ニ上野ノ住人赤井良遠本國ニ勸請センノ志アリ 其旨ヲ奏聞シケル
 ニ假感浅ラス 則邑桑部瀬戸井村ニ宮殿造営ヲ勸許シタマフ 因テ今年
 九月九日遷宮ノ式ヲ行ヒ爾來佐貫庄ノ人民一向ニ信仰シテ宮附十二ヶ村
 ノ總鎮守トス 其後文明年間ヨリ分社スルモノ頗ル多ク邑桑部ノ本宮ト
 称ス 明治五年十一月ニ至リ郷社ニ列セラル 又一説ニ長良神社ハ上野
 国神名帳ニ正一位長柄神社アリ 長柄ヲ長良ト譯レルカト云フ 両説共
 ニ記載シテ後考ニ備フ 已上ハ明治十二年十月ノ調査ニ係ル社寺明細帳
 ニ掲載ノ儘ヲ記ス

寺 院

恒落山宝生寺
 所在 瀬戸井村字中耕地 坪数千四百拾五坪
 宗派 真言宗 寺格 当郡赤岩村光恩寺末
 開基人名 不詳
 開基年月 不詳
 現住ノ姓名 長柄行將
 雜 本寺ハ(建築年月不明)本堂 庫裡及薬師堂等アリテ相応ノ造營
 ナリシガ明治廿年五月十八日祝融ニ罹リ薬師堂ヲ余スノ外皆蕩尽ス而シ
 テ目下檀徒金ヲ募シテ再建ヲ図ルノ際ナリ

道 路

足利道
 等級 里道老等

長 老町四拾五間三尺 上五箇村境ヨリ来リ菅野村境ニ至ル

幅 貳間

形状 登降ナク屈曲一ヶ所アリ

雜項 上五箇村境ヨリ来リ本村ノ東北隅ヲ北通シテ菅野村ニ至ル 本

道ハ下野国足利町ヨリ中山道ニ出ツル要路ニシテ車馬ノ行通ニ便ナリ

中道

等級 里道貳等

長 拾三町拾間四尺 赤岩村境ヨリ来リ上五箇村境ニ至ル

幅 貳間

形状 昇降ナク屈曲五ヶ所アリ

雜項 赤岩村境ヨリ来リ村ノ南部ヲ屈曲東通シ上五箇村境ニ至ル 本

道ハ赤岩村ヨリ川俣村ニ通スル別路ニシテ行通稍便ナリ

堤 塘

利根川堤

長 拾老町四拾貳間三尺 赤岩村境ヨリ来リ上五箇村境ニ至ル

高 貳間四尺五寸

幅 馬路三間三尺ヨリ五間迄 數 拾五間三尺

雜項 赤岩村境ヨリ来リ本村ノ南部ヲ貫キ上五箇村ニ至ル 本堤ハ德

川家康岡東八州ヲ管スルニ方リ本川ノ汎濫ヲ防ク為メ文祿四年其臣奉行

荒瀬彦兵衛 石川佐次右衛門二氏ニ命シテ建築セシムル所ナリ 西ハ古

戸村ニ起リ東ハ下五箇村ニ至ル延長一万八千三百貳拾九間ニ亘ル 之レ

ヲ本堤ノ創建トス 後寶文年間德川綱吉館林ニ城主タル時大ニ力ヲ水防

ニ尽シ堤防組合ヲ設ケテ防禦ニ供フ 然レトモ徳川氏治世ノ時ハ高幅制

限アリテ然ルニ自由ニ増築スルコトヲ許サス 是ヲ以本川暴漲ノ際潰決

ノ憂アリ 然ルニ權新以來官大ニ力ヲ水防ニ用キラレ年々地方稅ヲ支出

シテ増築セラル故ニ現今ハ頗ル堅牢トナル

古 跡

瀬戸井五郎廣明居趾

所在 瀬戸井村(字及ヒ居趾不詳)

現状 前記ノ如クナルヲ以テ現状モ亦記スルニ由ナシト雖モ蓋シ田圃

ナルヘシ

雜項 抑本氏ハ人皇八拾五代順德帝御宇ノ人ニシテ藤原秀郷ノ後裔

本郡古海ノ住人古海太郎廣綱ノ男廣宗ノ弟瀬戸井五郎廣明ニテ本村ニ居

住シ一方士ナリシカ承久ノ乱ニ戦死スト里人ノ口碑ニ傳フ 又応仁武鑑

其他ノ書ニモ載セテ瀬戸井五郎ノコトアリ 因テ考フルニ全氏ノ本村ニ

居住セルコトハ正ニ疑ヒナキモノト情哉其古趾今索ムルニ術ナシ 全氏

歿シテ茲ニ六百年余 蓋シ世變ヲ経テ居趾田圃トナリ古書記ハ悉ク竄滅

ニ帰シタル故ナルベシ

變異記事

堤塘潰決

安政六未年七月廿四日ヨリ廿五日ニ亘リ暴風降雨利根川洪水堤塘ニ溢

ルム三四尺 為メニ組合村々ヨリ出ツル鳩ノ人夫茲ニ群集スト雖モ防禦

其術ナク遂ニ本村西南ノ堤塘延長百五拾六間潰決ス 其深九尺余下流浸

水數拾村ニ及ヒ宛然江海ノ如シ 決口ノ橫流激走衝流ノ家屋流失シ人民

溺死ス 而シテ禽獸ノ流亡スルモノ亦夥カラス 老幼号泣シ其声水声ニ

響応シ其慘状実ニ言フニ忍ビス 殊ニ本村ハ全ク砂磧トナリ決口ニ數反

歩ノ池ヲ成ス 是ニ因テ村吏此狀ヲ官ニ上申ス 是ニ至テ政府勘定方林

又七郎ヲ派遣ス 全氏則普請方加納鉄三郎 板井規矩郎 武沢楠之助三

氏ヲ從ヒ該所ニ臨ミ水防組合各村吏員ニ命シテ人夫ヲ徵集シ之レヲ統督

シテ以テ全月廿七日急水留ニ取掛リ大ニ尽力スト雖モ決口激流ニシテ土

功流失セルコト三四回 九月十五日ニ及ンテ漸ク其効ヲ奏ス 尋テ十月

一日ヲ以テ本土功ニ着手シ越テ萬延元年三月廿五日至テ完ク竣功セリ

此前後ノ經費ハ悉ク官金ヲ以テ支弁セラル 又本村吏員ハ本村罹害ノ人

民救助ノコトヲ岩鼻郡代役所ニ請願ス。是ニ依テ代官荒井清兵衛氏ヨリ小屋掛料及夫食等ノ手当金ヲ給與セラル。依テ村吏ヨリ罹災者ヘ割與ス。是レヲ糲カニ醜濁ヲ免ルニ云フ。本村ノ茫漠タル砂原ハ如何トモスルコト能ハサル有様ナリシガ爾來人民奮フテ開墾田圃トナシ數年ニシテ之レヲ尽ス。池ハ漸次埋メテ水田トナシ又堤外決口跡ノ深流ナリシハ年々徑ルニ及シテ附洲シテ平原トナル。故ニ開墾シテ畑トナス。今日ニ至テハ堤外ハ皆桑園トナリ決所堤北ニ小池ヲ存シ内地ニハ砂石ヲ集タル小塚二三アルニミ。又堤内各渠ハ悉ク砂石押入シテ田面ト平行ス。依テ官費ヲ以テ浚深セラレ翌年三月ニ至テ竣功シ今日ニ至テハ聊用悪水流通ニ妨害ナシ。

以上ハ當時関係村吏ノ私記ニ係ル書類ニ徴シテ書ス。而シテ詳明ノ項日ハ則左ニ記載スル如シ。

- 一 破堤延長 百五拾六間 深九尺余
- 一 流失家屋 母家拾五棟 添家廿老棟 合三拾六棟
- 一 砂入村 本村全体 高三尺位
- 一 溺死 貳人 禽獸ノ數不詳
- 一 岩鼻御役所ヨリ救助 急夫食老人ニ付 永五百文 再夫食一人ニ付 永五百文

- 一 小屋掛ケ料 一戸ニ付金三分
- 一 築堤 長百五拾六間 高三間老尺 輻馬踏貳間 數拾老間三尺
- 一 人足 合計四萬四千百拾四人五分
- 一 普請金 合計九百拾九兩老分ト永三百三拾九文六分
- 一 本村内蠲堀々皆砂入浚深普請
- 一 人足 六千七百貳拾人貳分
- 一 金 永三百貳拾九貫九百七拾四文老分
- 一 普請御掛

勘定方 林又七郎
普請方 加納鉄三郎 武沢補之助 桜井規矩郎

普請組合村

- 古戸村 仙石村 古海村 舞木村 赤岩村 瀬戸井村
 - 上五箇村 上中森村 下中森村 大輪村 大輪沼新田須賀村
 - 川俣村 梅原村 江口村 千津井村 斗合田村 飯野村
 - 大高島村 下五箇村 岩田村 赤生田村 松原村 谷越村
 - 新宿村 小桑原村 青柳村 堀工村 江黒村 南大島村
 - 新里村 中谷村 大佐貫村 矢島村 近藤村 下三林村
 - 上三林村 入ヶ谷村 赤堀村 野辺村 荻野村 木崎村
 - 鍋谷村 田島村
- 以上四拾四ヶ村

双児生産

安政二年八月十五日平民南室房吉妻まさ双児ヲ産ム。長男ヲ伊之吉ト稱シ今郡上三林村川島伊三次方ヘ養子ニ入籍シ二男鹿造家ヲ嗣キ二子供今ニ生存ス。

大洪水の記

前記

洪水中に於ける実況を自己の記憶に備へ、又、当時の惨状を子孫に伝える為め、勿論、混雑の中に、筆を呵して書き連ねた。文、意に副はずとも難も、一百年來稀觀の大天災の一斑を窺うに足らう。

明治四十三年庚戌八月

雪廬漁客識

大洪水の記

明治四十三年庚戌八月、月の初めより連日の雨で、八日、九日の如きは終日終夜、丑寅の風で煽られて降り通した。八月十日になつても尚歇まない。河も堀も池も時々刻々、水量を累加して刀根は忽ち十五尺となり、十六尺となり、亭午には十七尺を算した。警鐘は乱打せられて、凶悪の響を伝へる。簀と笠に身を固めた水防夫は、次第次第に堤上にと走せ集まる。

内郷へ往つて北を見ると陸稲や桑や芋が僅かに頭を水面に露はして、菁蕪の漂ふが如く、刀堤へ上つて南を望むと味噌汁の如うな濁流が滾々と渦き、流れて武蔵の方遠く森や林を隈として際涯なく大湖の觀をなしている。乾坤正に水の領である。風伯、雨師は、益々兇暴を逞ふして吹き荒さみ、降り頻さる。

家の表長屋と土蔵の庇下は水防夫の臨時詰所に充てられた。

水量は益々増へる。水防夫の大部分は指揮者の命に依つて、各自に持ち寄せた空袋を荷車に満載して、古海村東部の浸入を防禦すべく出動した。

斯くて暗澹たる光景の中に自分の終世忘るる事のできなない凄惨なる一

夜を迎へたのである。夜に入ると不穏なる豈語は人から人へと伝へられる。「橋の宮が危険だ。」「お庚申が切れそうだ。」「古海は水が越して居るらう。」「何々。」「何々。」「と紛々として捕提する所がない。

午後七時。曩に古海村へ派遣された水防夫の一派はズブ濡れになつて帰ってきた。そうして防禦の努力が徒勞に期した事は其の指揮者によつて報告せられた。想ふに滔天の勢を以て奔入する水力は之を防止するに數十の人力は余りに微弱であつた。

数多の水防夫は二ヶ所の焚火を囲んで罵り騒ぐばかり、指揮者の頭にも水防についての成算がないらしい。尤も斯る際には何人が指揮者の位置に立つても十全の手段は尽せない。況して本村の如きは平時水防に対する設備が全く欠けてゐて、事變に直面して水防材料を集めるやうな訳であるから、到府危急に應ずることは不可能である。水防指揮者たるも亦至難と言はなければならぬ。

自分は水火防について公職は持つてゐない。けれども、そんな事を言つてゐる場合でない。全村拵つて水防夫とならねばならぬ秋だ。即ち仕度をして詰所に行つて「斯うしてゐては仕方が無いでせう。什麼です。是から交代に堤上を警戒して危険の場所を見出した場合は全力を注いで防禦しませう。」と激励したら、一斉に同意を表した。「そう一概に行かないでも半数位でいいでせう。」と約半数の水防夫と出発せんとして、「危険な場所を見出した時は此処へ急便を飛ばす、即ち全員が出動するのは勿論であるが、水防夫全隊で喰ひ止まらぬ場合はどうしませうか。」と語つた。すると喧々囂々。暫らく決しない。結局土堤の水が越すやうになつては例令舞木村全部の人が出動しても、氷菓村惣体の者が出動しても到底防禦は可能ない。人力を以て防止する事が可能の程度なれば必死の防禦し堤上を水が平押に越すやうになれば、不可抗力として各自避難の用意をする外はないと云ふ事になつた。

旋て自分は雨外套に提灯を持って出発した。雨は横さまに外套を撲つてばらばらと音がする。堤へ上ると河水はもう土堤から汎濫する許り、

上新田に至る頃、振り回して見ると後に続くものが六・七人。「他の者はどうしたらう。」と聞くと、「皆んな行く振りをして出たが、漸々途中で消えて了った。」と云ふ。噫、何と云ふ無責任極まる水防夫であらう。今己れが郷土の危急を目前に見て而も水防夫たる重き責任を負ふてゐながら途中で逃げて了つとは、如何に御役とは云ひ、無責任極まる連中だとなつてくつ愧れて了つとは。お庚甲の堤へ出ると風は一層強烈に吹當てる。自分は忽ち提灯を吹き消された。後の二ツの提灯も相次で消された。天は暗く墨を流した如う。殊に猛烈な風雨の中だから、一行の困難は一通りでない。南も北も一面の水で土堤ばかり大蛇の背の如うに蜿蜒として長く東西に横はつてゐる。刀根の川面は灰白く茫としてゐる。此時、自分に続いて来た者は僅かに四人、責任を重んじ職務に忠なる勇士は大谷正作、荒井仙藏、大谷駒太郎、黒田雄吉郎の四君であつた。記して永く其を伝へる。

だんだん西へ進むと遙かに中島の方から二ツの提灯が此方を指して来る。明城、又明城、恰かも巨蚕の流るゝやう。互に向進するから一歩一歩接近する。旋て摺り違つた時先方から声をかけた。「森田さんですか。」と、「いえ。」と自分は答へた。そうして先方の声の主は中島の高尾弁三郎君である事を直覚した。高尾君は「今、幡の宮、八幡社の西の土手が危険だから本村へ応援を頼みに行く処です。どうぞ十人許り至急派出して下さい。」と云ふ。「よろしい。承知しました。」と則ち黒田雄吉郎君を引返して直ぐ廿人許り八幡様の社へ来るやうにと言伝へた。

高尾君は元来た道の中島の方へ帰つてゆく。自分等は無提灯だから、中島から来た一人に八幡社へ案内を頼んだ。其の人が前に立つてゆく。見ると梅さんのやうだ。「何んだ、梅さんか。」と云ふと、「へえ、へへへ……。」と例に依つて不得要領の挨拶。果して元雇人田代梅吉君であつた。

旋て八幡社へ行くと一人の番人、高尾喜代三郎君がゐる。他の中島の人達はと聞くと、休泊堀の方を防禦してゐると云ふ。其の内に小林徳太郎

君と田村紋藏君がやつて来た。自分等は消された提灯に八幡社の拝殿で灯を点けた。「兎に角、危険の場所を調査しやうではないか。」と一同で堤へ上ると滑々として流の如うな音ひが自分の官能に棲ましく響いた。「あれ。」と一同は言合はせた如うな音ひが。堤防を越す水音が古海から浸れして来る。水勢が判然しない。其内漸々提灯を消されて、黒、暗黒……。夜天は漆より黒く、咫尺をも弁じ得ない。一同は探り足して進む、自分は一番先頭、進むに従つて音が激しい。「土手を越す水音だ、危ふない危ふない、帰らう。斯うなつては到底防げない、引上げやう。」と叫んだのは小林君であつた。然し自分はその音のする場所が見度い。戦々恟々として、一歩、二歩、三歩運んだ時、其時「危ふない、危ふない、帰らませう。」と自分の直ぐ後にゐた大谷正作君が注意する。自分ももう此上は危険と知つて進む勇氣はない。則ち一同と共に踵を回した。

何ぞ知らん、其の流の如き響きは土堤を越す水音にもあらず、又古海より押寄せる水勢にもあらずして、其時既に己に七・八十間破堤して、二十尺の河水逆まに堤内に奔下しつゝありしならんとは。自分は當時尚数十歩進んだならば、不測の難に逢ふこと必然であつた。危険、危険、自分は今思ひ出しても慄然として肌を粟を生するのである。

八幡社の前の堤上で、小林・田村の二君に別れた。然し自分は其時尙土堤を越してゐるのではない。古海から押寄せて来る水音だと信じてゐたから、八幡社へ寄つて提灯に灯を点けやうとしたら、「早く帰らませう。」と大谷君が頼りに急ぐので其のまま堤上を帰途に就いた。豪雨は襪を衝くやう。

小林君は大急ぎで帰らうとしたら、もう水が胸の深さとなつて、押流され押流され漸く家に迎りつき、田村君も桑の木へつかまつては進み、辛うして家へ帰つたと、翌日小林君が話された。自分等が若し提灯を点けに八幡社へ寄つて愚図愚図してゐれば、どんな酷い目に逢つたかも知れなかつた。思へば僥倖か、夫祐か。

詰所へ帰つたのが午後九時過ぎであつたらう。自分は「幡の宮はもう

防げない。中島との連絡も付かない。是から各自家の仕末や萬一の準備をするが肝要だ。中島の人とも其の事を協議して引上げて来た。」と報告した。数十の人は一齊に狼狽して中には無断で走せ帰った水防夫も数多あった。先是、糞を以て急派を求めた応援隊が疾く来る筈であるに、どうしたのであらう？不審を抱いて詰所へ帰って見ると便を受けたままに応ずる手配もしないのであった。詰所には指揮者が一人もゐない。噫、何と云ふ無責任の事であらう。斯處では止まる水も止りやしない。指揮者の無為には呆れるではないか。尤も指揮者と言っても水防夫と殆んど懸隔のない人物もゐる。否、寧ろ水防夫の中に有為の人がある。指揮命令宜しきを得て、一団を活動せしむることは望めない。失敗のやうだが事実が閉ち雄弁の証人である。測り知るべからざるは天の配剤である。此の匆忙の夜、此の紛騒の時、天は悠々として奇異なる事象を自分等の前に發現せしめて、ここを解決せしめんとした。其れは自分が詰所へ帰って暫らく後、炎々たる水防夫の篝火に照し出された一個洋装の青年があった。彼は満身スズ濡れである。上着も又ボンも水に浸したやう。近いて見ると風非瀟瀟の青年である。雖然、行旅風雨と聞かされた困苦の影が面貌に現はれて、眼は凹み顔蒼白である。彼は上着を脱いで焚火に乾かしてゐる。自分は、「君は早稲田中学ですって……。」と尋ねます。「何処から来たんです。」と桐生から。「何処へ行くんです。」と桐生の在、今泉に友人があるから、其処へゆく積りで来たのです。「君の家は何処です。」自分の間は余り査公式であった。「東京です。」どうして此処へ来たんです。「昨夜、桐生の友人の家へ泊って足利から太田・小泉を経て、赤岩へ来るうち此の大洪水に逢ひ、無拠赤岩へ一泊しやうと松村と云ふ宿屋へ行ったが泊めない。外の宿屋でも皆断はられた。それで舞木の勇屋といふ家なら泊めるだらうと聞へて、勇屋へ来たけれど矢張り泊めないのです。」と、自分はそぞろ同情の念が起った。漂泊の旅に宿る家もなく、殊に満身雨にぬれてゐる。寒くもあらう。空腹でもあらう。気の毒だ。家へ泊めてやらうと思つた。「君、名刺でもあつたら見せ給へ。」

と云ふと、滴々と雫の落ちる靴の内から、名刺と早稲田在字の証とも見るべき七月迄の授業料納付証を出して見せた。自分は、「君、家へ泊り給へ、斯んな場合だから、只雨と蝨を淡くばかりだ。」と云ふ。「い、何アに……此処で沢山です。」と流石に気の毒といふ風。「そんなに濡れてゐては毒だ。遠慮せずに泊り給へ。」重ねて勧める、居合せた水防夫も口々に「泊めて貰つた方がいい。」と云ふ。彼も泊まる氣になった。「それでは御厄介になりませう。」と云ふ。脚絆を解かせ、足を洗はせ、着物を出して着換せさせた。

此処で一とつ自分の心配が起きた。それは独断で彼を泊めた事だ。普通の時なら兎に角、未曾有の大洪水で今や床上に浸水せんとする際、家人の居処にも困る、事によれば避難でもしなければならぬ時に、知らぬ旅人を泊める。蛇度家君に叱られるに違いない。尤も中学生が迷つて来た事は父に話して置いた。自分は叱られる覚悟で父に泊める事情を話した。と、父は「それは気の毒だ、泊めてやるが、い。」と意外の言葉に自分は安心して青年を四番の座敷に案内して夕飯を進めた。

若い旅人の名は橋三千三、年は十九。天性の旅行好で年々徒歩旅行をやる健脚家。今年も夏季休暇を利用して、月の二日に東京を立て、川越、熊谷、伊勢崎、前橋、渋川を経て榛名、赤城を跋涉し、足尾に出て、桐生、足利、太田、赤岩、羽生を過ぎ、東京へ還る予定でありしと。彼が夕飯を終つた後、話して見度い事もあつたが、そんな余裕もなし、彼も旅人の神身を休養したからうと充分に寝具を与えて就床せしめた。彼はどんな夢を結んだであらう？

指揮者から各自用心の爲め退散の命があると、水防夫は我先にと帰つて了つた。焚火も消さず高強提灯は立てたまま茶碗や茶釜も散乱、自家族と跡片付けをする。いい面の皮だ。

水は益々激増して裏庭に一ぱい押し来て来た。表の道路もどんどん東に流れている。表の庭へは未だ没入しない。無論、床上へ没入する様な事は絶対ないと信じてゐた。

西隣の松野屋へ行つて見ると、既に台所がばいの水。今床上へ上るばかり。

本家へ行つて見やうと往來へ出ると恰ど川の如う。新宿の通りへ曲ると段々水が深い。下駄、桶、籠などが後から流れて来て尻につかえる。旧隠居へ寄ると、水が入口までしか来てゐない。新隠居ではもう台所がばいの水。次に本家へ往つて見ると矢張台所は満水してゐるが、床上へは乗らぬ。床上へ台を置いて俵を積んで用意してある。

本家を出て金子方へ行かうと中の庫の方へ曲ると、持つてゐた電灯の灯が消えた。幾度点けても消されて了う。焦れ度いから点けずに来た道を選へる。来る時は水に押されるのだから左程困難を感じなかつたが、戻りは水を遡るのだから中々骨が折れる。隠居の前迄来ると大塚半蔵さんが素蹠でやつて来るのに出会した。「本家へ手伝に行くだ。」と云つて行過ぎた。

家へ帰ると未だ表の台所に浸水した許り、これでは愈々座敷へ乗る如うな心配はないと、更に金子方を見舞ふ。金子方は表の道を少し水が流れてゐる位で台所へも入らない。却て避難者が五、六人来てゐた。金子方へは遂に浸しなかつた。

旋て帰宅した。床上へ浸水することは無いと思つてゐたから畳も上げずにゐた。然し流石に就眠する事は可能なかつた。父は平常の通り寝についた。其内空腹になつた。起きてゐる一同で握り飯を食ふ。

水は次第に殖へて何時しか表庭に光ち満ちた。鶏鳴三更を告げて冷い切つた夜の空気が肌を迫つてそぞろ寒さを感じる。

万一の用意にと子供は二階に移して寝かした。直ぐ床上へ浸水しそつてもないから自分も子供の間へ転寝をした。うとうとと思ふとけたたましく表の戸を叩いて「八幡様の西の土堤が切れた切れた」と絶叫するのは松の屋の和三部だ。同時に裏木戸を破れる如うに叩いて松の屋の女達が大声に呼ぶ。自分は、其れと跳ね起きて父を喚び起して裏木戸へ駆けつけやうと中庭へ飛下りると、中庭はばいの水。漸く木戸口へ行つ

て開けやうとしたが、懐はてるから中々開かない。外では狂気のやうに一層激しく叩く。やうやう戸を開けると龍ちゃんを背負つたお政さん、老婆を背負つた阿母さん、京ちゃんとか、物の崩れる如うに入つて来た。其処で老婆と龍ちゃんは二階へ子供と一緒に寝かした。それから大急ぎで床の上へ台を置いて畳を積む。六十余の畳数だから容易ではない。殊に相手は雇人の老婆と女ばかり、実にもどかしい。自分は寝てゐる彼の青年を喚びて「今、座敷に浸水する。濟まないが少し手伝つて呉れ給へ。」青年は起きて手伝つた。

漸く全部の畳を上げ終る時は八月十一日の晩近い頃であつた。と不穩の叫声が入り乱れて土堤の方で起つた。「お庚申が切れた切れた。」と吐鳴つてゆく者がある。統いて「お庚申が切れた。皆んな土堤へ逃げろ逃げろ。」と叫ぶものがある。

スワ大変だつと家中は引っくり回るやうな騒ぎ、不安と危惧は忽ち一同の胸臆に満ちた。お政さんは龍ちゃんを、お母さんは老婆を背負ひ出した。自分は無心に寝てゐる里子(七ツ)を揺り起して負ふ、片手に恵子(九ツ)の手を曳きつゝ、恒(十二)に「逃るんだ逃るんだ」と大叫し、雅彦(三ツ)はよく寝込んでゐるから、志子に「早く雅を早く雅を」と吐鳴りながら、土手に避難せんとした。父は「お庚申は切れやすまい。慌てると危ふない。静かに静かに」と一同を制した。父は事に臨むで、いつも沈着である。自分も「土手へ逃げたとして仕方がない。前の土手が切れないうちは豈夫家は流れはすまい。」と思ひつて引留め土手への避難を一時見合せた。すると利根川屋の廣さんと裏木戸から草履・脚絆のまゝ「お庚申が切れた。愚図愚図してると命がない、早く土手へ早く土手へ」と喚叫しながら表へと駆け抜けた。一同は氣も転倒し、自分は只うろろろする許り、どうして、いゝのか判らない。表の戸を開けて土手の方を見ると未だ明け放れぬ夜の隈は騒ろに、利根川屋の廣さんが紛々とした松の屋阿母さんを助けて土手へ避難せんとする所、阿母さんは恐怖の悲鳴を上げてゐる。

赤兎を負ふた人の妻や手を曳かるゝ年寄りや、陸続として堤を東へと走ってゆく。皆な避難するのだ。

水は激増して床上を浸すること二十余、門前を流るゝ水の深さは腹部に達し、波を立てて走らしてゐる。此時利根の水量正に二十尺。大塚基次郎君の屋前堤上は水が越してゐると云ふ。天の禍も此に至つては深酷惨烈を極める。

もう、猶予する場合でない、更に一同を奮勵して奥座敷の畳を上げ、床が母家より高いから浸水する如うな事はあるまいが、萬一にと用意した。座敷へ四斗桶を置き、板を渡し、松野家の人達を頼んで畳を上げ、襖を外して其上に載せ、他の道具は文庫蔵の二階と、四番の二階へ運んだ。穀倉へ行つて見ると床の俵が浸りそう。台を置いて積み替る。爺（田島和平と云ふ六十二の作男）とお政さんとおぢやうと自分。三人寄つても一人前の力は疑はしい。ネジ、ゴシしてゐるうちに米麦十六、七俵浸してつ了つた。

穀倉の片付が終つた夜が明けた。表へ出て西の方から来る人来る人にお庚申の様子を聞くと、切れやしないが処々が崩れて危険だと云ふ。不安の中にも意を休める。

堤へ上ると家の前も今堤から水が溢れんとしてゐる。水蒸気と霧は空中に溶け合ふて、天地朦々。対岸、武蔵の方、彼処此処、警鐘が凶音を伝へてゐるうちに、帛を裂く如うな女の叫喚が水を度つて細々として聞へる。此時、此際、天地は絶対悲惨の氣に満ちて、言ふべからざる惨憺の感に打たれたのである。欄干のついたままの長い橋が大きな百足のやうに流れて行つた。他家屋や木材や幾多流れ去り、流れ来る。

家へ帰つて見ると増水はもう止まらずやうだ。一同は始めて愁眉を開いた。蘆は水に浸されて飯を炊く事が出来ない。裏の東長屋は幸ひに床が高く浸水しないから此処で炊事をした。

朝飯後、お庚申の破堤した処を見に行つた。途々四五ヶ所も北に雪崩れてゐる。中には僅かに馬踏を残して崩れた所もある。これでは土手が

切れたと騒だも無理はない。上五箇、下中森、又、武州の大野、上中条等が切れなかつたならば到府此処も破壊は免れなかつたであらう。

然しまだまだ安心は出来ない。此のまま打撈して置けばどんな大事になるかも知れない。組頭や小頭や常設委員は何をしてゐるのだらう。早く応急の手配を尽さないとな家の用心をしても何にもならない。此処が破堤すれば我が舞木は全滅である。人事を尽して天命をまつ、社会の文明は科学の武器で自然を征服する。今や数千人の運命に係る場合である。

殊に我が家などは最も危険区域である。殊に我が家へ帰ると、某が来て「早く崩れ所を防がなければ危険です。其れには堤の両面から蘆を充てて竹を以て縫ふのが宜からうと思ひます。就ては御宅の竹を伐らして下さい。」と危急の場合、自分は即諾して後で父の承諾を得た。

旋て人夫が来て竹を伐り出す。それを崩れた所へ運搬する。竹伐りが終つて場合へ行つて見ると略作業が出来た。此の作業は危険区域に近い者が相集まつて指揮者も無く、共同協力でやつた。幾ら警鐘を叩いて非常召集をしても皆な自分の用心許りしてゐて集まらない。

旋て天晴れ、久し振りで舞たる日光に浴した。驟くが如き暑さである。赤岩方面から切れ処見物が陸続として通る。自分も見にゆく暇を得て之を観た。場所は幡之宮、旧八幡社の西、古海村との堺、破堤延長七十間、内古海分約六十五間、舞木分が約五間である。後に舞木分廿五間崩れて百余間となつた。切れ口に立つて觀ると六百尺の巨口に怒りする水勢は轟然として怪魔の高に餓えたる如き叫音を発して猛烈と吸入狂ひ、逆捲く濁流は五・六尺の高に躍り上つて、恰ら大小幾千個の土塊を投げ散らすやう、それが個々別々銅の如き光を帯びてゐる。狂波激浪は相撞突して自から破砕破滅する。八幡社の杉森は怒濤に衝突されて参天の喬木、風なきに揺動する。光景憤にして憤の極みである。而も心なき油蟬や法師蟬や久方振りの快晴に逢ふておのがしし鳴き競ふてゐる。

余勢は放奔して滔々と中島の前方を斜断して遠く福島方面に突流しつ

つある。作毛、作物の皆無に帰したのは勿論、耕地の大部分は砂と礫に埋められたであらうとは百人一様の観察であった。

八月十二日

晴れて明けた。朝飯後、再び破堤の場所を見にゆく。刀根の水量が減じたから切れ口の水勢もやゝ衰退したけれど、横溢する河水は尚遼津瀬のやう。

土台や壁や床板を水の退けぬうちに、泥を洗ひ流さぬと後では中々落ちぬと聞へたから、家中で掃除する。

八月十三日

又、雨。東北の風で頗る不穏の天候である。太田、東京、龍舞、四方寺へ出水見舞を兼ね、当地の惨況を概報した。

午後激しい降りとなった。恐慎の念は再び衆人の胸中を襲ふた。此上降り続いて又増水するやうなれば、漸く喰ひ止めた土手はどうして防く事ができやう。彼処が決潰すれば住宅や家財は挙げて失つて了ふのは勿論、実に数多の生命にも関する大事であるのだ。一同は悔々としてゐる。夜に入ると宇宙玄黒、風と雨は益々暴威を襲つて限りなき狂迫を一切の萬有に如ふるのである。一同は臥床したけれど、不眠、不醒、憂懼に因はれてゐるのであった。

八月十四日

夢冷かなる黎明、遽しく表中を叩いて「又、水が増して来たから御用心なさい。」と、松の屋の和三郎が警告に来て呉れた。一同は跳ね起きる。表戸を開けると一旦減水した道路を又河の如くに流れてゐる。

隣の伊勢松さんを頼んで土蔵の俵を積替へる。堤の上つて見ると一旦引けた水が又一ばいに充ちた。而かも風雨は尚活動を続けてゐる。

朝飯後、再び堤へ上ると金子常設委員が(文五郎君)来て「到底も我々常設委員二人許りぢや行り切れない。此の天候では崩れ所が危険だから更に厳重に防禦しなければならぬ。是非応援を頼んで。そうして鈴木組頭(新平君)の処へ行って手配の交渉をして貰ひ度い。」と、自分は

召諾して簀と笠を着て鈴木君に会つて打合をし直ぐに召集の警鐘を打たせた。家の前へ引返して人夫の集まるのを待つてゐたが、中々集まらな。毎日早く出て働く人は定まつてゐる。旋て組頭も常設委員も来た。人夫も少し集まつた。此処で荷車に空俵を載せて崩れ所へと運んだ。場所へ着くと空俵を堤表へて、土から割竹で縫付けける。低気圧の極度を示す刷毛を曳ひた如うな灰色の雲は東北の空より西南の天に飛ん、雨は横さまに注ぎ皆なツブ濡れとなつた。作業が終ると正午。土木官吏が三人、工夫一人連れて災害の調査に来た。防禦工事を見て貰ふと未だ不充分だ、更には五・六寸の竹を三叉に刺してそれへ土俵を釣る方がいい。と、それでは昼飯を食つて今度は各那共吟味で、村中惣出で作業することにす。竹は矢張り家のを伐ることにした。

午後には続々集まつて来た。約二百本の竹を伐り出す。大勢だから作業が大にハカ取つた。然しまだ空俵が足りない、大谷良三郎さんの濡れ俵が小学校の庭にあると云ふ。自分は数名の人夫と伝馬船に乗つて、片町、新宿を経て大谷さんの承諾を得て、新田八幡を船行し、校舎の東に船を停とめ、廿一俵の空俵を積んで元来し道を戻り、油免の崩れ所へ漕ぎ着けた。忽ち予定の工事が出来上つた。竹を二通り三叉に崩れ所へさし、それへ二ツ以上の土俵を竹カンナと釣つた。竹を二通り三叉に崩れ所へさし、それへ二ツ以上の土俵を竹カンナと釣つた。一致協力すれば何事も敏速に竣工する。土手が切れんとする場合でも大勢の人々が懸命に防げば其意気込みで喰ひ止める、一人の人間が人身御供になれば決水もとまると云ふ。結合の力、意気の力は尙に偉大ではないか。

十一日の夜から、各難災者へ(籠を浸して炊事不能の家)救助する糧食を、常設委員が取扱つて配付してゐた。最初は増田市八さんと金子文五郎さんの宅で炊いてゐたが、大谷六太郎さんの家へ移転した。(軒屋敷と中之倉は全部浸水せず)

自分は応急工事が終つたから「先掃宅しやうとしたら、金子常設委員に、又食糧配付の援助を頼まれた。金子さんと同道して大谷さんの宅へゆく。握飯が座敷に一ばい、炊事場では二ツの大釜で炊き出してゐる。

罹災者が五百余人、一回に二千個以上の握飯が要る。

旋て自分は西之根、往生院、上新田、片町の罹災者へ配付を托された。団飯を桶に入れ、船に載せ、二人の工夫に漕ぎ出発した。大林寺に避難してゐる人から始めて、西之根、往生院、上新田、片町を終り、最後に円福寺にゐる罹災者へ配付してゐる頃は、夜の十時であった。時に大門の方で「旦那はゐりましたか。」と呼ぶのは和三郎の声。「あゝ、ゐたよ。」と自分が応へると続いて「おゝい。」と金子の声。自分は崩れ所の応急工事が終つて、炊出所へゆく時、家の前を通つたのだから其事を鳥渡家人に告げればよかつたのを其まゝ之れに従事したので注意を欠いた。其内、和三郎と金子が門前に来た。「家ぢや帰らぬから心配して方々を尋ねた。それに夕方から阿父さんが体の工合が悪いので……。」と金子が云ふ。丁度配付が終つたから後を人夫に頼んで急いで帰宅した。父は夕方ふと気分悪しくなつて一回吐瀉したが、就寝後は異りは無いと話しにも変りはないので安心した。

此夜、糧食配付で始めて内郷の実況を目撃した。西の根は殊に水が深い。床上二尺以上浸水した家がある。破堤してから急に水が押し寄せて、女、子供は辛ふして避難した。大郷家は空虚である。こんな有様だから薪や鹽を流し、俵や味噌を浸したものは殆んど全部だそうだ。中には家を流されぬ様、周囲の樹木から家の柱へ繩で蜘蛛の巣の如くに引張つた家があつた。観音堂の側を通る時、激流に船を垣根へ押突けられ、人夫は水中に跳ね落され、糧食を船と共に転覆せんとした。

八月十五日

晴、炊出場にゆく。一回は昨夕の通り配付し終り、二回の配付に出発せんとする頃はもう黄昏。旋て消炭色の雲が日方の天に湧くと閃々たる電光、轟々たる雷鳴は間断なく耳目を驚かす。忽ち疾風に伴ふて豪雨が襲來した。一頼りて小降となつた。けれども、稲妻の閃光と鳴神の鼓音は中々激しい。然し余り遅くなるからと二人の工夫に握飯を入れた桶を差し担ぎにさせ、雨を衝て出発した。五軒屋敷から八幡権現を終つた。

是迄は船だから左程に困難も感じなかつたが、膝土の水を冒して迅雷電光の下、猛雨を衝いて歩行くのでなべつたり穴へ踏込んだり、幾度か転倒せんとした。その困苦は一通りではない。雖然一人間の生命を護るのだと、と心中に叫び、自分で自分を激励して漸く任を果し得て、炊事場へ帰つたのが十時過、自分は少くとも一善を尽したと信じて心切かに快感を覚へたのである。

新宿以西へ船で配布に出た三人の工夫はまだ帰らない。自分は雨と水にぬれたから後事を野村常設委員(清太郎君)に托して帰宅した。翌日聞くと昨夕三人の工夫が戻らないのは彼等は雷鳴雷雨に怖気づき、西の根の或る家へ逃げ込んだまゝとうとう一夜を明かしたのでさうだ。実に意気地のない事だと思つた。人は責任を知るのが大切である。自分も昨夕一人夫であつたならば或は配付を仕遂げられなかつたかも知れない。況んや自分の如き雷鳴に非常の恐怖性を持つてゐる者をや。

八月十六日

曇り、時々雨が降つた。救助米取扱簿を作製して終日野村清太郎君の方で執務した。糧食配付は今朝限り止めた。

自分は数日間風雨と悪戦した困身を慰養すべく帳簿作製を終ると帰宅して就寝した。

八月十七日

曇、朝飯後、保次、高際と一処に上五個の破堤を見にゆく。赤岩へ行くと、稲荷社の処と里東が数ヶ所崩れてゐる。防禦の跡を見ると赤岩でも大騒ぎをやつたらしい。里東から瀬戸井へかけて堤派の作物は青々と開き水害は知らぬ情だ。上五個へ入ると直ぐ惨澹たる光景が眼前に展開された。切れ口近く進むと約二百間の破堤。利根の水の七八分は呑みであるかと思はれる赤黄色の濁流は凄まじい音して奔入する。切れ口の下は広い砂原、あちこちに散れ家の家が哀れに形骸をとどめてゐる。砂原の先が流れて利根の本流よりも急激である。波は浪を蹴つて怒号し澎湃として遠く蒼野、木崎方面を突破してゐる。蒼野や木崎や海洋中に散在

する島嶼の如く、樹木のみ蒼々としてゐる。小舟や帆かけ船が行き交ふ状は恰然一幅の活画である。自分は砂原へ下りて二十余の生靈が一時に土砂に埋られて、無惨の死を遂げたといふ家の跡を吊ひ惘然として、一片の回向を心中に念じた。流れついた薪を拾つてゐる婦や跡片をしてゐる男や心なく遊んでゐる小兒も、皆哀愁を誘ふ。富水村役場が全滅し全駐在所が流失して巡査林某の妻子二人、行衛不明となつたに徴しても如何に惨劇を極めしかゞ想像せられる。

書き洩したが、十日の夜宿泊した彼の青年橋三千三君は、翌十一日の晩、破堤したと云ふ騒ぎの時危険だから眠つてゐるのを起して「此の大洪水では河は無縁流れない。又上五個が破堤したといふから川俣方面へも行かれない。まづ滞在してゐる給へ。」と云ふと「いや、此の上御世話になつては……兎に角出かけて見ませう。」「出かけても到底も行ぬから遠慮せずに居給へ。」「まあ出発して見ませう。」「ちや、行けなければ引返して来給へ。」と云ふ、彼は幾度か礼を述べ、旋て朝飯を喫して出発の用意する。濡した洋服は火で乾かしてやる、別に草履を手へて旅装せしめた。彼は「東京へ御出になつたら尋ねて下さい。」と家を出て十手へ上り、東を指して行つた。其内に上五個の破堤は確實になつた。彼は無引返して来ると思つたが来ない。何処で行き悩んでゐるか心配した。

八月十八日。

曇、朝飯前切れ所の応急工事を見にゆく。二間杭を二間の間隔に打ち、それへ杉丸太を結付け、葉付の杉枝を逆さに流し込んで、其の間へ磔依を踏込む。即ち急水止である。

火災、震災共に惨なりと雖、洪水の害に至つては一層深酷である。本村の如き切れ所が人家に遠ざかつてゐるので、人畜に死傷がなかつたのは不幸中の幸である。二百町歩の田畑が収穫皆無となり、幡之宮、中島、島間の各字は砂礫に埋められたであらう。穫々たる萬頃の稲波は一朝にして、茫漠たる砂原と化し、哀残の禾黍に蕭々秋風の度る光景は、満目荒涼の四字を以て尽きてゐる。

荒地免租年額に、城下、駒形、野分、橋原の四字と宮内の大部分を除く外残らず出願し、水害地租免除除願にも田は全部出した、今後土地を整理し、田畑を復旧するには幾多の歳月と多大の労費を払はねばならぬ、否到府復旧の見込みがない処もある如うだ、将来を想到すると実に寒心に堪へない。

慧星が出現すると災難があるとは古老の言伝へであるとか、其が的中したと云ふのぢやあるまいが、今年は春蚕もよく、大小麦は豊作、大豆も実入りよく、稲作も増収の見込みで、農家一般は豊年を謳歌してゐたが、一朝天災降りて禍福忽ち転倒して了つた。伯大隈は「天が大災を降して国民を警醒するのだ。」と。天は公明である。飽まで一部の生民を苦しめるものではない。無暗に悲観して萎縮してはならぬ。否、更に発奮して天災に打勝つ弾力を要すると共に、草を去り実を取むべく産業に励まねばならぬ。そうして此の大損失を補ふべく心掛けやう。自分等は生涯記念すべき大水害の洗礼を受けたのである。

心配してゐた彼の青年橋君は無事に東京の実家へ帰着されて、月の廿三日に礼状が着いた。

拜啓、過日旅行の帰途御地に於て頗る困難の地位に陥り其節は土堤破壊前非常にお多忙中の折にも抱らず、御親切にも御構ひ下され難有く御蔭を以て彼の一夜を無事に過し申候、猶舞木の土堤も切れたる由、御一家様には何の御障りも無之候哉、御礼旁々御尋まで

東京市小石川区雑司ヶ谷町一一九 橋三千三

森田登一郎様

応急工事は、県庁監督の下に村受工事として九月十八日竣工した。工費金參千八百円、古俵一萬八千を要せしと。

(舞木・森田 稔氏祖父著)

嫁入り	214
嫁入り道具	85
嫁入りのふとん	217
ヨメゴ	87
嫁ゴ観音	247
嫁のあいさつ	91
嫁のお客	218
嫁の着物	218
嫁の里がえり	90, 91
嫁の持参する着物	13
嫁の地位	89
嫁のつとめ(よめのつとめ)	89 218
嫁の年始	90, 246
嫁の任期	90
嫁・番頭の宿婦り	247
嫁・婿の条件	211
ヨメナ	21
ヨメギ	21, 256, 257
寄合	80
ヨクロ	91, 92
四本紙	34
ラ	
雷魚	49
ライサマ(らいさま)	61, 298
雷獣	61
雷電様	60
雷電神社	106, 155
ランガイソタ	297
ランプ	318, 319
リ	
離縁	220
理屈屋	294
陸上交通路	65
陸稲	38, 41
リヤカー	73
龍宮伝説	290
リュータツ	225
竜柱	22, 291
竜吐水	340
流木	98
寮の松	289, 291, 295
料理屋	47
旅行	63
隣保班	76
隣保班長	79, 81

レ

礼服	10
恋愛	210, 212
レンセンアシゲ	50

ロ

六算除け	56
六十六部	121
六間取型	302
ロクロ	39

ワ

ワカイシ	215
ワカイシュ	84, 85
若い衆	212
若い衆座敷	216
若い衆平天	84
若衆宿	209
若水	237
若水迎え	237
若もち	245
若連	84
和讃	126, 175
綿	13
ワタウチ	39, 40
わたごべっか	151
綿織り(わたくり)	39, 331, 333
綿作	30, 39
ワタン	23
渡し舟	72
ワタダル	41, 70
綿換え	39
綿の花(綿ノ花)	40, 236 243, 251
わたぶるい	331
綿帽子	214, 216
ワタリ板	66
ワラジ銭	48
わらしべ	333
わらすぐり	333, 334
ワラニユウ	36, 37
ワラ人形	234
薬鉄砲(ワラデッポウ)	183, 237 280, 281
わらでっぽう	21
わらび	179
わらべ唄	179
わらまぶしおり	44
わりはん	16

悪口唄(悪口うた)	152, 183 184, 192
ワンギリ	32

メシバタ……………276
 目の病い……………53
 メリーテラー……………32
 メリヤスシャツ……………12
 メンカ……………157, 158, 260
 メンコ……………185
 メンパ……………22
 メンボウ祝い……………39

モ

孟宗竹……………58
 モク刈り(モクガリ)……………76, 82
 モジアミ……………43
 モジリソデ……………12
 モチ……………166
 餅……………59
 餅つき(もちつき)……………21, 286, 287
 木工沈床……………98
 モトギョウ……………55
 モノづくり……………236, 243, 244
 ものび……………17
 物もらい(モノモライ)……………53, 252
 摺摺り(モミスリ)……………37, 283
 榎ひたし(モミヒタシ)……………32, 33
 榎干し……………37
 モモの節供……………254
 モモヒキ……………11
 ももわれ……………9
 もやいうえ……………49
 モヤ植え……………33
 モヤシゴト……………87
 守り子オビ……………12
 モリッコ……………207
 モリッコオビ……………207
 モリコバンテン……………12
 モロコシ……………40
 モロコシボウキ……………321
 モロミオケ……………19
 モンジャヤキ……………20
 もんじゅ焼き……………20
 もんつき……………10
 モンベ(もんべ)……………11, 13

ヤ

家移り……………23
 ヤカガシ……………32, 249, 250, 256
 焼きガマス……………236
 焼判……………88
 焼きビン(ヤキビン)……………236, 252
 253, 285

八木節……………168, 178
 焼めし……………20
 焼餅(やきもち)……………15, 20, 236
 厄落し……………208, 241, 246
 厄神除け……………158, 255, 259
 薬師様……………111
 薬師如来……………111
 役者……………154
 家崩し(やくずし)……………86
 厄年……………206, 208, 246
 厄年帯……………208
 やくのがれ……………206
 厄日……………277
 厄除け……………207, 241
 厄除け大師……………208
 ヤグラ……………178, 312
 やけど……………52
 火傷のマジナイ……………57
 薬研……………316
 屋号……………88
 八郎三十三社参り……………142
 八坂神社……………100
 八坂神社の祭り……………259
 屋敷稲荷……………92, 147, 148
 251, 279, 284
 屋敷木……………26
 屋敷鎮守……………205, 251
 ヤスミ祝い……………258
 野草……………21
 屋台……………101
 矢立て……………338
 蚊稲荷(ヤッコ稲荷)……………205, 206
 柳川……………15
 屋根がえ……………86
 屋根ぐし……………141
 矢の字……………12
 やぶ入り……………247
 ヤベ……………296
 山入り……………241
 やまうど……………21
 ヤマガガシ……………298
 山神祠……………102
 山サレ……………49
 山仕事……………49
 山の神……………150, 241
 山伏……………78, 290
 山藪……………141
 ……ヤン……………297
 やんめ……………52, 53

ユ

結納……………213, 214, 215, 216, 219
 結納おさめ……………211
 結納金……………212, 219, 220
 結納目録……………214, 216
 遊廓……………178
 湯灌……………223
 遊行上人……………120, 199
 遊山日……………246
 ゆず……………58
 ニッソ……………36
 弓……………185
 弓破魔
 (弓はま、ゆみはま)……………40, 207, 286
 夢……………55

ヨ

夜遊び(夜あそび)……………84, 210
 ヨウカヤキ……………285
 八日ヤキビン……………252, 284, 285
 糞蓋……………42, 44
 糞蓋蓋……………30
 糞蓋組合長……………79
 糞蓋の神……………150
 糞蓋用のかご……………329
 用水路……………31
 ヨウタチ……………224
 ヨコギリ船頭……………68, 69
 ヨゴザ……………267
 ヨシ……………40
 ヨシガラ……………239
 ヨシゴ……………39
 よしっこ……………88
 ヨシ屋根……………41
 ヨセド……………128
 よそいぎ……………10
 よつご……………32, 325
 ヨツ……………335
 ヨツデ……………49
 四ツ身(よつみ)……………12, 207
 夜泣き(夜なき)……………54, 57, 208
 ヨナッコ……………297
 ヨナネズミ……………297
 夜なべ……………64
 夜なべ仕事……………50
 夜ばい……………209, 210
 夜ふかし……………288
 線(ヨメ)……………215, 216, 217, 219, 282
 線いじめ……………219

二間取型	300
ふだん着	10
普通襦	62
ブッコスキダング	7, 17, 20
ぶっつけ	185
物々交換	74
不動講	139
ふとん綿	40
フナ	49
船頭	163, 164, 189
船株	66
舟石(フナコク)	71
船竿	163
船大工	68
船付場	71
船荷	70
船引き	163
船宿	68, 70, 71
フナトウシ	37
船	65
舟の神	70
踏みどり	49
部落総会	80
振袖	10
振り棒(フリボウ)	37, 38, 40 159, 328
フリマンガ	34
フルイ	37
ふれ正月	77
風呂	27
フロンキヨメゴ	88
ブロック	71
襪	12, 13
ブンノタボ	206
分焼	200
へ	
米作	30
ヘイシニ	297
弊東	260
ヘコオビ	12
ヘズ	297
ヘツタリ	91, 92
へその緒	201, 202
ベタ	297
蛇	58
へびの絵馬	44
蛇除け	236
ヘラ	322, 323

便所詣り(便所参り、ベンジョ マイリ)	203, 204 149, 245 289
弁天様(ベンテン様)	18
弁当のおかず	18
ホ	
ホーキ	200
ホーキ神	197
ホーズキ	203
ホーロク	20
棒打ち	159, 196
方角	63
ホオカムリ	9
方言	296
奉公人の出替り	237, 285
奉公人の出かわり日	285
ボウゴナシ	328
ホウジャク	297
宝生寺の間置と脱衣婆	115
ほうずき	184
ホウズキの根	202
ほうそう	54
ほうそう神	151, 253
疳瘡神様 (ほうそう神様)	139, 205, 254
ホウタロ	298
ほうちゅう	317
俵使い	156, 157
ホウトウ	17
宝塔山講	146
ほうど払い	225
防風林	26
宝林寺	81
ほうろく	316, 317
蓬萊山(ほうらい山)	215, 216 218
行器(ホカイ、 ホケイ、ホケエ)	23, 86, 94 141, 231, 232 339, 340
乾いも	20
ほしか	41
ほしもんかえし	329
ほしもんひろげ	329
墓制	197
ぼたもち	17
ぼたもち作り	159
ほたる	182
ほたる籠	182, 183
ほたるこい	192
ほたるとり唄	182
ボタン	165

墓地	229
ポッカソフリ	49
ホツキトウバ	233
ポッチャラ	37
仏の野回り	274
ホド払い(ホドバライ)	198, 222 225, 226
ホマチ	91, 92
ホマチガイコ	92
ホラ貝	71, 340
ホリ	297
堀かり	82
ホリザライ	82
盆	95, 265, 274, 275, 276, 277
盆うちの死者	234
盆踊り	276
盆踊り唄	169
盆買物	265
盆がら	277
盆勘定	99
本家参り	273
盆様	267, 275
本だき	12
本敷ち	61
盆棚	265, 266, 267, 268 273, 274, 275, 276
盆の食習	275
盆花	266, 267, 268
本日(ほんび)	156
盆づち(ポンづち)	237, 268, 269 272, 273
本分家のつきあい	95
ボンボンドリ	298
盆参り	273
盆迎え	237, 268, 269, 272
盆ヤグラ	168
盆屋根	272
マ	
舞木	80, 290
舞木河岸	66
舞木城	290
舞木太郎	290
舞木の地芝居	153
埋葬	227
マイダマ	244, 251
マイダング	244
前獅子	157
マエブクロ	44
曲り屋	299, 300, 303

初誕生	206
バツタン	46
八反取り(ハッタンドリ)	34, 35
八丁連速(八丁ジメ)	22, 258, 288
バットの灰	55
初参り	238
初山	204, 258
初山着物(初山ギモン)	203, 207 236, 257
初山参り	197, 207, 236
はてなし話	293
馬頭観音	112
ハナ	157, 236, 243
ハナカキ	243
花笠踊り	277
花木(ハナキ)	243, 244, 246
ハナゲ	244
鼻血	54
ハバタ	323
ハビショ	44
バヒフ	53
ハビロ	48
ハヤシダケ	157
はやり目	52, 53
はやり病	53
腹帯(はらおび)	112, 198, 199
はらみ箸(ハラミバシ)	243, 246
春巻	42, 44
針	59
針供養	14, 210, 253
針仕事	64
権名師	147
権名講	147
権名神社	51
ハンカゴ	329
判官	157
ハンギリ	231
ハンギリ桶	317
半夏	33, 51, 58
ハンゲ様	259
半夏生	259
半夏坊主(ハンゲ坊主)	33, 259
パンシ	297
晩秋巻	42, 43, 44
手籠供養塔	119
帆船	68
ハンダイ	94, 340
班長	80
ハンダタケ	36
半天	12

ハンデン	26, 35
般若心経	125
ハンの木	13, 14, 26, 44
半めし	16
ヒ	
ヒイラギ	26
冷え性	52
裨抜き	35
ヒカリコボレ	42
彼岸	95, 254, 279
彼岸入り	254
彼岸のアケの日	279
ヒキガエル	297
引き付け(ひきつけ)	52, 53
引舟	68
日限り地藏	112, 115
ヒキワリ	16, 38
ヒキワリ飯	15
日暮八幡	104
ヒコロダシ	24
ヒザナオシ	216
左前	60
ヒチヤ	204
ヒチヤギモン	203, 204
ヒツケンナノカ	227
ひっこしがゆ	21
ヒデ鉢	318
人魂(ひとたま)	220, 221
一ツ身	11
人の呼び名	298
一間取型	300
ひとみ	207
ヒナ市	253
雛様(ヒナ様)	253, 254
ヒナの節供	253
ヒナ祭り	253
ひねみそ	19
丙午	98, 212
日ノ御子様	290
旭向八幡	83, 103, 104
旭向八幡神宮	144
旭向八幡神社	145
ヒバ	20
ヒバ湯	20
火吹竹	209
火伏せ	247
火伏せの神	248
火伏せの法	104
ヒモカワ	20

火燃し	62
ヒヤクイロ着物	206
百万遍	60, 115, 121
百万遍念仏	115
ヒヤ汁	16
白狐	106
百本マンガ	324
評議員	79, 80
病室	44
ヒョウ祭	254
ヒョットコ	103
ひらぐわ	322, 323
肥料	39
昼寝	62
広間型	300, 301, 302
ビワ(びわ)	26, 58
ピンチン	226, 227, 297
ピンチンカイドウ	227
貧乏徳利	318
フ	
フルセット唱法	159
夫婦養子	88
笛	157
フカリゴ	87
吹き竹	209
フキゴメリ	23
フタ	109, 234
福食物	18, 19
福茶	250
フタビョウガン	55
フクリュー(ぶくりゅう)	54, 63
フシ	156
フシゴ	44
富士講	141
富士浅間講	142
富士浅間神社	207
富士登山	142
節日(フシビ)	16, 83
不祝儀(のたべもの)	18
不祝儀用膳碗	84
不成就日	14
不浄日(フジョウ日)	55, 241
藤原長良	289, 290
藤原秀郷	290
不整型田字型	301
不整型四間取型	301, 302, 303
付帯目的	160
双子	208
フタツメ	217

二十二夜塔	138
ニッカ	223
ニッキ	185
にないおけ	73
ニシヤマ	70
二の午	252
二百十日	277
二番子	34, 35
にぼうと	17
ニボウトウ	20
入家式	214
入定様	290
ニワガリ (にわあがり)	17, 90, 91, 95 282, 283
ニワトコ	243
妊婦	198, 201
ニンバ(荷場)	73
ヌ	
ヌイトス	297
ネ	
ネーマ(雷間)	285
ネエゴ	297
ねかせ唄	179
寝がや	63
寝刈り	42
寝棺	224
ねぎ	59
ネコ(半天)	12
ネコツケタガヤシ	325, 326
ネコノシッポ	87
ねじり木	64
風返し	42
ねずみぶさげ	283
ねずみ取り器	321
ねずみ除け	44
ネックイ	185
熱さまし	52
弥々子様	151, 255, 291
弥々子神社	107
ネブタ流し	262
ネプト流し	261
年回	232, 233
年忌	95, 232
年始	238, 239
年始回り(年始まわり)	95, 238
年中行事	236
ネンネコ	12
念仏	63, 121, 122, 229 254, 256, 283

念仏踊	121, 140
念仏玉	231
ノ	
農具市	74
農事実行組合長	79
納税組合長	79
農家のエビス講	281
納棺	224
農閑期の女の仕事	50
農休み	83, 259
農休み勘定	99, 259
ノゲ	159
野コギ	37
ノゴキ	296
ノコギリッパ	242
のちざん	201
ノッキリ競馬	247
ノツケオカミヤシ	87, 90
ノノコバンテン	12
ノビ	44
ノボリ荷	70, 71
上り荷物	67
野回り	237, 275
のみの夫婦	88
ノメンボウ	73
野ラ帯	11
野良着(野ラギ)	11
ノラボ	297
乗切り競馬	178
乗り鞍	335
ノリ仕事	50
ノロ	98
ハ	
歯	53
肺炎	52
灰小屋	27
端唄	177
媒約人(バイシャク人)	85, 212
灰上げ	41
ハエ取り器	321
墓掃除	265
墓なおし (ハカナオシ)	227, 228, 231
墓詣り(墓参り) ハカマイリ	227, 228, 231 232, 254
はかま返し (ハカマガエシ)	211, 213, 215
はかり	338
計り箕	62

萩の簪(はぎのはし)	21, 239, 240
腹物	59
白山神社	100
バタチ	72
羽黒山の先達	144
箱膳	18, 317
箱船	66
はさみ箱	339
箸	59
橋神球	199
ハンタケ	70
舳船	65
走り日(彼岸)	254, 279
はしり団子	254
ハンワタン仲人	212
橋わたり	205
ハス	40
ハスゴ	297, 298
機織り	13, 45, 46, 61, 63
はたおり唄	165, 166, 167
はだかじゃる	337
裸参り	238
はだっこ	207
ハタバ	304
機場まくり(ハタバマクリ)	197 210
機や	74
破談	219
鉢	316
ハチガケ	99
はちさされ	54
八十八才の祝い	209
八十八夜	32, 33, 256
八長良	106
はちはいどうふ	228
八幡様	79, 151
八幡神社	103
八幡神社の祭り	260
八幡太郎義家	104
バチマンノウ	32
バチンコ	185
初午	17, 18, 236, 250, 251, 252
二十日正月	248
初雲(初かみなり)	249, 259
ハツクンチ	279
初子	201
ハツサタ	278
八朔の節供 (ハツサタの節供)	90, 278
初節供	90, 206, 207, 219 253, 254, 257

燈籠259
 道コク神149, 245
 道除神様289
 トカゲ99
 トカゲ297
 常磐津153
 毒酒売り74, 75
 どくだみ54
 徳利318
 とげ52
 トコ301, 310, 312
 床入れ217
 トコバン86
 床振り(トコホリ)86, 225, 226
 とこほり)227, 228, 231
 トコワキ310
 土出98
 年祝(い)63, 197
 年男237, 242
 年神237
 年神様(年神さま)33, 245, 248
 年神棚239, 250
 年越し(トシコシ)249, 250
 年越しソバ288
 年取り(トシトリ)249
 年取りの豆250
 年取り豆252
 年豆18
 どじょう(ドジョウ)15, 21, 49
 渡船68, 69
 渡船場66
 土界85
 トダナ301, 312
 トッコ297
 土手刈り(土手がかり)76, 83
 土手普請唄177
 とときば21
 隣組225
 利根大堰31, 32, 95
 利根加用水31
 利根川65
 トバ68, 71
 土ば85
 土端打ち161, 162
 土端打唄152, 161, 162, 186, 188
 トボー口
 (トボウグチ)27, 215, 304
 どぼうろく142
 富岡城262
 富水の酒米32

とも164
 ドヤマの鐘ゴク81
 土用34, 260
 土用ゴマ59
 土用干し34
 土用の丑の日260
 土用芽26
 トリアゲバアサン200, 201
203, 204
 トリッケン297
 トリのクチ32
 とろめし59
 トンツク226, 228
 ドンドン焼き236, 245
 とんび184
 どんぶ185
 とんぼ(トンボ)58, 101, 225, 298
 呑竜様(呑竜さま)206, 288
 呑竜坊主206
 ナ
 ナイゴ298
 苗木30
 苗とり33, 34, 61
 ナエバ287
 苗ほぐし34
 ナエマドリ298
 苗間の水口246
 長唄153
 ナカザシキ302
 中獅子157
 中島78
 なかすかし87
 中スミ柱304
 ナガダコ22
 ナカスキ87
13, 30
 中野餅(中野がすり)45, 331
 ナカノクランチ279
 ナカノマ302
 ナガムシ245
 長持318, 320
 長持車26
 中森木綿39, 40
 長良様99
101, 106, 154, 194
 長良神社259, 279, 289
 流れ灌頂
 (ナガレカンジョ)56, 233
 中綿(ナカワタ)13, 39

.....84, 210, 211, 212, 213, 214
 仲人215, 216, 217, 218, 219, 220
 仲人親94
 仲人口212
 仲人のソウリ切らし212
 仲人のナナデンボ212
 仲人礼212
 なす59
 ナスガラ59
 なすの木13, 44, 46
 なすのへった55
 謎296
 なぞかけ坊主296
 夏蚕44
 ナットーマツリ278
 なでどり(ナゲドリ)34, 35
 七草(ナナクサ)184, 242, 246
 七草がゆ(七草ガユ)17, 242
 七草なすな184
 七十七才の祝い209
 鍋借り241
 鍋谷78
 鍋谷の笠踊り277
 ナベヤッカゼ295
 なめもの(ナメモノ)15, 20
 ならし唄160, 162
 ならの実46
 成り木236
 成り木の呪い244
 成田船72
 成田詣69, 178
 成る木責め247
 ナレイイ(なれあい)209, 212
 苗代32
 苗代作り256
 縄すり333, 334
 縄ない(なわな)39, 62
 ナンゴ297
 難産201
 南天54
 ナンド200, 201, 300, 302, 309

ニ

ニアガリ36, 128
 ニアガリ庚申283
 荷鞍335
 荷車73
 にざいりょう217
 二十三夜様138
 二十三夜塔139

誕生祝い	206
誕生餅(誕生もち)	206
たんす	318, 320
増徒総代	80
ダンナ	87
タンボロ	20, 21

チ

地下足袋	9
力石	294
力競べ	50
チカラゴイ	197, 201
チカラゴメ	197, 202
チカラメシ	202, 224
畜産	49
チジミッコ	44
地境明	177
乳づけ	203
ちづけおや	203
血止め	52
チバユ	80
茶	21, 40, 59
茶ズッバイ	252
茶ソッペ(ちゃぞっぺ)	18, 252
チャノマ	27, 302, 312
茶木錦	40
茶屋	72
茶綿(チャワタ)	14, 39, 44
茶碗	59
中院和讃	122
中気	54
中日	254, 279
中宿	214, 217, 218
ちょうちょう	12
ちょうちん	318
チヨチンコ	44
手舂	48, 301, 304
調味料	18
チリトパン	37
ちん小僧	295
鎮守様	205
賃機	13, 45, 46, 74, 331
賃ばた回り	46

ツ

追弔御和讃	125
通過儀礼	197
ツエ	225
月オガミ	286
接木	43

月の輪	97
つき日	55
悪きもの	64
告げ(ツゲ)	198, 222, 223
つげびと	85
つけ物	19
ツジオダンゴ	285
辻ろう(辻ロウ)	225, 226
土ぐも	184
戌の日(ツチノエの日)	254, 255
筒粥神事	51
つづみ車	331
ツノカタシ	224
ツノダル	339
つぼり	73
ツブシ	16
つぶれ屋敷	92
壺屋	300, 304
摘み桑	42
爪切り	241
爪ひき地藏	118
ツメリッコ	20
通夜	223
釣リッコケ	28
ツルシ柿	21
つるべ井戸	28

テ

テラ	73
出おくれ	220
出替り	285
テガラ	21
適令期	211
テゴ	336
手ごだわち	73
堤防くずし	97
手甲(手こう)	11, 223
テテナシゴ	87, 220
手拭のかぶり方	8
手ばた	166
テバンコ	209
出穂	35
テボウキ	337, 338
手ぼうきもろこしの実	20, 202
手間っかわり	49, 87
手マンノウ	35
テモッコ(手もっこ)	73, 336, 337
出羽三山	104, 256
寺アルキ	223
寺世話人	81

寺の年始	241
てんかん	52
天気	60
天狗様	241
伝承者	155
天神講	140, 249, 253
天神塚	102, 206, 255
天神原	77
天神祭り	253
天神やっこ	206
伝染病	98
テンチガエシ	297
デンチツツワ	323
伝づな	225
伝統音楽	158
天王様	100, 102, 259
てんびん	335
天びん棒	73, 336
デンボウ	297
天満宮	102

ト

トーモロコシ	51
トアミ	48
砥石	327
問屋	65, 68, 71
十日夜	17, 183, 192, 237, 278, 280, 281
十日夜唄	152
とうぎみ	58
道化	157
洞源寺	109
東光寺	111
冬至	250, 286
冬至ガユ	286
冬至トウナス	286
冬至祭	142
冬至已待ち	286
冬至ユズ	286
動植物のうた	184
道祖神	149, 236, 245
道中ブシ	158
盗難除け	56
塔婆	232
豆腐	59
東武鉄道	66
唐寅(とうみ)	40, 328, 329
トウモロコシ	59
堂山	289
棟梁	23

先祖追え	272
洗濯もの(洗たく物)	14, 59
センツケ	62
センテ	43
センテバサミ	43
船頭	47, 65, 69, 70, 163, 164
船頭唄	164
船頭のしたく	163
センバ	36, 37
センバコキ	36
専番	165
せんぶり	54
千遍返し	61
千本マンガ	324, 325
染料	13, 46

ソ

宗海	119
葬儀用品	224
葬式	77, 95, 222, 223, 225
葬式祝儀	55
葬式の役割り	225
相続	88
ソウマ	48
ソウメン	16
草履	23
ソウリュウ様	266, 267, 268, 272
葬列	225, 226
叩道様	115
底抜け納約	199, 200
そこ豆	52
ソダナイ	15
外あまど	85
供え物	239
そば	15, 16
ソバカキ	20
ソバ粉	50
ソバカキ	16
そめかすり	10
そめがすり	11
反町の薬師	207, 208
反町薬師	205
村会議員	80

タ

大神楽(大カグラ)	103, 252
大工の三大道具	48
大工用語	48
だいこんつき	20
大根の年とり	280

大根の葉	20
大膳講	140, 256
太子ガユ	286
大正車	73
大尺	62
大神宮さま	27, 248
大豆	40, 41
大豆粕	41
ダイドコロ	302, 309, 311
ダイハチマナコ	252
堆肥	247
堆肥出し	247
大日講	146, 256
ダイヤモンド	252, 285
ダイモン	285
ダイモンカエシ	285
タイヤク	228, 231
大役さん(タイヤクサン)	157, 228
代理者	79
田植え	33, 61, 62, 87, 246 258, 259, 287
田植きもん	11
田植の服装	34
田植之日鐘	259
田植休み	90
田ウナイ	32
高尾山	147
高瀬船	66, 67, 70
高機	44, 45
田刈舟(タカリ舟)	34, 36, 335
高灯籠	109, 261, 269
(タカンドウロウ)	272, 273
タカンボ	12
他行の講	140
沢庵	19
竹	49
竹馬	185, 341
竹ごうり	22
武田勝頼	240
竹とんぼ	185
竹なんご	185
竹の杖	226
竹の箸	239
竹筥	238
田こすり(タコスリ)	35, 325
タコつきゼンザ節	187
多胡早生	42
田スキ(タスキ)	199, 322
助け舟(タスキ)	66, 69, 76, 98
立ち針	59

立振舞(たちぶるまい)	140, 141
脱穀	37
竅穴住居	300
竅穴住宅	300
立棺	224
椀棺	224
建て前(たてまえ)	23, 86, 95
たどん作り	331
漕上げ(タナアゲ)	232
タナガケ	36, 37
漕探し	241
七夕	28, 236, 261, 262 263, 265, 272
七夕飾り	261, 262, 263
七夕さま	262
タナバタヤマノウマ	262
七夕節供	262
タナマイリ	234, 273, 274
田の草とり	34
田字型	302
たのまれ仲人	94, 212
タバコ吸い	298
足袋	9
足袋ぼそん	9
タブドウ	297
田舟	30, 36, 335
タマッチロ	297
玉の輿	211
玉巖	44
魂よび	221
タモツ(反物)	223
たもと	12
タラッペ	21
樽入れ(たるいれ)	210, 211, 213 214, 219
だるま	44
ダルマ屋	178
タレコ	44
俵あみ(タワラアミ)	333, 334
俵編み台	334
俵口	338, 339
タワラグミ	26
俵瀬	290
田原藤太秀郷(俵藤太秀郷)	64 290
俵ベシ	334
タン	316, 317
ダンゴ	17, 111
だんごじる	16
誕生	197

ショウゲン稲荷	106
狩野屋稲荷	51
焼香	225
上州名物	85
定使い	77, 80, 81, 83
ショウズカノバアサン	116
しょうづかばあさん	56
聖徳太子	140, 291
聖天様	288
昭天様	44
商人のエビス講	281
消防団	79, 80
ショウブ	256, 257
ショウブ湯	257
ジョウヤ	99
しょうゆ	19
ショウウユしぼり	317
ショウユノミ (しょうゆのみ)	19, 20
ショウリョウ様	266, 267 268, 275
精霊様	267
精霊花	275
燭台	318, 319
職人	47
職人の着物	48
初産	201
除草剤	35
初七日	231
除夜の鐘	288
ジョリン	38
女郎屋	72, 111
白井権八	168
シラジオキ	48
シラタ	297
シリガル女	88
じりやき	20
汁かけ飯	62
次郎の一日	249
白綿	39, 44
仁儀	47
神功皇后	257
神経痛	53
身上まわし	88, 89
身上わたし	89
神社総代	80, 156
親戚づきあい	94
神葬祭	235
神葬式	234
新宅(シントク)	89

シンダンボマワリ	238
新築祝い	86
しんつみ	39
甚兵衛ゴマ	185
シンボウ返し	22
新盆	261
新暦	237
ス	
水死人	98
炊事	18
水車	18, 38
水上交通	65
水天宮	200
すいとん	17, 20
水防	97
末子	204
末のタンチ	279
須賀神社	106
菅原道真	102
すき	322
スギ	323
杉田伝蔵	295
すくい網	331
スグジ道	72
スグリ道	72
すげ笠(すげがさ)	9, 10 214, 215
スケット(すけっと)	49, 82
直屋	299, 300
須佐之男命(スサノオのミコト)	106, 259
スシタ	296
スジヒキ	324, 325
スタ	296
スス竹	285
ススナゲ日	285
ススハキ	285
ススハキ日	285
スズメ追い	35
スズメ除け	32
ススリダンゴ	251
ズダブクロ	224
頭痛	52, 53
ステバ	223
ストコ	17
スナメ	297
スバコ	167
スベインカゼ	53
スマシ	19

スミズカリ	252
スミツカリ (すみつかり)	7, 17, 18, 59 236, 250, 316
スミツカレ (すみつかれ)	17, 251, 252, 287
角力甚句	177
スリボウ	337
スル	158
するす	37
座りまりつき唄	182
セ	
整型四間取型	302
せいこんまわし	46
製糸工場	47
精神鍛練	156
青年会	84
青年集団	197
青年団	80, 84
セイフロムコ	88
歳暮	286
青面金剛	130
施餓鬼	109, 276
せき	53
石尊様	109
石トン様	109
赤飯	17
セジ	68, 69
施主	85
セチ	236, 238
セチ餅	286
節供	90, 256
節供ぎもん	13
節分	51, 93, 237, 239 249, 250, 259
節分の豆	17
瀬戸井の太々神楽	154
ゼムシ	298
セメドリ	35
セリ	21
膳	317
センキ(せんき)	52, 167
センキンタンの唄	167
浅間講	142
浅間神社	207
線香の灰	55
千手観音	111
染色	44
せんす	169
先祖様	274

菫葉取締所	43
産後の食事	202
ゲンヤ節	161
三々九度	215, 218
菫種	42
三十三社詣り	142
33年忌	232
三州木綿	40
産泰様	199, 200
産泰信仰	197
産泰神社	200
桜俵	37, 208
さん供編み	334
サンダワラッペエシ	222
三途の川の渡し賃	224
三人兄弟	292
三年みそ	316
三の午	252
さんばいね	60, 298
産婆さん	94, 200
棧橋	66
三番子	34, 35
産婦の髪	202
産婦の着物	202
産婦の枕	200
産婦の休み	202
産部屋	200
サンミエ	202, 205
三軒モヤ	82
三夜様	139
さんやま講	145
さんやまち	139
三輪車	341
三隣亡	55
シ	
死	222
ジョウ様	277
志海	119
シカジツ	142
ジガラ	40
ジガラ白	38
直播き	32
自給肥料	41
しくれ八幡	103
地獄の釜のフタ	260
仕事着	11
仕事始め	241
シホル	297
獅子	157

獅子頭	157, 158
地芝居	101, 153, 154, 178
じじま	10, 11
獅子舞	100, 105, 106, 157 195, 236, 260
獅子舞の種目	158
死者の霊	232
地震	127, 128
地蔵盆	260
地蔵和讃	175
シタイガミ	223
シタケ	68, 164, 295, 297
シタゴシラエ仲人	212
七五三	280
七五三のお祝い	208
七夜着物 (シチヤギモン)	197, 203, 204
地鎮祭	22, 86
歯痛	52
しつけ	59, 62
ジッコウ	76, 78
実行組合	84
自動車	73
しのかご	330
しぎ	226
死の知らせ	220
篠笛	154
芝居	153, 154
芝居小屋	153, 154
芝居の出し物	153
芝居の伴奏	153
芝植	162
芝植唄	162
しばみの	315
シバヤキ	82
シビトツバナ	297
支部長	80, 82
ジフテリヤ	53
シフト	99
四方がため	23
四方神	151
シボリ	47
シマイノタンチ	279
シマヘビ	298
シミツカリ	252
しみづかり	20
しみどうふ	20
ジムグリ	298
シメエグンチ	279
シメ飾り	246, 287

下肥	41
下参宮	140
下中森	77, 80
下中森河岸	67
シカカ	253
シヤクシ(しゃくし)	297, 322
釈尊御真言	126
社日	254, 279
社日様	107, 255
社日神社	107
社日参り	255
シヤベル	322, 323
砂利船	66
舍利札	125
ジャルモチ	220
洒落	295
ジャンボン	16, 226
十王様	117, 247, 277
十王園	116
十王尊	116
祝儀	85, 198, 210, 217
十九夜さん	147
十五日ガユ	243, 246
十五夜	278, 279
十三仏	229
十三仏の念仏	229
十三夜	278, 279
主食	16
十七島田	15, 64
出棺	226
シュウトメ	215
収納祝い	283
ジュウノウ瓦	314
十文字	42
十八ガユ	247
十八長良	289
十八長良様	106
十六ダマ	245
十六バナ	244
しょうはしご	73
しょうが	51, 58
しょうがぞつく	90, 91
ショウカチ	54
正月	236
正月様	237
正月棚	239
ショウガの節供	278
聖観世音	112
蒸気船	66, 69
商團	74

こうで……………53
 香典……………223, 231
 香典かえし……………231, 339
 強盗のちょうちん持ち……………295
 コウブシン……………76, 82
 弘法大師……………39, 255, 291
 弘法伝説……………31
 郷役(ゴウヤク)……………68, 76, 82
 高野山……………267
 御詠歌……………126
 古海役(コカイ役)……………71, 76, 82
 五箇河岸……………66
 五箇五名……………78, 93
 五月の節供……………256
 五箇の渡し……………67
 小かぶ……………40
 御吉走(ゴキソウ)……………142
 コキアゲ……………36
 コケバナのハナマキ……………158
 五軒組……………95
 九日茄子……………59, 279
 コザ……………226, 300, 301, 310, 312
 小作米……………99
 小作料……………99
 コシ……………226
 乞食……………48, 99
 コジキノ雨……………297
 コシゴザル……………337
 コシゴト……………47
 コシザル……………337
 コシの実……………54
 腰巻……………12
 コシヤリ……………44
 五十五のダンゴ……………208, 237, 283
 こじゅけい……………298
 御祝儀のたべもの……………18
 コジウハン……………236
 こじゅはん……………15
 小正月……………236
 御所車……………225
 コジウハン……………159
 ご神水……………144, 145
 コスリ……………34, 35
 ごぜ……………177, 178
 コゼ縄……………62, 336
 子育観音……………111
 子育て信仰……………205
 ごたいぎぶるめえ……………218
 ごちそう……………17
 伍長……………77, 80

コゲナワ……………86
 小道具……………154, 157
 ごとく……………97
 琴平坊主……………206
 こと八日(コト八日) 236, 284, 285
 コトリバアヤン……………201
 謎……………295
 小荷駄……………71, 73
 五人組……………225
 コノメザル……………337
 コビ社……………279
 コビマチ……………279
 ゴフ……………62
 古峯原……………146, 147
 コマイ穴……………304
 コマイカキ……………86
 コマイ竹……………304
 駒形神社……………83, 107, 260
 ごまのはい……………72
 小間物屋……………74
 小廻船……………65
 小麦……………38, 41, 278
 小麦まんじゅう……………17
 ゴムまり……………182
 米……………16, 41, 278
 米作り……………33
 コモノイトコ……………296
 米の飯……………16, 222
 子もり……………179
 子もり唄……………179
 こやしじゃる……………338
 コヤシマンノウ……………336
 子安観音さま……………199
 御米光……………142
 御米遊様……………285
 五料の番番……………72
 婚姻……………197, 210
 こんがすり……………11
 金剛講……………140
 ゴンジ……………185
 金精様……………111
 権田コキ……………38
 婚約……………213

サ

西行(サイギョウ)……………47, 48
 在郷軍人……………84
 再婚……………220
 葦垣の一人前……………13
 祭文……………173

祭文唄……………173
 芋根……………163
 境木……………31
 サカイセブリ……………296
 サカエカブ……………51
 サカサ塔婆……………233
 魚とり……………48, 49
 魚のアラ……………41
 左官……………48
 坐棺……………224
 作神……………254
 サクガミ様……………128
 さく切り……………61
 さく縄……………62
 作番頭……………284
 サクヨセ……………39
 座繰り……………14, 165, 332
 酒の強い人……………294
 下げ棟……………55
 ササラ……………100, 236, 260, 337, 338
 ササラの起り……………158
 ササラの行列……………157
 ササラの組織……………156
 ササラの練習……………156
 坐産……………200
 18, 70, 77, 86, 102
 さし……………103, 209, 248, 253
 300, 301, 302
 ザシキ……………309, 311, 312
 雑草……………41
 サツマ……………202
 さつまいも……………20, 41
 サツマ苗……………40
 里がえり……………205, 217, 218, 246, 278
 サナ……………22, 37, 38, 158, 327
 さなぎ寄せ……………165
 サナダオビ……………12
 サナブチ……………40
 サナブリ……………34, 258
 座奉行(ざぶぎょう)……………85
 座布団……………88
 サマ……………309
 ザマ……………338
 サヤド様……………149
 ザラ……………163
 ザラスキ……………163
 ザル……………226
 猿田彦大神……………127, 128
 申の日……………58
 三月豆……………297
 三カ日……………239, 240

キヨメ	228
切り傷	52
切り太刀	157, 158
きりだめ	22
禁忌作物	93
近所づきあい	95
金肥	41

ク

くいぞめ	205
くいぞめのお願	205
くぐり	52
ククリ駆命	100
くこ	21
くさ(おてき)	52
くさかき	323
草刈り	82
草刈り鎌	326
草とり	38
草取り鎌	327
草花栽培	42
草花の栽培	30
クサル	297
グシ	23, 311
グシ瓦	23
グシマフリ	23
ぐしもち	23, 86
クズ菜	15
腎臓	44
クズ屋根	24, 41
藁屋	74, 75
口説節	169
下り荷	67, 70, 71
クチガタメ	213
クチキヨメ	213
クチナン	14, 44
区長	79, 80, 81
クツムキ	56
固定忠治	168
クネギリ	26
くねゆい	285
区費	76, 79, 80
首切地蔵	291
クビレワラ	200
熊野様	256
熊野の観音	111
くま柳	54
グミ	26
クライボシ	204
倉開き	243

鞍掛	103, 104
鞍掛八幡	104
クリゲ	50
車枝	55
車長持	320
くるみの皮	46
グルメキ台	14, 331, 332
クルリ	328
くろり棒	37, 328
クルワ(曲輪)	77, 79, 85, 103 109, 111, 112, 240
森市	74, 286
森勘定	99
クロ(田の)	32
黒谷	124
桑	42
くわ(厭)	323, 324
厭入れ(クワ入り)	51, 242 243, 245
クワイレ様	242, 245
クワイレ松	242, 243
桑切り	42
桑切り鎌	43
桑切りほうちょう	317, 331
桑くれ台	43
桑つみ	61
桑苗つくり	43
厭の使い方	51
桑畑	42
桑モキ機	43
桑もぎ包丁(桑もぎボウチョウ)	43
軍人合せ	185

ケ

芸者屋	47, 72
芸能	152
ケエド	237
ケエドワカレ	23
ゲエロコ	297
ゲキジョンカン	101
下参祝	141
下山祝	141
下駄	9
血脈	224
血脈料	223, 224
血圧	53
結核	52
結婚	211, 213
結婚式	95, 210

月牌	267
毛羽採り機	45
ケラ	298
ケリップ工事	98
賢海上人	120
賢海上人御念仏	176
けんか相撲 (けんかずもう)	99, 101, 102
ゲンゴロウ	35, 325, 326
元三太子	246
元三大師	208
源田稲荷	289
建築儀礼	22
検地の測量台	339
けんちん汁	20
げんしょうこ	54
ケンモツ橋	240
元禄袖	12

コ

コージハン	15
コーチ	77
コービマーチ	279
鯉	40
鯉口	12
鯉のぼり	257
小池家	240
小石	205
小泉瓦	314
小泉焼き	38
講	127
光恩寺	205, 207, 208
航空防除	35
後継者	156
後見人	88
コウザ	27
香時計	341
庚申	281
庚申供養塔	132
庚申講	29, 127, 135
庚申講の掛図	133
庚申様	128
荒神様	34
庚申塚	128
庚申塔	128, 130, 131, 132
庚申枕	135
庚申待	127, 128, 134
洪水	76, 95
コウセン	20
耕地整理	30, 98

風……………61
 かぜ(風邪)……………53
 扇こり……………52
 カタシ……………43
 カタックイ……………16
 カタバリツカ……………297
 かたびら……………224
 片見月……………279
 片目の白蛇……………291
 歩渡船……………65
 カッタテグサ……………35
 カッテ……………302, 303
 カット船……………68
 河童(カッパ)……………64, 259, 261, 292
 カッパガエシ……………259
 カッパゲエシ……………38
 カツモ馬……………236, 261, 262
 263, 264, 265
 家伝巻……………55
 門火……………272
 カド松……………239
 門役(カドヤク)……………81, 82
 カナゴキ……………37, 38, 327, 328, 333
 カナゴキ払い……………37
 カナツノ……………37
 カナババ……………202
 火難除け……………246, 286
 鉦打……………109
 かね玉……………221
 カネツケ祝い……………218
 カネマキ……………158
 カバシラ……………298
 カビタリ餅……………284
 カブマトリ……………35
 釜……………59
 カマアガリ……………36
 カマ神様……………22, 34, 237
 (かまがみさま)……………239, 288
 カマガリ……………283
 カマギツチョ……………297
 カマキリ……………297
 カマツタ……………261
 カマツタヒガシ……………261
 釜のヲチアキ(カマノヲチアキ)……………236, 261
 カマノフタ……………260
 カマボコ……………297
 カミアライ……………217
 神送り……………279
 神隠し(カミガタシ)……………64, 222

上五箇……………78, 79
 上五箇のササラ……………156
 雷(かみなり)……………61, 298
 雷除け(雷よけ)……………56, 61
 神の合祀……………151
 神迎え……………283
 上中森河岸……………66
 亀田勘吉……………133
 加茂様……………44
 家紋……………88
 かや(蚊帳)……………63
 萱野……………79
 カヤ場……………24
 カヤ葺屋根……………24
 家山(カヤマ)……………24
 粥かき棒……………32, 51, 243
 (カユカキ棒)……………244, 246, 256
 カヨイバコ……………47
 カラス(からす)……………184, 220
 鳥鳴き……………55, 220
 からっ風……………85
 カラト(からと)……………26, 320
 から耳……………52
 カラミ餅(からすみもち)……………17, 287
 カラヨセ……………329
 カラライ……………298
 カリアゲ……………36
 刈草……………41
 刈とり……………38
 カルママ……………297
 93, 236, 238
 239, 240, 243
 川施餓鬼……………121, 276, 277
 カワツバ……………292
 川俣河岸……………66
 川役……………83
 瓦板引……………167
 瓦板売り……………167
 かわらばんりり唄……………190
 瓦葺き……………24
 瓦屋根……………24
 かわりもの(食制)……………16, 17, 18
 変わりもの(変り者)……………294
 カン(疍)……………52
 ガンカケ……………224
 がんがん……………184
 寒行……………144, 146
 元日……………238, 239, 240
 勘定……………99
 元旦……………238

ガンブメ……………35
 カンドウ……………212
 がんどう……………318
 カンナ……………301
 カンのくすり……………21
 カンノ虫……………57
 観音様……………199, 247
 かんびょうや……………74
 ガンマキ……………224
 がんもどき……………18, 225

キ

生糸……………42
 紙園祭(り)……………236, 260
 きしゃご唄……………180
 きしゃご遊び……………180
 キジシ様……………27
 北ごぼり……………51
 北枕……………222
 義太夫……………153, 154
 喜多流……………194
 キツタテ……………316
 狐……………294
 祈禱師……………57
 木戸銭……………153
 キドリワタ……………39
 杵……………214, 215, 318
 キヌタ……………331, 333
 き流し……………97
 木灰……………41
 キビ……………15
 岐阜提灯……………272
 着物を縫う日数……………13
 着物の袖……………12
 客うけ……………85
 逆縁……………87
 キャン……………223
 きゃらぶき……………20
 木遣り……………23, 140
 沐浴廻……………31, 240
 きゅうり(キューリ)……………51, 59
 キョウカタビラ……………223, 224
 行五天……………119
 行者様……………255
 行商……………74
 共同権堂剣育場……………42
 行人……………119
 行人塚……………119, 120, 255, 291
 共有財産……………83, 84
 共有地……………83

忍藩	237
おしめり祝い	60, 61, 77 80, 81, 83
おじや	17
お釈迦様	255, 256
おシヤカ様の花祭り	256
オンラキ	251, 341
オンラ様	150, 251
お彼岸	91, 95
オゾイ	297
オゾクナル	297
おそなえ	21
お供え餅	287
オダ	297
オタイロ結び	12
おたかもり	216, 218
おたぎ	142
オタキアゲ	51, 142, 151 246, 277
おたけ大目	63
オタツ	224
お棚(オタナ)	239, 243, 267
オダレ	301, 304
オダンゴマツリ	256
オチツキ	216
お茶呼び	216
オチャンチャン	12
雄蝶雌蝶(男蝶女蝶、オチヨウメチヨウ)	215, 216, 218
オッカア	87
オッピライタ	297
おでき	52
おて権現(御手権現)	115
お手玉	181
お手玉唄	181, 190, 191
オトウカ	294
オトカ	293, 294
お年玉	238
オトツファン	87
オトモリ	207, 297
オトモリオビ	12, 207
オトモリッコ	207
踊り	178
オナベ仕事	50
オナム	19
オナシゴ	185
オニオロシ	17, 18, 236 251, 252, 316
鬼っ子	208
おにつつじ	58

鬼歯	208
オニヤキビン	284
オネネゴ様	205, 208
おねんぶつたま	339
おはぐろ	9, 218
オハンシ	210
オハチまわり	142
オハチリョウ	142
おはつ	21
帯祝い	198
尾曳稲荷	289, 292
尾引神社	78
尾引きの城	292
おひきの肉	55
オヒチヤギモン	197, 202 203, 204, 205
帯とき	203, 207
お日待	144, 279
オビマチ	279
おびや	197, 202, 203, 204, 208
おびやっこ	51
お百度	221
オヒャクドフミ	221
お百度参り	56, 198, 221
オヒロメ	216
オヘヤマリ	204
オボタテノゴハン	200
オボヤキ	197
オボンサマ	269
お盆様の野マツリ	274
お松ひき	243
オミタナ様	239
オミタマ様	236, 245, 276
オミタマメシ	245
お宮参り	205, 218, 238
オメコ祭り	93
オメザメ	283
オヤジ	87
オヤシキ山	292
オヤヒキ山	78
観船	66, 68
オランダ式水防工事	98
織物	44
お留守居様	268, 269
御旗講	146, 200
音頭とり	160, 161, 178
女遊び	178
女の子の遊び	185
おんぼこ	21

カ

蚤飼	43
蚤祝い	258
蚤かご	43
蚤神さま	150
蚤道具	43
蚤ビリョウ	297
かいこやすみ	90
カイドリアミ	49
かいば切り	335
蚊いぶし	63
戒名	232
カエン針	224
カエリ膳(カエリゼン)	226, 229
火炎太鼓	194
カカアデンカ	220
化学肥料	41
カクタレ	297
カカリゴ	87
川岸工事唄	162
かきうかし	34
カギツルシ	247
カキ餅(カキモチ)	20, 237 282, 287
額	140
角オビ	12
カクシゼニ	224
神来	105, 155
神来殿	155, 194
神来面	194, 196
神来連	155
かくらん(カタラン)	53, 54
カクレザト	290
かげ膳	140
カケノウオ	236
かけふな(カケブナ)	28, 236, 248
カゴ	198, 226, 297
かご台	329, 330, 331
かさ	315
火災除け	56
カザグルマ	35
風祭(カザマツリ)	83, 277
河岸	47, 65, 66
火事	15
河岸稲荷	101
樫のタネ	26
ガシウキニ	297
かしわもち	17
ガズ	297

稲荷様	22, 105, 256
稲荷鎮守	151
稲荷祭り	251
稲刈り	36, 61, 62
稲刈り鎌	326
稲刈り台	330
いねの品種	32
いのり釘	64
位はいさく	51
位牌袋	227
イバリカガヤタ	297
いぼ	54
いぼ地蔵	115
イモグシ	20
いもっさく	51
イヤマ(家山)	26, 241
依頼演奏	156
色なおし	218
色薬師	111
祝樽	215, 339
岩田帯	198
隠居	89
インキョメン	89, 91
ウ	
植木	42, 58
ウエバヒタ	33
うぐいすのふん	55
受け太刀	157, 158
ウコン色	44
牛	50
牛車	327
牛のロゴ	336
牛のわらじ	336
臼	215
語初め(うたい初め、ウタイゾメ)	80, 84, 219, 240
ウチ仏	267
うどん	15, 16
うなぎ	49
ウナギカキ	49
卯の日(ウの日)	33, 50, 58, 237, 258
ウブギ	202
ウブタテのごはん	202
ウブヤ	205
ウブヤキ	197
産湯	203
馬	50
馬の鞍	335, 336

ウマヤ	301, 304
ウマヤグチ	304
馬やど	47
生まれかわり	63, 234
馬渡船	65
ウミゴ	44
産み月	201
梅の笛	154
ウルシ	53
運慶	111
運送車	73
運搬	73
エ	
エエウえ	49
エエ仕事	50
江戸づま	10
エナ	197
エナイケ場	201
エビス	281
エビス講	20, 236, 237, 248, 280, 281, 282
エビス様	28, 248, 282
恵比須・大黒	248, 282
エビス祭り	282
恵方参り	238
エボル	297
絵馬	111, 138, 139, 199, 200, 289
エンガ	32, 321
エンガワ	303, 313
縁切り	219
縁切りもち	284
縁組	63
縁談	210
エンノイトコ	296
円福寺	120
エンマ大王	116, 236
オ	
オーバン	241
お伊勢様	151
お伊勢参り	69
おいだき	21
オイベス講	20
オイベス様(オエベス様)	281
オエネエコウ	297
オオガ	322, 323
大かご	329
大食	21, 294

大阪白	38
大島桑	42
往生院	109
往生念仏	123
応神天皇	257
大杉様	69, 151
大杉神社	69, 70
大掃除	27, 256
大力	294
オオ縄	62
オオバン	242, 243
大判餅	241, 246
大日侍	144
大晦日	288
大麦	38, 41, 278
大山阿夫利神社	109
大山講	109
大山石尊大権現	109
邑薬用水路	32
おわらじ	289
オカシロイ	297
オカズ	15
オカタのザシキ(おかたのざしき)	215, 217
オカボ	15
オカマ	297
オカマ様	22, 203, 258, 281, 282
オカマノダンゴ	77, 90, 91, 238, 282
オカリヤ	279
オキヨメ	229
オキリコミ	20
オクナンド	302, 303
オクリイチゲン	214
送り盆	275
オクタンチ	279
おけら	21
おさきどうか	63
オサヅカ	46
おさなふり	17
お産見舞	204
御師	142, 146
押し入り強盗	295
オシカケ女房	88
押し切り(おしぎり)	334, 335
男獅子	157
お七夜	200, 201, 203, 204
お七ヤ参り	203
お七夜わかれ	94

索 引

ア	
アーボ・ヒーボ	246
藍	14, 47
アオゲ	50
青大将	298
赤井将光舞房	289
赤井将光舞光	289
赤岩	78, 290
赤岩河岸	66
赤岩の河岸	152, 163
赤岩城	290
赤がえる	21
赤城山	64, 290
アカザ	21
アカノッポ	32, 231
あかんがえろ	55
秋蚕	42
アキの方	200
秋葉様	102, 247
秋元様	78, 292
アク	297
アクト	40
悪魔払い	56
アゲサ	38
アゲザル	337, 338
アゲモノ	223
アゲワク	39
麻	40
アサイチゲン	214
朝寝音	247
アザッコ	208
浅間峯	95
浅間山	298
朝湯	237, 238
足入れ(あし入れ)	198, 210 211, 219
アシゲ	50
足の病	54
足踏式消火器	340
アジロ	223
小豆がゆ(アズキガユ)	17 246, 247
あずきっぱ	21
遊ばせ唄	180
遊び目	248
愛宕様	248
愛宕神社	79, 83, 103 104, 156
愛宕大権現	104
愛宕大神御身跡ノ由来	144

愛宕別火	248
あだな	298
アタマアカル	44
あつけ	52, 53
後舞子	157
アトトリ	87
穴銭	228
アナップサギ	39
穴ツサゲ	283
穴廻り(アナマワリ)	225, 226
姉さん女房	212
あばれみこし	100
油みそ	15
油餅	286
油屋	47
阿夫利さま	109
雨こい	60
雨乞唄	174
甘酒	17
アマンジャク	298
あみがさ	217
雨	60
新盆	95, 234, 237, 269, 270 271, 272, 273, 274
新盆提灯	237, 269
(新盆ちょうちん)	270, 272
新盆見舞	273
粟	15
アワイ	249, 252
アワセバンテン	12
アワボ	243
安行	42
安産	112
安産祈願	111, 197, 198 200, 247
安産の神	199
安産の観音	111
アンジキ	223
行灯(アンドン)	318, 319
イ	
家がら	212
家中イッケ	239
イェヤマ(家山)	285
苧	66, 69, 70
苧師	69
苧乗り	177
苧乗唄	177
生き返り	221
生きダネ	26
生き塔婆(イキトロー)	95, 121 232, 233

生き盆	268
イキミタマ	268
居酒屋	71
イザリバタ	46
石臼	55
石弓	185
イスス(石臼)	19
伊勢講	140, 141
伊勢参り	24, 140, 141
板碑	118
市	74
一見(いちげん、イチゲン)	214, 215, 216 217, 218
一見客	217
イチゲン座敷(イチゲンザシヤ)	214, 215, 216
いちご	63
いちじく	54
一人前	61, 62
一人前の仕事	50
一番子	34, 35
一夜飾り	287, 288
一夜餅	287
いちょうがえし	9
一輪車	73
イッケ	92, 93
イツメ	217
一斗ます	338
一杯茶	59
糸割	43
糸織り	45
糸車	331, 332
糸ひき	166
糸ひき唄	164, 165, 189
糸まり	182
糸摺り	39
イトワタ	13
井戸	7, 28
井戸替え(井戸がえ)	7, 28, 86 87, 251
井戸神さま	28
井戸サライ	29
亥年の紫布団	209
田舎芝居	295
イナガ	36
いなご	21
戌の日(イヌの日)	50, 57 105, 198
イヌの日の伝説	39
稲作	31
稲荷	289

群馬県民俗調査報告書第十四集

千代田村の民俗

昭和四十七年三月二十八日印刷

昭和四十七年三月三十日発行

(非売品)

編 者 者 群 馬 県 教 育 委 員 会

高崎市高岡町九五

発 行 所 上 毛 民 俗 学 会

前橋市元籠町六七

印 刷 所 朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社

電話 044-3367